
空 - ku_u -

葵れい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空 - k u | u -

【Nコード】

N0553M

【作者名】

葵れい

【あらすじ】

少年はその空に遠い父の背中を追い求め、少女はその空を絶対の翼で駆け抜ける。それぞれがその背中に、簡単に消えない過去と単純に癒えない傷を背負いながら、生きる事のすべてを懸けて飛ぶ飛空艇乗りの物語。よかつたら感想・お気に入り登録をお願いいたしますm() () m 執筆のともとても励みになりますm() () m

プロローグ（前書き）

この物語はフィクションです。

実在の人物・地名・物等とは一切関係ありません。

ご了承ください。

プロローグ

天を統べりし永久とわのものを、人は？空？と言う。
そこに一つの青い物が、エンジン音を轟かせ、翔かけていた。
快晴の空を思わせるような真つ青の機体。前方のプロペラは快調
に、時折その回転を楽しむように色を変える。

人が造りし空を翔ける馬、飛空艇ひくうていと言う。

飛空艇は一定のスピードを保ちながら、まっすぐ北へと飛んでい
た。

そのエンジン音の向こうから、かすかに別の音が聞こえる。
パイロットが小さく、歌を口ずさんでいた。

時折リズムに合わせるように、操縦桿を握る指が軽く振られる。

彼の名前は、聖 瑛己（hijiri eiki）と言う。

歳は、先月21を迎えたばかりだ。

ゴーグルからのぞく瞳は、精悍な輝きを灯している。

彼は歌を口ずさみながら、チラと右を伺った。

薄い色の空に、雲が緩やかに広がっている。

（降るな）

歌を止め、瑛己はそう思った。

今はまだ青が見える……だが、直に雨が降るだろう。

（少し急ぐか）

のんびり遊覧飛行を楽しむ暇はなさそうだ……瑛己は小さく苦笑
して、速度を上げた。

だが、その時だった。

耳の端を、かすかに妙な音がかすめた。そう思った時、瑛己はす
でに操縦桿を前に倒していた。

次の瞬間、ドドドドという銃撃音が鳴り響いた。

瑛己はミラーをチラと見て、左手でエンジンを切り替えた。

急降下からひねるように機体を持ち上げ、相手を確認する。

(空賊か)

瑛己は軽く舌打ちした。

空の裏側を翔ける者達、それを？空賊？と呼ぶ。

その生業なりわいは様々だ。貨物船や客船を襲い金品を強奪する事を糧とする者もいれば、人さらい、殺戮……賑やかな街の裏側に闇の社会があるように、空にもまたそういう世界とそこを生きる者がいた。

そしてその特性は様々だが ただ一つ共通点がある。得てして、彼らはこの青塗りの空軍戦闘機を見つけた時、その銃口を向けずにはいられないという事。

黄土色に染められた機体。記憶の海をひっくり返す。あれが、この辺りの海域を縄張りとしている空賊団、【海蛇】だろうか。

事前連絡でも、鉢合わせの可能性は説かれていた。ただ。

(少し西よりに走りすぎたか)

陸地を確認しながら、瑛己は相手の数を数えた。

1、2……3。

最後のカウントをした瞬間、瞳の端に閃光が走った。

操縦桿を、横に倒した。つい今しがたまで翼のあった場所、機体の真横を、弾丸が滑るように飛んでいく。

それにもっていかれそうになる操縦桿を両手でグイと傾けて抜ける。

(後ろを取られた)

空戦の基本だと、誰かが行っていた。 まず相手の後ろを取

る事。

ド、ド、ド、

エンジンを吹かしながら、操縦桿を手前に引いて避ける。

と、そこへ別方向からも銃弾が飛んできた。

「チッ」

瑛己はいよいよ操縦桿を持つ手に力を込めた。

(抜けられるか)

瑛己は自分自身に問い掛けた。

「知るか」

襲い掛かる銃撃を、回転でかわす。

ガタガタガタと、飛空艇が無茶な運転に悲鳴を上げる。

上と下が一瞬、わからなくなるような錯覚に襲われながら、瑛己は片目を細めた。

整備士は、弾は満タンにしてあると言っていた。

軍手の向こうの手に、汗が、ジワリとにじむ。

操縦桿をグツと手前に引く。そしてひねりこみを入れると、

一機の、後ろを取った。

だが、別の二機の事を考えれば、悠長にしている暇はなかった。

その瞬間が、すべてだった。

瑛己は射撃ボタンに手をかけた。

だが。

「……ッ！」

次の瞬間、正面から閃光が走った。瑛己は慌てて左へ避けたが、それを見越したように横から銃撃が降った。

慌て回避を試みるが、避けきれなかった。ガツンガツンと掠めたそれに、機体は大きく揺すぶられた。

ハンドルがいう事を聞かない。予想以上にふらつく機体と、操縦桿の軽い手ごたえに、瑛己はゴクリと唾を飲み込んだ。

(まずい)

瑛己は背筋に冷たいものを感じた。

だが、その時だった。

何かが、視界の隅にキラリと光った。次の瞬間、黄土の機体が爆発音と共に、炎を上げた。

一体何だ、と振り返って見ようと思ったが、それより先に敵の機体が目に映った。

やられる。そう思った時。

ドドドドという閃光が、空からそれに降りそそいだ。

ヒシヤリと、黄土の機体が傾いた。そして爆発が起こる一瞬前。サツと、銃弾のごとく、白い何かが、その横をすり抜けた。それを合図に、ズンという重い音と紅い閃光が響いた。黒い煙の間から、パイロットが飛び出すのが見えた。

瑛己はゴーグルを掴むと、おもむろに脱ぎ捨てた。

あれは……！？ 辺りをキョロキョロと見渡す。まだ敵が一機残っていたが、もはや彼にとってはどうでもいい事だった。

生暖かい風が吹いて、瑛己は天を仰いだ。どこかでまた、爆発音がした。

空を仰ぐと、雲はさつきよりも随分と濃くなっていた。

焦げ臭いにおいては、確かに雨のにおいもまざり始めている。

太陽が、灰色の雲に覆い隠されようとしていた。

それに抵抗するかのようにつ、キラと輝いた光の中に。

白い翼を、瑛己は見た。

それは太陽が覆われるより先に、雲の中へと溶けるようにして消えて行った。

パラと、雨が降り始めた。

だが、瑛己はしばらく、放心したように空を見つめていた。

「空（k u | u）……」

雨音が機体に当たる音が、静かな空に、やけに大きく鳴り響いているようだった。

天を統べりし永久のものを、人は空と言う。

そしてこれは、その空を愛し、戦い、駆け抜けた、

飛空艇乗りたちの物語である。

プロローグ(後書き)

Copyright © 2011
All rights reserved

夕陽が、今日最後の光を灯し始めた。

金色こんじきの光に、水滴を残した雨上がりの世界は、キラキラと輝きを増す。

そこに働く者たちの横顔にも、今日一日に対する達成感のようなものが垣間見える。

そんな彼らの横を、一人の男が通り抜けた。

バシヤリ

まだ地面に残る水溜りを、気にした様子もなく大股に抜ける。

と、男の歩調がふっと緩んだ。

男はポケットに突っ込んでいた手を引つ張り出すと、懐から煙草を取り出した。

そしてその前に立つと、口に啜え、ゆっくりとライターで火を点けた。

男の吐く息が白い風となって空に溶けた。

「ああ」

そこにいた整備士の一人が男に目を止めた。

「これが、か？」

男はふーっと息を吐きながら、目だけ整備士に向けた。

「情報早いな」

「ま、ね」

煙草を啜えながら、男は力力かと笑った。

「にしても……随分のザマだな」

男が言うと、整備士は苦笑するように眉をしかめた。「ああ」

「大したもんだぜ。雨の中、これでここまでくるなんてな」

そう言って、整備士は目の前にある飛空艇をトンと叩いた。

男は煙草を片手にゆっくりとその周りを一周した。

その飛空艇はボロボロだった。

あちこちに被弾の跡がある。着陸の時についたものだろうか、右の腹はザクリと黒くこすれ、ましてギアが一本吹っ飛んでいる。

「今度のは、やり手かもしれないぞ」

整備士が、飛空艇を見つめる男に向かって、「冗談とも真面目とも取れる言い方でそう言った。

「どうだろな」

男は煙草を大きく吸い込むと、そこにポッと捨てた。

「まあ、直まじにわかるやろ」

ジリリと足でもみ消すと、男はもう一度飛空艇を見た。

飛空艇は夕陽を浴びて、不似合いなほど輝いていた。

そしてそれを見つめる男の目も　　。

1

ギシ、という軋きんだ音のする扉を開けると、中から暖かい空気と賑やかな喧騒がもれてきた。

思ったより広いな、そう思いながらグルリと店内を見回す。奥の片隅に空きがあるのを見つけると、ゴチャゴチャになったテーブルの隙間をぬうように抜けてそこへ向かった。

酒場はよく賑わっていた。

空軍の施設に近い所にあるだけあって、さすがに客はそれっぽい連中ばかりだ。

どこかでガハハという威勢のいい笑い声がして、瑛えいき己はチラリとそちらを向きながら空いたテーブルに腰をかけた。

と、店のバイトが注文を取りにやってきた。

「麦酒ビールを」

若いバイトの青年は、ぶっきらぼうに「お待ちください」と言っ
て奥へ消えて行った。

麦酒を待つ間、もう一度店内を見渡す。

建物自体はシンプルだが、所々に古い写真や絵が飾られている。絵は飛空艇をモチーフにしたものが多いようだ。

店の片隅にポツリと、ピアノが置いてあった。

だが今は誰も使っていない……。店内を流れる音楽は、カウンターの脇に置いてあるジュークボックスから流れたものだった。

先ほどのバイトが麦酒を持って現れた時、ふと、流れる音楽が変わった。

瑛己はバイトに硬貨を渡しながら、ああ、と思った。

昔有名だった歌手の歌だった。戦争に向かった恋人を待つ女性を歌ったものだ。

瑛己はそれを聞きながら、麦酒に口をつけた。

ゴクリと飲み込むと、それが喉を通って胃に落ちるのが妙にリアルに感じられた。

少し胸がキリリと痛んだ。

小さく一息吐くと、瑛己は頬杖をついた。

(……運がいい、か)

つい先ほど自分が口にした言葉を思い出し、自嘲じみた苦笑をもらした。

その後。

雨の中、瑛己はどうにかこの基地にたどり着く事ができた。

この『蒼国』、西の湾岸に位置する『湊』みなと第23空軍基地である。

朝、ここより南東にある基地を出た瑛己は、『湊』基地を目指して飛んでいたのだが……。途中、空賊と鉢合わせした飛空艇は、雨が降り始めた時にはもう、ひどい有様となっていた。

爆破・炎上こそ間逃れたものの、少しスピードを上げれば途端に安定を失う。両方の翼はフラフラと揺れるし、操縦桿を動かしても

ロクに舵は利いてくれない。いつ失墜してもおかしくないような状態だった。

その上、雨である。

基地が見えた時はホツとしたが、それも束の間の事だった。

この状況で果たして上手く着地ができるのか。

ギアは出たものの……瑛己は最悪を覚悟しながら滑走路に向かった。

結果としてどうにか止まったものの、衝撃に飛空艇の足が一本吹っ飛んだ。瑛己自身に大した傷がなかったのは奇跡に近かったのかもしれない。

何とか基地に着きとりあえず、『湊』空軍基地 総監・白河 元康（sirakawa motoyasu）の元に案内されたわけだが。

「それは災難だったね」

瑛己の話を聞いた白河は、溜め息混じりにそう言った。

瑛己は何も答えなかった。ただじっと白河を見つめ、ゆっくりと瞬きをした。

白河は、落ち着いた空気をまとった男だった。年は40半ばくらいだろうか。

「怪我がなかったのが何よりだよ」

そう言っただけで自分をみた白河の目が、とても優しく。少し居心地の悪くなった瑛己は視線を外し、思わずポロリと言葉を漏らした。

「……運がよかったです」

「それもまた、一つ」

白河はふつと微笑んだ。

「整備の者達が騒いでいたぞ。あんな状態で？砂海^{すなうみ}を越えてくるなんて……今度赴任してきたパイロットは、中々の凄腕ではないかと」

「……」

瑛己はもう一度、運がよかったですと呟いた。

だが……麦酒にチビリと口をつけながら、瑛己は思った。
本当に運がよかつたら。そんな事にも気が付かず、今頃宿舎で横
になっていた事だろう。

総監室を出た瑛己は、受付まで戻ると、宿舎ではなく酒場の場所
を訊いた。

酒を入れたかったというのもあるが、喧騒の中に身を置きたかつ
た。

一人になりたくなかった。

瑛己はふつと自分の手を見た。震えてなどいない。

だけど瑛己は知っていた。背中が。心が。チリチリと鳴り続けて
いるのを……。

「あの、」

その時だった。

瑛己はゆつくりと顔を上げた。するといつの間にか、自分の脇に
立つ者がいた。

白い長袖のカッターにジーパンという男が立っていた。歳は20
前くらいだろうか……？ 短く刈り込まれた黒髪。童顔に、人懐つ
こそうな笑顔が浮かんでいた。

「今日、『笹川』からみえた方ですよね？」

『笹川』空軍基地は、瑛己がつい今朝方までいた所だった。瑛己
は首を傾げた。「そうだけど」

「やっぱり！ あ、ここ座ってもいいですか？」

瑛己が返事をする前に、青年はイスに腰掛けた。

瑛己は青年を見るともなく見ながら、麦酒を飲んだ。

「僕は、相楽 秀一（Sagara Shuichi）と言います。
よろしく願います」

「……聖 瑛己だ」

よろしく、そう呟いたとほとんど同時、相楽 秀一と名乗った青
年はおもむろに身を乗り出した。そして、

「あの飛空艇は、あなたが運転していたのですか？」

あの飛空艇……。その言葉に瑛己は苦笑した。
なるほど、あの状態でこの基地に、胴体着陸同然で降り立ったのはかなり噂になっていらい……。さつきから感じる視線はその所為だったのか。

何と答えるべきか。瑛己は一瞬考え込んだ。が「そうだけど」と普通に答える事にした。

あの飛空艇つてどの飛空艇だ？ そんな皮肉を咄嗟に言えないのが、聖 瑛己という青年だった。

しかし簡単に返事をした瑛己に、秀一の方がかえって驚いた。

「やはり……」そう一度言葉を濁すと「……相手は？」

「黄土色の飛空艇、3機」

瑛己はグイと麦酒を飲み干すと、バイトに追加を頼んだ。

「【海蛇】ですか……」

よくご無事で、そんな言葉が童顔の青年の顔に過ぎった。

「奴らは、この辺りの空賊の中でも特に、空軍を目の仇にしている所があります。遭遇した場合、ある程度の腕がない限り、無事に通らせてはもらえません」

「俺は何もしてない」

秀一の目の浮かんだ何かしらの言葉を打ち消すように、瑛己はそう言った。

運……。つい口を出そうになった言葉を、眉をしかめて飲み込む。

けれど別の言葉を探そうとしても、うまい言葉が思いつかなかつた。やはり自分は運がよかつたのだろうか？ ふつと瑛己は目を伏せた。

あの時……。もし？あれ？が現れなかったら。

自分は今、ノンキに音楽を聴きながら麦酒など飲んでいられただらうか……。考えるまでもないか。

「白い鳥に助けられた」

瑛己はポツリと呟いた。

「白い鳥……？」

秀一は一瞬、不思議そうな顔をした。

が次の瞬間。ハツと目を見開き、瑛己が思う所「面白いほどに」
顔色を変えた。

「え……！？ それは、まさか……！？」

瑛己は2杯目の麦酒を飲み干した。

「空（ku|u）……！？」

音楽がピタリと止んで、また新しい曲が流れ始める。

3杯目の麦酒を頼むか、少し悩んだがやめた。

元々瑛己は、さほどアルコールに強くはない。

代わりに水をもらうと、2杯続けて空にした。

「白い飛空艇……僕らはそれを、？空（ku|u）？と呼んでいま
す」

瑛己はチラリと秀一を見て、「ああ」と小さく頷いた。

「？彼？は空賊のように徒党を組まず、単独で仕事を請負って飛ぶ

……フリーの？渡り鳥？と呼ばれる飛行艇乗りです」

「……」

「？渡り鳥？にも様々な者がいます。伝言や運搬を専門に請負う者
もいれば、護衛や殺人、空戦を専門にする者もいます。その中で、
空（ku|u）と呼ばれる飛空艇乗りは、様々な仕事を受けて飛ぶ
ようですが……？彼？に関しては謎が多く、わかっている事の方が
少ないです」

「……」

「ただ、これだけは言える事。この空に飛ぶ数多くの飛空艇とその
乗り手の中で、空（ku|u）と呼ばれる飛空艇乗りの飛空技術は、
かなりのものだと言われています。目にした者は皆、それに思わず
魅せられてしまうほどに」

「……」

「それがゆえに僕らの間で？彼？は、ある種の伝説であり……英雄……、憧れを抱く者は少なくありません。もちろんその逆も」
「瑛己は水に口をつけながら、ふっと煙草が吸いたいと思った。彼は普段煙草は吸わない。が、時々こう思う事がある。手持ち無沙汰な時……心が落ち着かない時とでもいうのだろうか。」

(空(k u | u)……)

秀一がこちらをじっと見ていた。彼が何を聞きたいのか、瑛己にはすぐわかった。

だが彼はしばらく虚空を見つめると、静かに目を伏せた。そして、
「風だった」

「……？」

空を駆け抜ける、一陣の白い風。

そう思った……それ以外の言葉が、瑛己には思い浮かばなかった。
「そうですか……」

秀一は溜め息を吐くようにそう言うと、ふっと苦笑をもらした。

「あいつがここにいたらよかったのに」

「あいつ……？」

ええ！ と秀一は笑った。

「自称・空戦マニア。あいつがいたらきつと、聖さんの話を、すっごい喜んで聞いたと思いますよ」

「……？」

「まったく、どこウロウロしてるんだろう？ まあ……遅かれ早かれなので……」

独り言のように呟くと、秀一はふっと腕の時計を見て立ち上がった。「じゃあ……僕はそろそろ失礼します」

「あ……、聖さん、もう配属は聞かれたのですか？」

「いや。明日の朝総監室にくるように言われた」

「そうですか。 またお会いできる事を、楽しみにしています」
意味ありげに笑うと、童顔の青年は小さく礼をして背中を向けた。瑛己はしばらくぼんやりと音楽を聴いていたが、10分も経たな

いうちに、彼も酒場の主人に礼を言って店を出た。

次の日。

秀一の笑顔のワケはすぐにわかる事になった。

朝一番、再び総監の部屋へと向かった瑛己は、そこで配属を言い渡された。

『湊』第23空軍基地、第327空軍飛空隊・通称『セツ（natu）』。それが、瑛己の配属先だった。

総監室に入ると、優しく微笑む白河総監の前に、一人の男が立っていた。

岩だ、と瑛己は思った。目の前に立つ厳格そうな男の第一印象は岩。そんな感じだった。

それが、327飛空隊、隊長・磐木 徹志（iwakidetetuji）だった。

そして挨拶もそこそこに、磐木の背中についていった先。

滑走路脇の格納庫の前、居並ぶ数人の男の中に 相楽 秀一の姿もあった。

秀一は瑛己を見た途端パツと顔を輝かせると、隣に立っていた男の肩を叩いた。

「今日から隊に加わる事になった、聖 瑛己飛空兵だ」

瑛己は形式どおりの挨拶をした。そして一人一人が自己紹介を始めたが……瑛己は結局、その隊が自分を入れて7人だという事、隊長が磐木という名前だという事、そして秀一が同じ隊にいるという事、そしてどいつもこいつも、一癖も二癖もありそうだという事。それだけしか頭に入らなかった。

元々こういうのをパツと覚えるのが苦手でもある。まあ、徐々に覚えていけばいいだろう……楽観的に思って、最後の一人の自己紹介を耳から流した。

「それで、やっぱりあのパイロットは？ こいつだったんすか？」
隊員の一人が警木にそう話し掛けた。その物言いに、瑛己はチラリとこの岩のような隊長の顔を覗き見たが、彼は大きくして顔色を変えた様子もなく、「ああ」と低く答えただけだった。

代わりに秀一が、「そうですよ！」と答えた。

目を輝かせて瑛己と隊員を交互に見ると、秀一は「僕も見ましたけど、凄かったですよね！！」

「着陸だけじゃ何とも言えんなあ」

と秀一の隣に立つ男が、腕を組みながら言った。

その男を見て、瑛己はふつと眉をしかめた。

男はじつと瑛己を見ていた。

歳は瑛己と同じくらいだろうか……？ 明るく染めた髪に、ヒョロリとした体格。首に巻いた茜色のマフラーを服の中に入れて背中に垂らしている。胸ポケットには赤のマルボロが、グシヤリと押し込まれ半分顔を出していた。

その目はまるで……品定めでもされているようだな、と瑛己は思った。

そしてその奥には、明らかに、挑戦的な何かがある。

まあそれはそいつだけではない。全員が、同じような目で彼をじつと見ていたのだが。

「あんだけボコボコにされとんのや。相手は誰や？」

「【海蛇】だって。それも3機」

「なんだ、秀、妙に詳しいな」

「お生憎さま。昨日酒場でね」

「なにー？ 抜け駆けとは、ええ度胸しとんな」

マルボロの男は秀一を小突くように腕を上げたが、「わっ」と秀一の避ける方が早かった。

別の隊員が、秀一の言葉に続いた。

「しかし、【海蛇】3機か……よく抜けたな」

「けど、それくらいじゃなきゃ、うちの隊は勤まらないんじゃないかねー」

の？」

「ハハ、確かに。何たって、最後の『七ツ』だからな」

自分の周りで繰り広げられる会話を、枠の外で瑛己は、まるで他人事のように聞いていた。

「せや。どやろ、一度こいつの腕、試してみる必要あるんとちゃいますか？」

マルボロの男が、グルリと隊員を見渡すようにそう言って人差し指を立てた。

「また、昇ったー落ちたー、じゃ話にならへん。こいつがどの程度使うか、いつペン検証の必要アリ、ちやいますかー？」

その言葉に、格納庫の壁にもたれて今までまったく会話に参加しなかった男がククツと笑った。

長めの髪を後ろで一つにしぼり、両手をポケットに突っ込んでいる。ほつれて落ちた一束の前髪を振り払うと、ふっと顔を上げ、マルボロの男を見た。

その目はまた、他のどの隊員とも違う色を灯していた。

黒い一匹の野生の狼。瑛己の脳裏を一瞬、そんな言葉が過ぎった。

「見え透いてるぞ、飛たかき」

「何がですー？ ジンさん？」

ジンと呼ばれたその男は、もう一度ククツと笑った。そして飛たかきと呼ばれたマルボロの男をヒタと向き、口の端を釣り上げるようにしてこう言った。

「戦やりたいだけだろ。お前が」

「……バれてんすか」

「バカが。見え見えだ。空戦マニアが」

だが、とそこで言葉を切ると、男は瑛己を見、そして磐木を見た。「一理はあるが」

「……」

磐木は何も言わなかった。ただじつと岩のように男を見据えると「うむ」と低く頷いた。

「決まりやな」

マルボロの男はパチンと指を鳴らすと、「誰が行きます?」と隊員を見回した。

「面倒だ、お前行け」

「そうですか? 何か悪いなあ」

「チツ、欠片も思っつてないくせに」

「ジンさん、そら痛いわ」

「どうやら。」

瑛己は思った。こちらの意見と存在は完全に無視されて……どうも自分は、腕試しに借り出されるらしい。

この隊がどういう隊なのかまだよくわからない。隊員たちがどういふ連中かもよくわからない。

だが……瑛己は思った。やはり自分はどう鼻^{ひいきめ}窟目に見ても、運があるとは言えないようだ。

一人静かに溜め息を吐く瑛己とは対照的に、マルボロの男はニヤリと笑って瑛己を見た。そして、「ほな」

「ドツグファイトと行こか?」

前途多難な幕開けだ。瑛己は空を仰いだ。

『漢 (Roman) (後書式)』

Copyright reserved
Copyright reserved
Copyright reserved

『湊』基地への異動が決まった時、周囲の者は瑛己えいきに、色々な言葉投げかけた。

栄転だと言う者もいれば、お気の毒にと言う者もいた。

ただ、懇意にしていた同僚達は口をそろえて彼の異動を羨ましがった。そして同時に、その身を案じた。

世界は今の所、平和を保っている。

隣国『黒』との関係はここ数年来よくなったり悪くなったりを繰り返しているが、今日の明日に戦争が始まるという状況ではない。

となると目下もっか、空軍が空で対峙する相手は、空をはびこる無法者達となる。

『湊』基地はその前線に立っていた。

『湊』へ行けば平穩無事に日々を送る事はできないだろう……それは彼らにとって胸躍る事であったが、同時に危険だという事になる。

瑛己の突然の異動。出発間際、元同僚の1人が彼にこう言った。

「先に逝いくなよ」

瑛己はその時ただ苦笑して返した。

今回の異動に関して、瑛己自身はさほど嬉しいわけではなかった。ただ、どうして自分なんだろうと思った。

『湊』が各地から優秀なパイロットを集めているという話は聞いた事があった。だが……自分がその？優秀なパイロット？の枠に入るとは思えない。さほど飛行技術に優れているわけでもないし、学校を主席で卒業したというわけでもない。

(『湊』か……)

瑛己はノロノロと軍手をはめながら、目の前の飛空艇を見た。

『蒼国』空軍戦闘機、通称『翼竜』。

それを見て、瑛己はふつと短く息を吐いた。
さすが前線基地と言われるだけある。

一目見てわかった。同じ『翼竜』でも昨日乗ってきた物とは違う。
最新の『零-K型』だろう。

「どこへ行くのか」

瑛己はポツリと呟いた。

そして小さく苦笑した。

そんなの、わかるわけがない。

「ルールを説明する」

聖 瑛己と須賀 飛、2人のパイロットを前に、隊長・磐木が重々と口を開いた。

「今回使用は、『翼竜/零 K型』。弾は、塗料弾で行う」

その言葉に途端飛が「ペイント弾だあ!？」と露骨な声を上げた。

「そんなんぬるすぎます、磐木隊長お」

磐木の代わりに、そばにいた長髪の男、風迫 ジン（kasak
o-zin）が口を開いた。

「実弾使ったら、お前、狙うだろ」

「何をつすかー?」

「撃墜記録」

「……」

飛は途端、バツ悪そうにそっぽを向いた。それに瑛己はとてつもなく嫌そうな顔をした。

「どの道、新型機を早々バラすわけにはいかんだろ。今回は我慢し
とけ」

「チツ……ジンさんらしくない言葉やな」

「だが、副隊長らしい言葉だろ」

2人のやりとりを傍で見ていた瑛己は、溜め息を吐きたい気分を

必死に抑えた。

「今回はあくまで、聖の実力がどれほどかを知る事が目的だ」
警木が重々しく言うと、飛は口を尖らせ「チッ」と黙った。
「制限時間内にどちらが多く被弾したか。それで勝敗とする」
飛がもう一度、「ぬるっ」と言った。

「ほな、行こか」

と自分の飛空艇へと向かいかけ、飛はクルリと振り返った。「の
前に」

「よろしゅう」

と左手を出した。

瑛己は一度、飛を見た。にんまりと、大好きな玩具おもちゃを前にした子供のような笑顔を浮べていた。

「お手柔らかに」

そう言って、瑛己は右手を出した。

それに飛が一瞬小さく目を見開いた。そしてカカカと笑った。

「よろしゅう」

飛は手を引っ込めると、左より慣れた感じで右手を出した。

そしてパンと軽く瑛己の手を叩くと、大きく笑って飛空艇に向か
った。

それからはお互い振り返らず、操縦席に乗り込んだ。

ゴーグルをつけながら、瑛己は思った。

あ、心臓が鳴っている、と。

大きく深呼吸した。

空は、昨日の天気が嘘のように、青々とした晴天だった。

ドツドツというエンジン音だけが、辺りの空気すべてを支配している。

隊員の一人が、バツと白い旗を振り下ろした。

それが合図になった。

瑛己と飛の乗った飛空艇が、滑走路をジワリと滑り出す。

警木の説明では、海の上まで出てから始める、そういう事だった。スロットルをフルまで上げて、やがて、ふっと機体が地面を離れる。

先上がったのは、飛の方だった。

一步遅れて瑛己の機体が離陸する。高度に気を付け、飛の機体を探すが。

(消えた)

次の瞬間。海に出るより先に、後ろからタタタタという音が響いた。

いくら、弾けて塗料が飛び出すだけだと言っても、銃弾に変わりはない。距離と場所によっては、危険度は生まれる。現実、かつてこれで練習機が一機、墜落した事もある。それは、塗料弾を操縦席に浴びたせいだった。

勝敗に大して興味はない、とは言っても、まともに八子の巣にされるのもシヤクだ……瑛己は素早く左に避けた。

後ろか？ バックミラーを確認する。飛の機体を見つける前に、また、銃撃が降った。

高度が足りない。ひねりながら上昇を試みるが、その度に嫌な角度から銃撃がくる。

翼を掠めた塗料弾が、弾けて、ピッピッと操縦席にも飛んだ。

(上か)

瑛己は微かに眉をしかめた。

「飛の奴、始めから飛ばすねえ」

陸で見守る327飛空隊、隊員の一人が呟いた。

「あいつは、あれでもうちの切り込み隊長だから……どこまで食
い下されるか」

「どつちに賭ける？」

その言葉に、クツとジンが笑った。

「賭けにならない賭けなんか、すんなよ」

小さな笑いが起こった。が、その中で、磐木と秀一はじっと空を
眺めていた。

「チ」

銃撃を避けると同時、瑛己はエンジンを絞って操縦桿を手前に引
いた。

ふわつとした感覚、素早く操縦桿を右に押し倒すと、エンジンを
吹かした。

（振り切る）

斜めに8の字を描くように飛ぶと、そこから急下降を入れた。

ただでさえ、高度のない状態。

海が間近に迫ってくる。

一瞬、吸い込まれそうな錯覚に陥る。

（このまま、海の中へ）

まさか。まだそこには行けない。

スピードに引っ張られるように苦笑を浮かべ、海面ストレスレで右へ
避ける。

バシユバシユと、海面突っ込んだ銃弾が渋きを上げる。

グルリと旋回を入れながら。

次に出たのは、飛の後ろだった。

「ほっつ?」

やるやないか、飛はヒユウと口笛を吹いた。

急下降からの建て直しの早さ、そして上昇と切り返し。ひねり込みの上手さ。

その絶妙さに、飛は目を輝かせた。

「じゃあ、こっちもマジで行きますか」

操縦桿を持つ手が、素早く動いた。

後ろを取った、しかし束の間、飛が視界から消えた。

(下か)

操縦席から覗き、瑛己はギョツとした。

逆さになって、飛んでいた。

そのままグルリと旋回させると、操縦席もろとも回転させながらこちらに向けて撃ってきた。

上に飛んで避ける、が、どこかに被弾したのだろう。ガクリと機体が揺らめいた。

(まずいな)

制限時間は、昼の時報であるサイレンが鳴るまで。

時計を見ている余裕などない。だが、瑛己はまだ一度も射撃していない。

だが自分の機体は、もう随分蛍光に光っているのだろう。

「……」

瑛己はスピードを最大まで上げると、海面スレスレまで下降した。

「相楽」

ふっと、ジンが振り返った。

「？予言屋？としては、どっちが勝つと思うんだ？ 聞くまでないかもしれないが」

「……」

空をまっすぐ見つめていた秀一は、ゆっくりと顔を戻し、ジンを見た。

その目は燐りんとした光を放っていた。

それにジンは少し言葉を失った。が、

「僕は、聖 瑛己さんに賭けます」

瞬間、その場にいた全員が彼を振り返った。

ジンは両の瞳をスツと細めると、ズボンのポケットから煙草を取り出した。

秀一は再び、空を見た。

「予言屋が、聖についた」

ジンが軽く笑ったが、他の者は誰一人、笑わなかった。笑えなかった。

海面ギリギリを、フルスロットルで飛ぶ。

後ろに航跡こうせきができるほどを、翔とばけ抜ける。

時折、焦れたように塗料弾が海に弾けるが、瑛己は、絶対当たらないと確信を持って飛んでいた。

低い得物は狙いにくい。昔、教官に教えられた事だ。

問題は、どこで上がるか。

そのタイミングが、鍵となる。

陸地の沿岸が見える。その向こうには『湊』基地。左右に滑走路が伸びている。

（ちよっと無茶だが）

そのまま、瑛己はエンジンを落とさず走った。
沿岸で上昇すれば、恐らく飛の予想内だろう。
だが、まさかその先へ。

滑走路さえも抜け、基地の端っこにある格納庫の屋根をかすめるように上昇するとは。

ガタガタと、板張りの屋根の切れ端が疾風にはためいた。

そこから急速上昇をする。高く高く、上がる。

そして、間髪のひねり込みの正面に、少し遅れてついてくる飛の背中を捕らえる。

(撃て)

初めて、射撃ボタンに指を入れる。

ダタタタ

慌てて飛は避けるが、避けきれない。青い機体の真ん中に、ドツと黄色い花が咲いた。

操縦席から、目を丸くした飛の顔が一瞬見えた。

余韻に浸るべくなく、飛の背中を追従する。

飛は塗料弾に揺らめく機体を建て直し、唾を飲み込んだ。

「あのヤロ……入った、チクシヨ」

呟いた自分の声に、苛々した。

「ええわ、ついてこれるもんなら、ついてきてみい！」

グワンと翼を傾けると、空を切るように斜めに滑り降りた。

「邪魔や」

そう言うと、ダダダダと基地の端に立てられた時計塔に銃発を浴びせる。

ザンとその横をくぐり抜けると、小さな時計は風をもろに受け、ガタガタと揺れた。

後に行く瑛己は、その上を抜けたが、

「……掃除当番、決定ですね」

秀一が苦笑しながら呟いた。

時計塔は見るも無残に、腕の悪いペンキ塗りのおかげで、その美観をぶち壊しにされていた。

「さて」

ジンが腕の時計を見た。「そろそろか」

正午の時報まで、残り3分。

「ファイナーレは、どちらが取るか」

磐木の、細い瞳が一層深く細められた。

海に出た所で、飛の動きが早さを増した。

「クツ」

ついていくので手一杯だった。これだけ動きが激しくては、撃った所で海を汚すだけだ。

と、一瞬の隙に、視界から機体が消えた。

認識するより早く、操縦桿を押し倒した。カツカツカという笑い声にも似た銃声がして、光が空を飛んでいった。

空を見上げた。いつの間にか、飛の艇影は高く高く空の向こうにあっただ。

その時、基地の方からウォーンというサイレンの音が鳴り響いた。それを合図にしたかのように、キラと、飛の機体が太陽に反射した。

途端だった。飛が急降下を始めた。

(くる)

瑛己は操縦桿を手前に引いた。

降下する飛と、上昇する瑛己。

勝負や。

飛が呟いたのが、瑛己には聞こえた。

空に、二つの鳥が、交差する。

ダダダダダ

カツンカツンと塗料弾がかすめる中、激突間際、お互いの機体がギリギリをかわして抜けた。

サイレンが、静かに音を緩め始めていた。

そしてそれが本当に聞こえなくなった時、二人同時に大きく深呼吸したのは……ここだけの話。

離陸時は真つ青だった機体。着陸した時、それは別の物となっていた。

被弾した塗料弾によって、きれいに染め上げられた機体に、瑛己は苦笑し、飛は力カ力と笑った。

そして、陸おかに戻ったそんな2人を出迎えた磐木は、まず、2人をぶっ飛ばした。

「……ツタタター！！ な、何するんスか、磐木隊長！！」

情けない声を上げる飛を磐木は睨みつけ、そして瑛己を見据えた。「誰が、基地の上を飛んでいいと言った」

「……」

瑛己はギクリと顔をしかめた。

「すいません……」

「せや！ 海の上限定や言うつとったのに！ 俺は、お前が行くから仕方なく」

そんな事言う飛に、瑛己は嫌そうな顔をした。海に出てから始めるという命令を無視して、最初に撃ってきたのはどこのどいつだ。

「誰が、基地の設備に銃口を向けると言った」

ギクリ。今度は飛が笑顔を引きつらせる番だった。

磐木がチラリと見た方向には、数年前、何かの記念で立てられたという時計塔が、物言わず訴えている……。

「せやかて」

「問答無用」

結局。午後から二人は仲良く、施設の掃除、そして飛空艇を磨く作業にいそしむ事になった。

「……はあー、めっちゃ、疲れたわあ」

運ばれてきた麦酒ビールにチビりと口をつけると、そのまま飛はテーブルに突っ伏した。

歓迎会という名目で、瑛己は飛と秀一に誘われ、昨日の酒場に赴いたのだが……。

「お疲れ様」

それを見て、秀一はニコニコと笑ってそう言った。

「しゅうー、お前、どんだけハードやったかわかつとんのか？ ノンキそうな顔しやがって……なあ、瑛己い！」

瑛己は知らぬ顔で麦酒を飲んでいたが……ポリポリと頭を掻いて呟いた。「確かに少し、疲れた」

「少ない？ はあ、俺繊細やで。超・うるとら・すーぱーに疲れたわ」

それにハハハと笑う秀一を、飛は睨みつけ、またテーブルに突っ伏した。

「だけど本当に凄かったです、聖さん！」

瑛己はチラリと秀一を見、そして気のない様子で麦酒を飲んだ。

だが秀一のその言葉に、突然飛が息を吹き返した。「せやせや！と跳ね起きると、瑛己に向かって乗り出した。

「お前、中々やるやないか。まあ、まだまだ俺には及ばんが……素質はあるわ。うん。気に入ったで」

「そりゃどーも」

瑛己は軽く返事をした。……ひよっとしたら、会話するのも億劫

なくらい疲れていたのかも……。。

だが自称・繊細な空戦マニアは、麦酒には目もくれず、声を響かせ言った。

「【海蛇】3機抜けたっていうのも、あながちや思った。まあ、これからもつと厄介な連中の相手してかなアカンで。下手な奴がきて、足引つ張られたらたまらんと思っと思ったトコや」

その言葉に、ピクリと瑛己と秀一の動きが止まった。

「ん？」それに気づいた飛が、眉をしかめた。「何や、急に神妙な顔しおって」

「飛。その話だけでも」

「何や？」

秀一はチラリと瑛己を見た。瑛己はやれやれと大きく溜め息を吐くと、昨日の事を、秀一に言ったのと同じ台詞セリフで話した。

「何やて」

途端。瑛己の顔が変わった。

「会あった……？ 今何て言った？ 誰に会ったと」

瑛己は答える代わりに麦酒を飲んだ。

「空（ku—u）……！！」

自分で呟くと、ダンとテーブルを叩いた。

「で！！؟؟ 戦やったんか！？ まさか、倒したんか！！؟؟」

「落ち着いて、飛」

「秀！ これが落ち着いていられるか！！ 瑛己、答ろ！！ 空（ku—u）と戦ったんか！！?? ああ、あの傷は、そんなもんか！！??」

「……違う。あれは、空賊にやられたものだ。さっきも言った。だが、瑛己の言葉など耳に入らなかったように、飛は「ぐああああ！」とうめいた。

「チクシヨ、ええなあ……！！ 俺かて、ずーっと飛んでるのに……何で会えへんのやろ？ クソ、お前、マジで運がええなあ」

「……」

運。瑛己は聞きたくない単語に、そつぽを向いた。冗談じゃない。移動の途中空賊に遭い、命からがら基地に着いたと思っただら、翌日さっそく模擬とはいえ空戦をさせられる……これのどこが、運がいいと言えるのか。

「飛は、空（k u | u）と戦うのが夢なんですよ」

ニコニコと秀一が言った。それに飛が「お前が言つと、緊迫感がない」と嘆いた。

「それに、戦うのが夢やない。倒したる。それだけや」

空に生きるもんなら、誰もが思う事やる。そう言つて、ようやく飛は麦酒を手を取った。

「強いもんと戦いたい。俺が飛ぶ、唯一無二の理由^{ワケ}や」

味など関係ないようにグイと飲むと、案外静かにテーブルに置いた。

「それで散つたら、悔いはない。空で死ねたら、本望や」

「……」

その時。ふっと、店内の音楽が変わった。

その曲に、瑛己はドキリと顔を上げた。

「お前は何で、飛ぼう思つたんや？ どうして空軍に入ったん？」
飛に聞かれ、瑛己は少し驚いたように目を開いた。

「……」

小さく、別に、特に理由はないかと呟いた。

だが。瑛己は心の中で呟いた。

？空の果て？が見ただけだ。と

苦笑した。

ジンは、夜空を見ながら煙草を吹かしていた。

「……で？」

その隣には、磐木がいる。磐木は腕を組んで、睨むように明後日

を見ていた。

「どう見ました、あいつの腕」

「……」
「確かに被弾数は聖の方が多い……が、「ジンは星から目を背けると、バージニアスリムを軽く噛んだ。「うまい事、急所を避けている」」

もしもあれが実弾だったら。そこで言葉を切って、ジンは磐木の見つめる明後日に目を向けた。

「聖は、それでもどうにか飛べたかもしれない……『てんかい天海』からでも、基地に帰ったかもしれない」

「……」
「だが飛は。弾によつては 最初の被弾で、飛の飛空艇はぶっ飛んでた」

「……」
「偶然だったのか、単に運がよかつただけなのか……どちらにしても」

そう言つて、ジンは磐木を見た。

「最後の『セツ』、見つかったみたいですね」

「……」

磐木はの表情は、何一つ変わらなかつた。

ジンは煙草を吹かした。

そして再び、夜空を見上げた。

風が心地よかった。

暖かな陽射しの中に、春のにおいがする。それが嬉しくて、自然と笑みがこぼれる。

バサリと、一つ、洗濯物を翻す。

真っ白なシーツは太陽の光を浴びて、こちらも嬉しそうにキラキラと輝いた。

穏やかな昼の一時。

だがその時、天高く鳥の鳴き声があった。

それに空を仰いだ。

「……ルカ」

2、3度、ピュルリと声がかして、空から一羽の鳩が現れた。

そしてその足にくくりつけられた物を見て、ふっとその顔から笑みが消えた。

風は心地いい。

けれどもそれは、ほんの数分前とは別のものに見える。

もう一度、空を仰いだ。

そして、陽射しに向かって歩き出した。

2

翌朝。

食堂の隅で、眠気覚ましの珈琲コーヒーを飲んでいると、飛たかきがフラフラとした足取りで現れた。

「おはよーさん」

瑛己えいぎは、ふっと顔を上げると、「ああ」と小さく返事をした。

「……あう……何か、ちょーし悪いわ」

らしくなく神妙な様子に、瑛己は一つ瞬きをして、「二日酔いか？」と尋ねた。

結局昨夜、飛の？空戦自論？のようなものを延々と聞かされ……日付が変わってしばらく、瑛己は酒場に居座る事になった。

「聖さんも疲れているんだから」と秀一が無理になだめすかして宿舎へ引つ張っていつてくれたからよかったものの。秀一がいなかったら、下手したら、朝までだつて付き合わされたかもしれない。

「ちやうちやう。煙草がな、きれてもうた……一本めぐんで」

「悪い。俺は吸わない」

「煙草なしで、よう、素面すいめんでおれるなあ……秀坊もお前も、尊敬してまうわ」

「そりやどうも」

「しゃーない、メシでも食うか……そう言つて、背中を丸めて飛が立ち上がった時だった。

「飛！ 聖さん！」

人のまばらな食堂のテーブルの向こうから、秀一が手を振っていた。

瑛己は返事の代わりに珈琲に口付けた。

飛は大きく息を吐くと、「朝っぱらから元気やなあ」、「シツシツと手を振った。

小走りで2人の元に駆け寄ると、

「飛、掲示板見た？」

掲示板とは、宿舎と本塔を結ぶ連結部分に設置された、各隊の召集等の連絡事項が書かれたボードだ。関係者は朝一番に閲覧を義務付けられている物である。

飛は「まだや。宿舎からここに直行したさかい」と言った。食堂は、本塔とは反対側に位置している。

瑛己も首を横に振った。彼もまた、目覚めの珈琲を優先した。

秀一はゴクリと唾を飲み込むと、声を低くしてこう言った。

「召集がかかっている。327飛空隊、0900時、第8会議室」

その言葉に、飛は目をキラリと輝かせた。「それは！」

「作戦命令、か」

飛は食堂のカウンターに飛びつくと、さっきまでの様子が嘘のように、朝から豪勢な注文を連呼した。

瑛己はそれに軽く苦笑すると、自分は軽めの朝食を頼んだ。

トーストとサラダ。昨日と同じメニューだった。

「ん？ 早いな」

瑛己と飛、秀一の3人が、北塔2階の第8会議室の扉を開けた時、先客が1人いた。

327飛空隊の一人、小暮 崇之（kogure | takayuki）。眼鏡をかけた、落ち着いた印象の男だった。

「早いっすね、小暮さん」

飛が笑うと、小暮は読んでいた本を閉じ、薄く笑った。「お前らも」

「さては、早くてジツとしていらなかったか」

「……それは飛だけです」

瑛己は溜め息混じりにそう言うと、手近にあった椅子に腰をかけた。

それに、秀一がハハハと笑った。飛は「あたり前や、ジツとなんかしてられるか！」と、蹴飛ばすようにテーブルに足を組んで座った。

しばらくして、同じく327のメンバーである短髪の男、元義

新（motoyosi | arata）がニヤニヤと笑いながら現れ、副隊長・風迫 ジンが仏頂面で現れた。

最後に姿を見せた、隊長・磐木 徹志の後ろには、『湊』基地総監・白河 元康の姿があった。

白河が上座に立った時、瑛己は飛の横顔をチラリと見て、こいつもたまには緊張するんだなと思った。

長テーブルに、上座から白河、磐木、風迫と順に席につき、一番下座を秀一がとった。

「さて」

総監・白河は柔らかな眼差しで、ゆつくりと全員を見回すと。

「今日集まってもらったのは、他にもない」

第327飛空隊、作戦任務を命ずる。その言葉に、誰かがゴクリと唾を飲み込む音がした。

「明後日の早朝、『永瀬』から『明義』にかけて輸送艇が2機飛ぶ」
白河はホワイトボードに貼られた地図を指しながら、ザッとまっすぐ経路を示した。

「そして今回は、その護衛の任を命ずる」

『永瀬』基地は『湊』より少し北にある基地だ。『明義』はさらにその北に位置するが、『永瀬』と『明義』の間にはガツと切り削られたように海がある。

これを？獅子の海？と言う。

長いな、と瑛己は思った。

かつて彼がいた『笹川』から、この『湊』基地までの間には？砂海？と呼ばれる湾があった。

これは、湾岸沿いに行っても4時間あれば行ける距離だ。

だが……『永瀬』から『明義』にかけては、倍以上の距離がある上に、途中、広大な海を渡らなければならない。

？獅子の海？は広い。

瑛己は、胸に嫌な感覚を覚え、白河を見た。

他の隊員も同じ事を思ったのか、顔を見合わせた。

それに答えるように磐木が、白河に代わって重そうに口を開いた。

「今回の護衛の任務は、その輸送艇が狙われているという情報が入ったからだ」

「相手は？」

訊いたのは、飛だった。

磐木は飛を一瞥すると、低い声音でこう言った。

「【天賦（tenpu）】だ」

ザワリと、空気がわなないた。

【天賦】と呼ばれる空賊の事は、瑛己も噂に聞いた事があった。

空の闇を支配する、翡翠の集団。

その力は、空をはびこるすべての空賊の動きすら左右するといわれ、政府上層部が最も怖れている空賊だ。

そして何より、その飛空技術は一流。単独の？渡り鳥？などを除けば、最も厄介な相手である。

そしてその翡翠の集団をまとめるのが、

「で」風迫 ジンが、瞼を閉じたまま問い掛けた。

「無凱は、出ると？」

無凱（mugai）。そう呼ばれる男である。

「それは未確認だ」

答えたのは白河だった。

「【天賦】総統・無凱。彼が今回、出撃するか否かに関して、詳しい情報は無い」

「だが、この所無凱が出たという話を聞きません」

小暮が口を挟んだ。「今回の輸送艇の積荷は？」

「定期の衣料物資だ。『明義』を経由して、首都・『蒼光（sakaki）』へと運ばれる」

「ほな……【天賦】が狙うとしたら、やっぱり？獅子の海？か」

『明義』から『蒼光』にかけては、山間を縫うため、飛行には向

かない。

となると？獅子の海？は絶好の空間となる。

「今回の作戦は、かなり重要な任務だ」

白河が、珍しく眉間にしわを寄せた。「私も上から、かなりすっぱく言われてね」

「輸送艇を2機、無事に『明義』に送り届ける事。よろしく頼む」

「全力を尽します」

磐木が敬礼した。

「うむ。私は諸君らの腕を信用している。 だがくれぐれも気をつけて。無茶はするな」

瑛己の隣に座る、一番無茶をしそうな男が、軽く頷いた。

白河が去り、残った327飛空隊のメンバーは、それぞれ色々な想いを胸に抱いていた。

「【天賦】か……また、厄介だな」

最初に口を開いたのは小暮だった。

「まあ、無凱次第だな」

ジンが、ズボンから煙草を取り出し、磐木を向いた。

「今の所、奴が出る確率は？」

「五分と五分」

「フン……まあ、出てきたら、その時はその時だが」

元義 新がふつと、秀一を見た。

「相楽は、どう思うんだ？」

その問いに、全員が一斉に秀一を見た。

？予言屋？。彼がそう呼ばれているという事を、瑛己は昨日酒場でチラリと聞いた。

何でも、何度か、彼が出撃前に言った事が当たったのだとか……ただ、詳しく聞く前に会がお開きになったので、それ以上の事はわ

からなかった。

秀一は少し戸惑った様子で、ぎこちなく笑うと、「えと」

「……わかりません」

「わからない？」

「はい……何か、今回は、よくわからないんです」

歯切れの悪い言葉に、瑛己以外の全員の顔が複雑な色を灯した。

「せやけど」

ポリポリと頭を描きながら、飛が明後日を見た。「俺は、会うよ
うな気がする」

「何たつてうちの隊には、？運命の女神に好かれた男？が入ったし。

なあ、瑛己い」

トンと肩を叩かれ、瑛己は顔をしかめた。

……冗談じゃない。

しかし、その飛のその言葉に一同は、納得の面持ちになった。

「確かに……」

ちよつと待て。瑛己はとてつもなく嫌そうな顔をした。

初日から空賊に遭い、昨日飛と空戦をしたと思つた矢先、出動命
令。相手はそれも、最も危険で厄介な空賊・【天賦】。この上、無
凱と遭遇なんぞしようものなら……。

「瑛己、宿命やわ、これは」

カカカと飛は笑った。

「お前は運がある。よかつたやないか」

「……全然嬉しくない」

「なーに拗ねとん！！ お前、初日つから空（ku）（u）に会あつと
つて！！ 文句言つたら、罰が当たるぞ！！」

「何だと！？ 飛、今何て言った！？」

「それがさ、新さん、こいつ、ここにくる途中で」

瑛己は、頭を抱えたい心境になった。

罰が当たる？ それならもう当たっているんじゃないのか？

しかし、自分が一体何をしたというのか。瑛己は、騒ぎ立てる3

27 飛空隊の連中を無視して、大きく溜め息を吐いた……。

「ええか、瑛己」

仏頂面を浮べる瑛己に、飛は人差し指を立てて言った。

「翡翠の飛空艇が【天賦】や。やけどその中に、ひときわ輝く銀色の飛空艇がおつたら。それが無凱や。絶対ちよっかい出したらアカン。とにかく逃げろ」

「……」

「下手に手え出したら、即、あの世逝きや。それくらい、あいつの腕はハンパやない」

何人も、あいつの手にかかっているからな……誰かがポツリと呟いた。

「ともかく。無凱がおつたら、俺に任せ」

得意顔でそう言う飛に、ジンが煙草を吹かしながらクツと笑った。

「バカが。飛、お前もだ。無凱に構うな」

灰皿にグツと煙草を押し付けながら、抑揚のない声で、ジンは言った。

「無凱が出たら、俺と警木隊長で戦^っる」

飛は「ちえっ」と口を尖らせたが、それ以上何も言わなかった。

瑛己は飛のその態度に、少し驚いた。こいつの事だから、もう少し食い下がると思ったのだが……。

【天賦】の無凱。

その名を持つ飛空艇乗りを狙われて、無事に逃れた者はいないとか……かつて、討伐に当たった空軍部隊を、一人で20撃墜したとしたとか……そんな噂ならば聞いた事がある。

だが実物は。一体どんな飛空艇乗りなんだろうか？

そう思って、瑛己の脳裏を、白い飛空艇が掠めた。

「しかし、」

その時、ふつと小暮が髪を掻き上げながら言った。

「定期の衣料物資か。一体なぜ、【天賦】はそんなものを狙うんだらう」

そう言えば……と、秀一が口を開いた。

「変ですね。【天賦】は今まで、貨物船や輸送艇を狙ったりしてこなかった」

「ああ。政界や軍事関係、密輸、暗殺……奴らが動く時は決まって何か大きな思惑がある時だ。例えて言うなら、世界を揺るがすような。何か大きな意図が、な」

「そういえば、白河総監は、やけに重要任務だと強調してたっけ」
大して気のない様子で、新が呟いた。

「……」

部屋が、静寂に包まれた。

それを破ったのは、磐木隊長その人だった。「ともかく」

「今、我々に与えられた任務は、輸送艇の護衛だ。そしてそれを狙う者がいる。我々は、それが誰であろうと、輸送艇を無事に『明義』基地へ送り届けなければならない」

それが、議論の終結の合図となった。

それから、具体的な作戦等の打ち合わせとなった。が、瑛己はそれを、何か胸に言いようのないものを覚えながら……ぼんやりと聞いていた。

午前の会議を終え、会議室を出る時。瑛己は磐木に呼び止められた。

今から総監の所へ行け。短く言うと、後は何も言わず、背中を見せた。

何だろうか？ 訝しがる瑛己に、横で聞いていた飛がなぜか面白そうに力力力と笑った。

「運命の女神が、まーた微笑んどるんちゃうか？」

……この上、どんな厄災があるというのか……気持ちの乗らないまま、瑛己は本塔へと向かった。

總監の部屋を訪ねると、白河が相変わらず人の良さそうな笑顔で迎えてくれた。

「聖君、昨日の飛行見たよ」

……瑛己は内心、ギクリと思った。

「申し訳ありません」

「ん？ 何を謝る？」

「……命令に反し、基地に迷惑をかけるような飛行をしてしまいました」

すると、白河は大きく笑った。

「磐木に何か言われたのか？ ハハハ……心配するな。磐木も若い頃は、大概無茶な事をした」

「……」

砕けた口調でそう言う白河に、瑛己は少し戸惑いを覚えた。

何と答えていいものかわからず、じっと彼を見た。すると、白河はスツと瞼を優しく細め、静かな口調でこう言った。

「327飛空隊のメンバーとはどうかね？ 上手くやれそうか？」

「前途多難です」

本音だった。それにまた、白河は笑った。

「奴らも悪い連中じゃない。君ならきつと、大丈夫だろう」

「……はあ」

「それで、今回の作戦、出立は？」

「明日の午後、1400です」

「うむ。くれぐれも気をつけてな」

「……はい」

白河は満足そうに笑うと、机の上にあった腕時計を取って、瑛己に渡した。

そこには瑛己の名前と、出身、生年月日、そして『湊』空軍基地

第327飛空隊 『七ツ』所属と掘り込まれていた。

これは、パイロットが配属と共に渡される物で、身分を証明するドッグタグの役割も担う物だった。

「期待している」

瑛己は敬礼した。

「最善を尽します」

そう言って、部屋を出た。

瑛己が去って、白河は静かに瞼を伏せた。そして、

「まさか、こんな日がこようとはな」

軽く苦笑して、それから窓に目を向けた。

青い空に雲が、波のように幾重にも重なり、伸びていた。

「あの目……お前によく似てる」

意志の強さを現すような、燐とした光を持った目。そして、善も悪も、まっすぐに見晴かすような……あの瞳。

白河は、同じ光を持った者の事を思い、小さく息を吐いた。

「聖……」

その咳きは静かに、空に消えて行った。

『獅子の海 (Lion sea)』 - 2 -

次の日。327飛空隊は、1400きっかりに『湊』みなと空軍基地を飛び立った。

そして2時間後、『永瀬』ながせ空軍基地に到着した。道中は何事もなく、晴れ渡る空の下を、穏やかに飛ぶ事ができた。

「肩凝った。俺は、こういう飛行は性分やないわ」

飛は、飛空艇から降りるなりグルグルと肩を回し、ジンは早速ヴアージニアスリムに火を点けた。

『永瀬』基地の者達は皆、彼らを普通に迎えた。

特に大げさな接待があるわけでもない、かといって、無碍むげに放っておかれるわけでもない。

それに瑛己えいきを除く他のメンバーは、大して気にした様子もなく。飛空艇を降りるとその足で、さっそく本塔へと向かった。

「まあ、いつもの事だから」

そんな彼らを不思議そうに眺める瑛己に、元義 新が軍靴のかかとを鳴らしながら言った。

「ここは、補給基地……っていうかさ。空軍基地とは名ばかりの、後方支援専門の基地なわけよ。各基地への物資の輸送、伝達等々を専門にしている。だから、護衛の依頼も結構あつてさ。現実、俺らもここには何度も足を運んでる、常連さんなわけだ」

「『七ツ』なのに、？七？でくるのは初めてだな」

ふっと、前に行く小暮 崇之が半分振り返りながら言った。

「そりゃあ、入ってくる奴が皆、腕も根性もなさすぎだったのと

飛が苛めるから」

「って、人聞き悪いわあ、俺がいつ、そないな事しましたー？」

「……」

「ほーら、聖が……こいつ、寝ぼけた事言ってる」って顔してるぞ」

「ぷっ！ …… ははは！」その言葉に秀一が吹いた。

「瑛己いー！ 俺がいつ、どこで、お前を苛めた？ あ？ 言うてみ？ 聖 瑛己クン？」

「……」

「『首絞めながら言うな、このドアホ』って顔してるぞ」

「ドアホお？ 瑛己、おま、ええ根性しとんなあ？ この天才&ナイスガイの須賀 飛様に向こうて……！」

「……新さん、馬鹿に向かって、あおるような事言わないでください……飛、少し苦しい」

「馬鹿やお！？ 瑛己、テメー」

……結局、磐木隊長の任務最初の仕事は、飛と新、そして瑛己をぶっ飛ばす事だった。

自分はただの被害者なのに……新にあおられ、飛に首を絞められた拳句、磐木に蹴飛ばされた瑛己は、最初からこんな目に遭うこの作戦の行末を、かなり真剣に悩んだ。

そんな中秀一は、そばでコロコロと笑い転げていた。

その後、『永瀬』基地の総監からもう一度、今回の作戦の説明を受け、実際に輸送艇を見せてもらった。

今回飛ぶのは『逸雲』^{はやくも}という、輸送艇の中でも小ぶりの物だったが、小ぶりとは言っても瑛己達が乗ってきた『蒼竜』より二回りほどの大きさがある。

白と青の迷彩柄で、尾翼には『蒼国』の国旗？蒼翼の鷲？の章が描かれていた。これは、『翼竜』の方にももちろん描かれている。

それから、最終的な打ち合わせをした後、ここの宿舎の一角を借り、早めの就寝についた。

そして明朝、日の出前。327飛空隊は輸送艇2機と共に、『明義』へ向けて出発した。

黒い海の向こうから顔を出した太陽が、今日最初の輝きを放った。
『永瀬』基地を出て約1時間。編隊は、まっすぐ北へ、見果てなく広がる海の上を飛んでいた。

？獅子の海？だ。

地図の上で眺めると、実際飛ぶのでは違う。先の見えない水平線を見ていると、瑛己はふっと、自分達はどこを飛んでいるのだろうかと思ってしまう。

（いや……どこに向かって飛んでいるのか、か）

『永瀬』から『明義』まで、予定では4時間から5時間の飛行だ。しかしこれはあくまでも、途中何事もなければ、の場合だ。

「……それを願う」

瑛己は小さく嘆息しながら呟いた。

彼は今、編隊の斜め右後方を飛んでいた。

隊列は、中央に輸送艇、7機のうち6機がそれを囲むように飛び、1機が一段上から飛ぶという形をとった。

各配置は、次の通りだ。

先頭、輸送艇の前を先導するように飛ぶのが、2番艇・風迫 ジン。

そしてその両脇を補佐するように。

右前方に、6番艇・相楽 秀一。左前方に、4番艇・小暮 崇之。
後方、しんがりを、1番艇・磐木 徹志。

その前に補佐が2人。

右後方が、7番艇・聖 瑛己。左後方が、5番艇・須賀 飛。
そして上からグルリと全体を見渡す役を、3番艇・元義 新が勤めた。

新の勤める？上？は、ある意味一番重要な役目を担っていた。
中央に輸送艇を抱えている以上、どうしても各人に死角が生まれ

る。これを補い、いざと言う時のラグをどれだけ小さく済ます事ができるか。それが、彼にかかっていた。

だが、新はそれを気負った様子もなく、「見晴らしがいい。ラッキー」と気楽そうに笑っていた。

《 3番、雲が出てきた》

ザツという音がして、無線から声が流れた。

瑛己は空を仰いだ。

《2番、飛ばしますか?》

《1番、このままを維持せよ》

《2番、了解》

もしもここで無線のスイッチを押して、気に入りの曲口ずさんだりしたら。陸に戻った時、また磐木隊長にぶつ飛ばされるんだろうな……そんな事を思って、瑛己は苦笑した。

(しかし、これは、降られるな)

やれやれ。小さく小さくそう呟いた時。

レーダーに、光が点滅した。

《レーダー確認》

磐木の低い声が響いた。そして、その刹那。

《3番、飛行物体確認! 方位135!》

《4番。方位270。西からもきている》

ザザとひときわ大きなノイズと共に、2つの声が響いた。

方位135とは、南東を意味する。瑛己は素早く斜め後ろを振り返った。

「……………」

片目をジリと細める 確かに朝焼けの中、空の彼方に、何か黒いものが見える。

それも1つや2つじゃない。それは小さな黒い雲のようにムワリと広がり、こちらに向かつて飛んでいた。

《挟み撃ちか。チツ、趣味わるっ》

その時全員が、同じ事を思った。

瑛己はじつと、南東の艇影せんえいを見ていた。そしてそれが色を薄め…遠目にも、その翠が見て取れた時。

その中に、キラリと輝く物を見た。

朝の光の中。一回り大きく見えるそれは。

「【天賦てんぷ】の無凱むがい」

《総員、戦闘態勢につけ》

磐木の声の向こうから、飛の声が聞こえた気がした。

「ご感想は？」

「最低だ」

ガチリとレバーを切り替えた。

「太陽の中から現れるとは、ええカッコしい奴やな」

飛は皮肉に笑ってそう言った。

東と西、両方から現れた翡翠の集団、【天賦】。

総勢、おおよそ15。

輸送艇がスピードを最高にして高度を上げた。

そして、まず、ジンが編隊から抜けた。

元々それほど綿密な作戦を練る隊ではないが、今回は、2通りの

作戦が練ってあった。

無凱が出るか出ないか。それであった。

そして無凱がいた場合、最初のジンの言葉通り、磐木・ジンの2人がこれに当たる事になった。

そして他を、残る5人で担当する。

だが問題は、今回の飛行がただの偵察や迎撃ではなく、護衛だという事である。

「面倒やなあ」

作戦会議中、飛がしきりとそう言ったのは、首に鎖をつけられた状態で飛ばなければならぬからである。

自由勝手に飛んで、目的の輸送艇が墜とされたら意味がない。だが、息苦しさを感じたのは何も飛だけではなかった。

「難しい作戦になりそうだな」

隊一番の頭脳派、小暮 崇之も終始難しい顔をしていた。

無凱が出た場合、磐木とジンが特に無凱を重視して、一番奥へ走る。

2人を送り出した後、その援護しながら、瑛己と飛が他の部隊を迎撃。

小暮と秀一は、輸送艇に一番近い場所で、防空。防御の要となる。

そして最後に、新は遊撃。全体を見回して、状況に応じて攻撃・援護する役割となった。

「一番心配なのは、お前らだな」

そう言って、ジンが煙草で瑛己と飛を指した。

「どつちが、ですか？」

さも心外だという顔でそう言った飛に、ジンは片目を細めて「両方だ」と言った。

「飛も無茶な飛行をするが、聖も結構無茶をしますからね」

小暮が、眼鏡を上げながら言った。それに、瑛己も一瞬心外そうな顔になった。

「とにかく飛、無凱が出ても、お前は自分の仕事を優先しろよ？」

お前は他を蹴散らす。いいな？」

「ザコの相手ですか」

「馬鹿が。【天賦】のメンバーは無凱の息がかかっている。簡単に雑魚と言えるような飛行をする連中じゃない」

そんなの、知っているだろう？ 諭すように言うが、飛は機嫌悪そうにそっぽを向いた。

「あー、煙草が吸いてー」

新品のマルボロをズボンの懐から取り出すと、さっさと火を点けた。

「聖、お前も。くれぐれも、独断飛行は避けるよ」

「……はい」

「小暮、そうガミガミ言わなくなったって、だいじょーぶだって」
新が、軽い調子で笑って言った。

「馬鹿始めたら、俺が撃つから」

「げっ！」

「……」

飛が一步引いたが、自分だって仲間で撃墜記録を狙うじゃないか……新に顔をしかめ、飛にも、思いつきり眉をしかめた瑛己だった。
(そういえば)

あの時、秀一はどうしていたんだろうか……そう思って、瑛己は前を行く秀一の飛空艇を見た。

その表情はおるか姿も、艇体せんたいに隠れて見えない。だが。

あの童顔の少年……歳は後で聞いたが、20歳。学年としては、自分と飛より1つ下らしい。いつも穏やかに、ニコニコと笑うあの少年が。

(一体、どんな飛行をするのか)

飛に合図して、二人、隊列を抜ける。

「何とか、もつてくれよ」

瑛己は空に向かって呟いた。

微笑んでいるんだろう？ だったらたまには、こっちの願いも聞いてくれ。

その願いが叶ったのかどうかはわからないが、この後最後まで、彼らは雨に降られずにすんだ。

空戦は、ジンの銃撃で始まった。

西側の方が早かった事もあり、まず、ジンが先陣、西側部隊へと切り込んでいった。

それを援護するように後ろに飛がつき、ジンが抜けるのを見届け

ると、得意の戦闘飛行を披露し始めた。

瑛己は東から迫るもう一群を気にしながら、迎撃に入った。会議中、他の隊員にも言った事だが、瑛己は空戦が得意というわけではない。

空軍に入ってから、空戦を伴う作戦だって、数えるほどしかした事がない。

それで、何かしらの功績を立てたかというところ……首を傾げるばかりだ。

(飛との空戦で、随分大きく買われたみたいだな)

ある意味、プレッシャーだ。

飛と交差した飛空艇に、横合いから射撃をする。

ズン、という重い音がして、黒い煙が噴出した。

(やっぱり塗料弾とは重みが違う)

そんな事言つと飛みたいだろうか、瑛己は苦笑して、輸送艇の下を抜けた。

正面からくる翡翠の飛空艇を、操縦桿を左に倒しながらドドと短く威嚇射撃する。

と、向こうの空で【天賦】が炎を上げて墜ちていくのが見えた。

1対1とはわけが違う。今この空で、様々な駆け引きとドラマが起こっている。

瑛己は操縦桿を手前に引いた。

自分はただ、今できる事を。目の前で起こる1つ1つに対し、最善を尽すだけ。

(警木隊長は?)

探そうとして、目の前に丁度1機、【天賦】の背中を捕らえる。

瑛己は射撃ボタンに指をかけた。そして1つ、押し込もうとした刹那。

背中を、言いようのない何かが駈け抜けた。瑛己は咄嗟に、操縦桿を押し倒した。

と思つた途端、ガツンガツン! と激しく何かが機体を掠めた。

(まずい)

途端安定を失った機体が、錐揉み^{きりも}気味に落ちていく。操縦桿を思いつきり手前に引き、瑛己は心の中で上がれと念じた。

海面スレスレとまでは行かないが、どうにか持ち直した機体を、急には上昇せずに走る。

速度が乗ってきた頃、やっと上昇をするが。見上げた空に、瑛己は目を見開いた。

巨大な、銀の光。

東から貫く陽光に照らされ、その空に、巨大な銀が君臨していた。

「あれが」

無凱。

機体は、『翼竜』の1回り……輸送艇ほどの大きさがあり。

胴体に描かれた絵は。西洋の神話に登場する　グリフィン。

「銀色の獅子か」

苦笑している場合ではない。

手負いの瑛己の元へ、【天賦】の刺客が1機、滑るように空を横切ってきた。

瑛己は舌打ちをして、操縦桿を左へ大きく切った。

目の前にある計器が、一瞬、フラリとよくわからない動きをした。さっきの被弾は、少し嫌な所に当たっただけらしい。

いざと言う時の事を考え、飛行服の向こうに背負ったパラシュートに意識を向けた。

途端、ドドドドという音がした。が、瑛己はすでに操縦桿を倒していた。

頭の上を、光が軌道を描いて飛んでいく。

落下感に信頼ができなくて、すぐに操縦桿を右へ向ける。

幸か不幸か、速度だけは生きている。

そして【天賦】の足は、思ったほど速くない。

これならいける。瑛己は操縦桿を手前に引いて、ひねるように傾けた。

「出た」

斜めになった視界の先に、【天賦】の脇を捉え。瑛己はためらわずに撃った。

ガンガンガンガン！

銃弾が入る音を聞きながら、その真上をザンと抜ける。

チラと振り返ると、【天賦】が炎を上げた。

乗り手が脱出するのを見届けるが。

その時、視界が暗く陰った。瑛己は慌て、正面を見た。

そこに、無凱がいた。

それは、一瞬の事だ。

巨大な銀の艇ふね。

その圧倒さ。

その空気。

瑛己は息を呑んだ。そしてこう思った。

この飛空艇は、今、空を支配しようとしている。

何か圧倒的な力が。この空を。

解き放とうとしている。

《聖イイー！！》

思考を絶つ、劈つくような叫び声に、瑛己はハッと我に返った。

その時、ザンと瑛己と無凱の間を断ち切るように、青い翼が横切った。

新だ。

瑛己は慌てて操縦桿を右へ押し倒した。

新は、まるで無凱の注意を引くように、グルリと旋回して見せた。

それに、無凱が吠えた。

たった一撃。ドンと火を吹いた銃口。

だがそれは、とてつもなく重い弾だった。

ヒラリと避けた新の向こうにいた、翡翠の飛空艇。

それはその弾を被^あび、その瞬間爆破した。

パイロットが逃げ出す暇なんかなかった。瑛己はそれを直接見て、すぐに、バックミラーに切り替えた。

(そばにいてはいけない)

後はミラーには目もくれず、ひたすら走った。

背中の変和感が抜けない。

瑛己はそれが何か、わかっていた。

恐怖だった。

ドドドドという射撃と共に、新が無凱に食らいつく。

それを、あれだけの巨体に関らず、無凱は難なく避けた。

「早っ」

天を舞う、神話の獅子。

それは羽を翻すと、新に襲い掛かる。

新は、後ろを取られまいと必死に艇体をひねった。

だが、一瞬、バックミラーからその姿が消えたと思った刹那。向かうその、真正面に出現した。

新は慌てて操縦桿を切ったが 間に合わない。

その銃口から、光の炎が飛び出そうとした。

その時、ドドドドドドという連続銃撃が、下から無凱を射た。

磐木だった。

それで間一髪、銃口が逸れた。新の真上を、物凄い風が吹いた。

新はそれに操縦桿を取られないように両手で必死に握ると、下に逃げた。

彼は、ゆつくりとそちらを見た。

今の銃撃。すぐにわかった。

「警木か」

その口元が歪められる。

「こい」

ブオンと、質量のある音がして、咆哮のように一つ、炎を放った。

「警木隊長！」

無凱に警木が対峙している。

それを、327飛空隊の全員がその目で見た。

【天賦】の数はもう、10を切っている。

飛は、今にでもあそこへ走って行きたいのを必死にこらえ、その数を減らす事に神経を向けた。

それは、彼自身が、わかっていたからだ。

（俺が行っても、足しにならない）

本当は、無凱と対峙してみたい。

だが、それが同時に死を意味するのはわかっている。

空で死ねたら本望だ、その言葉に嘘はない。

だが、

（まだ、ちと、死ねん）

苦渋を全面顔に出しながら、それを晴らすために撃墜記録を伸ばす事に全力を傾ける。

そんな飛を見て、秀一は少し胸を撫で下ろす。

彼もまた、輸送艇に群がってくる輩やからを払いのける事に必死だった。

「……大丈夫」

まっすぐ空を見ながら、秀一は呟いた。

「誰も死なない」

翼を傾け、切るように飛ぶ。

輸送艇に近づきかけた【天賦】の注意を引くようにクルクルと飛ぶと、こちらを向いた【天賦】の脇を、小暮の銃口が貫いた。

「誰も死なない」

死なせない 心の奥底で彼がそう呟いたのを、知る者はいなかった。

無凱の咆哮を、操縦桿を押し倒して、磐木は逃げた。

そしてそのまま、海面スレスレまで走る。

後ろに銀の機体がついてくるのを確認しながら、操縦桿を左へ切る。エルロンで水が薄く切られた。

無凱の圧巻、そしてその早さ。

磐木は知っている。だからこそ彼は、意識から無凱の姿を追い出していた。視覚に惑わされなないために。

磐木はスロットルを急激に落とした。

途端、目の前に銀の機体が姿を現す。

だが、向こうが咆哮を上げる前に、磐木の姿は落ちている。

小さく8の字を描くように無凱の横を抜けると、ザッツとレバーを切り替えた。

無凱が左に切った。

それをサイドのミラーで見ながら、磐木は操縦桿を右に切った。

そしてそのまま、スピードだけで横へ滑ると、

「 出た」

磐木の脇は、無凱にさらされる。

無凱がニヤリと笑うのが、わかった。

だが、磐木には打算があった。

目の端に、無凱を捕らえながら。

ジンは走れない。

【天賦】3機に絡まれて、必死に試みるものの、抜け出す事ができなかった。

だが、状況とは裏腹に、ジンの表情は静かなものだった。

1機が横合いから射撃をかけてくる。それをかわし、さらに降りそそぐ銃弾の嵐を、寸前でどうにか抜けていった。

その先に、【天賦】の姿を捉える。

そこで、ジンは射撃ボタンに指をかけた。だがそれは、どう見ても命中するタイミングではなかった。

案の定、弾はかわされ、空を走って行く。

【天賦】の翼をすり抜けて。

その先にいる、銀の機体へと。

一直線に、飛んでいく。

「ダンダンダンダン！！」

「！」

明後日からの銃撃に、無凱はそちらを振り返った。

磐木を狙ったその瞬間、無凱のわき腹はガラ空きだった。

だが、確かに入ったにも関わらず、無凱は何事もなかったように磐木を撃っていた。

磐木は寸でそれをかわすが、傾けた翼の一端に、それが掠める。それだけで、翼は爆破しようとした。

だが磐木はそれをさせまいと、スピードで炎を切った。それにより、破損は半分ですんだ。

磐木の飛空艇は宙を叩くように斜めに飛んだ。それを建て直し、なおも、無凱に食い下がる。

「笑止」

無凱が磐木に止めを刺そうとひねり込みを入れる。

そこに上から新が矢のように現れ、射掛けた。

だがそれは、見越したようにかわされた。どころか、通り過ぎた新の背中を、グンと重く操縦桿を切った無凱が捉える。

逃げる。上に逃げた新に、無凱は咆哮しながら追いかける。

「クソッ！」

呟いた新のサイドミラーに、ふと、青い機体がかすめた。

新は目を見開いた。

それは、聖 瑛己だった。

瑛己は無凱を追いかけた。

その手は汗でジトリと濡れていた。

背筋の寒気は消えない。

だが、無凱を追いかけた。

新を追いかけるその背中に回り込むと、間髪入れずに銃撃した。

ダダダダ

無凱は簡単にそれをかわした。逸れた銃弾が新に当たらない事を祈りながら、瑛己は操縦桿を押し倒した。

そこに、無凱の銃弾が飛んできた。炎をまとう、神話の獅子の咆哮。

だが、瑛己はギリと眉を寄せると、右に避けた。そのまま翼を立てて、ザンと下に空気を切り裂く。

ミラーにも、目視にも、無凱が捉えられない。

だが、炎の銃撃だけは襲い掛かる。

それが機体に入らなかつたのは、やはり彼に運があるからなのだろうか？

「小童が！」

無凱は叫ぶと一気に間合いを詰めた。

チラと後ろを確認して、瑛己は歯を食い縛った。

今、上に上がると、銃弾が飛んでくる。

だが、上にひねらなければ、無凱を捉える事はできない。

(自分に、運があるかないか)

瑛己は苦笑しながら。

賭けてみる。

右に素早く操縦桿を切りながら、手前にグイと引く。

無凱はそれに、照準を合わせる。

瑛己のバックミラーに、無凱の姿がようやく入る。

ここから、逆さに旋回ができた。瑛己は無凱を捉える。

だが、その前に、無凱は必ず撃つ。

それを抜けるか、抜けられないか。

それが、聖 瑛己、命の境でもある。

無凱中^{むがい}で、この戦いはもう、終わっていた。

仲間を救うように現れた、一羽の青い鳥。

自分の銃撃を何度か、よくかわしたと思う。偶然にせよ、必然にせよ。

だが、それ以上の興味などわかかなかった。もちろん、乗り手がどんな輩^{やたい}であるかなど。

思いもしない。

考えも及ばない。

どうでもいい事である。

なぜなら、目の前を飛ぶこの鳥は。もう、墜ちる事が決まっているのだから。

(勇気は称えよう)

我の前に、翼をさらした事に。

だが、それだけだ。

墜ちる鳥に、興味はない。

目の前を行く鳥が次に動いた時。

それが、終わりの刻^{とき}。

あの青い機体がこの空に、紅く光り、散り染まる時。

「翔ける」

お前に許された残りの時間を。

思うだけ翔ける。翔けて翔けて、翔け抜ける。

そして最後は、我が空に還^かえしてやる。

あの、久たる空へ。美しくも残酷で、無限のように儂い、あの空へ。

その時、前を行く鳥がふっと傾いた。

無凱はニヤリと笑った。

その体が、無凱の前にさらされる。

そして、射撃ボタンに指を入れようとした時。
無凱の目の前に、別の映像が重なった。

目の前に行く、青い鳥

クルクルと自分を翻弄する、一機の飛空艇
追いかける。今日こそは……！
そして、青い飛空艇が右に旋回する
死に物狂いで追いつがる
そしてそれは、偶然の事
青い鳥の、脇を捉える
これで終わりだ、射撃ボタンに指を入れる
だが

無凱は思った。
見た事がある。
我は、これとまったく同じ光景を。
見た事がある。

瑛己えいきは操縦桿を握り締め、無凱を振り返りもせず、走った。
(抜けてやる)

無凱の銃口が、こちらを向いたのがわかる。
瑛己は片目を細めた。
だが、頭の中ではわかっていて。
無凱がこの機会を、逃すわけがない。

目の前に広がる、広い広い大空を見つめ、
(あの空に、たどり着けないかもしれない)
瑛己はそう思っても。わかっていても。
走る事を、止めない。
そしてその時、一陣の風が吹いた。
瑛己の中で、何かがドクンと跳ねた。

その瞬間だった。

空の彼方から、それが現れたのは。
それは、空を翔ける一陣の白い風。
空(k u | u)。そう呼ばれる飛空艇が現れたのは。

ザンツ。

そんな音と共に、白い飛空艇が現れた。
それは速度を緩める事なく、まっすぐ、瑛己の飛空艇に向かって
いく。

最初に気付いたのは、飛^{たかき}だった。

「ッ!!!」

瑛己が危ない。このままではまずい。そう思い、必死に他を蹴散
らして、そちらに向かおうとした矢先。

天翔ける、白い翼。

あれは、とか。まさか、とか。そんな事を思う事もできなかった。
瑛己の機体と触れ合う間際、空(k u | u)は翼を斜めに傾けた。
ザンツ。瑛己の機体をギリギリでかわすと、刹那、銃口が開いた。
ド
ド
ド
ド
ド

連続射撃に、無凱が操縦桿を切る。何発か入るが、機体は普通に

動いている。

空（k u | u）はその真横を抜けると、すぐに機体をひねった。白い機体がキラリと、空に輝いた。

？彼？は、足元のレバーに手をかけた。

それを2、3度上下に動かすと、その体勢のまま、操縦桿を押し倒した。

そして、？彼？を見失い、妙な走行をする無凱を下から捉えると、？彼？は操縦桿を立て起し、無凱に向かって翔け出した。

そして、

「……3、2、1」

足元のレバーを、グイと押し倒す。

その瞬間、ドンと、先程より重い音の銃弾が飛び出した。

無凱が空（k u | u）に気づいたのは、その翼がその弾に貫かれた時だった。

まともに射抜かれた機体は、途端、体勢を失おうとする。

その真横を、空（k u | u）がすり抜けた。

「……空（k u | u）！！」

無凱は、悠々と空へ上がった白い飛空艇に向かって、ギリと歯噛みをした。

途端、ドドドドと別から銃撃が降ってきた。

瑛己だった。

ひねり込みを完成し、無凱の後ろを捉えた瑛己は、撃った。

たった今。貫かれた翼を目掛け。その、止めを刺すように。

貫かれた穴から、誘発が起ろうとする。

無凱は眉間に深くしわを寄せると、一度輸送艇を見、そして空（k u | u）を見た。

その時、ふっと、無凱は思った。

（？あの時？か）

先程見た、映像。あのシーンは。

そして、

「退く」

呟くと、その背中を翻した。ひるがえ

瑛己は元より、他の者もそれを追いかけてしようとした。だが無凱が背を向けた途端、残った【天賦】てんぷもそれにならい、無凱を固めるように動きを変えた。

《深追いするな》

無線のノイズが生まれる。

だが、わかつていた。

今追いかけても、【天賦】に固められた無凱は捉えられない。

それほど誰もがボロボロになっていた。

それこそ、彼らの頭上でクルリと旋回し、消えて行った空（ku
— u）にさえ気付かぬほどに。

327 飛空隊の全員が、複雑な想いを抱え、去り行く【天賦】を見つめていた。

そして聖 瑛己も……。

空から現れたボロボロの編隊を、『明義』基地は喧騒で迎えてくれた。

【天賦】から輸送艇を守り、そして満身創痍で降り立った327 飛空隊。『セツ』の噂はたちまちに広がった。

だが、隊員達に笑みはなかった。全員が重い表情のまま陸に立ち、息を吸った。

その中で、瑛己は。重いというよりも、無表情。少し悪い顔色に、何の感情も浮かんでいなかった。

一同、一言も話さぬまま、報告に向かう。

そこで何を言われたのか。こここの総監がどんな人だったのか、何を話したのか……後になって、瑛己はまったく思い出せない事に気が付いた。

ただ、部屋を出て。

「聖」

磐木に低く呼ばれた所から、彼の記憶は蘇る。

「なぜあんな事をした」

全員が、磐木を見、そして瑛己を見つめた。

瑛己は答えなかった。ただ無表情のまま……磐木を見つめ返した。

「聖ッ！」

広い廊下に、磐木に怒声が木霊した。

身動き一つしない瑛己に、流石に心配になった秀一が、間に入る

うとした時。

「……怖かったです」

ポツリと、瑛己はそう言った。

全員がハッと、瑛己を見た。

無凱という、圧倒的な存在を前に。

瑛己の心に生まれたものは、たった一つ。

恐怖。

逃げ出した。逃げ出したかった。

心が震えているのがわかった。

瑛己は目をそらした。

自分でもよくわからない。

なぜだろう？　なのに。

気付いたら、無凱に向かっていた。

怖かった。なのに。

逃げ出したくなかった？　違う。

立ち向かわなきゃ駄目だと思った？　そうじゃない。

逃げていても何も始まらない？　そんなんじゃない。それ

も違う。

「怖かった、だから向かった、か」

ジンが溜め息混じりにそう言った。そして思い出したようにポケットから煙草を取り出した。

「……………」
磐木は何も言わなかった。

「……………」
「……そうか」
小さく呟くと、何事もなかったかのように歩き出した。

新が、ポンと瑛己の肩を叩いた。振り向いた彼に、

「サンキュ」

そう言っつて、彼も歩き出した。

小暮が、眼鏡を上げながらふつと笑った。

ぼんやりと立ちすくむ瑛己に、飛がボカリと小突いた。

「どつちが阿呆や」

飛に殴られた所を抑える瑛己に、秀一が言った。

「瑛己さん、行きましよう」

瑛己は……ふつと、苦笑した。

「ああ」

彼は再び、歩き出した。

そして、『湊』へ戻る日の朝。

少し早めに、集合場所である格納庫に向かった瑛己は、そこに並んだ飛空艇を見て立ち止まった。

青く光る飛空艇。その機体の中央に、無造作に、7つの星が描か
れていた。

後で聞いた話。これは、新が磐木の許しを得て、前日の夜に描いたものだった。

すべての機体に刻まれたそれを見て、瑛己は瞼を閉じた。

そして、初めて、『湊』から海を渡り、【天賦】と遭遇し、無凱を相手にしてなお、今ここに生きている……その事を、実感したよ
うな気がした。

「 輸送艇は、『明義』に無事到着したそうです」
報告を聞き、無凱は薄く目を開いた。

「今夜、例の物は、『明義』から『蒼光』^{さき}に向かうと思われま

言外に含まれた意味をとり、無凱は首を横に振った。「否」^{いや}」

「よい。捨て置く」

「……よろしいので？」

「案ずるな。機はいずれまたくる」

無凱は遠く、空を見た。

そして、

「いずれまた」

空に向かってそう呟くと。彼は再び、目を閉ざした。

すべてはまだ、始まったばかりだ

『ピアノ (Piano)』

彼女は、表通りをゆったりとした足取りで歩いていた。

両手には大きな重い物袋。抱えるように持ち、その重さに時々「何でこんなに重いのよ！」と悪態を吐いた。

あの角を曲れば、原っぱの向こうに店が見える。

街道の脇に建った時計をチラリと見る。大丈夫。開店までにはまだ、時間がある。

だけど、あそこの連中じゃね……そう思って、彼女は苦笑した。

飲みたい時に飲む。来たい時に現れる。そういう連中だ。開店時間も閉店時間も、お構いなしな事の方が多い。

もう何年も、そういう連中を相手にしている。それこそ、生まれ
た時からだ。

そして彼女も、何だかんだと言いながら、そういう彼らが嫌いじやなかった。

「空を命で翔けてる……か」

呟いて、ふっと彼女は視線を流した。

そして、空を見上げた。

「……」

角を曲ると、小さな看板が目止まる。

『うみくもてい海雲亭』

そしてその向こうに見えるのは、空を渡る風の棲家。『湊』空軍基地がある。

晴れ渡る大空に飛空艇の姿を見て、彼女は微笑んだ。

また、忙しい夜がくるわね。

そう思って、一歩踏み出した時。

「」

音が、聞こえた。

それは、店の方から聞こえる……ジュークボックスを切り忘れた

のだろうか？ それとも父が、気まぐれに流しているのだろうか？
それは……ピアノ。美しい、ピアノの音。
ピアノが、メロディを奏でている……そう思った時、彼女は不意
に立ち止まった。

この音楽。

このメロディは。

まさか。そう思った。

そんなはずは……だけど。

まさか。

彼女は持っていた荷物を放り出し、走った。

3

護衛の任務を終えた翌日、瑛己^{えいき}達327飛空隊は、非番を言い渡
された。

『湊』へ帰還、その足で報告へ向かうと、白河はすべてを知った
様子で彼らを迎えた。

「ご苦労だった」

短いが、労わりの気持ちは伝わってきた。

「非番か……何や、余計と肩こりそうやわ」

総監室を出るとすぐ、飛^{たか}がそう言いながら煙草に火を点けた。

「たまにはゆっくり休んだ方がいいよ。あんな激戦の後だし、せつ
かくだから、のんびりしましょう」

秀一が、全員を見回しながらそう言った。

瑛己は秀一の横で、短く溜め息を吐いた。

確かに休日ありがたい、そうは思う。

しかし……瑛己は窓から空を見上げた。

胸がモヤモヤする。

そしてそのモヤモヤを、ここにいる誰もが抱えている事を。瑛己はわかっていた。

「飛は明日、どうやって過すの?」

「あー? 俺はとりあえず……寝る。ええか、秀、絶対起すなよ? おまん、いつも、人の夢のええ所で、ギヤーギヤ喚く。かなわん」

「えー? そんなの知らないよ。大体? ええ所? って??」

「はあ? せやな……歴代撃墜記録・トップになった時とか、無凱をコテンパンにのした時とか。【天賦】と【白虎】相手にたった一人で抜けた時とか。そうそう! 山岡を後一撃で墜とせるつちゅー時に起された日には! あー! 思い出しただけでも悔しいわ!!」

こいつは、夢の中までこれなのか……瑛己はとても嫌そうな顔をした。

「あと、まぶいねーちゃんに、言い寄られた時とか。美女に囲まれ幸せに浸ってる時とか」

「……はいはい。じゃあ、明日も定時に起してあげるね」

「定時か!! まて、秀。俺を殺す気か!??」

「新は、雪乃ちゃんか?」

「あー、最近行ってないからなあ……かなり怒ってんだろっなあ。小暮は?」

「ちよつと調べ物でもしようかと思う。無凱の装甲も気になるし」

その言葉に、全員が彼を振り返った。

「……どう見た?」

ジンが、ヴァージニアスリムを吹かしながら言った。

小暮は人差し指で眼鏡を持ち上げながら、燐と言った。

「KY1 1。通称、ナノ装甲。あれだけ撃たれたにも関わらず、ビクともしていなかった……恐らくは」

ナノ装甲。それは、最近遠国『ビスタシオ』で見つかった『ナノ』と呼ばれる原料を元に作られている。

その強度は鉄よりもずっと優れている。そしてさらに軽い。だがまだ、『ビスタシオ』が正式にそれを元に兵器開発をしているという話はない。いまだ未知の物体、懸念する声も多いのである。

それを先駆け、自身の飛空艇の装甲に取り入れるとは。

「ザークフェレス社……あそこから流れた物と思われませんが」

「ザークか……やりかねないな」

ジンは眉間にしわを寄せた。

ザークフェレス社。闇の世界では？死の商人？として有名な名前である。

国際規定外の不法は兵器を開発、売買する組織である。時にその名が、戦争で流れない事はない。

謎の多い組織ではあるが……ここが【天賦】とつながっていると
いう噂もある。それは事実なのだろうと、ジンは言った。

「だが、それを一撃で貫いた」

ジンは煙草の灰を廊下に捨てた。

ジンが何を、そして誰の事を言おうとしているのか。

先頭に行く磐木が、無言で振り返った。

「空（ku-u）……！」

飛が、珍しく真剣な顔で呟いた。

「流天弾るてん」

小暮が少し自信なさげに言った。

「……そういう物があると聞いた事があります……『黒』が全力で
開発しているという、対『ナノ装甲』専用弾です」

「『ナノ』を貫く、『流天』の光、か」

ジンが皮肉混じりに笑った。「どうも、先行きは暗いな」

「だけど、なんで空（ku-u）が『黒』の兵器を装備していたんだ？」

新の問いに、小暮が神妙な面持ちで答えた。

「『流天』の製造法は、一時、市場に出たという噂が流れた。その

時、どこかの組織がそれを買って独自に開発した……ありえる話だ」「どちらにせよ、どこが攻めてきても『蒼』には苦しい戦いになる」ジンが、ふう……と煙草を長く吐いた。

「……戦争なんて」と秀一が言った。

「起らないと思うか？」

永久に？ ジンが、まっすぐ秀一を見た。

「それこそ愚問だ」

「せやけど……その代わり、こつちには優秀な乗り手が、ようけおります」

「今はいい」飛の言葉に答えたのは、磐木だった。

「1対1、それぞれが、それぞれの腕で飛ぶ事もできる……騎士道精神、そんな物を持って戦う事もできる。だがいずれそれは複数対複数になる。パイロットが大量生産、大量消費される時代だ」

「……」

「その時、個人個人の腕などもはや関係なくなる。どれほど優れたパイロットであろうとも、戦場で、100の乗り手を一度に相手にする事はできない」

「……」

「まあそういうのを考えるのは、お偉いさんの仕事だ」

新が、どこ吹く風という感じでそう言った。

「俺らはただ飛ぶ。それだけじゃないの？ 相手が『ナノ』だろうが『流天』だろうが。どういう時代がこようと、さ」

だろ、飛？ 問われ、飛は大きく頷いた。

瑛己はそんな会話を横で聞きながら、別の事を考えていた。

翌日、いつもと同じに目を覚ました瑛己は、昼過ぎまで宿舎で本を読んで過した。

瑛己の部屋は本当は3人用だったが、同居人はなく、1人で使っ

ていた。

飛と秀一は同じ部屋である。3人用の部屋だが2人で使っている。そのうちあちらに引越し命令が出るかもしれない。

昼過ぎて、何となく瑛己は部屋を出た。施設内をブラブラしているうちにふと思い立ち、酒場に向かった。

表に書かれた『海雲亭』という看板を見て、そういえば昼間にきたのは初めてだなと思った。

扉の所に「準備中」という札が掛けられていた。

瑛己は少し溜め息を吐いた。どうしようか、出直すべきだろうか。何気なく扉に手をやると、鍵は掛かっていなかった。

店内は薄暗かった。「すみません」と軽く声を掛けたが、返事はなかった。

留守なのだろうか……物騒だなと苦笑しつつ、扉を閉めようとした時。

目の端に、黒いピアノが入った。

「……」

瑛己は扉を閉めようとしていた手を止めると、しばらくピアノを眺めた。

そしてゆっくりとそちらに向かって歩き出した。

「……」

静かな店内を歩く。何か不思議な想いにかられる。

ピアノにたどり着くと、瑛己はそっと触れてみた。

埃一つない。

慣れた手つきで鍵盤を開ける。と、一つ、気まぐれに叩く。

その音はちゃんと調律されていた。

椅子に腰掛けると、瑛己はそっと目を伏せた。

……気まぐれだ。

両手を鍵盤に落とすと、一つ、指を込める。もう一つ込める。

それが、メロディになっていく。

それは瑛己のよく知る曲だった。そして一番気に入りの曲だった。

弾いていると、あの時の光景が過ぎった。

無凱と対峙したあの時。瑛己が賭けに出た、あの瞬間。

無凱は自分を捉えていた。銃口がこちらを向いたのに気付いた。なのに。結局、無凱は撃たなかった。

空（k u | u）が現れたからだろうか。だがその前に撃てる機会
はあった。

無凱は、その瞬間を外した。

（なぜ？）

そして突然現れた白い飛空艇……。

『明義』にたどり着いた後、飛がしきりと地団駄を踏んで悔しが
っていた。

「まさか、あないな場所で対面するとは！！ 無凱に気い取られて、
取り逃がしてしもた！」

そうだ……空（k u | u）は突然現れ、無凱を撃って、そのまま
姿を消した。

まるで自分達を助けにきたかのように。無凱……【天賦】が退く
のを見るや否や、自分の仕事は済んだとでも言うように、去って行
った。

なぜだ？ 鍵盤を打つ手に知らず、力が込もった。

無凱はなぜ撃たなかった？ そして空（k u | u）はなぜ……。
？砂海？で助けられ。

今回も、自分は。

（空（k u | u）……）

一体……？彼？は、何者なんだろうか？

二度も自分を助けてくれた、飛空艇乗り。

それは一体……。

その時だった。店の扉がガバリと開いたのは。

瑛己はピアノを止めて振り返った。差し込む光が眩しく、自然、
瞼を細めた。

誰かが立っている。

次第に目が慣れてくると……それが女性だとわかった。

長いスカートが風に揺らめき、エプロンもそれに合わせて揺れている。ふわりと2つにまとめられた淡い茶色の三つ綱。背丈は……女性にしては少し高めなのだろうか。

しばらく彼女は放心したようにそこに立ち、じっと瑛己を見つめた。瑛己もまた、不意に現れた女性を驚きと共に見ていた。

どれくらい時間が経ったのだろうか。

どこかで鳥の鳴く声があった。そして、

「……晴高……」

女性の口から、一つの名前がこぼれ落ちた。

その名に瑛己は、思わず腕を、ビクリと揺らした。

その時触れた鍵盤が、場違いな音を立てて鳴った。

鍵盤の前に座る、一人の青年。

白いカッターに黒のズボン、その背格好。彼を見て、彼女は思わずその名を口にした。

だが少しして。

それが……違う事に気付いた。

「あなたは……」

青年が、ガタリと立ち上がった。

「僕は、瑛己と言います」

「えいき」

違う名を聞き、彼女は溜め息を吐いた。

「そう……そうよね、ごめんなさい」

その辺りの椅子にペタンと座り込むと、彼女は軽く笑った。

「ああ、私は海月 (m i d u k i) ……この店の者だけでも。本当にごめんなさい。あなたが知り合いによく似ていたから」

「……知り合い、ですか」

「ええ」

そして彼女は立ち上がると、ピアノに寄った。

「彼の好きだった曲が聞こえてきたから」

「……」

「彼もよく、ここでその曲を弾いていた」

「……」

瑛己はそつと瞼を閉じた。「？約束の場所？……」

「その人は……どんな人だったんですか？」

瑛己は、無意識にそう訊いていた。

海月は少し驚いた顔をしたが、すぐに柔らかく微笑んだ。「空を、

命で翔けてた人」

「空を愛し、飛ぶ事に生きる事のすべてを懸けた……飛空艇乗り」

そう言つて彼女はふつと店の壁に掛けられた一枚の写真に目を向

けた。

瑛己もまた、それを見た。

白黒のその写真には、飛空艇の前に佇む3人の男が写っている。

ぼやけているし、店内が暗いのでよく見えなかったが……そのう

ちの2人は、見覚えがあつた。

「これは……」

そう言おうとして。その時。

ウーンと、重いサイレン音が木霊した。

何だ？ と瑛己は時計を見たが、おかしい。こんな時間に鳴るは

ずがない。

不意に胸に違和感を覚え、瑛己は手近な窓を開け放ち、空を見上

げた。

片目を細め、滑るように空を見渡す。

と向こうの空を、一機の複葉機が飛んでくるのが見えた。だがそ

の姿は。

「被弾している」

黒い煙が吹き出ている。かなり危険な状態だ。

だが問題はその飛空艇。

遠目にも、その飛空艇には見覚えがあった。

「まさか」

瑛己はゴクリと唾を飲み込むと、バツと海月を振り返った。

海月は瑛己のその瞳に、目を見開いた。

「行きます」

勝手に店に入ってすいません。そう言うと瑛己は早足で扉に向かった。

その背中に、海月は思わず「待って」と声を掛けた。

瑛己は振り返った。が……呼び掛けた海月は、何を言ったらいいかわからなかった。何か言いたい、だけどそれが何か、咄嗟に浮かんでこなかった。

瑛己はそんな彼女を見て、「また、来ます」と言った。

そして、

「……聖 晴高は、僕の父です」

それだけ言って、駆け出した。

一人残された海月は、揺れる扉を見ながら小さく息を吐いた。

同じ目をしてる。

まっすぐな、あまりにも精悍な輝きの瞳。

それはかつて彼女が出会った、ある飛空艇乗りと同じ目だった。

その空を命で翔け、いつもまっすぐに飛んでいた。

そしてその果てに、忽然と消えて行った、一人の飛空艇乗りと。

「……そっか」

彼女はそして開け放たれた鍵盤を、トンと一つ叩いた。

空を見ながら、瑛己は走った。
基地に続く砂利の一本道を外れ、ザワザワとわななく草原に飛び込む。

被弾した飛空艇のエンジン音が、いよいよゴオオと重く響いた。
高度はかなり落ちている。

瑛己はふと足を止め、空を仰いだ。

複葉機の上と下、2つの翼がフラリと左右に揺れ動く。

瑛己はゴクリと唾を飲み込んだ。

飛空艇は、基地に着陸しようとしている。

だが……無理だ、瑛己は思った。

スピードが落ちていない。このまま基地に降りたら……衝撃にギアが耐え切れない。

地面と激突する。

乗り手もそう思ったらしい。機体を少し上向けると、そのまま滑

走路を突き抜けた。

ゴオオオ

低重音を響かせて、飛空艇は基地を越え、そして瑛己の頭上を横切った。

間近に見たその艇影に、瑛己はその姿を追いかけ走り出した。

「兵庫おじさ……ッ!!」

だがそれは、瑛己が再び走り出してすぐの事だった。

グラリと翼が揺れたと思った途端。一つ、火が散った。

そして次にズドンと翼が爆破した。

それが最後。機体は空で、花と散った。

瑛己はゆっくりと立ち止まった。

空が煙に黒く染まる。

だが残骸が降りしきるその中に、キラリと光る何かを見た。

そしてパツと開いた、水色のパラシュートと。
ブンブン手を振る、誰かさんの姿を。

「……まったく」

瑛己は地面を蹴飛ばした。

そして、そのパラシュートの元へと、全速力でダッシュした。
その顔には確かに、安堵の笑みが浮かんでいた。

4

「　　ッ！！　痛タタタッ！！　　おい、瑛己、もーちよつと
優しくしてくれや」

情けない声を上げる兵庫に、瑛己は仏頂面で消毒液を塗りたくつた。

きつと痛いだろうと瑛己は思った。いや、ひよつとしたら物凄く
痛いのもしれない。

だが、瑛己はそれで手加減するつもりはなかった……大きく溜め
息を吐くと、問答無用に薬をベトベトに塗り、包帯をギュウギュウ
と巻いた。

それに彼は悲鳴を上げるが、それが妙に嘘っぽく聴こえ、瑛己は
手を緩めなかった。

「ひでえ……お前いつからそんな、問答無用な性格になったんだ……」

「……？」

「磐木隊長の所為だよ」

完了の印、最後に一発叩こうとして。さすがにそれは嫌だったら
しい兵庫が、怪我人らしからぬ俊敏な動きを見せた。

「磐木か……ちくしょー、後で殴ってやる。俺のかわいい瑛己を、
よくもこんな鬼のような冷血漢の、ポンポコリンにしたな！」

「……ポンポコリンで、悪かったね」

瑛己は散らかした医務室を見回し、ふうと大きく息を吸い込んだ。そして愛しそうに左腕を摩る目の前の人物を見て、その息は全部溜め息に変える事になった。

彼の名は、原田 兵庫 (harada hyougo)。

歳は今年で41歳だが、童顔と柔らかな顔立ちから、30前半と言われても不思議ではない。ボサボサと揺れる猫っ毛は薄く刈り上げられ、鼻の上に丸い小さな眼鏡をチョンと引っ掛けていた。

穏やかな優しい目。だが、この目が時折少年のようにキラキラと輝く事を瑛己は知っている。

瑛己にとって兵庫は、兄のような存在だった。

そして何だかんだ言っても、瑛己は兵庫をとて慕っていた。大好きだったのである。

「まったく、人を心配させておいて」

それだけに、瑛己は兵庫を睨みつけた。

艇影を見て彼はすぐに、それが兵庫の飛空艇だとわかった。

爆破の瞬間など、どれだけショックだったかわからない。だが、

兵庫は間一髪脱出していた。

それはいい。

だが人を散々心配させておいて、駆けつけた瑛己に兵庫はこう言っただのである。

「よっ、瑛己！ ハッハッハ、相変わらずクソ真面目な顔してんなあ」

「……」

瑛己はその瞬間、心配などするんじゃないなかつたと思った。

幸い兵庫の怪我は、左腕と左脚に軽く火傷しただけですんだ。

それから放っておこうかとも思ったが……それもできず。仕方なく、手当のために基地に戻った。

基地は、突然現れた飛空艇とその爆破に、ひっくり返ったようにパニックになっていた。そのため兵庫のたつての要望で、できる限り人目につきにくい所を選び、どうにか医務室にたどり着いたので

ある。

2人がきた時、医務室には誰もいなかった。

よって不承不承、瑛己が、兵庫の傷の手当てをする事になったのだが……。

瑛己は薬を棚に戻しながら、ふと兵庫を振り返った。

「……おじさん、磐木隊長を知ってるの？」

すると兵庫は、ハツハツハと大きく笑った。

「あの磐木がタイチヨーねえ？ 知ってるも何も、あいつの初フライトは、俺が補佐しましたよー？」

「え」

思ってもみなかった言葉を聞き、瑛己は目を丸くした。

兵庫は元・空軍のパイロットだった。

12年前、ある事件をきっかけに空軍を退役。今では？自称・郵便屋さん？となったが、今でも空軍に顔は広い。

「そりやもう、ひでえ飛行でさあ？ 2人乗りの『葛雲』（かづん）で出たんだけど……俺、途中で酔っちまって。下ろせーって言ったら、自分は着陸が苦手なので上手くできるかわかりません、とか言い出すわけ。俺はあの時ほど、今死んだら、くっだらねーよなあと思った事はなかったね」

「……」

瑛己は苦笑した。あの磐木隊長が初フライトで、そんな事があつたとは……。

しかし……待てよ、それじゃあ……瑛己はハツと目を見開き、兵庫を見た。

兵庫ははにかみながら笑うと、「あー、そういえば」

「俺らの前飛んでたのは、ハルだったような気がする」

ハル。その言葉に、瑛己はピタリと手を止めた。

原田 兵庫の口から「ハル」という言葉が出た時。それは、たった1人の人物の事を指す。

「……父さん……」

聖 晴高 (hijiri harutaka)。

兵庫は胸元から葉巻を取り出すと、グルグルに巻かれた左腕で器用に火を灯した。「なんつーか」

「正直、俺もびっくりしたよ……お前がここに異動だつって聞いた時は」

「……」

それは俺だつて同じだよ、瑛己はふつと目をそらした。

『湊』空軍基地。その名前は、瑛己にとって他の基地とは違う意味合いを持つ。

ここはかつて、自分の父が飛び、

消えていった場所だから。

「変わってねーなあ、この医務室も。ほんと、俺なんかしょっちゅう出入りしてたつて。無茶ばっかしてたもんなあ」

感慨深げに部屋を見回すと、兵庫は葉巻を吹かした。

ここへも、赴任したばかりの瑛己は場所どころか存在も知らなかった。兵庫が瑛己を案内したようなものだった。

「懐かしいな」

「……そう？」

「ああ」

瑛己は兵庫の横顔を見た。

その瞳には、なんとも言えない光が灯っていた。

懐かしい、楽しかった思い出、辛かった思い出、色々な出来事……

……ここで起つたすべての事が、今、その瞳に映っているのだろう。

兵庫おじさんはここで、何を見て、何を感じてきたんだろうかと、瑛己は思った。

そして12年前、その空で。一体何を見たのか……。

父が消えたその日、その時。兵庫はそこにいたのだと言う。

その後すぐ、空軍を退いた。そして今、その空を。

何を思つて飛んでいるのか……。

「さっき」

瑛己はふつと思いついたように言った。「父さんを知っているって人に会った」

「……ほお？」

兵庫は目に浮かんでいた光景を消すように、一つゆっくりと瞬きをすると、瑛己を見た。

「『海雲亭』」

「海月か」

「……知ってるの？」

すると、兵庫はハツハツと大きく笑った。「知ってるもなにも」
「常連。ハルと2人、毎日のように行ったからなあ……今時、あいつの事を知ってるなんて言う女ときたら、海月くらいしかないって」

「……俺、女なんて言ってない」

「バーカ。顔に書いてあるぜ？ 何であの女の人、父さんの事を知っていたんだろう？ って。まさか、よからぬ関係だったんじゃないか！？ ってな」

「……」

瑛己はとてつもなく嫌そうな顔をしたが、兵庫は「安心しろ」と呟いた。

「ハルに憧れる女は結構いたけど……結局、あいつは咲ちゃんだけだった。んで、お前の事を、何より愛していた」

「……」

……そんな事、別に聞きたくなかったのに。

あの時瑛己は8歳。もうすぐ9歳になるという時だった。

だけど留守勝ちだった父の事など、よく、覚えていない。

だが……兵庫と、そして母に聞かされる「父」という存在の事。けれど俺は……。思った言葉を、寸前で飲み込んだ。

「ところで、なあ、瑛己」

ふと、兵庫が渋い声で言った。「さつきからず　　と気になっ
ていたんだが」

「お前、どうして俺の飛空艇が、あんなふうになったのか……訊かないんだ？」

「……」

瑛己はギクリと顔をしかめた。

確かに。気にならないはずがない。

兵庫は元・空軍パイロットだ。それも、腕は悪くない。

それがあんな状態になった。

一番最初に訊きたい事だった。どうしたの？ 誰にやられたの？ と。

だが瑛己には、訊けない理由があった。

「……聞きたくない」

「何で？」

「……飛にまた、？ 運命の女神に惚れられてる？ って言われる」

つい昨日、輸送艇の護衛から帰ってきたばかりなのだ。

訊けばまた、何か厄介な事に巻き込まれるような気がして……わざとその話題を避けていた瑛己だった。

だが、兵庫はそんな瑛己の様子に小首を傾げ、呟いた。「聞けよ、

お前も人事じゃないんだから」

「？ 砂海？ で、ちつと横を通ったばかりに絡まれた……【蛇】の団体さんに」

瑛己は耳を覆いたい心境になった。頼むから、もうそれ以上言わないでくれ。

だが彼が本当に耳を塞ごうとする間際、兵庫が言った言葉に。瑛己はついに、そうする事ができなくなった。

「瑛己が『湊』にいるってんで、会いに行こうと走らせてたら

空(ku|u)一機を取り囲む、20の【海蛇】ご一行様に。鉢合わせしちまってさあ」

「」

瑛己は確かに、運命の女神がにこやかに微笑むのを見たような気がした。

「空（k u | u）が……20の、【蛇】……？」

【海蛇】。？砂海？を拠点とする、黄土色の空賊集団だ。

つい一週間ほど前、赴任の日。瑛己も彼らには遭遇している……その時の事を忘れてしまうには、まだあまりにも時間は経っていない。

あの時、3機の【海蛇】と対面した瑛己。だが、もしもあそこに空（k u | u）が現れ、助けられなかったら。間違いなく、自分は海の藻屑になっただろうと瑛己は思った。

不意打ちだったとは言え、確かに空（k u | u）は3機の飛空艇を難なく墜とした。

だが、今度は桁が違う。20……！

絶句する瑛己を見て、兵庫は何を思ったのかニヤリと笑った。彼はとにかく、この表情の少ない青年が顔色を変えるのを見るのが好きなのである。

「それで……状況は。空（k u | u）は……？」

瑛己の中で何かが、ドクンと跳ねた。

「さて。俺ものんびり観賞している余裕はなかった。一発撃ったら、途端に軍勢が押し寄せてきたからな。逃げるので手一杯」

それに、と兵庫は葉巻を噛んだ。

「逃げる途中、雲の切れ端きれっばに嫌なモンを見た」

瑛己は眉をしかめた。

兵庫は腕を組むと、適当に髪を掻いた。

「セピアの飛空艇……その真ん中に」

その時。ガチャリと医務室の扉が開いた。

瑛己と兵庫はハッと戸口を見た。

そこには、飛たがきが立っていた。

「お前……」言いかけた瑛己を制し、飛は、兵庫に向かって訊いた。

「セピアの飛空艇、真ん中に、ド・でかい、キスマーク」
兵庫は一瞬キョトンとしたが、すぐに「ああ」と頷いた。
途端、飛の顔色が変わった。

「【竜狩り士】、山岡 篤(yamaoka atusii)……！」

被弾した兵庫の飛空艇のエンジン音に目を覚ました飛(サイレンの音じゃないというのが、なんとも彼らしい)。

すぐさま宿舎を飛び出し、360度空を見回した途端、それが爆破するのを見た。

何事や!? 騒ぎ立てる連中には混ざらず、その足で爆破現場に向かおうとした。

だがその途中、瑛己と兵庫に出会った。

兵庫の様子からして、あの飛空艇の乗り手だという事はすぐにはわかった。

それから、こっそりと後をつけたが……決して、立ち聞きするつもりはなかったと彼は言った。「話し掛けるきっかけがなかっただけや」と飛は不必要に連呼した。

瑛己は、思いつきり嫌そうな顔をした。

「そないな事よりも！」

飛は(まさか罪悪感からか)少し顔を赤らめ、兵庫に向かって身を乗り出した。

「おっちゃん、ホンマに見たんか? その飛空艇……本当に、そうだったんか!？」

兵庫は突然の乱入者に気を悪くした様子もなく、むしろ面白そうに目を輝かせた。

「間違いない。山岡だな。それもあの様子からすると、向かった先は」

恐らく、空(kuu)……。瑛己は眉をしかめた。

【竜狩り士】、山岡 篤。

瑛己もよく知っている。フリーの？渡り鳥？で、その飛行技術は並の者じゃないという。

そして彼が【竜狩り士】と呼ばれる所以は。

彼は様々な仕事を請負う……だが、専門にしているのだ。空軍を、墜とす事を。

空軍の戦闘機『翼竜』。それを撃墜する事を、彼は仕事……いや、？趣味？にしているのだ。

それがゆえに人は彼を【竜狩り士】と呼ぶ。

「空（k u | u）を狙うだろうか」

瑛己の問いに兵庫は苦笑した。「そりゃ、間違いないだろ」

「空（k u | u）の翼は、表の世界も裏の世界も、この空では一級の価値がある」

墜とした者は空の歴史に名が残るだろうよ。冗談とも本気ともつかない言い方でそう言うと、兵庫は葉巻を吹かした。

瑛己の中で、再び、何かがドクンと跳ねた。

200の【海蛇】。

そして 【竜狩り士】。

何かを考えるまでなく、瑛己はスツと立ち上がった。

「俺」

兵庫はジツと瑛己を見つめた。

少し俯いて、何かを考えている瑛己。

その姿に、思わず苦笑がもれてしまう。

「あー、俺は、こんな腕だし……それに、ちょっとここに用があるから」

瑛己はハツと兵庫を見た。

「期待すんなー？」

すぐに追いかける。

「……ああ」

瑛己は大きく頷くと、医務室を出た。

格納庫に向かって走る瑛己の横に、不意に、誰かが並んだ。

「待て。俺も行く」

飛だった。

「……お前」

振り向くと、飛は呆れた顔して走っていた。

「お前一人行った所で、【海蛇】20と山岡相手に何するんや？」

俺よかよつぽど、おまんの方が無茶やわ」

「……」

せやけど。飛は片方の眉を上げると、明後日を睨むように見つめた。

「俺も、山岡には借りがあつてな」

絶対ゆずれん、借りって奴がな。

「……」

瑛己はしばらく仏頂面で飛の横顔を見ていたが、ふっと、苦笑を浮べた。

「……悪い」

「阿呆」

瑛己と飛、喧騒静まらぬ基地を2人、駆けた。

兵庫はゆっくりと窓辺に向かうと、硝子越ガラスしに空を見上げた。
医務室の窓からは、滑走路がよく見える。

こつから。果たして俺も、色んな物を見てきちまったもんだな…
…兵庫はかすかに苦笑した。

望む望まぬは、問われる事もなく。

そしてその滑走路から、2機の飛空艇が飛び出した。

それにより、静まりかけた基地が、また慌しく動き始めた。

兵庫は飛んで行くその艇影を見つめ、やがて、目をそらした。

「さて」

葉巻を灰皿でもみ消すと、彼はゆっくりと振り返った。

「久し振りだな」

そして小さく微笑んだその先には。

『湊』空軍基地、総監・白河 元康の姿があった。

瑛己と飛、2人が出て行って間もなく、彼はここに姿を現した。

だが兵庫はさして驚いた様子もなかった。まるで、白河がここに
来る事がわかっていたかのように、扉を開けた彼にゆるく微笑んだ
ものだった。

「あの複葉ふくようは、やはりお前か」

白河は手近の椅子には目もくれず、じつと兵庫を見た。

「馬鹿な事をしてくれる…基地は今、大混乱だぞ？」

「見りゃわかる」

そう言っつて、後ろ手でコンコンと窓を叩いた。

「何しにきた」

白河は険しい瞳で兵庫を睨んだ。その顔は、穏やかに微笑むいつ
もの彼からは想像できないほど厳しいものだった。

「瑛己えいきに会いたくてな」

「……………」

「それともう一つ」

兵庫は一度ゆっくりと瞼を伏せると、同じようにゆっくりと、白河を見た。

「白河、お前に訊きたい事がある」

「……」

白河は、視線はそのままに、一瞬意識だけを背後に向けた。

「あまり時間がないんでな。単刀直入に訊く。　　？あれ？は、

『蒼光』に着いたのか？」

「……」

答えない白河に兵庫は軽く溜め息をつく、「別の言い方をしてほしいか」

「？空の欠片？は今、橋爪が持っているのか？」

「……ッ」

白河は眉間にしわを寄せると、うめくように言った。

「……原田、なぜ、お前がそれを知っている」

「さあね。答える、白河。お前、自分が何やったのか、わかってんのかよ？」

「……」

白河が目をそらした。それが兵庫は気に入らなかった。

「瑛己達には言ったのか？　自分らが、一体何を守って飛んだのか
って」

「……」

「白河……！　お前、ハルの息子に、何させたんだよ……！」

よりによって、ハルの息子に。

「自分の親父殺した、何運ばせたよ……ッッ！！」

兵庫は壁に拳を叩きつけた。

それに、白河の眉間のしわが一層深くなった。

「……だったらどうすればよかったというんだ……？　まさか、輸送艇を撃墜しろとでも？」

乾いた笑いをこぼす白河を、兵庫は殴った。

その体が扉に叩きつけられる音が、辺りにワンと響いた。

「お前、橋爪が何狙ってるのか、わからないのか」

「……」

「奴の狙いは、」

「わかつている」

「だったらなぜ!!」

「……なぜ？」

そう言うと、白河は口の端をぬぐって、兵庫を睨みつけた。「決まっているだろう」

「俺は、聖達を」

助けたい。

その言葉に、兵庫は片目を細めた。

「助けたい？」

「ああ」

残された、たった一つの可能性。

兵庫は、もう一度白河を殴ろうかと思った。だが一歩踏み出して、
「……」 結局、それ以上進む事はなかった。

そして彼がつむいだ言葉は、

「無理だ」

淡々とした、表情のない声だった。

「原田」

「奴らはもう、帰ってこない」

「……」

「……そんな単純なもんじゃ、ねーよ」

お前が考えているような、そんな、単純な問題じゃない。

「それに、万が一奴らが……ハルが、あの穴の向こうで生きてたとしても。あいつが、もがかなかったわけがない」

それでもあいつは帰ってこなかった。

「白河」

兵庫は白河を見た。

その目に、白河はハツと息を飲んだ。

「お前は……、橋爪 誠（hasizume makoto）・本部総司令殿がやるうとしてしている事は、あの空に再び、地獄への入口を開けようとしている、そういう事だぞ？」

その目は、？見てしまった者？の目だった。

「お前はあの光景を知らない」

白河はゴクリと唾を飲み込んだ。「原田」

「助けたい……？ バカな……吐くのか、今その言葉を……。そんな気持ちを抱くなら、なぜあの日お前はあの場所に」

こなかつたんだ？

「……」

兵庫は脱いでいたジャンパーを掴むと、窓の隣にある外への扉に手をかけた。

「原田」白河がもう一度、叫ぶように言った。

それに兵庫は振り返りもせず、こう言った。「二度と？空の果て？なんか」

「瑛己に、ハルと同じ運命なんか……絶対たどらせはしない」

俺の命に代えても。

兵庫は蹴破るように扉を開けると、滑走路目掛けて走った。

一人残された白河は、開け放たれた扉から視線をそらし、自分の腕を見た。

「……聖」

左手で顔を覆うと、白河はしばらくそこで、大声で泣く事もできない自分を呪った。

基地を出た瑛己えいきと飛たかきは、南へ、？砂海？へと飛んだ。

《注意しとけよ。いっどこから、何がくるともわからん》

前方に行く飛に、「ああ」と瑛己は短く返事をした。

前後左右、そして上下。見渡すが、人間には限界がある。その限界を埋めるためにリーダーがあるが、それだけを頼りにしてもいけない。

そしてこれが、編隊だったらばまだしも。飛ぶのは2機の『翼竜』、向かうは20の【蛇】と【竜狩り士】。

(無茶、か)

瑛己は苦笑した。間違いない、そう思ったからだ。

自分の姿を見ても思う。かろうじてパラシュートとゴーグルは持ってきたものの、カッターに黒のズボン。飛も似たようなものである。

《瑛己、山岡がいたら、手え出すなよ》

無線の声に、瑛己は顔をしかめた。……またか……。

「?自称・空戦マニア?としてか?」

思わず言った言葉に、飛が一瞬黙った。

そして、

《ちやう。プライドや》

……? 瑛己は首を傾げた。

《山岡には、借りがある》

そういえば格納庫に向かつてる時もそんな事を言っていたな……

瑛己は思い返しながら、後方を確認した。

《初フライトの時、あいつには……随分コケにされたからな》

「遭ったのか」

《遭った。そこで俺は、墜ちた》

「……」

風が出てきた。リーダーを確認しながら、操縦桿を右へ少し傾ける。

《よう覚とるわ……エンジンガタガタで、どうしようもなくなって。脱出の準備しとった時やった》

Good Luck

ザワついた無線から聞こえてきた、陽気な音楽と、場違いな声。

何や？ 嘩然とする飛が次に聞いたのは、

もうちょっとマシな腕になってから、かかっておいで

そして、笑い声。

飛はハツと空を見上げた。

そしてその目に飛び込んできたのは、セピアの真ん中に映えた

朱のルージュ。

そして、操縦席からニヤリと笑う、黒いサングラスの男。

《……他の何者にもゆずれん。あいつは絶対、俺が墜とす》

瑛己は上空を見上げた。

《瑛己、聞いたんのか？》

「ああ。ほどほどに」

ほどほどって、何や……飛がそう言おうとした時。

レーダーに、光が灯った。

《瑛己》

「ああ」

瑛己はジリと片目を細めた。

北西。方位330。

操縦桿を傾ける。

「頼む」

誰にともなく、瑛己は呟いた。

2人がそこに着いた時、20いたという【海蛇】の姿は半分ほど
になっていた。

だが……その様子を見て、瑛己の背中をゾワリとしたものが這っ
た。

10の黄土色、ウネウネとそれぞれが独自の動きで飛び回る。そ
してその目的は等しく、ただ1つ。

取り囲む、白い翼を墜とす事。

そのすべてに銃口を向けられ、背中を追われ、目の前に立ちふさがれ、射撃を受ける。そんな状況の中、そのすべてに注意を払い、同等……いや、それ以上に立ち回っている飛空艇乗り。

一体それは、瑛己は思った。その乗り手は、一体どんな人物だというのか。

むしろそれは……人間なのだろうか？ 普通の人間に、そんな事ができ得るといふのだろうか……？

《きたで》

飛の声に瑛己はハツとした。うねる【蛇】の中から、こちらを見定めた何機かが這い出してくる。

瑛己と飛は左右に分かれた。そしてそこから、空戦が始まった。だがすぐに瑛己は気付いた。

兵庫が見たという、セピアの飛空艇。その姿は……ない。

黄土色とセピア、色は見間違えたとしても「ど・デカイ、キスマーク」を見間違うとは思えない。

瑛己の胸の中を、嫌な予感めいたものが走った。

(山岡は一体……)

だがそれも、束の間の事だった。

襲い掛かる【海蛇】と対峙し、飛ぶうちに。そこにまで意識は回せなくなっていた。

目の端に、炎を上げて墜ちていく黄土色の機体が入った。

誰がやったものか、そんな事を考えている余裕は、瑛己にはなかった。

彼は【海蛇】2機に付かれ、それをかわす事で頭がいっぱいだっ

た。
「……………」

瑛己はバックミラーを一瞬だけ見て、操縦桿を押し倒した。

刹那、頭の上を銃弾が飛んでいく。
ひねりながら右へ旋回を入れるが、そこにも、銃撃が降る。
瑛己は翼を傾けると、上へ、どうにか逃げた。

前に【海蛇】と対峙した時。

3機を相手に、瑛己はやはり、必死に立ち回った……だがあれから、あの時の事を思い出すたび、瑛己は思う。

一瞬、自分は撃つ事をためらった。

その所為で命を落としかけた。

3機の飛空艇、その1機の背中を捉えたその時。

瑛己はほんの数瞬……だが、撃つ機会を外した。

それが元で直後、被弾し。

……結果はどうあれ、彼の中にはずっとその時の事がわだかまっていた。

(俺は、父さんみたいにはなれない)

父だったら……そして世に？エースパイロット？と呼ばれる者ならば。恐らく、戦場で躊躇する事などないのだろう。

それが、己の運命を左右する事を知っているから。

瑛己は操縦桿を右へ。ひねりながら、後ろの1機を撒きに掛かる。

(連係が、いい)

前も思ったが……【海蛇】は個人の腕はともかく、連係での飛行が恐ろしくいい。

1機の攻撃を避ければ、もう1機の攻撃がそこに降る。それをどうにか避けても、今度は元の1機に背中が向く。

執拗な追撃と、走行。

この空に飛び込んでまだ大して時間は経っていないが、すでに、瑛己の体力はかなり消耗していた。

(気がもたない)

飛はどうしただろうか、だが、確認する余裕などない。

空(k u u)は……？ だが、その飛行に見惚れるどころか、顔を上げる暇さえない。

疲れが、集中力を殺いで行く。

瑛己は、らしくなく焦りを感じた。

「……チ」

軽く舌打ちをして、そして。

瑛己は操縦桿を左に切った。

スロットルを調整しながら、転じて、下降する。

ふわっとした浮遊感と、サイドミラーに【海蛇】の残像を一瞬見る。

そしてすぐさま、スロットルを全開にして、操縦桿を右に切りつつ手前に引いた。

どうしようもない焦燥感が、彼の胸を支配し始める。

宙返りする。

そして、飛空艇の腹を反らして海を見た時、【海蛇】1機の頭上を捉えた。

(撃て)

間髪入れず、射撃ボタンに指を入れる。

ドドドド

結果を見ずに操縦桿を左に切る。

瑛己はバツと空を振り返り、もう一機を見た。

宙を蹴るよう上昇する。ガタガタと機体が、激しく揺れる。

その上を、飛が抜けた。

その後ろにも2機。鬱陶しいほどに絡みつかれ、彼も必死に戦っていた。

その姿を見て、瑛己は、自分の気持ちが一瞬軽くなるのを感じた。

「……」

手負いの1機が、体制を立て直し、瑛己の背中についた。

だが、瑛己はそれをチラと目視して、再び操縦桿を振った。

(根競べで)

負けるわけにはいかない。

瑛己は微か、苦笑を浮べた。

ピンと、ジッポーを開けると、彼は啜っていた煙草に火を点けた。のんびりともう片方の腕で操縦桿を操作しながら、器用にピースを吹かす。

その機体には、ノリのいい音楽が流れ、男は微かにハミングしていた。

その目の表情は、漆黒のサングラスによって定かではないが、先ほどから一点に向けられていた。

並ぶ計器の中の一つ、レーダーに映る、赤の点滅に。

そのうちの一つがまた、忽然と消えると、

「流石さすがだなあ」

ニヤと笑いながら、男は呟いた。

「まあ、せいぜい頑張って」

男はジッポーを片手で遊ぶと、ピンともう一度開けた。この音が、彼は好きだった。

そこには、銀色のキスマークが描かれていた。

そしてその下にはこう書かれていた。

I can fly to the end of the world.

男はゆるく微笑むと、また、ジッポーを鳴らした。

トトトトトト

後ろからの銃撃を寸前でかわし、飛はそのままクルクルと錐揉み気味に降下して避けた。

一瞬、どっちが空でどっちが海だかわからないような感覚に捕われるが、すぐに我を取り戻し、すばやく左右を確認する。

【海蛇】2機に追われながらも、飛は、辺りに気を配る事を忘れなかった。

その理由の最大は、やはり、兵庫が言った言葉。

セピアの飛空艇 【竜狩り士】、山岡 篤の存在。

瑛己と同じように飛も、ここに山岡の姿がない事にすぐ気付いた。見間違いだっただのかとガツクリしたが……。

空を見渡し、飛は、他を確認もせずには操縦桿を手前に引いた。すると今まで彼がいた所を、銃弾が矢となって飛んで行った。

飛は、絡みつく【蛇】など眼中にないかのように、空を見る。

「……変やな」

ポツリと呟くと、飛は操縦桿を右に切った。

山岡 篤の姿はどこにも見当たらない。レーダーを見ても赤い点がるだけで、もちろん、光るキスマークなど存在しない。

だが、飛は何度も何度も空を見回した。

妙だ……飛はそう思った。どうもさつきから……胸騒ぎがする。

もう一度、意味がないとわかっていても、レーダーを確認する。

そして、勘だけで【海蛇】の攻撃を避けると、また、グルリと空を見る。

(この空には、意思がある)

漠然と、飛は空に何かを感じた。

何かが……息を潜めているような感覚がする。

なぜや？ 飛は自分自身に問い掛けた。これほど空は、雑把ざつぱに燃

えとるつちゅーのに……。

なぜか、空は、静かだと思った。

その静けさが、飛の心に疑問を投げる。

「おかしい」

俺と瑛己、えいき【蛇】、空(k u | u)以外の他の意思が、この空にはある。

飛はついに無線のスイッチを押そうとした。

空戦中は、味方の気を殺そいだり、敵にジャックされる事を避けるため、極力の無線は控えるようにと言われてきたが。

瑛己に言わなければならぬと、飛は思った。

瑛己は、何だかんだ言ってもまだ空戦経験は少ない。技量は認める。だが……。彼には経験によつて得る？勘？というものが、まだあまりない。

そして、飛の中の？勘？は、注意しろと告げている。

「瑛己ッ」

飛は叫ぶように言った。

返事がない。飛は苛々と、もう一回名前を呼んだ。

《 何だ》

すると、ノイズが混じつてもわかる、不機嫌そうな声が返ってきた。

「瑛己、変や。嫌な予感がする、気を」

そこまで言つて。飛はハッと口をつぐんだ。

《飛？》

訝しげに、瑛己が問う。

だが飛は一点を見つめ 目を見開いた。

そこへ、【蛇】の銃撃が唸る。

一瞬の判断遅れから、飛の機体に弾が入る。

ガツンガツンという衝撃に、飛は舌打ちをする暇もなく、上に逃げようとすが、舵が思うように動かない。

(しもた)

何とか機体を大きく左に振って、最悪だけは避ける。

《ザザ……ッ、……かきッ……》

「電波、わるっ」

まずいな……無線の無茶苦茶なノイズ音は、電波だけの問題ではない事くらい、飛にもわかった。

「瑛己ッッ!!」

聴こえてくれ、届いてくれ。

「気をつけるッッ、山岡は　　ッッ!!!!」

再びの【蛇】の執拗な攻撃に、飛は大きく舌を打った。

「じゃかあしいわッッ!!!!　だーっとけッッ!!!!!!!!」

それに返事したのは、無線だった。

ザ。

プツリと、その音しかしなくなった無線に、飛は啞然とした。

「お前が黙ってどないする……!!」

チクシヨ……!!　飛は苦渋に顔を歪めると、空を見上げた。

「飛……、飛」

何度問い掛けても飛は返事をしない。無線の向こうから聴こえるのは、ザーっという耳障りな音だけ。

空を仰ぎ、飛を確認する。煙が出ている。

(撃たれている)

舵がおかしいのが、遠目にもわかる……しかし鬱陶うっとうしく絡みつく

【蛇】に食われまいと、懸命に飛んでいる。

もちろん、瑛己とて、傍観している余裕などない。

つい先ほど、どうにか手負いの1機は撃墜したものの、もう1機残っている。

後ろをとられまいと走り、ひねりながら、相手の背中を狙う。

【蛇】の姿を目で追いながら、だが、瑛己はふと先ほどの飛の言

葉を思い出す。

突然点いた、無線のランプ。聞こえてきた、飛の声。

嫌な予感がする。

そしてその後、何か言ったような気がするが……瑛己には、雑音でよく聞き取れなかった。

嫌な予感。瑛己は、ここに飛び込んだ時自分も同じ事を感じたのを思い出した。

「……………」

瑛己は空を見渡した。

向こうでは、空(k u | u)が飛んでいる……周りを囲む飛空艇は、もう残りわずかだ。

この空に【蛇】は、兵庫が見た時からすれば3分の1以下になっている。

それは飛も見ているはずだ。それなのに、彼は嫌な予感がすると言った……………」

瑛己の胸にも再び、何か妙な感覚が湧き始めた。

「……………」

瑛己はもう一度、飛を見上げた。

その時、不意に飛が妙な動きをした。

彼の後ろには、2機の飛空艇……それを懸命にかわし、逃げ、追いながら。

飛が撃った　だがそれは、その2機とはまったく違う方向。

空に向けて。

彼の上に行く、雲、目掛けて。

瑛己は、眉をひそめた。

残る一機の背中を追いながら、だが瑛己の目に、さっきの飛の姿がチラついた。

(なぜ?)

確かに飛は無茶な飛行をする。それは実際よく知っている。

だがあの?空戦マニア?が、目的もなく撃つだろうか?　何もな

い虚空目掛け撃つような事を。

瑛己は空を仰いだ。

蒼空、そして雲。ポカリと浮かんだそれが、向こうにある。

瑛己は目を凝らした。

その時、その雲間から太陽が顔を出した。

キラリとこぼれた光に、瑛己は目を細めた。

だが、その光が一瞬、さらに輝きを増した。

まるで、何かに反射するかのよう……そう思って、瑛己はハッと目を開いた。

「まさか」

レーザーに、赤のランプは点在している。

だが、その数までは数えなかった。

一つ、その数が、食い違っている事など。そして残るその一つは、ずっとそこに。

その雲の中にあつたとは。

瑛己は腰を浮かせた。

雲の切れ間からこぼれた太陽と、その端に。確かに彼は、翼を見た。

そしてそれは、間違いなく。

セピア色だった。

「……そろそろかな」

男は口の端を釣り上げると、サングラスを掛けなおした。

その瞬間また一つ、レーザーの赤い点滅が消えた。

男は、操縦桿をグイと押し倒した。

途端、急降下を始める機体に、男はニヤリと笑った。そしてさらに一步エンジンを踏み込むと、スロットルを跳ね上げた。

「……………」
瑛己と飛、二人は共に、雲間から飛び出すセピア色の機体を目にした。

飛は目を見開いた　まるで、風のように猛然と落下する機体。それ自体が弾丸のように、空を縦に切り裂くその切っ先にあるのは、

「空(k u | u)……………」
真白き翼を持つ、一羽の鳥。
飛は、息を飲んだ。

避けられない。

このタイミングは……………！！　飛は言葉を失い、ただそれを見つめた。

もらった　ッ！　山岡の音が聞こえたような気がした。

だが、山岡の銃口が輝いた、次の瞬間。飛は、信じられない光景を目にする。

銃弾が飛ぶ、空(k u | u)目掛けて、一路、まっすぐに
入った……………そう思ったその瞬間。

弾丸と、空(k u | u)の間に、風が吹いた。

それは、青い風。

まるで、空(k u | u)を庇うように……………事実。守るように。
その背をさらした、そこに、銃弾は降りそそいだ。

ガンガンガンガン……………！！

『竜』の翼に。

その身をさらした青い機体が。

聖　瑛己の機体は。小さく爆破すると共に、炎を上げて。
安定を失った機体は、まっすぐ海へと、空を斜めに墜ちて行った。

「瑛己ッッ……………！！！！！！」
飛は、声の限り、叫んだ。

その時の事、そしてその後の事を。後に瑛己は何度も聞かれるが、はつきりと覚えていなかった。

ただ、すべてが夢中の事だった。

山岡が、走っていた。

目指す先に、空（k u | u）がいた。

避けられない。そんな事を思う間もなく、瑛己はスロットルを全開にして翔け出していた。

庇うとか。守るとか。借りがあるとか、何度も助けられたからとか。

そんな事、考えもせず。浮かびもせず。

ただまっすぐに、空（k u | u）を目指した。

次の瞬間、目の前が真っ白になるような感覚を覚えた。

激しく揺すぶられる機体に、瑛己は歯を食い縛り。操縦桿を動かしてもいないのに急速に生まれた落下感に、彼は目を閉じた。

ああ、墜ちる。

思ったのは、それだけだった。

それから。気付いた時には、瑛己の体は勝手に操縦席から飛び出していた。

パラシュートを背負って。

見果てぬ空へと。

カッターシャツが風にあおられ、髪が吹き飛ばされる。

パラシュートが開き、グワンと体が引っ張られ。

次に目を開けた時。

目の前に、セピアの飛空艇が迫っていた。

撃つのか？ 瑛己はじつと【竜狩り士】を見た。

途端、別の所から銃弾が、山岡目掛けて降った。

輝くほどに白く、痛いほどに白く、泣きたくなくなるくらい白い、飛空艇。

瑛己はもう一度目を閉じた。

その瞬間、空（k u | u）に狙われながらもセピアの飛空艇が放った弾が、パラシュートをかすめ切り裂いた。

目を閉じた、その身に。色々な感覚が通り過ぎていった。

風、

落下感、

気分が悪い。

風、

吹き抜ける、

飛んでる……？

翼。

白。

心地のいい、

風。

背中に、

翼が、

はえたみたい……。。

……気付いたのは、波の音。

緩く柔らかな海の声。

瑛己はゆっくりと目を開けた。

ここは、天国だろうか？

苦笑した。

（それも悪くない）

目の前には、真っ青の空が広がっている。

雲一つない蒼空の青^{ブルー}。

瑛己はふつと、歌を口ずさんだ。

気に入りの曲。

父が好きだったという、そのメロディを。

(父さん……)

空があまりに青くて、眩しくて。その瞳をそっと閉じようとした時。

瑛己は初めて、そのにおいに気付いた。

天国には不似合いな、何かが燃える……焦げ臭いにおい。

彼は目を開けると、ゆっくりと体を起した。

海岸に広がる砂が、サラリと瑛己の体を流れた。

そして瑛己は言葉を失った。

そこに、白い飛空艇が横たわっていた。

だがその姿はどう見ても、まともな着陸をした体ではない。

片翼にパラシュートを巻きつけ、もう片方はゴキリと地面に垂直に折れている。砕けたプロペラ、ひしゃげた頭部。胴体からは、黒い煙がこぼれるように立ち上がり、尾翼は不自然に宙に浮いている。

パイロットは……？ 瑛己はハッと顔を歪め、駆け出した。

体の節々が痛む。だが構わず、瑛己は機体にしがみついた。

そして、操縦席を覗き込む。

「！」

飛行服に身を包んだ乗り手が1人、そこに掛けていた。

「おい！ 大丈夫かッ！」

声を掛けるが、反応はない。頂垂れた首がグラリと揺れる。気を失っているようだ。

このままにはいけない。機体がいつ爆破するとも限らない

瑛己は痛む体で、パイロットを操縦席から引き出そうと試みた。

「クッ……」

幸い、大きな怪我はないようだ……思ったより小柄な体を抱え機

体から離れると、瑛己は一息吐いた。

そして改め、その乗り手を見た。

「……………」

(これが、あの、空(k u | u)の乗り手……………)

心臓が、ドキリと跳ねる。

自分の手に、別の意識でも生まれたかのように。その手は、無意識に？彼の？のゴーグルへと伸びていた。

胸の鼓動が鳴り止まない。

ゆっくりとゴーグルを外す……………。

そして、日の下にさらされたその顔を見て、瑛己は言葉を失った。

「……………まさか……………！」

その時、意識を取り戻すように、その瞼が深く揺れ動いた。

瑛己は魅入られたかのようにじっと、その顔を見た。

そしてその瞳が開かれようとした……………だが次の瞬間。

頭に走った強烈な痛みと共に、彼の意識は暗転した。

数分後。

瑛己は、彼を追って駆けつけた兵庫によって助けられた。

だがそこに、白い機体はなかった。

そしてもちろん、空(k u | u)と呼ばれる飛空艇乗りも。跡形

もなく、消え失せていた。

だが、瑛己の心に焼きついたものは、決して、消える事なかった。

白い飛空艇、そして。

それに乗った、少女の姿は。

空なんか、気にした事なかった。

太陽だとか、雲だとか、その色だとか。

広さだとか。

空の大きさなんか、気に止めた事もなかった。

流れる雲も、その青も。それは、あまりにも当たり前前で。

当たり前前すぎて……ひよっとしたら、僕はその日まで、空を見た事がなかったのかもしれない。

だから、覚えてる。

その日の空が、あまりにも澄んでいて。

雲一つない、まっさらな蒼空で。

それは、どこまでも高く。高く高く続いていて。

無限に。世界のすべてを包み込むように。彼方へと導くように。

僕は初めて、空が美しいと思った。

そして、その日。

父は、その空へと還^{かえ}った……。

僕はそれを聞いた時、どう思ったんだろう……？

あの日の空は、これほど鮮明に覚えているのに。

父が逝ったと知ったその日、その時の事は。よく覚えていない……

…。

次の日の朝。

目を覚ますと、瑛己^{えいき}は、医務室の寝台の上に横たわっていた。

「なぜ、基地を勝手に飛び出した……!!」

磐木いわきは、今にも掴みかからんばかりの勢いで、瑛己に向かって怒鳴った。

それに瑛己は逃げ出したい心境を抑え、寝台に腰掛けたまま磐木を見つめた。

「まあまあ、磐木。瑛己も怪我してるんだし」

と、横で兵庫が磐木の腕を掴んでなかったら。実際、もうぶつ飛ばされていたかもしれぬ。

瑛己の怪我は奇跡的にも、全身の軽い打撲、右足の捻挫だけなんです。

そして彼の横の寝台たかきで飛が胡坐を掻いているが、彼の怪我は、基地に戻った時磐木にボコボコにされてできたものだった。

「聖! なぜ勝手に飛んだ!! なぜ黙って飛び出したりした!!」
「磐木、それは、俺が……」

「原田副長は黙っていてください! 聖ツ!!」

原田副長……その言葉に、兵庫は苦笑した。彼がそう呼ばれたのはもう何年も前、空軍にいた頃の事だ。

磐木が初めて空軍に入ったのは、12年前、兵庫が副隊長を務めていたその隊だった。その時の印象が強く、いまだ、磐木は兵庫の事を『原田副長』と呼ぶ。

瑛己は2人のやりとりを、不思議な面持ちで見ている。

「聖ツツ!!」

危機迫る形相で言われ、瑛己はハツと我に返った。そして、「……すいませんでした」と言った。

「謝罪の言葉など、聞き飽きた」

理由を説明しろ。なぜ無断で飛んだ？　それがどういふ事かくらい、お前ならわかっていいるはずだろう？

磐木の瞳に、瑛己はそつと目をそらした。

(理由？)

そんなもの……瑛己は心の奥で、わからないと呟いた。

空(k u | u)が、【海蛇】20機に囲まれていると聞いたから？

そこに、【竜狩り士】まで出てきそうだったから？

空(k u | u)には何度も助けられているから？

どれも、違う……どれも……本当じゃない。

「わかりません」

結局、その言葉を選んだ。

そして瑛己は瞼を伏せたままこう続けた。「飛びたかったから、飛んだだけです」

途端、磐木は兵庫の腕を振り払い、瑛己をぶん殴った。

「磐木ッ！！」

寝台に叩きつけられた瑛己は、痛む体を起こしゆっくりと磐木を見た。

磐木は、燃えるような瞳で彼を見ていた。

「

斬るような沈黙が落ちた。

兵庫も飛も物音一つ立てられない……少しでも動けば、途端、斬り裂かれそう。漂う空気が、刃を含んでいるかのようで。

磐木の目を見て飛は思った。目で殺すとは、こういう事かもしれない。

それほどに、恐ろしい目だった。

だがそれを受ける瑛己の目は、あまりにも静かだった。

兵庫はその双眸に、一人の人物を思い出さないわけにはいかなかった。

いつそ怒鳴りあってくれた方がどれほど楽か。

「しばらく謹慎を命じる」

頭を冷やせ。

永遠とも思えるような沈黙の後、磐木はそう呟くと、蹴破るように医務室を出て行った。

その様子に、兵庫は瑛己をチラリと見て小さく頷いた。そしてその背中を追った。

残された瑛己は瞼を閉じると、大きく深呼吸した。

「しかし……お前も、ようやるわ」

磐木が出て行って、空気が緩み始めた時。隣の寝台に座る飛がポツリと呟いた。

「飛びたかったから飛んだ、か……まあ、俺かて人事やないけど。

あの場でそれを、普通言うか？」

「……」

だったら他に何と言えればよかったんだ……瑛己は飛を見もせず、虚空を睨んだ。

「まあ、お前らしいっちゃ、お前らしいがな」

カカカカ。小さく笑う飛に、瑛己は呟いた。「あの時」

「俺は、どうなった？」

飛は笑うのを止め、瑛己の横顔を眺めた。

「覚えてないんか？」

「……あまり」

「そーか」

飛は枕元に放ってあったマルボロを取ると、1本出して、火を点けずに啜えた。

「磐木隊長が殴っても無理ないわ……俺かて、この手がまともやったら、お前を殴る」

……磐木隊長に蹴られた時、捻挫したんだよな、その手……？
思ったが、瑛己は結局何も言わなかった。

「山岡が雲の上から現れた……えらい勢いで空を切って降りてきた。その先に、空（k u | u）がおった」

「……」
「俺は、入ったと思った。避けきれんと思った。そこへ、どっかの阿呆が間を割った」

「……」
「空（k u | u）は無事やった。その阿呆が全部、弾を浴びたからな。せやけど代わり、阿呆の機体は炎上や。見てて、とっても心臓にいい光景やったわ」

おかげで寿命が3年縮まった。そう言った飛に、3年、世界平和につながったのかも……と瑛己は思った。

「間一髪、阿呆は脱出したみたいやな。けどもそれを見た山岡は心中穏やかじゃなかったみたいや。あいつ、まともに阿呆を狙い始めた。俺も慌てて向かおうとしたが、【蛇】が絡んできて動けえへん。どないしようかと焦った時や」

「……」
「空（k u | u）が、山岡を撃った」

「……」
「それでも山岡は執拗に追いつがる。けども俺かて、それ以上は許さへん。それに丁度うまい事、兵庫のおっちゃんが見れた。山岡は形勢不利と見てトズラしおった。あーあ、阿呆なんか放つというて、追いかければよかったわ」

「……」
「結局その後、無人島の海岸端にお前が倒れてるのを見つけた。そういつわけや」

瑛己は窓から空を見上げた。

（結局また、助けられたのか……）

兵庫の声に揺り起こされて見た時、辺りにはもう何もなかった。それからすぐにまた気を失ってしまったが。

瑛己はドカリと枕に倒れた。そして目を閉じた。
するとそこに、浮かび上がるものがあった。
それに驚き、瑛己は目を開けた。

「……」
「まったく……お前が寝てる間に、俺がどんな目に遭^あったかわかっ
とんのか？ 警木隊長にボコボコにされるわ、小暮さんにコンコン
と説教されるわ、ジンさんと新さんには笑われるわ、」

「僕に、泣きつかれるわ？」

その時、向こうの窓からヒョイと飛び出す顔があった。

相^{さか}楽 秀一だった。

秀一は裏口から医務室に入ると、早速、頬を膨らませた。

「瑛己さん、ご無事で何よりです……だけど、僕は怒ってるんです
から」

「……」

瑛己は秀一の様相に小さくギョツとし、それから吹き出した。

「何が面白いんですか！？ 僕は真剣に怒ってるんです！！」

「悪い悪い」

パタパタと手を振りながら、瑛己は笑いをこらえるように顔を背
けた。

こんな事を言ったら秀一はますます怒り出すに違いないが
怒ってる姿が、なんだか子供じみてて、妙にかわいらしくて。

「しゅうー、何^{なに}また駄^だ々こねとん。お前に黙^もって飛んだのは悪かつ
たと思うが……ええやないか、何とか2人、無事に帰^{かえ}ってこれたん
やから」

すると秀一はキツと飛を振り返り、猛然と掴みかかった。「そう
いう問題じゃない！！」

「飛も瑛己さんもツツ……！！ 自分で勝手に危険に飛び込んで……」

……ツツ！！ 残された僕がどんな想いで待^{まち}ってたかツツ……！！
どんなに心配したかツツ……！！」

「しゅういちー」

飛は苦笑して、トントンと秀一の肩を叩いた。「泣き虫」

「ガキの頃から変わらんなあ、お前は。安心しろって、そう簡単に俺はくたばらへんから。な、瑛己」

「世の中のためにはならないがな……」

「何やて？ 今何が言うたか？」

「決めた」

「？」「？」

言つと、秀一は決意に燃えた瞳で2人を見た。

「ジンさんが言っていたんです。当分、誰かあの2人を見張っていないといけないんじゃないかって。2人共謹慎と言ったって、絶対大人しくしているわけがない、医務の佐脇先生は出張中だし、

僕が2人を、見張ります」

「……」「……」

飛が、煙草をポロリと落としながら戸惑った様子で言った。

「み、見張るって……何や、囚人じゃあるまいし」

「囚人です。という事で、今後、無断で医務室を出る事を徹底的に禁じます！」

「て、徹底的……？」

「俺、便所行きたいんやけども……」

「却下です」

「ブツ！ ちよい待て！！ 冗談やる！？」

「本気です。却下です」

「待て、秀一！」

「……」

これはとんでもない事になったな……。瑛己は苦笑した。

結局、「連れションなんて、趣味わるっ」と言いながら、連行されるように飛と秀一、医務室を出て行った。

もちろんその時、「瑛己さん、逃げちゃだめですよ」と念を押す事を忘れなかった……。瑛己は苦笑して、パタパタと手を振った。

一人になって。

瑛己はふうー……と大きく深呼吸した。

「……」
考える事はたくさんあった。思う事もたくさんあった。

飛は言わなかった。彼は知らない。

あの時……あの後。何が起こったのか。

そして瑛己が何を見たのか……。

「……」

瑛己は目を閉じた。

日の光に透ける瞼のそのずっと奥に。途端、浮かび上がってくる残像がある。

(消えない)

あの時目にしたすべての映像が。

そして、あの少女の面差しが……。

名づての飛空艇乗り、空(k-u-u)。

この空で、その飛行技術は誰に勝るとも劣らない。目にした者は皆、魅入られてしまふと言われ、憧れを抱く者は少くない。

そして逆に。その翼を落とした者は空の歴史に残る……そう言われるほどの、飛空艇乗り。

それが……なぜ？ 瑛己は思った。なぜあんな……。

その時、キイト扉のきしむ音が聞こえた。

飛と秀一が帰ってきたのだろうか？ そう思っただけと瞳を開けると、そこに、まったく見知らぬ人物が立っていた。

質のいい黒のパンツスーツに、黒塗りのヒール。スラリと伸びた背筋。首にキラリと光る物がある。そして 後ろですっきりとまとめられた焦げ茶の髪。輝くような、赤のルージユ。

「聖 瑛己、飛空兵？」

「……」

鈴のような美しい声だった。

瑛己は微かに、眉間にしわを寄せた。

彼女は瑛己のそんな様子に、薄く微笑んだ。

そして一歩前へ出ると、音を立てずに後ろ手で扉を閉め。

瑛己に向かって、銃口を向けた。

「怪我」

彼女は瑛己に銃を向けたまま、場違いなほど優しく微笑んだ。

「大した事なかったそうですね……安心しました」

瑛己はそれをじっと見据え、小さな声で呟いた。

「……頭はまだ痛みます」

「ごめんなさい。加減したつもりだったのだけれども」

何気に吹っ掛けたその言葉に、思ったより簡単に答えは返ってきた。

「……何の用ですか」

すると女は笑みを絶やさず、ゆっくりと銃を上から下になめるように動かした。

「用件は1つ。あの時見たすべての事を忘れていただきたい。それだけです」

女は瞬きをしたが、瑛己は視線一つ動かさなかった。

「ご理解ください。さもなければ、私はこの場であなたを消さなければならぬ」

「……」

瑛己はふっと小さく息をこぼした。「それは」

「空（ku|u）の乗り手の事ですか？」

「判断はお任せ致します」

「……」

「私はただあなたから、諾の返事をお聞きしたいだけ」

女の銃口が、陽光にキラリと輝いた。

瑛己は女の瞳をじっと見た。

女も、その目をじっと受けた。

「……………」

「……………」

その時不意に、外が騒がしくなった。

飛達が帰ってきた。それに、女の笑みが少し崩れた。

瑛己は一瞬、飛びかかろうかと思った。銃を奪い、制し、通報すべきかと思った。

だが……瑛己はそれをしなかった。

その代わり、一言、

「あなたは何者ですか？」と尋ねた。

「……………」

女は答えなかった。その問いの主が本当は誰か、誰の事を訊いているのか、わかったからだ。

「忘れると言われて、簡単に忘れられるほど」

瑛己はゆっくりと、緩やかに瞬きをした。「僕は、器用じゃありません」

「撃てと、おっしゃっているのですか？」

「……………別に。事実を言っただけです」

ふっ。女は微笑んだ。それは決して、美しい作り笑いではなかった。「可笑しな人ですね」

「ならば、永久に、その心に封じていただく事を願います」

「……………撃たないんですか？」

「撃ちたくなくなりました」

女はヒラリと背を翻すと、裏口の扉に向かって歩き出した。

瑛己はそれをぼんやりと見ていたが。

「伝言を、お願いできませんか？」

女はクルリと振り返った。

「……………ありがとう」と

女は目を細めると、「承知致しました」と言った。そして、
「私は、時島（tokisima）と申します。 お見知りお
きを」

微笑みを残して、去って行った。

「さっすが！ 瑛己さんは、どっかの誰かみたいに逃げようとしな
い！ 聞いてくださいよ、飛なんか、トイレの窓から逃げようとし
たんですよ！！」

「逃げるとは人間が悪い！ 俺はただ、煙草を買いに行きたかった
だけや！！ お前、『却下です。禁煙してください』とか言ったや
ないか！！」

「いい機会じゃないか！ 煙草なんて体によくないよ。この機会に、
せめて本数減らすくらいしなよ！ ……あれ？ 裏口のドアが開い
てる。僕、さっき、閉め忘れたかな？」

秀一が戸を閉めるのを、瑛己はじつと見ていた。

だがその目には別のものが映っていた。

瑛己はそつと胸を抑えた。

彼の額の汗が、頬を伝って流れる。

しばらくの間、胸の鼓動は激しく、鳴り止まなかった。

そつと目を閉じると、また、あの少女の顔が浮かんだ。

そして、あの日の空が高く高く広がった。

『永劫の丘(Haruru)』

『湊』空軍基地から一步出た所、だだっ広い平原を横切る砂利道の真ん中に、一台の車が止まっていた。

くすんだ橙色《だいたい色》の小柄な車。あまり手入れされていないのがすぐわかる、サンサンと輝く太陽に反射する光は鈍い。

「いい天気だねえ」

その運転席に座った原田 兵庫は、葉巻を片手にニカツと笑った。
「絶好のデート日和だ」

その時、コンコンと助手席の窓が叩かれた。

「おっ、愛しのマイ・スウィートハートのご登場か」
固そうに扉を開け、助手席に乗り込んだきたのは、

「ごめん、遅くなった」

聖 瑛己^{えいき}、その人だった。

「うっん、あたしも今きた所よ」

「……」

不気味な裏声を出す兵庫に、瑛己は心底嫌そうな顔をした。

「じゃ行こっか、ダーリン」

「……おじさん、降りていい？」

車はドバンと一つ大きく煙を吹き出し、走り出した。

6

しばらくの謹慎を命ずる 警木にそう言われ、1週間が経った。

その間、瑛己の怪我はかなりよくなっていた。

そしてここにきて初めて、何事もなく過す事ができた。平和な日

常がこれほどありがたいものだとは。21年生きてきて初めて、心から実感した瑛己だった。

のんびりと日々を過す、本を読んだり、音楽を聴いたり。『湊』の町並を散策に行ったりもした。活気のある、中々いい町だと思った。銅レンガの洋風な造りに、似たような建物と入り組んだ路地。最初は迷ったが、道を尋ねれば誰しも、笑顔で気安く案内してくれた。

瑛己はこの町が、この1週間でも好きになった。

『海雲亭』にもよく顔を出した。店の看板娘・海月みづきに今回の事を話すと、彼女は心配そうな顔と面白そうな顔を両方覗かせた。

「そりゃ一番悪いのは、兵庫だわね」

自分は逃げ出しておいて、瑛己を吹っ掛けるとは……。「こっちに顔見せたら、殴っておくから」とニコニコと拳こぶしを見せた。

その兵庫は、医務室にあるもう一台のベットに下宿生活をしている。「瑛己が心配だから」と行く先について周り、彼をからかっては面白がっていた。だが海月の話をする、「殺される。近寄らないようにしよう」と、そこにだけはついてこようとしなかった。

この1週間は、瑛己にとってはそれなりに楽しい日々だった。だがもう1人の謹慎者・須賀たかき 飛は逆に、いつ見ても退屈そうな顔をしていた。

「つまんねー」

煙草の本数を減らすどころか、増えたんじゃないかと瑛己は思った。

腕の怪我が治れるにつれ、ますます、彼の顔は冴えなくなっていた。ボンヤリと虚空を眺め、瑛己や秀一が何を言ってもカラ返事ばかりしていた。

「俺の謹慎いつ解けるか、隊長、何か言ってた？」

飛の頭の中は、それだけでいっぱいの様子だった。いつ謹慎が解けるか、いつ空を飛べるか……。

「完全にお前、中毒だな」

冷やかしがてら医務室にやってきた新は、飛の様子に苦笑を混ぜて呟いた。「そのうち心だけ先に、空に昇っちまうかも」

「作戦中にとり憑かれたらたまらん」

そう言った小暮に、飛は涙を浮べて嘆願した。

「小暮さんんんん、どうにかしてくださいよおお」

「悪いが俺は、隊長の鉄拳を食らいたくない」

「新さんんん」

「あー、俺はもう、隊長の鉄拳を嫌ってほど食ってるから、腹いっぱい」

そう言って、新は自分の左頬を指した。

そこには、黄色い星のマークのペインティングがされていた。

それは、輸送艇護衛の任務を終えた次の日、町に出た時何となく入れた物だった。だがそれを見た磐木は、途端「何だその顔はツツ！！」問答無用に彼をぶつ飛ばした。

もちろんそれは、瑛己・飛の一件で虫の居所が悪かった時

運の悪い所に出くわした、そういう事である。

「けどお前、それでも消さないんだな」

「あん？ だって、気に入ってるもん」

小暮は苦笑いした。同期のこの男の、こういうあっけらかんとした所が、彼は嫌いじゃなかった。

「ともかく、何となく言っておくから。大人しくしてるよ」

軽く笑った新に、「期待薄……」と呟いた飛だった。

それぞれが、色々な想いを抱いて過ぎた一週間。

「まだ休暇中だろ？ 明日、ドライブでもどうだ？」

謹慎中を？ 休暇中？ と勘違いしている兵庫に、昨日の夕方、不意に誘われた瑛己だったが。

「……おじさん、この車、大丈夫なの？」

嫌な音を立てて走行する車に、瑛己は心配そうに兵庫を見た。

だが当の運転手は気楽そうに口笛を吹くと、「大丈夫大丈夫」とアクセルを踏んだ。

「あり？ アクセルが利かない。ありやりや、ブレーキもダメだわ」

「エッ!？」

「なんちつて。冗談だよ、ハッハッハ」

「……………」

瑛己を驚かせる事を趣味としている兵庫は、高らかに笑った。もちろん瑛己は溜め息を吐いた。

「それにもし事故つたら、白河に請求書出せばいいさ。これ、『湊』の倉庫に置いてあった奴だから」

「……………その前に、無断で持ち出した事を咎められるんじゃない?」

「咎める! 瑛己、難しい言葉を知ってるなあ。さっすがあ。立派になっちゃって、おじさん超嬉しい」

「……………」

だめだこれは……………瑛己は大きく息を吐くと、外の景色に集中する事にした。

窓の外では、草原が広がっている。その向こうにチラリと見えるのは海だろうか。

「どこへ行くの」

瑛己は尋ねた。

だが、どんな返事が返ってくるか、彼はわかっていた。

「内緒」

「……………」

瑛己は再び車窓に目を向けた。

昔からそうだ……………兵庫は決まって、行き先を言わない。どこかへ連れて行ってくれる時も……………自分がどこかへ行ってしまう時も。

そして、瑛己は思った。

兵庫おじさんがこんなふうに自分を誘う時。それはまた、自分の前からいなくなってしまう時なんだ……………。

? 自称・郵便屋さん?。だが彼が本当はどんな仕事をしているのか、瑛己はよく知らない。

しかし瑛己は、別に知らなくたって構わないと思う。

(それで、何が変わるわけでもない)

自分の兵庫に対する気持ちも。その存在も。何も揺らぐわけじゃない。

瑛己はそつと目を閉じた。

窓から吹き込む風が心地いい。

(永遠の別れでもないし)

「……………」

瞼に少し、力が入った。

そしてもう一度、同じ台詞セリフを呟いた。

『咲ちゃん……………』

『どうしたの、一体……………その怪我……………!?!?』

『咲ちゃん……………ごめん……………』

『兵庫くん……………?』

『ごめん……………俺、俺……………』

守れなかった。

『ハルを……………ハルがッ……………ッ、ハルがッ……………!?!』

「瑛己、おい、着いたぞ」

「……………ん、あ、ああ……………」

どれくらい走ったのだろう。いつの間にか眠ってしまったらしい

……………瑛己は目元を擦ると、窓の外を見た。

「こっからもう少し歩くから」

運転席から降りると、兵庫はうーんと伸びをした。

瑛己も車を出た。ほんの少し立ちくらみがして、目を閉じる。草のおいがする。

空を仰ぐと、痛いほどの青に、波のような白い雲がサッと流れていた。

「行くぞー」

片手をポケットに突っ込んで、口を尖らせて言う兵庫に、瑛己は短く「ああ」と返事をした。

まっすぐに伸びる道をそれ、車を背中に、草原の中を歩く。

瑛己はチラときた道を振り返った。が、兵庫は迷いなく先へ先へと向かった。

しばらく無言で2人、歩いた。

そして。目の前に海が見えてきた。

沿岸に沿って歩いて行く。そしてさらに行った所で。

「着いた」と兵庫が呟いた。そこは小高くなった丘の上だった。

瑛己は小さく息を漏らした。

そしてそこに、世界が広がっていた。

まるでこの星のすべてのように……180度見遥かな、満天の蒼空。地平線がグルリと線を描き、雲が世界を翔けている。

そしてその半分は碧色の海。崖になった向こうに、海が遥か彼方太陽を受けて光輝いていた。それはさながら、翼を持つ者を誘うかのような。引き込まれそうな風が髪を揺らし、体の横を抜けていった。

「ここは……」

瞳は、世界に目を奪われたままだった。

兵庫は懐から葉巻を取り出すと、ゆったりとした動きで火を点けた。

「この大陸で、一番西に位置する場所だ」

ふと兵庫を振り返る。と、その傍らに彼の背丈半分ほどの石塔があるのに気付いた。

「色んな呼ばれ方がある……忘れられた場所、最西端の地……だが、俺達、空で生きるもんの間では、こう呼ばれている」

兵庫はふつと息を吐くと、ポツリと呟いた。

「永劫の丘」

「……」

そして兵庫は、その石塔を見た。

その目は、空の蒼と海の碧に洗われたかのように、とても穏やかで、静かなものだった。

その石塔には、こう書かれていた。

永劫の鳥　この空に　眠る

「あの日の事を、お前にはどう話してあったかな」

「え……？」

兵庫は瑛己を向くと、ゆるく微笑んだ。

「出発前にもう一度、話しておこうと思ってな」

「おじさん」

「んな顔すんな。別に遺言じゃねーよ」

「……」

「本当は、ちょこつとのもりだったんだ……けど、瑛己があんまりかわいくて、ついつい仕事も忘れて長居しちまった」

「……」

瑛己は顔をしかめようと思って、やめた。兵庫なりの、気の遣い方だとわかっている。

「けどその前にな……お前にもう一度、話しておきたいと思った」

あの日、何が起こったのか。

「俺はお前に、何て言った？ あの日の事を……ハルの事を」

兵庫の真剣な瞳に、瑛己は一瞬たじろぎ、言葉を探した。

「……？空の果て？」

「ああ」

「父さんは、そこに、消えて行った」

「そうか」

兵庫は目を伏せ、そして海を振り返った。「この先」

「ここをさらにずっとずっと西に行った所……どの国にも属さない、広い海域がある」

「……」

「？零地区ゼロ？そう呼ばれる場所だ。すべてはここで終わり、」
そして始まった。

兵庫の吐いた息が白くもならず、風に溶けて舞い上がった。

「12年前の冬のある日、俺達はその海域を目指し飛んでいた」

不審な艇団せんたんが海域にたむろしている。その情報を聞きつけ、兵庫達は直ちにそこへと向かった。

「俺はシンガリを勤めた。斜め前には磐木もいた。そして先頭を走っていたのが、ハルだった」

父さん……瑛己はドキリと眉を揺らした。

「しばらくして、？零地区？まで来た時、俺達は奴らを見つけた」

そして、空戦が始まった。

「向こうは物凄い数だった……空に真っ黒になって襲ってきやがる。俺も、一度に3機も4機も相手にしなきゃならないような状況だった。周りを見ている余裕もない。考える暇さえなかった」

「……」

「どんくらいそんなふうに飛んでたかな……手の感覚も足の感覚も、よくわからなくなり始めた頃だった」

翔ける飛空艇に、ポツリと、雨粒が落ちてきた。

「実際雨だと思った。俺は、やべえなと思った。それで初めて、辺りを見回した。入り乱れる飛空艇の中に、キラキラと光るものが降っている。仲間はどうなっただろう、ハルは……？ まあ、あいつがどうこうなるとは思わなかったが、それでも俺はグルグルと周囲を見た」

「……」

「そして俺は、空の暗さに気付いた。そりゃ雨が降っているんだ、暗いに決まっている。けど……違う。その時の暗さは自然のものじゃなかった。雲に覆われてできる暗さ、それとは明らかに違っていた」

例えて言うなら、夜の闇　いや、それよりも濃く、深く。

「そしてそう思った時、ふと、今まで雨粒だと思っていたもんが、違う事に気付いた」

兵庫はその瞬間、背中に物凄い寒気を感じた。そして、

「空を、仰いだ」

そこに。

「俺は……一瞬、目を疑った」

空が、割れていた。

パリリ、パリリ、卵の殻でもむくかのように。硝子の城が、崩れていくかのように。

「空が割れていた。そしてその向こうに、黒い空が広がっていた」
空……？　兵庫は自分で言いながら、その言葉に眉をしかめる。

あんなもん、空じゃねえ。

「夢でも見てるのかと思った。でなくば、俺はもう死んでいて、あの世への階段を上っているか、だ。だけでも爆音が夢オチを許してくれなかった。周りを飛ぶたくさんの飛空艇が、無線から流れるノイズ、吹き荒れる風、そしてハルの機体が……」

兵庫は無線に向かって叫んだ。何を言ったのかよく覚えていない。ただ、滅茶苦茶になって叫んだ。

自分の生を、誇示するように。

「空が割れるにつれて、機体を取り巻く風は強くなっていった。空戦どころの話じゃなかった。操縦桿を握り締め、もっていかれないようにするので精一杯だった。そして次第にその風は、割れ目に向かって吹き出した。俺は何もしてないのに、勝手に機体はそっちに向かいやがる」

ただな、兵庫は葉巻を吹かし、視線を流した。

「一番難儀だったのは、そんな状況になったにも関わらず、敵さん、なおも攻めてきたって事だよ。あの根性には参ったよ。こっちはそれどころじゃねーっつーのに」

それは、地獄だった。

「実際、本当にそれどころじゃなかったんだ……そんな事している場合じゃなかったんだ。敵も味方も、次から次へと吸い込まれて行く。俺はそれでも必死に抗い飛んでいた。操縦席から逃げ出す事もできなかった。飛び出した人間は、紙クズ同然に、あっちの世界に消えて行った」

兵庫の耳に、様々な断末魔の音が蘇った。

ぎゃあああ、助け、吸われる、母さん、うああああああ……

……

だが、それを瑛己に聞かせたくはない……そっと耳にフタをする。「ふと見れば、そこには、残り少ない敵さんと、ハルと俺だけになつていた」

『兵庫』

兵庫の脳裏に響く声は、色あせない。

そしてその声を聞くたびに、あの日の光景が蘇る。

『逃げる』

兵庫は叫んだ。馬鹿野郎と。

「こりゃもう、人の身分じゃどうにもできない……人知なんてとっくに超えてる。逃げるぞ、俺は必死に叫んだ」

だが、晴高は言った。もうエンジンが死んでいる。自分はこの風

に抗えない。

『咲と瑛己を頼む』

『ばツか野郎ツツ!!!!!!』

「ザザつく無線のノイズの向こうで、ハルがどんな顔していたのかはわからない……けど俺は許せなかった。てめえの大事なもんは、てめえで守れ!! そう叫んだ」

ノイズに混じって、晴高が何かを言った。

そしてそれが、最後の通信となった。

『生きる』

兵庫は晴高を振り返った。

猛然と荒れ狂う嵐の中で。だが、兵庫の目に焼き付いている。

聖 晴高。

最後に見た奴の顔は。

「笑っていた」

そして彼は、？空の果て？へと消えて行った。

「その後は……よくわからない。気付いた時、俺はボロボロの機体と共に浜に打ち上げられていた」

「……」

「あの時生き残ったのは、俺を含め、わずかな人数だけだった……磐木もその1人だ。その証言を元に後に調査団が向かったが、その時はもう何もかも終わった後だった。？空の果て？なんか、どこにも存在しなかった」

静かで勇壮な、空と海が広がっていただけだった。

瑛己は海の彼方を見た。

「？空の果て？……」

「けど俺は覚えている……現実には、それはそこに存在した。そしてお前には、少し、知っておいて欲しくてな」

酷かもしれない。これは自分の、ただのエゴでしかないのかもしれない。

(この肩に背負わせるには、)
だが……兵庫はポツリと思った。

知らなければならぬ。瑛己はすべてを、知らなければならぬ。それは、空で生きる事を選んだ以上。父と同じ道を選んだゆえに、父と同じ運命を辿らぬためにも。

「瑛己」

兵庫は彼を見た。

「……わかつてる、……」

瑛己はたった一言、そう言った。そして兵庫を振り向いた。

その目に、兵庫は小さく苦笑を浮べた。

兵庫は心の中で嘆息を吐き、そして呟いた。

「すまない、と。」

基地に戻ると、兵庫は瑛己を下ろし、「またくる」と別れを告げた。

それ以上お互い、何も言わなかった。瑛己は「ああ」と頷いて、後ろを見ずに去って行った。

兵庫はその背中が見えなくなるまでそこに立ち続け、そして自分も出発しようと思った矢先。

「兵庫」

呼びかける声があった。

兵庫はその声にビクリと眉を揺らした。そして、ゆっくりとそちらを向いた。

「……おう」

そこに、海月が立っていた。

「お前、どうしたんだ、こんな所に……」笑顔を見せるが、海月は

ムツとした様子で兵庫を見ていた。

「私に一度も顔を見せず、そのまま行くつもり」

「……」

「あんたのやる事と言ったら、わかってるんだから」

「……」

「すまない。兵庫は目をそらした。」

「いい……けどあんたも、私が何を言いたいか、わかってるでしょ
う？」

「……」

海月の目が、すつと緩んだ。

兵庫はその目を見て、小さく頷いた。

「……またくる。その時は、そっちにも寄るから」
「待ってる」

その言葉に、兵庫は苦笑した。

「……じゃあ、行かないわけにいかないな」
「ええ」

兵庫は笑った。そして運転席へと乗り込んだ。

「気をつけて」

車が、音を立てて走り出した。

基地に背を向けて去っていくその姿を見ながら、海月は思った。

これ以上、自分を責めないで。

12年。

振り返ってしまえば、一瞬の事だが、

一言で言つにはあまりに長い歲月。

気に入りの煙草に火を点けると、ジンは軽く吹かし、目を伏せた。半分開けた窓から、少し湿り気を帯びた夜風が吹いてくる。

その窓辺の壁に身体を預け、チラつと外を見た。

北塔の2階。ここに広がる景色は、昼間なら『湊』の町を一望する。

だが夜の闇に最初に目に入ったのは、硝子ガラスに映った自分の顔だった。

「……」

ジンは、窓枠で灰を落とした。

それは夜風に誘われ、闇の中へと消えて行った。

「待たせた」

その時、ガチャリと部屋の扉が開いた。

ジンはまず硝子に映る室内を眺め、それからそちらを振り返った。

『湊』空軍基地、北塔、第8会議室。

「こんな時間に突然の召集、すまない……掛けてくれ」

そこに、第327飛空隊のメンバーが集まっていた。

その顔を見渡し、総監・白河 元康はチラリと磐木を見た。

「謹慎中の2人は外しています」

「……そうか」

白河の目が、ほんの一瞬複雑な色を灯した。

ジンは外側の壁で煙草をもみ消すと、そのままポツと空へ放った。

その時ふと思った。この手を離れた煙草は、一体どこへ行くのだろうか。

夜風に誘われ、空へ舞い上がるのか。それとも、飛ぶ事もできずただ地に落ちて、雨風にさらされ果てて行くのだろうか。

ジンは苦笑した。

そんなもの、知った事じゃない。

放った煙草の行方は、振り返らない。

白河は、座に着いた一堂を眺め、重い口調で呟いた。
「作戦命令だ」

誰も声を上げない中で、空気だけが。ザワリと一つ、瞬またたいた。

7

「一昨日、『音羽』海軍基地を出立した巡視船が2隻、消息を絶つた」

『音羽』海軍基地は、『湊』から南東へ行った湾岸沿いの基地である。

「最後の通信は一昨日の朝。不審な船を発見したので追跡するとう内容だったらしい、だがそれ以来、何の連絡もない」

その最後の通信すら、電波障害でも起したかのように、言葉途中で途切れた。

「そこで、その行方不明になった巡視船の搜索依頼がきた」
「……」

「最後に通信があつたという場所は？」

警木が尋ねた。白河は彼を見、そして全員を見渡し、ゆっくりと口を開いた。

「『湊』から西、『久那諸島』を抜けさらに西へ行った海域」
その言葉に、全員がハツと顔を上げた。

白河はそれを受け、静かに、だがまっすぐを向いてこう言った。

「中立海域、通称？零地区？
そう呼ばれる場所だ」

「……」

シンと静まり返った室内に、夜風に揺れる窓の音がカタカタと鳴り響いた。

「……？零？か」

その沈黙を破ったのは副隊長・風迫かざこジンだった。

「それでその、不審な船というのは？」

白河は腕を組んだ。「わからない」

「言葉以上の事は何もわからない。それが一体何だったのか……」

「不思議ですね」

小暮の眼鏡が、照明にキラリと輝いた。

「不審な船……それも、気になるのは？零地区？」

「うむ」

「？零？は、国際規約上の規定海里の穴とも呼べる場所だ。たくさんの国に囲まれながら、その海と空はどここの国にも属さない。いやむしろ……人という身分では、御さえきれない場所なのかもしれない」

そう言って、小暮は磐木を見た。

？零地区？。その言葉が導き出すもう一つの言葉。

だが、磐木は何も言わなかった。白河も目を伏せ、何も答えなかった。

「で？ ミッションは？ どう飛ぶんスか？」

その空気を察したのか、単に気がはやったのか。新が身を乗り出すように訊いた。

「今回の作戦は、あくまでも巡視船の消息を追う事だ」

白河は一言一言を確かめるように言った。

「彼らは何を見て、どこへ向かったのかはわからない……それゆえに、行動はあくまでも慎重に、目立つ事は避けた方がいいのかもしれない」

「少数で、という事ですか」

「うむ」

小暮と新が顔を見合わせた。

その隣に座っていた相楽 秀一が、不意に手を上げ立ち上がった。「待ってください。それじゃあ、飛たかきと瑛えいき己えいきさんは？」

その問いに、磐木の答えは早かった。「奴らは待機だ」

「しかし……！」だが秀一は引き下がらなかつた。「もうすぐ2週間になります。彼らも十分に反省しています。怪我也随分よくなっている。そろそろ解いてくださっても」

「待機だ」

「隊長！」

磐木がギロリと秀一を見た。だが秀一も負けじと彼を見返した。

その光景は、周囲の者にとって冷や汗そのものだった。

磐木が身じろぎをした。今にも立ち上がって、秀一を蹴り飛ばしそうな様子に、新がギョツと飛び上がった。

「俺、立候補！ 絶対行きたい」

それを見て、新も彼に続けた。

「新はここに来る前、海軍だったもんな。やっぱり心配か？」

だが彼は苦笑して、フルフルと首を横に振った。「まさか」

「見つけたら、おめーら変なもん追いかけないで、もっと夢を追いかけるよと言ってやる」

「夢？ 確かお前、搭乗の船にラクガキばかりしてクビになっただんじゃ……？」

「ちげーよ！ 俺は、自分の力で飛びたかったの！ 大人数でへ口へ口船を動かすんじゃなくて、一人でバーツと空を翔け回ってみたかった。だから、こっちにトラバーユしたのだ」

「ほお…… 絵描き志望だったけど親に大反対されて、仕方なく入った海軍で、デツキに絵ばかり描いていたからお払い箱になり。空軍なら、自分の機体にペイントしているのも見かけるし、多少は許されるだろう、そう思ってたという噂は、デマだったんだな？」

「…… 小暮ちゃん、文章長いし…… 大体、どこでそんな、信憑性のある真実にほど近い噂を聞いたのん？」

2人のやりとりに、白河がハッハッハと笑った。

「相楽君、慌てなくても2人にはまだまだ一杯飛んでもらわなければならぬ。怪我も完治したわけじゃないのだから？ 幸い、今度の仕事は調査だ。2人の気持ちも、君の気持ちもわかるが、今回は理解してくれ。その代わり、これが終わったら謹慎は解かせよう。な？ 磐木」

「……………」
磐木は何も答えず、顔をそむけた。秀一はもう一度白河を見た。すると彼は大きく頷いた。

「それで。あとは誰が出ます？ 目立つ事ができないとなれば、3か、多くて4という所でしよう」

秀一が座るのを確認して、小暮が言った。

「磐木隊長、新が行くとして」

「お前も外せないだろう、小暮」

ジンが、足を組み替えながら言った。

「じゃあ、磐木隊長、風迫副長、新、俺……………」

「待った。秀一だけであの2人を抑えきれぬのか？ 飛が今度の事を聞いたなら、秀一なんかぶつ飛ばして、絶対ついてくるぞ!？」

「今2人は？ ちゃんと撒まいてきたのか？」

撒く……………小暮の言葉に、秀一は苦笑した。「ええ、まあ、一応。

飛はもう寝てたし、瑛己さんも『海雲亭』に行くって」

「聖か。あいつも、今度の事を聞いたなら、ついてきたがるかもな」

「……………」

「俺が残る」

言ったのは、ジンだった。全員が驚いた様子で彼を見た。

「副長……………しかし、」

「4人もココノコ行く事はない。隊長と小暮と新、3人で充分だろう」
小暮が磐木を見た。

磐木はジンを見やり、ポツリと呟いた。

「いいのか」

「ああ。調査なんてかつたるい仕事、俺はパスだ」

「となると、問題児2人の見張り係になりますよ?」

「ニヒヒと笑う新に、ジンは鬱陶しそうに片目を細めた。そして「んなもん知らねーよ」と煙草を取り出した。

「だが、何かあったとしても、俺は磐木隊長みたいに手加減できないがな」

クツと笑うとそのまま、火を点けずにくわえた。

秀一はその様子に苦笑したが、心のどこかで少しホツとた。

「あ、瑛己くん! 丁度いい所にきた」

『海雲亭』の扉を開けると、奥から海月の元気な声みづきが飛んできた。

「夜も大分過ぎ、店内は穏やかな空気に包まれている。」

程ほどに込み合った室内を見回すと、カウンターの所から海月がブンブン手を振っているのが見えた。

瑛己は小首を傾げ、ゴチャゴチャになったテーブルを注意深く避けて歩いて行った。

ある程度までくると、海月の背中越しに、こちらを見つめる者がいる事に気付いた。

カウンターに座り、グラスを片手にジッとこちらを見ている男。目が合うと、男はニコリと微笑んだ。

「……………」

瑛己は海月を見た。すると彼女は嬉しそうに笑った。

「今ね、丁度あなたの話をしていた所なのよ! 今日ほこないのかなあって思っていたんだけど。ナイスタイミング。さっすが? 運命の女神様に一目惚れされちゃって、以来ラブラブな子? だわ」

「……………何ですか、その、いつも以上に長いフレーズは……………」

瑛己は頭を抱えなくなつた。誰だ、この人にまでそんな事を吹き込んだのは……………しかしそんな人物、一人しか思い当たらない。

今頃そいつは、医務室のベットで眠りこけているはずだ。飛は一度寝付くと簡単には起きない。その間に、顔に落書きでもしておけばよかったと瑛己は心から思った。

「あのね、あなたに会いたいわって人が来ているの」

海月がそう言うのと、彼女の後ろに座っていた男がスツと立ち上がった。

「フリーライターの田中と言います。よろしく」

背丈は瑛己よりも頭一つ分くらい高いだろうか。黒いカッターシャツに赤のネクタイ。スラリとした足は、随分長く見える。そのポケットに手をつ込み、人の良さそうな笑顔を浮べる男。歳は……20代後半くらいだろうか。

胸のポケットからは、サングラスが半分顔を出している。

田中と名乗る男は懐から名刺を取り出すと、瑛己に渡した。瑛己はそれをチラと眺める。『フリーライター・田中 義一』。瑛己は男をもう一度見た。そして「聖 瑛己です」と軽く頭を下げた。ライターが何の用だろうか……瑛己は訝しそくに男を見たが、男はそんな瑛己にますます面白そうに微笑んだ。

「噂通りの子だね。ちょっと話が聞きたいんだけど時間、いいかな

? 海月さん、彼に飲み物頼むよ」

「はい」

「……」

笑顔で奥へ行く海月を見て、瑛己はその背を引き止めたい気分になった。

「掛けなよ。別にとって食ったりしないから」

「……」

仕方なく、瑛己はカウンターの隣に腰掛けた。

「いい店だね。海月さんは可愛いし、気に入ったよ。俺も毎日通っちゃおうかなあ」

瑛己の眉間にしわが寄った。「あの」

「聞きたい事って」

「ん？ ああ。まあ、色々だね」

その時、海月が「お待たせー」と言っただけ酒を運んできた。

「海月さん、ごめんね、ちょこつと彼と2人で話したいんだ。いいかな？ 本当は海月さんと2人きりで、朝まででも一緒にいたいくらいなんだけど」

「ふふつ。じゃあ、何かあったら呼んでね」

「ありがとう」

「……」

「ごめん。それじゃあ本題に……って、何？ そんな怖い顔して」

「……いえ、別に」

すると、田中は意味ありげに微笑んだ。「まさか、海月さんに惚れてるとか？」

「……違います」

確かに、海月の事は嫌いじゃない。だが瑛己にとって海月は……

この一週間話すうちに、姉のような存在になっていた。

「じゃあ、本気でアタックしようかなあ。俺、タイプなんだよなあ、ああいう人」

「……で、聞きたい事って何ですか」

殴りたい衝動を必死にこらえ、瑛己は低い声音でそう言った。

彼のその様子に田中は面白そうにクスクスと笑い、ポケットから一枚の写真を取り出した。

そこに、一機の飛空艇が映っていた。それを見た途端、瑛己の動きがピタリと止まった。

「君の事は、ある程度調べさせてもらったよ」

田中は微笑みを崩さず、そんな彼を楽しそうに見ていた。

「18で学校を卒業。それから2年の飛空学校を経て、去年『笹川空軍基地へ配属、そしてこの春『湊』空軍基地へ異動。以来、？運命の女神に好かれた男？』という呼び名を欲しいままにしている。ここへくる途中、【海蛇】に遭遇し、すぐに輸送艇の護衛の任務で【天賦】と対峙、無凱との激闘。からくもそれを無事に抜け基地に戻

つたあくる日、無断で基地を飛び出し、【海蛇】の渦巻く海域に出る。そこでかの【竜狩り士】と対峙するも、撃墜。現在は謹慎を言い渡され、怪我の療養に励んでいる」

「……」

瑛己は顔を上げた。そして田中を、睨を大きく広げて見た。

「父親・聖 晴高は、君が9歳の時に行方不明に。当時空軍の中でも指折りのエースパイロットだった彼は、？空の果て？に消えて行ったと話題になった。母親・咲子はそれから君を女手一つで育ててきたが、君が空軍に入るのを見届けると、それに安堵したかのよう
に去年」

「……父と母の話は、関係ないでしょう？」

瑛己はそれ以上の言葉を遮るように、感情を抑えて言った。

田中はそんな彼の様子に「失礼」と軽く手を傾けた。

「ともかく、ある意味君はとても面白い背景を背負い、今を、そしてこれからを飛ばうとしている。そう思えてならない」

「……僕はまったく面白くありません」瑛己は腰を上げると田中を睨んだ。「そんな話ならこれで失礼します」

「待った待った」

田中は瑛己の袖をグイと掴むと、無理に座らせた。「本題はここからだつての」

「君は『湊』にきてから、この短期間で様々な体験をしている。そしてその体験には、一つの共通項がある。そうだろうか？」

「……」

瑛己は田中と目を合わせなかった。

共通項？ そんなもの……と思いかけて。

瑛己はハッと目を見開いた。

「空(k u | u)。君の飛ぶ先には、その存在が必ずある」

その目の先には、先ほど田中が置いた写真があった。

セピア色に、スピードの振れもある……が、瑛己にはそこに映っている機体が何か、すぐにわかった。

そして田中はゆつくりと、舌なめずりでもするかのようにゆつくりと、言葉を解いていった。

「最初の出会いは『湊』への異動の途中。【蛇】に苦戦している所へ、空(k u | u)は君を助けるようにして現れた」

「……」

「次は？獅子の海？だ。無凱との接戦の中、結果としてまたも君は助けられる事になった。それに恩を感じたのかな？ 【蛇】に囲まれていると聞き、厳罰覚悟で飛んだ。君がその分別を欠いているとは思えないからね」

「……」

「君の飛ぶ先には、いつも空(k u | u)がいる。偶然か、それとも必然か、そこまでは俺にもわからない。しかし随分、できすぎている気もするがな」

「…… あんたは……何が目的だ？」

その問いに、田中はフフフと笑った。「目的？」

「俺はただ、真実が知りたいだけだよ。この空に溢れるすべての、光と闇と、真実をね」

「……」

「そして、君は」

瑛己は、ゆつくりと田中を見た。

すると田中は彼の目を待っていたように、まっすぐ彼の瞳を見つめた。

その奥にある、彼の心を覗き見ようとするかのように。

瑛己は背中にゾワリとしたものを感じた。だが、目がそらせなかった。

「あの日、空(k u | u)の正体を 見たんじゃないのか？」

瑛己の心臓が、ドクンと一つ、大きく跳ねた。

空(k u | u)。

「あの日、君は空(k u | u)をかばって墜ちた。だが空(k u | u)は、爆破した飛空艇から脱出した君を守るように飛んだ。その

せいで【竜狩り士】の弾を浴び、致命傷にはならなかったが、不安定な走行で空を落下して行った。それを目撃した者がいる」

「……」
ドクン。

「その後君は近くの無人島の海岸に倒れている所を発見された。だが、その浜には何か巨大な物にえぐられたような跡が残っていた。

まるで、飛空艇が胴体着陸したかのような跡がね」
ドクン。

瑛己は音を殺して唾を飲み込んだ。

田中の目が痛い。

けれどそらせない。

何か返事をしなければ。

「……いや。たった一つ、その胸に浮かぶのは、口がカラカラだ。」

頭の中が、真っ白になる。

「……いや。たった一つ、その胸に浮かぶのは。」

「それが、彼の心を激しく揺さぶる。」

その時だった。

「瑛己っ！！」

呪縛から解けたように、瑛己はガバリと声を振り返った。

そこに、飛が立っていた。

「飛……」

瑛己は、明らかに安堵の表情を浮べた。

その様子に、飛は怪訝に眉を上げ、瑛己を、そして田中を見た。

「やあ。こんばんは。君が……まさか、噂に聞く須賀 飛君かい？」

「何やあんた」

「フリーライターの田中と言います。よろしく」

にこやかに笑うと名刺を出した。飛は訝しげにそれに目を落とし、すぐに瑛己に向いた。

「瑛己、ちょっとこい。緊急事態や」

「……」

瑛己は大きく深呼吸すると、返事より先に立ち上がった。「失礼します」

「聖君」

呼ばれたが、彼は振り返らなかった。しかしその肩が小さく揺れたのを田中は見逃さなかった。「また会おう」

「……」

「あ、おい、瑛己ちよい待て！」

逃げるように店を出る瑛己を、飛は慌てて追いかけた。

2人の背中を見送りながら、田中は懐からジッポウを取り出した。それをピンと開ける。と、彼の顔に緩く笑みが広がった。

そこには銀で、大きなキスマークが描かれていた。

「ちよい……！ 瑛己ッ！ 待て、聞いとんのか!？」

『海雲亭』を飛び出し、基地に続くただっ広い草原の真ん中で、ようやく瑛己は足を止めた。

「どないしたんやっ……一体、お前」

「……何でもない」

飛を振り返りもせず明後日を見たまま、瑛己は静かに答えた。「お前こそ」

「緊急事態って、何だ」

「お？ ああ、おう……それやそれ」

ザツと靴を鳴らすと、飛は声を低く落とした。

「秀一がおらん。さつき、新さんと小暮さんの部屋にも行ったけど、誰もおらへん。どうも様子がおかしい」

「……」

「何や、俺、いや〜んな予感がする」

「……」

瑛己は空を仰いだ。

半分欠けた月明かりに照らされ、灰色の雲が、一層暗い空を流れるように翔けていた。

同じように、飛の声も彼の心に留まる事なく、耳を流れて消えていた。

自分の心臓の音しか聞こえない。

黒い空。だが星よりも、その目に映る映像は。

「……」

あの日から消えない、顔。

2日後の朝。

基地全体を、揺るがすように騒ぎが起こった。

作戦に出たパイロットが、1日経っても帰ってこない。

それが第327飛空隊の。

隊長、磐木 徹志を含む3人のパイロットだと。

瑛己達が正式にそれを知らされたのは、その日の午前中の事であった。

「一体、どういう事ですか!?!」

飛たかきの音が震えていた。

右足が半分前に踊り出た。それを止めたのは、秀一だった。

「飛ッ」

ガシリと腕を掴むと、目で訴える。

しかし飛はそんな秀一を睨みつけると、再び、総監・白河に向かって吠えた。

「警木隊長たちがッ……帰ってこないって!?! どういう事ですか

!?! 総監ッッ」

「飛」

その時、入口の脇でジッと黙って腕を組んでいたジンが、低く口を開いた。

「黙ってる」

「!?!」

せやかてジンさんッ……そんな言葉が出かかって、しかし彼はハッと口をつぐんだ。

ジンの目が。

刃を含んだ視線……? いや、そんな優しいものじゃない。

目だけで制する、狼の眼。

最後に総監室の戸をくぐった瑛己えいきは、それを見て、ゆっくりと瞬きをした。

そして、静まり返った室内の緊迫した空気を封じるように。部屋の扉を閉めた。

扉のキィという音に、少しだけ胸のざわつきが息を潜めた気がした。

瑛己はノブを戻すと、秀一、飛、ジン、そして最後に白河を向いた。

窓辺に立ったままの白河の表情は、逆光のためによく見えない。

「掛けてくれ」

そう言われて、動く者はいなかった。

「……総監」

瑛己が、ポツリと呟いた。

白河はチラと瑛己を見、そして息を吐いた。

「君らがここへきたという事は……聞いたのか。磐木達が、戻らない」

瑛己の心臓が、コトンと切なく声を上げた。

その時思った。ああ自分がここへきたのは、否定の言葉を聞いたのだったのかと。

瑛己と飛、秀一がその噂を聞いたのは、今朝。食堂へ行った時だった。

誰が教えてくれたわけでもない、だが、基地を駆け抜けるその風は、知らず3人の耳にも飛び込んできた。

「お前ら、阿呆か」

飛は、そこで3人ばかりと殴り合いをしている。

「磐木隊長が帰ってこん？ どっかで撃墜されたやと？」

ド

阿呆。あの人がそう簡単に死ぬか」

秀一と瑛己が間に入って必死に止めている時。そこへジンが現れた。

「馬鹿が」

その言葉は、瑛己達に言ったようにも、基地全体に言ったようにも取れた。

「行くぞ」

「……どこへ……」

ジンは黙って一人歩き出した。それを追いかけて、そうして4人、ここにたどり着いたのである。

まだ朝早いにも関わらず、白河はそこにいた。そしてまるで来る事がわかっていたかのように、普通に彼らを迎え入れた。

「一体どういう事ですか」

ひよっとしたら総監は、ここで一晚過したのかもしれない……そう思いながら、先ほど飛が使ったのと同じ言葉で、もう一度瑛己が尋ねた。

白河はやや間を置いて、小さく頷いた。

そして。瑛己と飛は初めて、今回の作戦の事を聞かされたのである。

飛は何か言いたそうに身を乗り出しては、それを飲み込んでいるようだった。

そんな彼の腕を、秀一は離さなかった。その手が、堪えてくれと飛に訴えているのを。飛自身が一番よくわかっていた。

ジンは壁に背を預け、ポケットに手をつ突っ込んでそれを聞いていた。

瑛己は……。ジツと白河から目をそらさなかった。だがその胸には、色々な思いが駆け巡っていた。

「警木、小暮、元義の3人は、昨日の朝早くに基地を発った」

目指していたのは、巡視船が消えたという？ 零地区？

「一帯の様子を見て周り、結果如何いかにに関らず夕方に帰還の予定だった。だが、現実、夜が明けても戻らない。どころか、連絡一つないとは……警木が何の理由もなしにそんな事をするとは……」

「となると、連絡すらできない状況、だと？」

白河はジンを見て、肯定とも否定ともつかない、首を縦横させた。「わからない」

「……確か、巡視船は何かを追って、そのまま行方不明になったんでしたよね？ ひよっとして、隊長達が連絡できないのも、同じ事が理由なんじゃ……」

秀一が小さな声で言った。それに総監は「かもしれん」と答えた。

「どちらにしても、何か連絡があったら君たちにすぐに知らせる。

今少し、辛抱を頼む」

「辛抱？」

飛の肩眉が、ピクンと跳ねた。

「それは、このままここで、隊長達が死ぬの、待つとれっちゅー事ですかい？」

「飛ッ！」

「同じ事やないか！」

腕にしがみつく秀一に向かって、飛は怒鳴った。

「かもしれん？ わからへん？ 連絡ができんっちゅー事は、そんなだけ、状況がひっ迫しとるっちゅー事やるがッッ！ 相手はあの磐木隊長やぞ？ それが、動けもできず、何しとるっちゅーんや！！茶あでもしばいとるっちゅんか！！ せやのにここで一体、何しとるっていうんだ！！」

顔は秀一を向いている。だが、言葉は白河を向いていた。

わかっている、秀一は黙ってそれを受け止めた。それは、飛の気持ちがかかるからこそだった。

作戦内容どころか、そこに呼ばれる事もなかった。

そして知らされたのは、事態が悪くなってから。

瑛己は黙っている。怒鳴ったりしない……だが、彼も心中は複雑だった。

謹慎中の身だ。それだけの事をした。これでもむしろ、軽いと思っっている。

だがせめて 聞きたかった。教えてほしかった。そう思うのは、勝手な事なのだろうか？ 瑛己は臉を伏せた。

「すまない」

白河の声はかすれていた。「すまない……」

その時、ジンが一步前に出た。瑛己、飛、秀一の3人が、ハッとその背中を見た。

白河の顔が、かすかに強張った。ジンはソファを挟んで彼の前に立つと、おもむろに、腕の時計を外した。

「風迫君」

「お返しします」

それをカタリとテーブルの上に置くと、彼は背中を向けた。

「待て」

「俺は、自分の目で見た事しか信じない」

ポケットに突っ込んだまま、ジンは目を閉じた。

逆光に背を向けて立つ彼の顔は、瑛己の目には、ほのかに笑っているように見えた。

「待つのは飽きた。いい思い出がないんでね」

それに、隊長には恩がある。

「……風迫君……」

「俺の道は俺が決める　あんたに、責任はない」

それだけ言って、ジンは瑛己達の横をすり抜け出て行った。

「副長！」

バタン。扉が閉まる音が、心臓に波紋のように広がった。

そしてその瞬間秀一が、大きく目を見開いた。

「……あ……」

途端、その手が震え始めたのを。飛は驚いて彼を振り返った。

「秀」

「……かき」

秀一その様子に、瑛己と飛は顔を見合わせた。

そして瑛己は大きく息を吸い込むと、小さく吐き出し、まっすぐ

白河を見た。

その目は、凜と、澄み切っていた。

「総監、僕らも行きます」

白河は、そんな彼を眩しそうに見つめた。「そうか」

「すまん。……いい。私からも頼む」

磐木達を探してくれ。　助けてくれ。

「聖……頼む」

「はい」

瑛己は飛と秀一を目で促した。

そして2人が部屋を後にし、最後に戸をくぐろうとした時。瑛己

はもう一度白河を見てこう言った。

「必ず全員で戻ります」

その言葉は、白河にとって魔法になった。

「任せた」

ガチャリ。

閉じられた扉を見て、白河は、泣きたい気持ちにかられた。

「聖……頼んだぞ」

白河の瞳には、？あの日？の光景が蘇っていた。

凜然と笑い、二度と戻る事なかった友と。

泥と汗と怪我にまみれながらも、自分を殴った、かつての友と。

「……頼む……」

それは、総監・白河の言葉ではなく。白河 元康という一人の男の、心の叫びでもあった。

「秀」

部屋を出るなり、飛は秀一の両肩を掴んだ。

「何を見た」

総監の部屋を出た瑛己が最初に見たのは、戸惑いの表情を浮べる

秀一の横顔だった。

「飛……」

「言え。お前……見たんやろ？ 何か、今、見たんやないのか？」

「……」

秀一は目をそらした。それを、飛は許さなかった。「言えんよう
な、光景か？」

「隊長達が爆死する所でも見たか？ 秀一」

「……おい」

止めようとした瑛己を制したのは、秀一本人だった。

そして、彼は静かにこう言った。

「何かはわからない。けど……ジンさんが総監室から出て行った時、何か、爆発した」

「警木隊長か」

瑛己は眉をしかめて飛を見た……さつきから聞いていると、こいつ、実は警木隊長に死んでいて欲しいんじゃないか……？

「違う……と思う。わからない。だけでも目の前が真っ白になったんだ。何か……爆発したのが見えた」

「……そうか」言った飛の顔は、どこか残念そうにも見えた。

「確かなのか」

瑛己は、半信半疑、尋ねた。

秀一が？予言屋？と呼ばれる事は知っていた。何度か、出撃前に彼が言った事が当たったのだと……だが、本当にそんな事があるというのだろうか？

未来を見る事ができるなどと　そんな事が？

秀一は、どこか不安げに首を縦に振った。「ともかく」

「嫌な予感がする……急ごう」

『湊』空軍基地を飛び出した4機の飛空艇は、滑るように駆け出した。

その空は、風一つ吹いていなかった。

西へ。

その先に、一体何があるというのか。

警木隊長は？　小暮、新は？

？真実が知りたいだけだよ？

あの男、田中の姿が、脳裏に浮かんだ。

そして同時に、

？俺は、自分の目で見た事しか信じない？

瑛己は前に行くジンの機体を見た。そして、ぎゅっと操縦桿を握

り締めた。

西へ　　？零？と呼ばれる場所へ。

それが、すべてだ。

薄暗い部屋に、ディスプレイの電子的な明かりが、ワンワンと鳴り響いていた。

カタカタカタ

その前に座り、一人の男が延々とキーボードを叩いていた。

その音は、単調にも聴こえる、そして無限にも聴こえる。

男は鼻筋に引っ掛けた片方だけの小さな眼鏡を持ち上げると、「ザ」と言ってまたキーボードを打った。

それは一瞬で溶けてしまったかのような、一つの？音？であったが。

「うい

彼の背後に、一人の男が姿を現した。

「首尾は

男はニヤと笑い、「上々」と言った。

「こつちももうすぐ終わる」

片輪眼鏡の男はディスプレイから目を離さず、マウスに手をやった。

「それで、例の3機は

それに男はギクリと肩を揺らした。

「捜査中」

「探せ

「うい

「まだ近くにいますはずだ。見つけ出し、殺せ」

放るようにマウスを置くと、再びキーボードの乱打が始まる。「
ザ、指揮はお前に任す」

「うい」

ザと呼ばれた男は嬉しそうに返事をする、敬礼のポーズを取った。

「フズ。そういえば、連絡」

「何だ」

ザは可笑しそうに笑うと、その目をキラリと輝かせた。

「カシラが生きていた」

「わかったのか」

「ああ」

「……後で詳しく聞く。行け。予定を忘れるな」

「イエッサ」

ザがいなくなると、片輪眼鏡の男は小さく口元をほころばせた。

「生きていたのか」

ダンと、大きく最後のキーを打ち込む。

と同時に、ディスプレイの映像が目まぐるしく縦に流れた出した。

男は天井を見上げると、誰ともなく呟いた。

「楽しみだ」

その頃、同じく天を仰いだ者がいた。

「……ふう」

男は額の汗をグイとぬぐうと、外した眼鏡をかけなおした。

小暮だった。

汚れた飛行服の袖をまくり、パンチを片手に彼が見つめる先にあったのは。

うつそうとした樹々に囲まれ、緑に覆い隠されるように横たわる、半壊した、竜の名を持つ飛空艇であった。

太陽が、空の頂上ちゅうじょうにたどり着こうとしている。
季節は春。

冬の寒さを思えば、陽射しはとても暖かい。海から吹き込む風も、春のにおいが混ざっている。

小暮は前髪を掻きあげ、東の空に目を向けた。

(一日、か)

そしてやがて、目の前にあるボロボロになった飛空艇に視線を戻した。

大きく溜め息を吐き、そこら辺に投げ捨ててあったドライバーを拾い上げた時。

「小つ暮ちゃーん」

場違いなほど能天気な声が響いた。

振り返るとそこに、新がいた。

眩しそうな笑顔を浮べた彼は、「珈琲、飲むだろ」と、缶を持つ手を軽く掲げた。

「ああ。サンキュ」

ポツと新の手を離れ弧を描いて飛んでくる缶を、慣れた手つきで受け取る。

タブをキュッと開け、一口。ブラックを選んでくれた事が、少し嬉しい。

「しかしお前、よくこんな物持って飛んでたな」

傍で同じく珈琲缶を傾ける新に、呆れとも苦笑ともつかない顔で小暮が訊いた。

新はニイッと笑うと、「だって」

「いつ何時、何が起るともわからないし」

実際、新の飛空艇には携帯食料と水・飲物が馬鹿のように積み込まれていた。

おかげで3人、今の所飢え死にだけは間逃れている。

(だが、時間の問題だな)

心の奥で嘆息を吐き、「警木隊長は？」と珈琲片手に木陰に座つた。

その横に新もドツと胡坐あぐらをかき、「向こうで寝てる。珈琲と麦酒ビールどっちがいいつスカ？ って聞いたなら、いらんって言うから。一応1、麦酒を置いてきた」

「寝てるって……隊長は、考え事をする時はいつもああなんだよ」
朝方、最後に見た警木は、向こうの岩辺で座禅を組んでいた。

一睡もしてない様子だった。それを思うと、小暮の胸が少し曇る。
「んで、こっちは？ 直りそう？」

小暮の向こうにある飛空艇を覗き、新は珈琲に口付けた。
「無理だな」

小暮は淡々と返事をした。

「これだけ壊れていたら、修復は不可能だ。せめて無線くらいは戻らないかといじってみているが」

「そうか」

新は右手で缶を遊ぶと、軽い口調で言った。

「まつ、よろしく頼ま。俺、そっち系はからつきだし。俺にできる事と言ったら、この無人島に記念の絵でも描いて残すくらいだよ」

「……新、それはやめろ……」

苦々しく笑うと、小暮は珈琲を飲み干した。

しばらく、カラになった缶を片手に、ぼんやりと2人、空を見ていた。

「なあ」

海の音に、小暮が一つ深呼吸した時。新がポツリと口を開いた。

「結局……何が起こったんだ？ あの時」

新は片目を細めて隣の男を見た。

何が起こったか。問われても、小暮にも「わからん」と答えるしか術がない。

「ただ言えるのは……飛空艇が突然操縦不能になったという事だ。3機同時に、それも？零？に入った途端な」

《 隊長ッ！ 》

《何だこれっ！？ 舵が利かねッ！？ 》

彼らは必死に迂回を試みた。だが、安定を失った飛空艇は落下の一途を辿り。

そしてこの島に。3人、不時着を余儀なくされてしまったのである。

大した怪我もなく、陸おかに立てたのは喜ぶべき事だ。

だが……小暮の胸には、昨日からずっと晴れない物がある。

あの時、確かに舵はなかった。計器はユラユラと意味不明にふらつく、操縦桿はいう事をきかない。機体は、こちらのどんな操作も受け付けず、何かに引かれるように地上を目指した。

しかし、エンジンは生きていた《……………》。

「……………」

小暮は眉をしかめた。

磐木、新の機体を見ても、それは明らかだった。彼らの飛空艇3機共、エンジンは動いていたのである。

なのに、墜ちた。

機体は突然、飛ぶ事を忘れたように。翼を無くした鳥のように、ただ、空を遠ざかって行った。

そしてもう1つ。

「あの編隊は……一体」

ポツリと言った新の言葉に、小暮の眉がビクンと跳ねる。

舵を失ったその途端。西の空から飛空艇が現れた。

灰色のそれは、1つや2つの話ではなかった。

艇団。

黒い塊となってこちらに向かってくるその一団に、3人は嫌な予感を覚え、急ぎ背を翻ひるがえしたのである。

「小暮……あの時リーダーに、あったか？」

小暮は軽く首を横に振った。「いや」

「だがあの時点でもう、機体は正常ではなかった。……一概には言えない」

そう言いながら、小暮の背中には寒気が走る。

リーダーに映らない、艇団せんたん。

一体……？ 何がどうなっているというのだろうか。

突然の操縦不能。

謎の灰色の艇ふね。

無人島への不時着。そして。

「奴ら……俺達を探していたよな」

「ああ、恐らく、今も」

まるで、海域に入った者を逃しはしないと言うかのように。

その空には絶えず、何かを探すように灰色の飛空艇が通り過ぎていく。

そのため彼らは飛空艇を木々の中に隠し、身を潜めているのである。

(この状況では、例え艇が生きていても)

とても逃げ切れないと、小暮は思った。そして、

(見つければ、命はない)

直感だ。

秀一のような能力はない。だが、小暮は自分の勘を信じていた。

「どちらにせよ、この状況では動くに動けない」

打開の手は 基地に残した連中だが。

「ジンさん、助けに来てくれっかなあ」

「副長か……。助けに来てくれる以前に、心配しているかどうかも謎だな。それに、たとえ万が一副長が出るとして、一人でこれるわけがない」

「……」

新は苦笑した。「あらら」

「ジンさん、見張りどころか、おもり係になっちゃったか」

「飛たかきが、総監を殴ってなければいいが」

「ハハハ。あるな、それ。『なんで俺を呼ばへんかったんやー!!』
とかって。荒れてるだろうなあ」

飛が総監に食って掛かる様を思い浮かべ、新が大笑いしていた。
その横で、小暮は神妙に瞼を伏せた。

(4人できたとしても、果たしてそれで、足りるのだろうか?)

あの連中が、今回の一件で黙っているはずがない。必ず誰かが、
助けに行くと言い出すに違いない。

それを思っ、小暮は心の中でポツリと呟いた。

(むしろ、来ない方が……)

空を仰いだ。

その空は青く晴れ渡っていた。

それが小暮は、不気味だと思った。

《じきに、?零ゼロ?に差し掛かります》

秀一の声が、無線の向こうから流れた。

瑛えいき己は周りを見渡し、小さく息を飲み込んだ。

(ここが、?零地区?か……)

瑛己は太陽を見上げた。

?零地区?と一言で言っても、広い。

だが……瑛己にとってその名は、父の最期へとつながる。

(父さん)

父はここで、あの空に消えた。

?空の果て?……空が割れた、その向こうの世界へと。

それが今、ここにある。

空を見渡しても、どこにも、切れ目などない。

どこか遠い世界の、絵空事のようにも思える。

だが、現実にはそれはそこに存在したのだ。

その空に、果ては生まれ。

(父さんはそこに)

そして今自分は、そこへ向かおうとしている。
自分は何を目指しているのだろうか、と瑛己は思った。

空軍に入った理由。なぜ自分は空に生きる事を選んだのだろうか

……？ 父と同じ道を、歩こうと思ったのだろうか……。

父の背中。

瑛己は父・聖 晴高を、よく覚えていなかった。

遊んでもらった記憶もない。顔すらも、写真のものしか浮かんでこない。

むしろ、幼少の記憶に登場する顔は兵庫の方が多し。兵庫おじさんに遊んでもらった記憶は、いくらでもあるというのに。

(俺は、父さんを憎んでいるのかもしれない)

ふっと、瑛己はそう思った。

自分に何一つ残さず、勝手に空に還^{かえ}った父。

自分はそんな父が……憎いのもかもしれない。

父親がいないという引け目を感じた事はなかった。母がいたから。

兵庫がいたから。

けれど。。。

「面白い背景、か」

田中の言葉を思い出し、瑛己は小さく笑った。

誰がそんなものを、望むか。

その時瑛己の脳裏に、一人の少女の顔が浮かんだ。

(あの少女は)

一体、なぜ飛んでいるのだろうか……。

この空に、並ぶ者はないと言われ。

その翼には、一級の価値があると称えられ。

墜とした者は、歴史に残るとまで言われる。

尊敬と敬意。

そして、憎悪と敵対心。

常にその背を追いかけられ、そして狙われる、白い鳥。

(なぜ)

なぜあの子は飛んでいるのだろうか？

何のために、何を目指して。

(彼女は)

何を背負って。飛ばなければならぬというのだろうか？

忘れてください。

時島と名乗ったあの女性。彼女は一体、何者なのか。

見たんじゃないのか？

空(k u | u)の正体を探る、田中という男。

(そして、自分は)

どんな空を、飛ばうとしているのだろうか？　そして、どこへ行くこととしているのか。

(その行く空の果てで)

自分達は、何を見つけるといえるのだろうか？

「父さん……」

そして父はその果てに、一体何を見たのだろうか……？

《聖、ポーっとするな。遅いぞ》

「っ、はい」

瑛己はハッと目を見開いて、やがて、小さく首を2つ振った。

考えても答えが出ない事は考えない。

母の口癖だった。

《静かやなあ》

飛はボソリと呟いた。

ジンも油断なく空を見渡しながら、同じ事を思っていた。

(静か過ぎる)

秀一が見たという映像の話を、ジンも基地を出る前に聞いた。

それに関して、彼は特に何も言わなかった。だが、戯言たわごとと一蹴したわけでもなかった。

実際に秀一の？予言？が当たるのを、彼も何度か目にしている。むしろ簡単に、くだらないと言えた方がどれほど楽だろうかと思っ

った。

(俺も焼きが回った)

ジンはクツと低く笑った。そして、己の腕を見た。

脳裏を駆け巡る様々な残像。それに小さく舌を打ち、無線のボタンに手をかけた。

「注意して見る。痕跡があるかもしれん。見落とすな」
海を見る。

飛も秀一も、波間を縫うように見つめた。

瑛己は編隊の一番後ろを飛び、同じように海に注意を向けたが。

「……？」

一瞬、前にある速度計がフラリと大きく左右に振れた。それが、合図だった。

突然機体が、ガクンと大きく上下したのである。

「？」

瑛己は手元のレバーとギアを見、もう一度計器を見つめた。

アクセルを踏み込む。一杯まで踏み込む。

だが。

(おかしい)

速度が上がらない。

メーターを見る。すると、それがガクガクと揺れ始めた。

ガクンツ、もう一度、機体が揺れた。今度は、下に向かってバウンドするかの動きだった。

《副長！ な、何や……変です！》

無線で連絡しようとした矢先、飛の声が響いた。

《エンジン不調?? おかしい、計器がツ》

《僕もです……ツ、うあッ》

《落ち着け、クソツ一体どうなって》

必死に操縦桿と格闘している最中、瑛己は耳の端に奇妙な音を聞いた。

そして。

「　　ッ！！　飛ッ！！　上だッ！！」

その瞬間、瑛己は腰を浮かせて飛の飛空艇に向かって怒鳴った。

ドドドドドドド

それが届いたかは知れない。だが突然の砲撃に、4人の飛空艇はバツと散らばるようにそれを避けた。

瑛己も利きの悪い操縦桿を一杯に横倒しにした。いまいち鈍い感触と、予想以上に生まれる落下感に、瑛己は歯を食い縛った。

一体誰が？　相手を見ようにも、銃撃は止まない。バツクミラーに黒い影を捉え、瑛己は必死に逃げた。

「クソツ」

走れッ……！　そう念じてアクセルを、踏み抜くように一杯まで入れる。すると、一度ドツと機体が振られ、かすかに速度が戻ってくる。

焦げ臭いにおいが鼻をついた。

増した速度でどうにか抜け、切り替えしながら相手を確認する。

そこには、灰色の機体が飛んでいた。

ザツと見……5。大きさは『翼竜』とそう変わらない。だが翼の角度が特異だ。『翼竜』よりも、少し後ろに向かって伸びている。

だがその機体、どこにも、何のマークも記されていない。

『翼竜』などの『蒼国』の機体には必ず国旗である？　蒼翼の鷲？の証が尾翼に描かれているように、【海蛇】にも黄土の機体の一角に蛇の紋様が描かれていた。【天賦】総統・無凱の機体には、伝説の獅子・グリフィンが激しく翼を翻していたし、竜狩り士・山岡篤の機体のキスマークは、まだ記憶に新しい。

だがこの機体にはそう言った、？特徴？を現すものが何もない。ただ灰色に塗り詰められた機体。それが、何の前触れもなく自分

達を狙っている。

(一体……?)

瑛己は眉をしかめた。

その間にも、相手の攻撃は止まない。

今の機体の状況からしても、ゆっくりしている暇はなさそうだ。

瑛己は操縦桿を握る手に力を込めた。

(随分と、無茶苦茶なりハビリだ)

途端、前に押し倒した。

一杯まで切れないのは、やはり今の機体に信用できないからだ。

そこから右へひねる。機体が操作についてこれるか心配したが、

思ったより反応はよかった。

刹那、一機の後ろをかすめる。間髪入れず、瑛己は射撃した。

その結果を見る事なく、すぐに左へ。火の粉が目の端に通り過ぎ、

消えて行く。

どこかで爆音が聞こえる。と目の前を、蒼い機体が横切った。

(皆、無事に)

出かけ際、白河に言った言葉を思い出した。そして瑛己は苦笑し

た。

とんでもない約束をしてしまったものだ。

この空に 人の一生に、必ずなんて言葉、ありはしないのに。

「……」

だが……瑛己はふっと思った。

必ず。

そんな言葉も吐けなくなった時、それはもう、終わりの時かもし

れない。

「……必ず」

彼は改め、その言葉を口にした。

それで自分に、勇気を持たせるように。

それで自分を、強くするために。

ザツ。

乾いた砂利の音に、小暮は背後を振り返った。

「隊長」

そこに、327飛空隊隊長・磐木 徹志が物言わず立っていた。

「聞こえます。エンジン音と……爆音」

「うむ」

「副長達でしょうか」

磐木は空を見上げながら、低い声音で呟いた。「だろっな」

「このエンジン音には、聞き覚えがある」

小暮は眉間にしわを寄せた。無事だといいが……。

その時不意に、彼の耳に妙なノイズが聞こえてきた。

新も気付いたらしい。顔を見合わせる。

そして次の瞬間、小暮はハツと目を見開いた。

「まさか」

叫ぶように言うと、つい先ほどまで向かっていた飛空艇に飛びついた。

《 《 》 》

無線から、音が吹き出していた。

慌ててポリウムを調節する。磐木と新も驚いて、操縦席を覗き込んだ。

「……待て、何か聞こえる」

磐木が、ハツと手で2人を制した。

《 《 》 》

一見、ただの雑音にしか聴こえなかったものが。耳をすませると……その音の中に別の何かが混じっている事に気付いた。

しばらくそれを、注意深く聞いていた小暮だったが。ふっと、顔を上げて磐木を見た。

「これは」

「ッ」

「暗号だな」

表情一つ変えず、磐木は断言した。「それも、この配列は」

「……？」新が、よくわからないといった顔で2人を交互に見た。だが磐木と小暮は険しい顔つきで無線を睨んでいた。

Copyright © 2008
All rights reserved

『(onzarea)地区』(後書)

だるそうに無線のヘッドホンを外すと、男は大きく溜め息を吐いた。

「やれやれ」

これだから嫌なんだ……ポツリとそう呟くと、ディスプレイを見やり、そして再び無線のスイッチを入れた。

「ザ」

男は片輪眼鏡を軽く上げると、瞼を伏せた。

《うい》

しばらくして、いつもの短い返事が聞こえてきた。

「予定変更だ。05 - a f t e r、作戦を遂行する」

《フズっ！ ちょ、待った！》

用件だけ言つて電源を切ろうとした男は、明らかに眉をしかめた。

《今、交戦中》

「例の3機か？」

《違う。けど同じ、アオ》

それを聞いて男の眉間のしわがさらに寄った。

(仲間か)

昨日海域に現れた3機の飛空艇。その色から、『蒼国』の者という推測は易い。

その仲間が、消息を探しに現れた ある話だ。

(面倒な事だ)

男は目を閉じた。

「数は」

《4》

「殺れそうか？」

問いながら、一つの返事しか期待していない。そしてその返事が聞ける事を、男は疑っていなかった。

それだけに、返ってきたのは予想外のものだった。

《不明》

「不明？」

男とザ。2人の付き合いは長い。その長い付き合いの中で、男は相棒のこんな歯切れの悪い返事を聞いた事があまりない。

ザが殺れると言え、実際そうだったし。無理と言え、それもまた一つの事実となった。

だが、不明とは……。「どういう事だ」尋ねずにはいられなかった。

《結構、やり手。中でも……変な奴がいる》

的を射ない返事に、男も苛々してきた。

「ザ」

《……ッ、まさか、そんなッ》

「どうした」

《けどッ……これは、この飛び方はッ》

「」

男は無線機のスイッチを切った。

そして乱暴にヘッドホンを捨てると、キーボードに意志を叩き込んだ。

その結果も見ず、彼は部屋を飛び出した。

残されたディスプレイの黒い画面に、短く文字が流れた。

そこには、00:05という表示と、刻々とカウントを減らしていく秒数が。

残りの時間を、告げていた。

敵の一機を沈め、ジンはふっと顔を上げた。

（援軍がきたか）

素早く周囲を見渡す。最初は5だった敵の数が、いつの間にか1

0ほどに膨れ上がっている。何機か撃墜したにも関わらず、だ。
「チツ」

舌を打ったが、彼の表情に特に変化はなかった。

風迫^{かざこ} ジンという飛空艇乗りは、どんな状況になろうとも冷静に大局を見る事ができる。そこが磐木、そして白河の信頼を受けている所だ。

冷静 だが言い換えれば、冷淡とも言える。

その瞳が空の青と太陽の光に、薄氷色に輝いた。

「相楽、聖と飛^{たかき}の援護に回れ」

敵の銃撃をかわしながら、ジンは無線に向かって言った。

《了解》

これを聞いた飛が、もし敵と交戦中で手一杯でなければ。「援護なんぞいらんっ！」と叫んだかもしれない。

(この連中、ただの空賊ではない)

ジンは操縦桿を前に押し倒しながら思った。

戦闘技術、連帯技法。どちらをとっても、そこいらの空賊とは違う。

そして何より引つかかるのは、一塗りされた灰色の機体。

まるでそれは、故意に身分を隠されている ジンには、そう思えてならなかった。

何のために？ だが彼はそう思って、ニヤリと笑った。

「よほど、この海域に立ち寄って欲しくなかったらしい」

発端は？ 零地区^{ゼロ}？ 付近で通信を絶った巡視船。彼らの最後の言葉は「不審な船を見つけた」。それを追跡すると言って、行方不明になった。

そしてその調査に向かった、磐木・小暮・新の失踪。

それを追いかけてやってきた4人を出迎えてくれたのは。

「銃撃の花か」

クツと笑いながら、射撃ボタンを連打した。

波線状にその雨が、炭色の機体に吸い込まれて行く。

ドンツと低い音がして、間髪入れず、爆炎の紅い花が咲いた。
「悪いが俺は、男から花をもらう趣味はない」

簡単に言って笑うジンだが、その後ろは3機の飛空艇に張り付かれていた。

耳の端をヒュツという音がして、ジンはエルロンを縦にした。その翼のあつた所を、光が駆け抜けて行った。

そのままグルリと旋回すると、ジンは手早くレバーと操縦桿を切り替える。そしてアクセルを一杯まで踏み込んだ。

速度が全開になる一歩手前で上へ切り出すと、敵に覆い被さるよ
うに天を渡った。

灰色の飛空艇に乗ったパイロットが、それを見上げた。

操縦席のジンが見えた。逆光でよく見えないその顔。ゴグルと飛空帽に覆われ、ただ一つ見えたその口元が、クツと曲線を描いた。それに目を見開いている時間が、彼にとって命取りになった。

気付いた時、もう空に飛空艇はなかった。
代わりに、彼の右手。

ドドドドド

さらされた横っ腹は、格好的になった。

崩れ行く機体の上を掻っ切るように横切ると、ジンは飛と秀一を見た。

飛は上手いが、荒い。時折、その気性ゆえに周囲が見えなくなる事がある。

それを秀一が補う。秀一は飛ほど戦闘飛行に長けていない。一人で敵と渡り合っていくにはまだ甘い。

が、援護に回せば別だ。327飛空隊の誰よりも、いい動きをする。

（聖は）

視線を滑らせ、もう一人の姿を探そうとした時。

「
」
ジンはそれを途中で止め、操縦桿を右に切った。

ガガガガガ

ジンはバックミラーに目を向けた。

灰色の飛空艇。それは何一つ、他と変わらない。

だが。

「少し骨のある奴が出てきたか」

ジンは口元を傾け、しかしすぐにそれを引っ込めた。

機体を右下に、斜めに落とす。

落下感、むしろ、心地がいい。

海スレスレまで落として、そこからフワリと宙に上がる。後ろの

機体が放った弾が、飛沫しぶきを上げて海に突き刺さる。

そのままひねり込んで、自分を追って上がってきた機体の後ろを取ろうとする。

が、それを悟った機体は、巧みにそれを避ける。

「ほっ」

後ろが取れない。

ジンは一旦間合いを外すと、偶然眼中に入った別の灰色を撃墜した。

そしてそれが上げる爆炎の煙の中にもぐりこむ。

ゴーグルの視界が、黒くかすむ。

煙から抜ける瞬間、ジンの脳裏に、ある一場面が浮かんだ。

それを風の彼方に捨て去ろうとアクセルを踏み込んだが、浮かんだ情景は消えなかった。

そして出たそこに、その灰色の機体と正面、ガチ合った。

お互いが、射撃ボタンにかけた指に力を込めようとして。

お互いが、それを、瞬間、止めた。

その機体が、空に交差する。

背中を向けた2つの機体。遠ざかるその音を耳の端に聞きながら。

ジンは、両の眼を一杯に見開いていた。

(まさか)

今すぐ立ち上がって、その背を振り返りたい。

だができなかった。

そしてその瞬間、今まで完璧だったジンの飛行に、ほころびができた。

彼を取り巻く別の灰色が、ジンに向かって撃とうとした。

ジンがそれに気づいた時、だがその銃口は、結局火を吹かなかった。

ダダダダ

横合いからの別の射撃が、それに向かって飛んできたのだ。

ジンはその出所を振り返った。

秀一だった。

ジンは片手を上げて礼を言った。

「神は」

操縦桿を立て直しながら、ジンはふっと笑みをこぼした。

「結局俺を、逃がしてくれはしないという事か」

その笑みを皮肉に変えようとして、止めた。

ジンの胸に、また、あのシーンが過ぎった。

それを、ゆっくりと再び、心の向こうに閉じ込めようとしたその時だった。

ドカン

どこか聞きなれた爆音が、辺りに鳴り響いた。

誰かがまた、誰かを墜としたのか。誰もが単純にそう思い、淡々と、再び空を翔けようとした。だが。

ドカン

また一つ、爆音が鳴った。

ドカン

もう一つ。

立て続けに鳴り響くそれに、炭色の飛空艇のパイロットが顔を上

げた瞬間。

ドカン

その飛空艇は、突然木っ端微塵に爆発した。

一体何が それを見ていた、そばにいた機体も。

ドカン

ドカン

ドカン

爆発した。

「なッ……!!？」

飛は言葉を詰まらせ、目を見開いた。

自分は何もしていない。どこからも、銃弾は飛んでいない。

なのに。たった今、撃とうとした相手が。突然閃光を上げた。

それに驚いている間もなく、取り巻いていた敵の機体が次から次へと爆破していく。

「何で……!!？」

飛の補佐をしていた秀一も、わけがわからないというように操縦桿を握る手を止めていた。

その隙に、敵の一機が彼に向かって飛んできた。秀一は（しまった!）とそれを振り返って。途端。

ドカン

彼の目の前で突然それが、光と炎を吹いたのだ。

その爆風に舵を取られそうになりながら、秀一の頭の中は真っ白になっていた。

今の光景を、どこかで見たと思った。

出撃前。

総監室の前で見た爆破の映像。それを今、現実として、彼は自分の目で見たのである。

「副長、これは一体」

顔は無線に近づけながらも、瑛己の視線は、炎を上げて墜ちていく飛空艇だったものに釘付けになっていた。

一体今、この空で何が起きているというのか。

突然のエンジン不調。そして現れた、謎の艇団。

それが今、突如、次から次へと墜ちて行く。

その翼を木っ端に砕かれ。

一体何が……？ この空は一体……。

瑛己が戸惑う間にも、また、どこかで爆発が起こった。その生暖かい風が頬を撫で、瑛己はせめて、巻き込まれないようにと上昇する。

高度を上げて下を望めば、立て続いた爆発に、空は灰色に煙っていた。

敵の数はもう残り少ない……そう言っている間にも、また一つ、爆発が起こる。

飛と秀一も、呆気に取られたように飛行している。

副長は……？ 返事のない彼の姿を探している時。

「
」
瑛己の視界に、一機の機体が飛び込んできた。

それは、灰色ではなく。

黒。

それがまっすぐ飛ぶ先にあるのは。最後に残った灰色の機体と、蒼。

その間を裂くように飛ぶと、黒い機体は蒼い機体の背後に迫った。

だが結局。黒い機体は蒼い機体に一発も撃つ事なく、その背中を反転した。

そのまま西に向かって走り出す黒い機体。それに従うように、最

後の灰色の機体も去って行った。

残された蒼い機体は、その背を見送るように飛んでいた。

それが瑛己の目には、なぜか、淋しげに見えた。

そして間もなく。彼らが消えて行った西の海から炎が立ち上った。

4人が駆けつけた時、そこには、炎を上げる船が一隻、海に沈んで行く所だった。

数時間後。

『湊』空軍基地・第8会議室に、327飛空隊のメンバー7名が顔をそろえていた。

その後。瑛己達は、磐木達からの無線を受け、無事の再会を果たした。

そして『湊』へ連絡を入れ、『音羽』基地からの船により。飛空艇を大破した3人はそれで基地へ戻る事ができた。

磐木、小暮、新の顔を見た白河は感慨深げに頷いた。そしてジン、

瑛己、飛、秀一の4人に向かつて同じように笑顔を見せた。

特に瑛己に対して。白河は何かを言いかけて、結局笑顔で彼の肩を叩いた。

それから。全員の事を考え、「報告は明日でいい」と白河は言ったが。

「早急の報告があります」

磐木の険しい顔つきと、無事にも関わらず327飛空隊の全員の顔が浮かぬ事に気付き、夜の集合をかけたのである。

磐木はまず白河に、当初の目的である巡視船の捜査がこんな形になった事を詫びた。それに白河は優しく微笑んで言った。

「さつき『音羽』基地から連絡があった。？零地区？の近海で見つかったらしい……船は全壊。搭乗員は今の所6名が行方不明だが……君達に、ありがとうと伝えてくれとの事だ」

白河の知らせに、全員が顔を見合わせた。

「それは……」

言葉を詰まらせた秀一に、白河は神妙に頷いた。

「まだはつきりとはしないが、何かに撃墜された跡があるそうだ。恐らく、君たちが会ったという灰色の飛空艇か……」

ジンは何も言わずに、窓辺で煙草を点けた。

「その事です」

小暮が憐とした声音で彼を向いた。「総監に報告しなければならぬ事があります」

白河は色の薄い目を一度瞬きした。小暮は新と顔を合わせ、そして磐木と無言で言葉を交わした。

「昨日の早朝、隊長、元義、私は基地を経ち？零地区？へと向かいました。行程は順調に、数時間後、我々は？零地区？に到着しました。天候も風も、いたって問題はなかった。

ですが、突然機体が操作不能に陥りました。3機同時に、？零？に入った途端です。

後で副長達に聞いた所、彼らも同じように？零？に入っすぐ同じような不調を覚えたそうです。我々ほどヒドイものではなかったようですが。

そして間もなく、例の灰色の機体が現れました。我々は機体の状態から危機を感じ反転しましたが、結局無人島に不時着を余儀なくされました」

「うむ」

全員が、小暮と白河を見ていた。

この時327飛空隊、7名の心には同じ事が浮かんでいた。

「そこで一晩を過し、そして副長達がきた……。副長達は灰色の艇団と空戦に入り、自分達にもその音は聞こえてきました。

そしてそんな時でした。

半壊した飛空艇の無線から、音が聞こえてきました」

瑛己はチラリとジンを見た。なぜだかその瞬間、彼は副長の横顔

が気になったのである。

目を伏せて煙草を吸う彼の表情から、感情までは伺えない。だが……瑛己はその横顔に、よくわからないものを感じた。

それは、彼には到底知りようもない……深い、深い、何か……。

「それは、暗号のようでした。内容までは、解読できませんでした。が……あの配列には覚えがありました」

小暮はもう一度磐木を見て、そしてスツと息を飲み込んだ。そして。

「『黒国』軍部が使う暗号文。それに、酷似していました」

この空は、自分は、一体どこに続いているんだろう？

そして父はその果てに、一体何を見たのだろう？

(どうか)

それが穏やかな世界であるように。安らかな場景であるように。

(その空が、優しい空であったなら)

そしたら自分の心も、少しは、優しくなれるかもしれないのに……。

神様に、誓いもせずに、願っている。

ギイという床板のきしむ音に、彼女はそちらを振り返った。

そこに、見慣れた女性が立っていた。

黒のスーツに身を包み、凜然りんぜんとした空気を放つ女性。そのルージュが、輝くように印象的だ。

彼女は少しの間その女性を眺め、やがて、ゆっくりと瞬まはたきをした。

「……時島さん」

女性は緩やかに微笑むと、居間へ一歩足を踏み入れた。

「どうですか？ 具合は」

その問いに、彼女は曖昧あいまいに笑って「ええ、まあ」と頷いた。

「腕の怪我は？」

「はい。まだ少し痛む事もありますが、随分よくなりました」

「それはよかった」

時島は嬉しそうに微笑んだ。

だが彼女の顔は、逆に、少し険しくなった。

それを見て、時島は笑みを和らげ、そして静かに頷いた。

「仕事です」

「……」

彼女は時島から顔を背け、明後日に向けた。

しばらく、無言の時が流れた。

その間、黙って彼女を見ていた時島だったが。不意に声を潜める

ように瞼を伏せた。

「まだ無理だと、伝えますか？」

「いえ」

即答だった。「出ます」

その目には、仕事だと言った時、一瞬浮かんだ迷いの色はもうなかった。

時島は小さく微笑むと、「わかりました」と頷いた。

「日程など、詳しい詳細は後日。また連絡に参ります。それまでに、体勢を整えておいてください」

「わかりました」

それで会話は終わり。時島は去り、自分はまた一人になるんだ……彼女はゆっくりと瞬きをしながらそう思った。

だが、時島は部屋を出て行かなかった。

無言で立ち続ける時島に、彼女は訝しげに顔を上げた。

じつと。時島がこちらを見ていた。目が合うと彼女は一度視線をそらし、そしてまた、時島を見た。

「恵さん……？」

時島の真剣な眼差しに、彼女はその名を呼んだ。

時島 恵 (toki s i s i m a | m e g u m i) は小さく息を吐き、そして呟いた。「空そら」

「あなたはなぜ……あの時、あのような事をしたのですか？」

「……」
空と呼ばれた少女は途端、目をそらした。

そしてじつと自分の手の甲を見つめる少女に、時島は少し苦笑し、そして自分の胸に手を当てるようにして言った。

「空、私はあなたを責めているわけではありません」

「……」

「ただなぜあなたが、身の危険も顧みず、あのような事をしたのか。少し気になって」

「……」

「あの少年が助けしてくれたから、ですか？」

彼女は俯いたまま、虚空を眺めた。

時島はそんな彼女を眺め、そして答えを待った。

「……そうかも、しれません」

沈黙の果てに彼女が口にしたのは、そんな言葉だった。

「自分でも……よくわかりません。ただ……」

「ただ？」

彼女の目の前にあの時の光景が蘇った。

天より現れた、【竜を狩る者】。

自分に向けられた銃口。逃れられないと思った時。

彼女はその瞬間、まっすぐな誰かの瞳を感じた。

そしてグイと、抱きしめられた気がした。大きな腕で、優しく…

…包まれたような気がした。

温もりを感じた。

だがそれが火を吹いた。

自分を守った誰かが、その空に、崩れるように墜ちていく。

それを見て、彼女の腕は、勝手に動いていた。

この人を助けなければいけないと。

絶対に助けなければならぬと。

助けたいと。

気付いた時、もう、走り出していた。

「空」

「おじさんは？」

彼女は時島を見た。その目が凜と一つ、輝きを灯した。

時島は静かに目を伏せ、「いいえ」と首を横に振った。

「今回の件は、フライト中の事故と告げてあります」

「……恵さん」

「しかし、あなたはもっと自覚しなければいけない」

時島の声は、刃のような響きを持っていた。

「あなたの翼にどれだけの価値があるのか　その背中に生えて

いるのは、？絶対の翼？だという事を」

そして自分が、何を背負って飛んでいるのかを。

「……はい」

少女は小さく返事をした。

その小さな肩に、時島の胸にチクリと刺すものがあつたが、彼女

は気付かない振りをして背を向けた。

「そっういえば」

「やっぱりここやったか」

ポケットに手を突っ込むと、ガラガラのテーブルを蹴飛ばすように歩いてくる。

昼時を過ぎた食堂に客はほとんどいない。飛の声も、ワンと響く。

「何しとんのや」

問われ、瑛己は本を掲げた。それに飛は「げえっ」と顔をしかめた。

「こないな時に、文字の軍団眺めて何が面白いんや」

「こんな時に、こんな時間まで眠っているよりはマシだと思うけど」

飛は胸ポケットからマルボ口を取り出すと、「阿呆」と一本取り出した。

「こないな時やからこそ眠れる時に眠る。常道や」

瑛己は息を吐き、そしてまた窓に目をやった。

『零地区』の飛行から、2日が経っていた。

瑛己達327飛空隊は、総監・白河から3日間の休暇を命じられていた。

激戦の後、特に磐木、新、小暮に配慮したものだった。わかつているだけに、飛ですら何も言わなかった。

その折、瑛己と飛の謹慎は正式に解かれた。総監の口添えもあったが、磐木もそのつもりでいたようだった。

あれから、瑛己は前以上に空を見る事が多くなった。その雲の中に、その蒼の中に……無意識に、何かを探すように視線を走らせてしまう。

それは飛も同じだったのかもしれない。テーブルに足を組んで座ると煙草に火を点け、空を見た。

「いい天気だな」

瑛己が言った。

「せやな」

飛が煙草を吹かせた。

「あの話、結局総監は大っぴらにせんかったみたいやな」

「……………」
この広い空の下で。誰もが幸せに平和に暮らし、生きている……
そんな夢を描くのは、愚かな事なのだろうか？

磐木達が聞いたという、謎の無線。瑛己達が『零』の空で見た、灰色の編隊。

そして最後に現れた、一機の、漆黒の飛空艇。
すべてが等しく、一つの符合で結ばれようとしている。

隣国 『黒』。

「最後に出てきたあの飛空艇は、確かに、『黒』の『月之蝶』に似ていた……まあ、紋章は消したっただけだな。小暮さんが言うところわ。『黒』は極秘で動く時、必ず出所を残さんてな」

「……………」
「そして仲間やろうと、何やろうと、口封じは躊躇わへん」

瑛己は溜め息を吐きながら、珈琲を飲んだ。

隣国『黒』。『蒼』と『黒』は、ここ数年来、ギリギリの均衡を保ちつつ、何とか平穩を守ってきた。

だが歴史を紐解けば、『蒼』と『黒』は戦争の歴史だ。

一番古いものに至っては、創世の頃にまで遡る……。海を挟んで向かい合う2つの国は、いつも互いを牽制しながらここまで過ぎてきたのかもしれない。

だがそのような歴史に惑わされているのは、新しい世など築けない。お互いがそう言い出したのは、100年ほど前の事だ。

いつまでも過去に捕われいみ合うのではなく、理解し協力し合っつてこそ、真の平和が生まれるのではないか……当時の蒼国王と黒国王、2人の英断により平和協定は結ばれた。

そしてそれから、確かにきな臭い空気が漂った事もあったが、現実として戦火が吹くにまでは至らなかつた。

「まあ、俺は歴史はようわからへん」

飛はポツリと呟いた。そしてトンと灰皿で灰を落とした。

「今度の事かて、『黒』が何考えて何しとったんかはわからへん。」

せやけど引つかかるのは」

「？零？……」

明後日の空を見て、「せや」と言った。

「あないないわくつき場所で、何をしとったのか。それも、仲間の口を封じないかんような……何を、しとったのか」

「調査は」

「『音羽』が血眼になってやってるっちゅー話や。あそこも身内をやられてるからな、せやけど、なーんも出てこおへん。すべては海の藻屑うぶく、空の散雲や」

「……」

瑛己は飛とは反対側にある窓を眺め、ポツリと呟いた。

「これから、どうなるんだろう」

飛はふーっと長く息を吐き、「さあな」と言った。

「どないなサイが振られた所で、俺らはただ、飛ぶだけや」

相手が空賊であるうと、例え、一つの国であるうと。

瑛己はそっと目を閉じた。

（父さんだったら）

こんな時、どう思ったのだろうか……不意にそんな考えが心を過ぎった。

そして、あの少女だったら……。

そんな時だった。

「飛、瑛己」

ドカつと、2人のテーブルに乱入してきた者がいた。

元義 新だった。

新はテーブルに顔を伏せると、飛の腕を引っ張り、瑛己の肩を引き寄せた。

「ど、どないしたんすか??」

突然の事に体制を崩しかけた飛は、目を丸くして新を見た。

だが、頬に星のペイントをしたこの年上の飛空艇乗りは、らしくなく真剣な面持ちでテーブルの傷を睨んでいた。

「今、偶然聞いた話」

「……？」

低く声を潜める新に、瑛己の顔も険しくなった。

「どうしたんですか？」

神妙に訊くと、新は瑛己に向かって小さく頷いた。

「明日、ここに、客がくる」

「客？」

「『黒』の軍関係者だという話だ」

その言葉に、瑛己と飛は顔を見合わせた。

それだけ言つと新は2人を放し、ヒョイと立ち上がった。

「まだ『七ツ《おれら》』以外は知らない話だ。どうせ時間の問題でバレル事だが……まだ、他所よそには言うなよ」

「なぜ……？」

訝しげに問う瑛己に、新は口を尖らせた。「知らね」

「けど、まだ2日だろ？ どうも……いや〜んな感じはするわな」

「口止め、っスか」

「そんなトコだろ」

新は耳の端をポリポリ掻き、テーブルに尻を引つ掛けた。

「それも小暮が仕入れたトコによると、結構ポストの高い奴がくるらしい……難儀な事だ。今、総監達はてんでこ舞いだっつー話」

「……」

「で、小暮ちゃんから2人に伝言。くれぐれも大人しくしてるように！」

「なんスかそれ。何やそれじゃあ、俺達が、しょっちゅう問題起してるみたいやないスか」

「達？という言葉に、瑛己は露骨に顔をしかめた。それを見た飛がムツとした様子でそれに食って掛かった。

「何や瑛己、その顔は。まさかお前、？運命の女神にぞっこん惚れられてる分際？で、まさかまさか、自分は真つ当な人生歩んでますと？？ 問題なんぞミジンコほども起してませんか？？？ 言うつ

もりやないやるな」

「……」

「ともかく。お前らの見張りは秀一に頼んでおいたから。頼むぞ」

「げえっ！ 秀かいな」

あいつ無茶苦茶チエツク敵しいからなあ……嫌そうに飛が喚いた。
そのそばで瑛己は静かに新を見て言った。

「変な事にならなきゃいいですが」

新は片方の眉を上げ、苦笑した。「そりやなるだろ」

「わざわざこつちの基地まで出向いて、？ 変な事？ 一つ言わず大人しく帰って行くようなタマじゃあ、『黒』の軍の重責なんぞ担ってられんのじゃないのん？」

「……」

「まあ、相手の出方、お楽しみつてトコかな」

気楽に笑って立ち上がると、新は背を向け去って行った。

瑛己は空を見た。

天に行く雲が、何かを訴えているように見えた。

ただどどれほど目を凝らして見ても、それが何を言おうとしているのかわからなかった。

翌日。

『黒』からの使者は、昼を少し回った頃に現れた。

公には「首都『蒼光』へ向かう途中の中継と、施設内の見学」という触れ込みだったが。瑛己達327飛空隊の者は、西の空から現れた漆黒の飛空艇を固唾を飲んで見ていた。

それは、総監・白河も同じだった。

穏やかな笑みの中に険しさを漂わせ、滑走路で『黒』からの使者を迎えた。

「この度は突然の訪問、失礼を致します」

大型の複数搭乗型飛空艇から降り立った数名のうちの1人が、白河を見るなり丁寧^{ていねい}に頭を下げた。

若い。歳はまだ20も半^{なか}くらいだろうか……？ 微笑む白河の目じりに、緊張感が走った。

『黒国』の軍服を凜然と着こなし、しわ一つない。無造作に垂れた長めの前髪、その間から覗く瞳は、垂れ目勝ちだが、鋭く輝いている。

そしてその右目には、片輪の眼鏡を引っ掛けていた。

『黒国』黄泉騎士^{こうせん}団所属・第1特別飛空隊隊長、埠頭^{ぶつ}と申します

埠頭は余裕の笑みを浮べ、供の者に待機を命じ、白河に向かった。

「座^サ、頼む」

「イエツサ」

「行きましようか」

総監室へ案内しながら白河は、内心冷や汗が出るのを感じた。

部屋に入り一心地^{いっしんぢ}つくなり、埠頭は余裕の笑みを浮べたままこう言った。

「回りくどい話はやめましよう。単刀直入に申します 本日こ

ちらにお邪魔しましたのは、先日こちらの基地所属の編隊に、当国所属の飛空艇を規定外領域で、布告なしに爆撃を受けました事に対する抗議に参りました」

「ほつ」

白河は息を吐いた。

「その話は聞き及んでいます。ですが埠頭殿、私が受けた報告では、先に仕掛けてきたのは相手側であると。消息を絶った巡視船の捜査で『零海域』に入った途端、前触れなく灰色の飛空艇が襲い掛かってき。応戦より他に、身を守る術がなかったと聞いています」

埠頭は片輪眼鏡を力チリと持ち上げ、白河を見た。

「第三者の証言があたりですか？」

「いえ、あくまで当事者の証言に頼りますが」

「ならば真か疑か、容易に判別できる事ではないはず」

「私は彼らを信じています」

まっすぐに言う白河に、埠頭はクックと笑った。

「白河殿、これは『黒』と『蒼』との国交問題になりかねない事態ですよ？」

「……」

白河はかすか眉間にしわを寄せた。

「こちらに非があると？」

「断定はできない、そう申しているのです」

「彼らの証言によれば、『零』に入った途端、機体が謎の不具合を起したと。そして現れた灰色の編隊は、彼らに銃口を向けた挙句、突然爆破して果てたと聞きます。まるで誰かに、無理に自爆を強制されたかのように。関った者の口を塞がなければならぬほど、一体、何をなされていたのか」

「それをここで貴殿に、説明する必要はないと思われませんが？」

埠頭の目が痛い、白河は思った。

その双眸はまるで、こちらの心の奥底まで覗くかのような……奇妙な輝きを灯していた。

白河の脳裏に、ふと、327飛空隊の面々の顔が浮かんだ。

彼らがここにいてくれたら……。そう思って、内心苦笑した。

それでは簡単に戦争が始まる、そんな気がしたからだだった。

「何がお望みですか？」

かすかに顔の緩んだ白河に、埠頭は眉をピクリと動かし、再び余裕の笑みを浮べた。

「望みなど……そのような事」

ただ、と言って埠頭は袖口の埃を取った。

「今回の件を、橋爪・軍本部総司令閣下も大変遺憾いかんに思ってみえる様子」

「……」

「こちらで内々に協議した結果、問題の飛空隊に当方の要請で、一つ、飛んでいたかどうか。それで互い、今回の一件はなかった事に」

白河は拳を握り締めた。

確かに今度の一件、橋爪総司令にも報告はした。だが……自分の知らない所でそのような事になっていたとは。

一瞬、兵庫の声が聞こえたような気がした。大馬鹿野郎、と。

「……そのような連絡、受けておりませんが」

最後のあがきだった。だが、

「白河殿は、戦争を始めたいのか？」

「……」

「橋爪殿には、私から話をしますと申してあります。余計な心配は無用です」

白河はただ、小さく頷くしかなかった。埠頭が深く微笑んだ。

「『湊』第23空軍基地、第327飛空隊・通称『七ツ』……簡単に調べさせていただきました」

埠頭は懐から紙を取り出すと、チラと眺めた。

「隊長・磐木 徹志氏を筆頭に、中々いい腕を持ったパイロットがそろっているようだ。【天賦】^{てんぷ}とも対等に渡り、今までどれだけの空賊を撃破してきたかわからない。その腕前は、当方も身をもって存じておりますがね」

「……」

「中でも、副長・風迫 ジン殿は。相当のパイロットとお見受けしましたが？」

「……作戦内容を伺いましょう」

それ以上を許さぬように、白河は埠頭を見つめた。

彼はそんな様子に軽く肩をすくめ、「そうですね」と言った。

「作戦……と言っても、とてもシンプルな物です」

埠頭は人差し指をスツと立てた。

「鳥を一匹、始末していただきたい」

「鳥……？」

「そう」

埠頭の顔が、嬉しそうに歪んだ。

「この空に並ぶ者はいないとわれ、撃墜した者は、空の歴史に名が残るとまで言われる……絶対の翼を持つ、白い鳥」

「！」

「【空(k-u-u)】。その名を持つ鳥を、327飛空隊には墜と
していただく。これは命令です」

空を行く雲から、パラリと涙が零れ落ちた。

だが、太陽と蒼い空に包まれたそれに、誰一人、気付いた者はいなかった。

「第327飛空隊、【空 (ku|u)】撃墜を任ずる」

その瞬間、そこにいた全員が。動く事を忘れたかのように立ちすくんだ。

耳に痛いほどの静寂が、室内を突き刺した。

10秒、20秒……壁の時計の秒針が、刻々と時間を刻んでいく。そして1人、2人。徐々に瞬きを取り戻した彼らは。

たった1人の人物を、ゆっくりと振り返った。

「瑛己^{えいき}……」

誰かが、その名を口にした。

振り返った、聖 瑛己の顔には。

何の表情も、なかった。

感情のすべてが消えてしまったかのような、まっさらなその顔に。誰もがまた言葉を失い。口を閉ざした。

そこにいる者は皆、彼と空 (ku|u) との事を知っていた。

それはもちろん、その言葉を発した総監・白河とて同じ事だった。

始まりはここ、『湊』空軍基地への異動の途中。【海蛇】と呼ばれる空賊3機に囲まれ、絶体絶命の状況に立たされた時。その危機を救ってくれたのが、空 (ku|u) と呼ばれる、白い翼を持つ飛空艇だった。

この空に並ぶ者はいないと言われ。撃墜した者は、空の歴史に名が残るとまで言われる飛空艇乗り。

【天賦】の無凱、『湊』での初めての任務、その時も。瑛己の危機を救ったのは空（k u | u）だった。

絶対の、白い翼。

その鳥が危険にさらされている。それを聞いた瑛己が、無我夢中で空へ飛び出した事も知っている。

そして、【竜狩り士】の銃弾から？彼？を守った事も。そのために、彼の機体は撃墜され、木っ端微塵になった事も。謹慎処分を受けた事も……。

そこにいたすべての者が。

瑛己と空（k u | u）との、不思議な縁を。

そして瑛己が？彼？に持っているだろう、特別の感情も。……知っているからこそ。

「……何ですか？」

空（k u | u）を倒す、「それが夢だ。初めて瑛己に会った日そう言った飛までもが。白河にそう問わずにはいられなかった。

「何で俺らが……空（k u | u）と戦らなあかんですか？」

飛は苦しそうに顔を歪め、白河を見もせず言った。

お前、空戦マニアじゃなかったのかよ？ お前、空（k u | u）と戦いたいんじゃないかったのかよ？ どうしたよ？ どういう心境の変化だよ？ 何、らしくない事言ってるよ？

誰も飛に、そう言わなかった。

一番瑛己のそばにいた男。一番多く、共に、空を飛んだ男。

あの飛が。その飛が。そんな言葉を吐いた事。むしろそれは、その場にいたすべての者の心を揺さぶった。

「……僕もお聞きしたいです」

飛の隣にいた秀一も口を開いた。その声は震えていた。

「どうしてそんな、突然……？ 何で……」

秀一もまた、瑛己がこの基地へきた時からよく知っている。飛が思うのと同じくらい、瑛己の気持ちを知っていた。

「昨日きた『黒』の使者と。何か関係あるのですか？」

2人とは一転、落ち着いた口調で小暮が言った。

「国際上の取引に、俺達と空（ku|u）を担ぎ出されたとしたら」

「……胸クソ悪いなあ、そりゃ」

苦笑混じりに笑ったのは、新だった。

「俺達に、空（ku|u）を墜とせなんて」

ジンは何も言わなかった。腕を組んだまま、ジッと目を閉じていた。

磐木は白河を見ていた。その目は……彼にしては珍しく、複雑な色を灯していた。

『獅子の海』から、そして無凱から。無事にこの基地に戻る事ができたのは。

「……白河総監」

彼とて、ちゃんとした理由を聞かなければ納得がいかない。

隊長であり、そしてこの中で一番、義に厚い男であるからこそ…

…。

全員の目が、白河を向いた。

そして白河は。

「」

次の瞬間すべての者が。驚愕に目を見開いた。

白河がその場に膝をつき、頭を垂れたのである。

「総監ッ」

「すまない」

白河は頭を垂れたまま、そう呟いた。

「すまない」

「総監、顔をッ、どうか」

「すまない」

「やめてください……！ 総監ッ！」

「すまない」

白河の声は、悲鳴のようだった。

誰もが、それ以上の言葉を無くした。

すまない。土下座してそう呟き続ける彼の姿に。彼らはあまりにも多くの事を知らされてしまったからかもしれない。

『零』の海で遭った、『黒』との事。

そして現れた、『黒』からの使者。

そこで白河は何を聞いたのだろうか？ 何を知ったのだろうか？

どちらにしてもそれは、小暮の言葉の的のどれだけかを射ているという事。

そして、白河は。瑛己の気持ちも、『獅子の海』での事も。すべてを知って、理解して。……それであるにも関わらず。

どうする事もできなかったのだと。

恐らく、この場にいる誰よりも、苦しんで。もがいて。涙して。

この言葉を紡がなければならなかった彼は。

「すまない」

瑛己は視線を落した。そして、ゆっくりと目を閉じた。

風に、初夏のにおいが混じっていた。

瑛己はそれを吐いた。そして小さく頭を振った。

「……なんつーか」

飛はポツリと呟いて、グイと麦酒を飲んだ。

その夜。飛と秀一は2人『海雲亭』の隅に陣取り、静かに麦酒を飲んでいた。

普段は滅多に麦酒など飲まない秀一も、この日は珍しく口をつけていた。

「すいません、もう一杯お願いします」

バイトにそう言う秀一の姿に、飛は苦笑して「適当にしとけよ」

「飛は？ おかわりは？」

「阿呆。お前のピッチに合わせてたら、こっちの身がもたんわ」

この顔で、実は秀一は飛よりも酒に慣れている。

普段飲まないのは嫌いだからではなく 単に、酒の強さで周りの人間を閉口させたくないからだった。

だがそんな彼でも、こうして自棄になったように飲む事がしばしばある。

運ばれてきた4杯目を、平気な顔して飲む秀一の横顔を眺めながら、飛はチビリと一口だけ飲んだ。

「……………なんつーか」

何度目になるかわからない、飛はそう呟いた。

そしてそれに続けるように、秀一はコトンとグラスを置いて言った。

「飛ぶしかないのかな」

飛は頬杖をつき、明後日を眺めた。

「せやな……………」

あの後会議は、よくわからないうちにお開きとなった。

「瑛己さん……………どうしたんだろう」

会議が終わると瑛己は、無言のまま一人、部屋を出て行った。

飛と秀一が慌てて追いかけたが、その背中が「一人にしてくれ」と言っているようで、結局声をかける事ができなかった。

「あいつに限って、妙な真似はせんとは思うが」

そう言ってみたものの、飛は、空(k u | u)の危機を聞いて飛び出した瑛己を知っている。

飛は頭の後ろで腕を組み、大きく息を吐いた。

「あいつは……………案外、激情家やからな」

普段、多くを語らない、自分の心にどれだけの事を飲み込んで、言葉にしない青年。

だからこそ、その胸にどれだけのものを秘めているのか。

瑛己がここにきてから、まだ1ヶ月と少し。

だがこの間、色々な事が起りすぎるくらい起きた。

そして2人は、それを瑛己と共に見てきた。たくさんの生死の危機を、彼と共に潜り抜けてきた。

「……どうにかならないのかな」

秀一の言葉に、飛はただ一言、

「警木隊長は、瑛己を外さんやるうな」

「……」

「あの人は、そーゆー人や」

一時の感情のみで、作戦から外すような人間ではない。

秀一は俯いた。それは彼自身、よく知っている事だった。

(それが果たして、いい事なのか悪い事なのか)

秀一にはわからなかった。

ただ酷だと思った。

「どうしてあんな命令が……。空(k u | u)を倒せなんて、僕らに……」

その問いに、飛は眉をしかめた。

「奴らにとつてそれだけ鬱陶しいつちゅー事やな。空(k u | u)つちゅー、絶対の存在も」

そして、俺らも。

「へえ？」

最後の言葉を口にしようとした時、突然、隣のテーブルから声が上がった。

「君達、空(k u | u)の撃墜命令をもらったのかい？」

その声に、秀一はキョトンとそちらを振り向き、そして飛は。小さく目を見開き、怪訝な顔でその男を向いた。

隣のテーブル、そこに、一人の男が座っていた。

黒いカッターに、真っ赤のネクタイを揺らして。胸のポケットからはサングラスが覗いている。テーブルの上には煙草の包みが無造作に置かれ、その一本を咥えると、男はニヒルに笑みを浮べた。

「あんだ」

この男に、飛は覚えがあった。

「須賀 飛君と……そっちは、相楽 秀一君かな?? フリーライターの田中だ。改めて、どーぞよろしく」

「あ……どうも、はじめまして」

キョトンとしたまま、秀一は田中に頭を下げた。だが飛は不審げに田中を見ただけで、何も言わなかった。

田中はニコニコと微笑むと、椅子を滑らせ、2人のテーブルに近づいた。

「さつきから、ちょこつと話は聞かせてもらったよ。何？ 君ら、空（kuu）の撃墜を命じられたのか？ それで瑛己君は？ 俺と彼はマブダチなんだ。詳しい話を聞かせてよ」

瑛己がここにいたら、またたく瞬く間に嫌悪の表情を浮べた事だろう。

だがその代わりに、飛は眉間にしわを寄せ、ズイと立ち上がった。

「行くぞ、秀」

「え、飛……？」

戸惑う秀一を無視して、飛は一步踏み出した。

それに田中は腹を立てるところか 笑い出した。

飛は田中睨みつけた。

「何がおかしい」

「ククツ……いや、失礼っ」

言葉とは別になおも笑い続ける田中に。飛の顔は一層険しくなつた。

「いやあ……君の態度。あまりにも思った通りの事をしてくれるもんだからね、ついつい」

「どういう意味や」

クククツ……田中はニコリと微笑み、煙草を灰皿に押し付けた。

「瑛己君の行方が知れないんだろう？ 俺なら、心当たりがない事もないぜ？」

「え」

その言葉に、秀一が腰を浮かせた。

「それはっ」

「よせ」

だが即座に止めたのは、飛だった。

「あいつは、ほかつておいても帰ってくる。こんな奴に 無理
して訊く必要はない」

「飛」

「はっはっは!!」

飛の言葉にまた、田中が笑い出した。

「俺、相当嫌われてるみたいだなあ」

飛は拳を握り締めた。ぶん殴りたい衝動を必死に抑え、ギリと歯を食い縛った。

それは、飛の脳裏に焼き付いている。

この男と初めて会った日。瑛己を探してここへきて、その名を呼んで振り返った彼の顔が。決して自分の心をさらす事がない青年が、自分の感情の多くを飲み込んで言葉にしないあの瑛己が。

あれほどの、安堵の表情を見せた、あの瑛己があんな顔を見せた

……そこに。この、田中という男はいた。

そして何かを問うよりも早く、瑛己は背を向け店を出て行った。

「俺はあんたを信用できん」

飛はハッキリとそう言った。

聖 瑛己に、あんな顔をさせた男。

飛は嫌悪の表情を浮べ、秀一を目で促した。

「ふふふっ、まさか君も人並みに、ライターなんていう人のアラ探しをして生きるような人種は好きになれないとでも？」

「自分でライターなんて名乗る、こましゃくれた奴は嫌いやっちゅーだけや」

秀一は飛を止めようとした。だがその横顔があまりに険しくて。

秀一ですら、口を挟む事ができなかった。

こんな時、海月さんがいてくれたら……店内を見回す。だが彼女が出かけている事は、さつきバイトの少年に訊いたばかりだ。

「君は、空戦マニアと名乗っているそうじゃないかい？」

田中が唇の端を釣り上げてそう言った。

「それがどうした」

「いや？」　そして、この空に数多く存在する空賊・渡り鳥の

中で、君が最も敵対心を抱き、倒したいと思っっている飛空艇乗りは、

【竜狩り士】・山岡　篤だと聞いたけど」

「それがどうしたッ」

しかし田中は、笑みを浮べるだけでそれ以上何も言わなかった。

それに痺れを切らしたのは飛だった。

「行くぞ」秀一に向かって吐き捨てるように言うと、ダンと床を踏み鳴らして、田中の横をすり抜けようとした。

「飛」

秀一が慌てて、その背中を追いかけてしようとした刹那。

それより早く、田中の腕が飛の肩を掴んでいた。

「何やッ……………」

田中はニツコリと微笑んだ。その手を荒っぽく振り払おうとした途端、その口元が小さく動いた。

「……………」

次の瞬間放るように投げ出された飛の顔は、驚愕で固まっていた。それを見て、田中は一層微笑んだ。

「飛……………」

飛の足を動かしたのは、秀一の声だった。

足早に去る飛を、今度は田中も止めようとしなかった。

カランコロン

扉の鈴の音が、甲高い音を立てて鳴り響いた。

田中は椅子に座りなおすと、バイトの少年を呼び止めて「マテイ

ー二ね」と言った。

彼は煙草を取り出すと、銀のジッポーで火を点けた。

その顔に浮かんだ笑みは、しばらく彼の顔から離れなかった。

「飛…………… ちょ、待ってよ、飛っ！」

だが、彼は止まらなかった。

前方に広がる闇の一点を睨みつけ、草土を蹴るようにして歩き続けた。

そしてその脳裏には、田中と名乗ったあの男の目が焼きついていった。

肩を掴まれ振り返ったその瞬間。飛の背中に過ぎったのは悪寒。

そしてその口元が最後に、音なく発した言葉は。

「飛ーっ」

倒してみるよ

その頃瑛己は、星空を眺め、大きく息を吐いていた。

空を見るたび、いつも思う。

もしも見上げた空が、すべての答えを導いてくれたら。

この心を苛むすべての疑問と不安の渦を。眺めたその空が……まっさらにな、消し去ってくれたらと。

「……」

瑛己は小さく苦笑して、星の海から目をそらした。

(俺は……)

どれほど空を仰いでも。何の答えも出なかった。

まして父の声など。聞こえてこなかった。

永劫の丘。

小さな石塔の前に、一人。聖 瑛己は、ボンヤリと立ち続けていた。

そんな彼の背中を見ていた者がいた。

「……瑛己君」

海月は、風になぶられる髪をそっと抑え呟いた。そして……振り返った瑛己に、静かに微笑みかけた。

海月は持っていた手提げから小瓶を取り出すと、「お父さんの好きだったお酒」とふんわり笑って、石塔にかけた。

瓶からこぼれ流れて行く様を、瑛己はじっと見つめていた。カラになったそれをしまい込み、海月は小さく息を吐いた。

「……時々。こういう星のきれいな夜には、ね」

「……………」

海月が空を見上げた。それにつられるように、瑛己も仰いだ。風が頬を抜けた。

春とはいえ夜はまだ冷える。まして風は海から吹いている。

コート一つ羽織ってこなかった瑛己は、小さく肩を震わせた。

それを見て海月はクスリと笑い、自分のマフラーを彼の首に巻いた。

「……………」

「ほんと。子供じゃあるまいし」

クスクスと笑いながら、海月は瑛己の顔を盗み見た。

月明りしかない暗闇の中で、彼の表情はよくわからない。

けれど……。ふつと海を見たその横顔が、どこか頼りなさげに見える。

その顔が、いつかの誰かに重なった。

だが、

(……………違う)

そう思い海月は苦笑した。

「あんたの父さんは、もつとしっかりしてたわよ」

その言葉に、瑛己はビクリと海月を見た。

「父さん……………」

「あんたの父さん、聖 晴高は」

スツと短く息を吸い込み。

「いつも、自分は何の迷いもないぞって顔してた」

「……………」

「いつも凜と胸張ってさ、毅然としててさ。兵庫が酔っ払っ

てつぶれる所は何度も見たけれども、あの人がぶっ倒れる所は見た事なかった」

「……………」

「私にあんたの父さんに、憧れてた」

瑛己が息を飲んだのがわかった。海月はそれに小さく笑い、続け

た。
「だってさ、超カッコよくって優しくて、紳士的で。その上軽々とピアノまで弾いちゃってさ。憧れないわけがないよ、あんな素敵な人」

恋していた。

「だからぶっちゃけ、奥さんがいて、子供までいるって聞いた時は……ごめん、ちょっと妬いちゃった。えへへ」

「……」

こんな告白話を。

「さらにぶっちゃけて言ってしまうえば……何とか振り向いてくれな
いかなーとか。10代後半の海月さんは、思った事もあったわけよ」
「……」

きっと、ずっと私は。

「けど、結局晴高はいつも優しく笑うだけで。それ以上の顔しな
かった」

凜としていた。

毅然としていた。

いつもまっすぐ前を向いていた。

何の迷いもないみたいだった。

たった一つの不安さえ。

たった一つの悲しみさえ。

どんな小さな弱さでもいい。

どんな小さな悩みでもいい。

そんな些細な顔さえも。

「私には見せてくれなかったよ」

完璧じゃないあなたの姿を。

「だから、私にとってあの人の思い出は、きれいなままでよ」

笑い話と一緒に。空へ。

「だから……晴高がその空で何を思って。何を求めて飛んでいたの
か、私にはわからないけれども」

生きる事のすべてを、飛ぶ事に懸けた人。

「あの人が、上官の指示に文句言ってボコボコにされたとか、命令違反して地下に監禁されたとか。悩んで悩んで飛んだ事も、その時にどれほど悲しい事があったのかも。自責の念に死のうとした事なんか」

知らないけどさ。

「出たトコ勝負で真冬の夜中、仲間を助けに草原を突っ走ったって話もあるから……あの人もやっぱ、あんたと同じ、本当はかなりバカっぽかったのかもね」

「……バカですか」

瑛己が小さく苦笑した。それにニヤリと笑って「うん」と即答した。

「運命の女神様は、バカでまっすぐで、すっごく悩んでも顔に出せないような……そんな奴が好みなのかもね」

瑛己がここにいる理由を海月は知らない。

だが何かあったのだらう……夜空を見つめる瑛己の背中が、誰に問い掛けているか。海月はすぐにわかったから。

「海月さん、俺……」

瑛己の声は、揺れていた。

それに海月は軽く目を見開いた。

「俺……」

それっきり。瑛己は黙り込んだ。

どう言葉にしたらいいのかわからない、どうしたらいいのかわからない……彼のそんな背中を優しく撫で、海月は言った。

「……何があったか聞かない」

無責任な助言をして、それであなたを傷つけたくないから。

「だけでもね、瑛己。答えは一つじゃない　晴高が好きだった

言葉よ」

「……」

「考えて考えて……悩んで悩んで。そうして答えを探す事もあるわ。

あの聖 晴高でさえね。空を飛ぶ事、どれだけの想いを抱えて、不安を抱えて。彼だって飛んでいたかわからない。そしていつぱいいっぱい考えてこれが正しいと思って出した答えすら、信じられなくなる事もある」

それが絶対正しいと、神に誓う事ができた答えですらも。

「……」

「ただ、」

目を閉じた海月の瞼に、優しいあの笑顔が蘇った。

「例えどれほど万人に罵られ、後世に嘲あざわらられるような答えであつても。それを出すのは自分自身よ。そしてそれを信じる事ができるのも、その意志を誇る事ができるのも」

脳裏に浮かぶ、聖 晴高の瞳が。

「たった一人。あなたの人生は、あなただけのものよ」

振り向いた瑛己のその瞳と重なった。

海月は緩やかに微笑むと、瑛己の肩をトントンと叩いた。「風邪ひいちゃうよ」

「帰ろ？ あったかい物飲みたい。どーせ何にも食べてないんですよ？ ごちするからさ」

「……」

小さく頷く瑛己にニッコリ微笑むと、海月は満天の星空を見た。

そして瑛己の手を取り、心の奥で呟いた。

これでいいよね、と。

酒に濡れた石塔が、キラリとほのかに瞬いた。

翌日。

327 飛空隊は、北塔の第5会議室に召集された。

瑛己の姿も、そこにはあつた。

部屋に現れた彼に秀一は安堵の笑みを浮べた。そんな彼を「阿呆」

と小突いた飛だったが、彼も内心ホツとしていた。

だがそれによって事態が変わるわけではない。

その場で、居並ぶ彼らに伝えられたのは、作戦決行の日程であった。

一週間後

。白河が低い声音で言ったのは、紛れもなく、空

(ku|u) 撃墜の行程^{フロセス}だった。

「一週間後、『音羽』の南・『輝向』(kikou) 湾『上空を、』
空(ku|u)』が通過する」

『湊』の南東に位置する『音羽』海軍基地。その南、なだらかな
山地を越えた向こうに、『輝向湾』^{きこうわん}という海がある。

その昔、ある偉い法師が海にかけられた呪いを解き、漁業の繁栄
と永遠の光を祈ったとされる湾である。

その伝説もあり、神に祝福された海・幸福の海として、『蒼国』

でも有名な所である。実際その海の水で病気が治ったという噂もあり、
遠路はるばる訪れる者も少なくない。

そこで空(ku|u)を迎え撃て、と。

瑛己の向かいに座っていた新が、皮肉げな苦笑を浮べた。

「出立は、5日後。『音羽』を経由して向かってくれ」

白河はそれで口を閉ざし、一堂を一人一人見渡していった。

そして最後、瑛己の目と会った。

「……」

先に目をそらしたのは、白河の方だった。

「よろしく頼む」

そう言って、白河は部屋を出て行った。

室内に沈黙が落ちた。

それを打ち止めたのは、小暮の大きな溜め息だった。

「隊長、どうされるんですか？」

「……」

視線が警木に集まる。だが彼は動じた様子もなく、ふっと息を吐
いた。

「訊くな」

その声が、ワンと部屋に木霊した。

「冷静に見て」ジンが、煙草に火を点けながら言った。「分はどちらにあると思う？」

小暮の眉間にしわが寄った。「五分五分」

「……そう言えればまだ楽ですが。客観的に見て、難しい戦いになるでしょうね」

小暮は眼鏡を持ち上げると、深く瞬きをした。

「ざつと？彼？の事を調べてみました……その経歴には、目を見張るばかりです。？彼？が初めて空に現れたのは今から5年前。当時権勢を誇っていた空賊集団、【南十字】をたった一人で撃破・壊滅した事に始まります。」

彗星のように現れた？彼？は、その後も、護衛や迎撃、様々な仕事を請負って飛んでいます……いまだ、？彼？が墜ちたと報じられたただの一度もありません。撃墜記録は正確にはわかりませんが、歴代に存在するどの撃墜王も及ばない、文字通り、空に並ぶ者はないと言われています」

「『獅子の海』……」

呟いた新に、飛が頷いた。

「俺はあん時……背筋がブルって止まらなかったっすよ……」

不意とはいえ、あの無凱の翼を砕き、そして退かせたあの飛行。

鳥。空を自由自在に駆け巡り、太陽の光に輝く真っ白い鳥。

「俺ら全員が束になって、それで、足りるんですかね」

新がハハハと笑いながら言った。

『湊』第23空軍基地、第327飛空隊・通称『七ツ』。『蒼国』空軍関係者でその名前に覚えがある者は多い。

前線基地と言われる『湊』の中でも、最も激戦を潜り抜け、空のならず者達を沈めてきた者達である。

最近ではやはり『獅子の海』。【天賦】と渡り合い輸送艇を守り切った話は、既に広く知られる所である。

だが。それが、誰の力によるものなのか。彼らは知っている。

そして目の当たりにしたその、？絶対の翼？を墜とせと。

「空は、飛んでみなければわからない」

ジンが灰皿に煙草の先端を傾けた。

「死んだ後、後悔するのはまっぴらだからな」

そう言っただけ彼はチラリと瑛己を見た。

「作戦会議だ」

ガタリと音を立てて、磐木が立ち上がった。

瑛己はジンの横顔を見つめた。そして目を伏せ。

ゆっくりと、その目を空へと向けた。

その目が一瞬、青い空の色を浴びて、同じ色を灯した。

だが、瑛己にその空は、灰色に見えた。

白黒の空は、どこまでもどこまでも続いているようで。それでいて、墨をこぼしただけのまっ平らにも見える。

それから連日、327飛空隊は会議室と空を行ったり来たりした。様々な作戦を練り上げ、それを踏まえての空での訓練はかなりの熾烈^{しれつ}を極めた。

だがどれほど飛んでみても、これで充分だと誰も思えなかった。

あの白い翼がこちらを向いた時。その身が太陽に翻った時。

その時自分達は一体どうなるのか……誰しもが脳裏にあまりにも濃い不安を抱え、あえて口にしなかった心に。赤い閃光を見なかった者はいなかった。

すなわち　　自分が爆破する瞬間を。

そしてその朝は、やってきた。

飛行服を身にまとい、瑛己は、石塔の前に立っていた。

開けたばかりの空には、薄いピンクがかかっている。

それを仰ぎ見て、瑛己はそつと臙脂色えんじのマフラーに手をやった。

そして、

「父さん」

小さな声で呟いた。

瑛己の脳裏に浮かぶのは、写真の中の父の姿。セピア色に身を染めて、飛空艇の前で微笑む父の姿だけだ。

母がそれを時折、とても淋しそうに眺めていた事を瑛己は知っている。

そしてそんな母が言っていた。父が残したというたった一つの、瑛己への言葉。

自分の空を行け。

「……俺は父さんみたいにカッコよくは、生きられない」

だけどせめて。だからせめて。

(自分の空……)

「行ってきます」

そう言って、瑛己は歩き出した。

昼過ぎ。快晴の空を、7つの青い鳥が翔けて行った。

太陽の光に空も海も、世界はキラキラと輝いていた。

だが鳥はそれに目もくれず、勢いよく南へ飛んで行った。

それはまるで、空を引き裂かんとするかのようだ
まっすぐだよ。 まっすぐ、

「瑛己さん…… ちょっといいですか？」

自販機からこぼれ落ちた缶珈琲コヒーを取ろうと腰を屈めた時。背中に
かかった遠慮がちな声に、瑛己はふっと振り返った。
そこに秀一が立っていた。

瑛己は額の汗をぬぐうと、小首を傾げた。

『音羽』基地で迎えた、作戦の前日。

最後の飛行訓練を終えたばかりの2人は、共に、飛行服のままの
姿だった。

瑛己は襟元を緩めながら、「皆は？」と尋ねた。

「飛は新さんと、飲みに行くって」

珈琲のタブをキュツと開けながら、瑛己はその辺の階段に腰掛け
た。

「……じゃ、僕も」

秀一は軽く微笑むと、自販機に向かった。

その顔が瑛己にはぎこちなく見えた。

滑走路と海を見下ろす広い階段に2人、ボンヤリ肩を並べて珈琲
を飲んだ。

しばらく無言で、夕焼けに染まる空と海を眺めていた。

カモメの声が1つ、2つ、淋しげに響いた。

それに秀一は短く息を吐き、視線を落とした。

「……明日」

瑛己はじっと、黄金に輝く水平線を見つめていた。

「このまま行ったら、僕らは、」

「……」

瑛己はチラリと秀一を見た。

「ジンさんに、口止めされていたんだけど」

秀一は珈琲缶の口元を見つめたまま。だがその瞳には、一体何が映っているのか。

瑛己は再び水平線に視線を戻した。

「どんな事を、どんな形で見ても、誰にも言うなって……言う必要はないからって」

お前が言わなくても、すでに全員が、何度もその光景を見ているのだから。

「僕らは……明後日の空を見れないかもしれない。明日『輝向湾』きこうわんを飛ぶ、8つの飛空艇は……」

「……」
「瑛己さんには言いましたっけ？ 僕の……こういう変な……ちから」

「……少しだけ」

「一番最初は、僕がまだ5歳の時。飼ってた犬が事故に遭う映像でしたよ」

「……」

「最初は気のせいだと思ってたんです。偶然見た夢と似たような事が、現実でたまたま起きただけに過ぎないって。既視感デジャヴってありますよね？ それくらいにしか思ってたなかった」

「……」

「大きくなって落ち着いてこれば、次第に消えて行くものだろうって父は……医者は言っていました。けれど、消えて行くどころか逆に、むしろそれは強くなっていくようだった」

「……」

「小さい頃は夢でしか見なかった映像が、段々と昼間……普通に起きている時でも見るようになって。瑛己さんも知ってますよね？

この間総監室で……。突然脳裏に映像が滑り込んでくるんです。こちの都合も関係なく……何の前触れもなく、突然、見たくもない映像が」

「……………」
瑛己はグイと珈琲を飲み干した。その動作に、秀一がビクリと肩を揺らした。

「……………」
「……ごめんなさい、こんな事言われたって、瑛己さんだって迷惑なのに……………」

「外れた事は？」

「……………」
「え？」

「？映像？が、外れた事はないのか」

秀一は躊躇ためらいながら、ゆっくりと首を振った。

「……………」
「1回だけ」

「じゃあ、今回も外れる」

そっけなく瑛己はそう言った。

それに秀一は目を見開いた。

「瑛己さん」

「何で俺に話した」

「……………」

「例え副長に口止めされてなくても、普段のお前なら言わなかった

……………」
「違うか？」

「……………」

秀一は小さく苦笑し、海に視線を投げた。

「……………」
「やだなあ……………」
「瑛己さんは、」

「……………」

瑛己の凜然としたその瞳が。

秀一は、ふと、泣きたい心境にかられた。

「確かにあの時も……………」
『獅子の海』が危ない事を、僕は知っていた。
あの映像を見たのは瑛己さんがくる前日だったけど。僕はあの時、
確信があっただんですよ。絶対大丈夫だって」

「……………」

「それは、あなたがきたから」

「……………」

「僕の映像に瑛己さんはいなかった。そしてあの日、『海雲亭』であなたを見た時、僕は思いました。感じたって言ってもいい……未来は変わる」

「……」
「そして今回も……言おうか悩んだけど……。話す事で、僕は瑛己さんに、自分の背負っているものを、なすりつけようとしているだけなのかもしれない」

「……」
「けど」

瑛己はそこで、大きく溜め息を吐いた。「よしてくれ」

「俺に運命を変えろと？」

「あなたなら……」

「そういう宗教家まがいの台詞、好きじゃないんだ」
セリフ

「……瑛己さん」

「買いかぶらないでくれ」

「……」

瑛己はスツと立ち上がった。

それを目で追いかけて、秀一は何かを叫ぼうとするかのように顔を歪めた。

だがその声は。瑛己の瞳に掻き消された。

その、凜としたまっすぐな眼差しが。

困ったように笑う……その姿が。

「俺は」

瑛己は瞼を細め、遠い水平線を眺めた。

「自分のできる事を、精一杯やるだけだよ」

「……」

「だからお前も」

瑛己は秀一を見た。「負けるな」

その目に秀一は、胸の奥から何かがドツと溢れそうになるのを感じた。

「瑛己さん……」

瑛己はそつと視線をそらした。金色を浴びたその横顔に、秀一は……ふつと笑みをこぼした。

「……あなたが何で女神様に愛されるのか、わかる気がします」
「女神？」

「運命の、女神様ですよ」

途端、瑛己は額を抑えてガクリと頭を垂れた。

「……やめてくれ。冗談じゃない……」

「あはは！」

「……お前、俺がどれだけ困っているのか……大体、笑えるような立場なのか？ お前」

「あははは！……だいじょーぶ、女神様が一番愛しているのは瑛己さんだもん。僕は取ったりしませんから」

「……やる。もらってくれ、頼むから……」

笑い転げる秀一に、瑛己は内心ホツとした。

だが同時に、彼の中に重い感情も生まれていた。

（明後日は、ない……か）

ゴオオオ……

音がした。

瑛己はビクリと、双眸を揺らした。

空は、彼の心をそのまま映したかのように、灰色に曇っている。その見晴かす彼方に。太陽もないのに何かがキラリと輝いた。

それが白い翼であると。

瑛己は深く深く目を閉じた

磐木が乗る1番機が、無人島の影からふわりと舞い上がった。それに続いて、他の機体もエンジンを乗せていく。

神に祝福されたという海の上で。

《これより【空(k u | u)】迎撃体勢に入る》

瑛己はゆっくりと目を開けた。

そして最後に、空へと向かった。

空(k u | u)の飛行技術の凄さは、この中では瑛己が一番よく知っている。

【海蛇】に絡まれた時も。瑛己が2機や3機に四苦八苦ししている所を、?彼?は、倍以上の数と同時に渡り合っていた。

その飛行は、見た者を魅了すると言われる。

まさしくその通りだった。初めて会った時、瑛己は自分の置かれた状況など忘れ、その白い翼に見惚れていた。

(まさか、こんな日がくるなんて)

何度も危機を救われた。

?彼?のお蔭で、どれだけこの命は長らえる事ができたのか。

(?彼女?のお蔭で……)

あの日以来に会う、空(k u | u)の姿。

白い機体は、傷一つなく、輝いている。

あの日見たあの光景は、夢だったのではなかるうか? 瑛己はゴ

ーグルの位置を直そうとして、やめた。

誰にも語る事なかったあの日の光景。

あの日の映像が、例え幻だったとしても。女神に見せられた、儚い白昼の夢だったとしても。

「……………」

何の事実も、変わりはない。

『湊』への途中、【蛇】から助けられた事。

『獅子の海』で、無凱の銃口から救われた事。

その危機を聞いて基地を飛び出した事も、【竜狩り士】の銃撃に機体をさらした事も。

そして。

脳裏に焼きついた、あの、少女の顔も。

(女神様に、愛されている)

瑛己は苦笑した……だとしたら。

彼女は自分に、何を求めているというのだろうか？

こんな小さな自分に。

一体、何を。

青い鳥が7つ。白い鳥を囲むように、空を斜めに切り込んだ。

そして一斉に、交差するようにすり抜けた。

その腕を縫うように避けた空(ku|u)に、頭上から仕掛けたのは新だった。

ダダダダダダダダダ ! ! ! !

この一息で終わらそうとするかのように、無数の銃火が空(ku|u)を自掛けて降りそそいだ。

だがその最初の弾が当たるか当たらないかの刹那で、空(ku|u)は避けていた。

新が舌打ちするかのよう銃撃をグワンと止めた。だが代わりに避けた所を、左右から撃木とジンが、そして下から狙ったのは小暮だ。

この間合いで、避けられるわけがない。

だが、空(ku|u)は翼を横倒しにすると、3人をあざ笑うように右斜めへとすり抜けていった。

「逃がすかッ」

その背中についたのはジンだった。

短期決戦。

「この俺達が束になるんだ。最高のフルコースをご馳走してやろう」
空（k u | u）が編隊相手にも物怖じしない事はよく知っている。
それゆえ今回の作戦はとにかく、2人以上での一点・同時連続攻
撃。それを重視し、何度も練習を重ねた。

だがそれでも、長引けば長引くほど、不利になるのはこちらであ
る。

早い段階での勝負　　打ち立てたのは、その言葉。

ジンの横を、飛と新がついた。

そして同時に、瑛己が空（k u | u）の斜め前につき、銃撃を開
始する。

はずだった。

瑛己は確かにそこにいた。ここ連日、汗まみれになって繰り返し
た動きである。

4機が空（k u | u）を中心に、交差する。

ダダダダダ

だが、瑛己は撃たなかった。

空（k u | u）と翼がすれ違うほど至近距離を抜けたため、一瞬、
操縦桿があらぬ方向に持っていかれる。

瑛己は眉間にしわを寄せた。

瑛己が抜けた後、飛、磐木、小暮。そして秀一の4方向からの一
点攻撃が始まっていた。

もちろん、2次元の世界ではない。逃げ場は存在する。だが。
逃げた先に、ジンと新が待ち受けているにも関わらず。

ダダダダダダ

ドドドドドド

ガガガガガガ

一撃も入らない。

この短時間、6つの機体がどれほどの弾を放ったかわからないというのに。

どの一つも、空(k u | u)を、かする事さえしない。

瑛己はその様を見て、ゴクリと唾を飲み込んだ。

最後の4機一斉攻撃の後の2機攻撃。後者に、瑛己も加わらなければならなかった。

それをあえて外し、円の外側からその様を見た時。

(おかしい)

弾が入らない事ではない。

327飛空隊の面々が、束になって撃っているこの間。

空(k u | u)はまだ、一度も銃口を開いていない。

そして撃てる瞬間は、いくらでもあった。実際、先ほどの瑛己との交差の瞬間。空(k u | u)は撃てたはずだ。そして自分は今も

この海に落ちていても、まったくおかしくなかった。

(なぜ?)

今だって。いつだって、撃てる。

最初こそ体勢を取れていなかった時もあったが、今なら。明らかに空(k u | u)は自分の意志で飛んでいる。自分の思った通り、冷静に弾を避け、その間をかくくぐっている。

無駄な殺生はしない……そういう事なのだろうか？ 空(k u |

u)は、仕事以外で余計な空戦はしないと??

(だが秀一は……)

その時だった。

「……?」

空(k u | u)の動きが。

今まで、6機の動きに合わせ、流すように攻撃を避けていたその動きが。

「……狙ってる」

変わった。

「ッ!! 秀一ッ

!!」

瑛己は叫びながら、空（ku|u）を目掛けて飛んだ。

（撃つ）

空（ku|u）の砲口が唸る……間に合わないッ……！！

だが。

ブオン

空（ku|u）の翼は音を立てて秀一の横を突き抜けると、上に向かって翔け上がった。

どうして……瑛己は操縦桿を握りながら、身を乗り出した。

今。確かに狙っていた、確かに撃とうしていた。そして撃てた。

なのに。

「なぜ……」

空（ku|u）は撃たない。

彼女は……なぜ……。

「……」

彼女はそっと、目を伏せた。

そして、チラリと眼下の艇影に目を向けた。

「……いる」

ドドドドドド

左へ折れるように身をかわす。

そこへ別の飛空艇の攻撃が降る　もう、読んでいる。

そしてこの空には。それをかわす事ができる空白の場所が存在している。

それが恐らく。

「……なぜ？」

6機の機体を避けながら、彼女は、最後の1機に向かって問い掛けた。

彼女は決めていた。

あの最後の7機が。その最後の空白を埋めたなら。
その時は。

「……………」
光の加減で、ゴージャルの向こうの瞳は見えない。

「……………」
見ている。

空(k u | u)がこちらを見ている。

瑛己は眉間にしわを寄せ、天を統^すべるように飛んでいる白い飛空艇を仰ぎ見た。

(運命の女神は)

俺に何をさせたい？

俺にどうしろという？

秀一はこう言った。明後日の空は見れないかもしれない

明

日、『輝向湾』を飛んだ、8つの機体は、と。

「……………」
瑛己は厳しい眼差しで明後日を睨みつけた。

「俺に、何を」

自分の空を行け。

『あなたの人生は、あなただけのものよ』

「……………」

瑛己は、無理に苦笑を浮べた。

そしてそれを瞬きと共に消し去ると。

両手で操縦桿を、強く握り締めた。

最後の『七ツ』が、空に向かって、翔け出した。

そして彼が取った行動は。327飛空隊の誰も、そして空（ku）
（u）さえも。予想だにしないものであった。

飛は操縦桿を握り締め、目の前の、ただ一点を見つめていた。ガンサイトに映る、照準の中央。そこに、白い機体が重なる瞬間を。

「……クソッ」

ゴールの向こうの瞳が、厳しげに細められる。

今、目の前に対峙する　　空 (ku-u)。

ずっと戦ってみたかった。飛だけじゃない、この空を翔ける飛空艇乗りなら誰しも、一度は夢に見る事なのではないだろうか。

? 絶対の翼?。そんなふうに言われる白い鳥と。

こんなふうに、羽を交える瞬間を。

(こんな、)
だが。

さつきからずっと、飛の心にはたった1つの言葉が巡っている。

(これは、アカン)

歯を食い縛り、飛びかう仲間の銃撃を浴びないように操縦桿を強く押し倒しながら。

空を見上げ、飛は思った。

ああ死ぬ、と。

今日ここで、この空この海が。

最後の空になる。

空 (ku-u) の動きには、まったく、無駄がなかった。

最初こそ、楽観的に考える事もできた。7人と1人……。こつちも、伊達^{だて}ではない。危険な場数を幾つも踏んでいる。自分自身の腕は元より、仲間の腕を信じている。

自分達が本気で向かえば。『湊』第23空軍基地、第327飛空隊・『七ツ』。この空でも、少しは名が通った自分達が。

簡単に……そう簡単に、散るわけがないと。この空を渡す事にな

るわけがないと……そう思っていた。
信じていた。

確かに？彼？の腕は知っている。飛は【海蛇】の群と対等に渡り合う？彼？の姿も見ている。

『獅子の海』。その時動けなかったのも事実だし、腕が震えて止まらなかったのも事実だ。

だが。

飛は舌を打った。

「チクシヨツ」

これほどまでに？

こんなにも？

自分達と？彼？の差は、歴然としているというのか？

絶え間なく繰り返される波状の攻撃。

それぞれがそれぞれ、無造作に入り乱れ、もはや練習で練り込んだ限界を越えている。

誰が、どの位置から撃つのか。

誰が、どの位置へと飛んでいくのか。

それは、自分達ですらわからない。仲間の銃弾にぶつ飛ばされても不思議ではない状況だというのに。

それなのに、空(k u | u)はそれを巧みに潜り抜け。

仲間も、自分ですらも、予測できない動きを。

(読んでいる)

かすりもしない。

こんなの、敵うわけがない。

こんなの……もう、どうしろというのだろうか？

飛は叫びながら上昇、そして、空(k u | u)を目掛けて撃ち込んだ。

もう、王手された将棋盤の上でもがいているみたいだと、飛は思った。もう、勝負は決まっているのに……。

「ウオオオオオオオ!!!」

放たれた弾は、虚空を切っていく。

弾を避けた空（ku—u）が、他の攻撃を避けながら空を、滑るように斜めに下り。

「あ」

その動きが。

飛は右に機体を倒しながら、小さく声をもらした。

自分を狙ってる。

そして、

（撃たれる）

ここまでまったく動かなかった銃口が。

ほんの少しだけ浮かんだ、樂觀と希望の芽を^{むし}取り取るように。

キラリと怪しく光った。

ダダダダダダ！！

「アカンツツ！！」

銃撃音に、夢から覚めたように飛は操縦桿を前に倒した。だが、遅かった。

ガンガンガン！！

腹を何発かがかすり、エルロンの一部が粉と砕けた。

飛は後ろを振り返り、そして舵を必死に抑えた。

「ツチツ！！」

バックミラーに空（ku—u）がいた。

（撃つ）

今度はもう、避けきれない。

そう思うか否かの刹那。その銃口が再び、銀の光を灯そうとした時。

ザンツツ

飛と空（ku—u）との間を、何かが、物凄いスピードで切り抜けた。

それは、青い翼。

「瑛己……ッ」

飛は舵をいっばいに押し倒しながら、横目にその姿を追いかけた。そしてその時無線から、雑音に混じって、淡々とした彼の声が流れてきた。

《 退どいてくれ》

瑛己は瞼を伏せて、低く、呟いた。

《聖》

間もなく返ってきた声は、一瞬、誰だかわからなかった。だが瑛己は瞬きを一度だけすると、空(k u | u)の翼を振り返った。

《どういう事だ》

警木隊長だとやっとわかるくらい。その声はかすれていた。

瑛己は雑把ざっばに青い機体を見渡し、無線を見もせず言った。

「退どいてください」

《聖！》

《お前、何を言って》

「……………」

空(k u | u)は頭上高く上り、旋回しながらこちらを眺めているようにも見えた。

聴いているのかもしれないと思った。

周波数さえ見つかれば、ジャックは可能だ。

だとしたら。瑛己は空(k u | u)を仰ぎ見ながら、静かに口を開いた。

「俺に……………飛ばせてください」

《聖、》

「……話がしたいんです」

「この空で。」

「その翼で。」

「羽を交えて。」

銃撃の声で。

《聖、自分が何を言っているのかわかっているのか?》

「……」

《お前一人で、何ができる》

「……」

《一人で空(k u | u)を、倒せると思っているのか?》

「いいえ」

《我々に課せられた任務は何だ》

「……」

《我々に与えられた命令は、何だ》

「……」

《聖ッ!!》

「……その命令には、従えません」

息を呑む音は、沈黙で伝わる。

《聖、お前……それがどういう意味か、わかって》

「……謹慎でも、懲罰でも、死刑でも」

瑛己は瞼を強く見開いた。

「好きにしてください。ですが、」

俺は、その命令に。

《聖ッ》

「従えません」

何かが激しく、叩きつけられるような音がした。

それは、瑛己自身、よくわからない感情だった。

空（k u | u）。

彼女は撃たないんじゃない　待っている。

それに気づいたのは、飛への銃撃だった。

恐らく飛も気付いている。あの攻撃が、わざと外されたものだという事に。

空（k u | u）がああのタイミング、あの状態で。向かう的の心臓を、射抜けないわけがない。

なのに飛はいまだ、平気な顔で飛行を続けている。

なぜ？　だったらなぜ、空（k u | u）はそんな事をしたというのか。

（……見抜かれている）

自分達の飛行はもちろんの事。

この空にある、迷いを。

7つの動きが前提にある作戦だ。そこから1つでも輪を抜けたらどうなるのか。その穴は、相手にとっての格好の逃げ道になる。

わかっていて、瑛己は輪から外れた。

それは、同じ事だと思ったからだ。

「隊長は」

雲が少しずつ、薄くなり始めていた。

「何を撃っていますか」

それは命令だ。……けれども。

327 飛空隊が本気で向かえば。……けれども。

白河の背中が蘇る。自分達は『蒼』と『黒』の国際的なものを背負って飛んでいる。……だがしかし。

この命令に納得できない。誰も口にしなかったその言葉は。

ちゃんと、空に語られていた。

彼らはただ我武者羅に、白い機体を撃っていた。それ以外の何もかも忘れたように、忘れようとするかのように、銃弾を連呼し続けたその先にあったのは。

《……》

抱えきれない、闇。
抑えきれない、衝動。
そして。

感情を殺した 自分自身。
蚊帳の外から眺めた時。瑛己は思った。
もう戦闘は終わっている。

327 飛空隊は、無限の空に向かって問い掛けている。
自らの、最期の瞬間を。

そしてこの命令が、間違っている事に気付いていると。
だから。

銃弾は、空(k u | u)を避けて通る。
そして。

空(k u | u)はそれに気付いている。
すべてに気付き、理解して。そして、撃たなかったのではなく。
恐らく。

「……2人にしてください」
瑛己はまっすぐに前を見据えて言った。

《どうするつもりだ》
警木がポツリと呟いた。

「どうもしません」
ふっと。

彼自身それがなぜだか。後になってもわからなかったが。
「ただ飛びたい。それだけです」
笑みがこぼれた。

それ以上誰も、何も言わなかった。
1人、2人と、翼を陸に下ろしていく中で。
瑛己の機体は、1人、空へと舞い上がった。

秀一は、その時の光景を後で瑛己にこう言って聞かせた。
天使のようだったと。
瑛己はそれに、静かに苦笑を浮べた。

始まりは、空。

瑛己は射撃ボタンを押し込んだ。
ダダダダダ

仰ぎ見た、白い翼。

空（kuuu）はそれをヒラリとかわし、下降から一転、左へとひねり上がった。

後ろを取られるわけにはいかない。瑛己は歯を食い縛り必死に逃げる。

それに自分は助けられ。

一瞬気を許した瞬間、正面に、空（kuuu）の姿が踊り出る。

トトトトト

見惚れていた。

避ける事ができたのは、奇跡だったかもしれない。

運命の女神が助けてくれたのか……？ そう思って苦笑した。それくらいの手ノディがなければ。

どれだけの感謝と。

雲が薄らいでいる。

少しずつ、空が明るくなり始めている。

敬意と。

操縦桿を手前に引き倒すと、目の前いっぱい白い空が広がった。そして、次の瞬間。

そしてあの時からずっと。離れない……顔。

その瞳に、雲間から、光が、飛び込んできた。

「あ

どうして、君は。

それはとても、眩しくて。

それはとても、輝いていて。

この空を。そんなふうに。まるで自由に。

目が熱い。

胸が焼けるようだ。

飛べるのかと。

涙が、こぼれた。

ダダダダ

俺は、君に。

機体が揺れる。

火花が散った。

俺は、……。

ドンと、小さな音が鳴った。

脱出の準備はしない。

心は奇妙なほど静かだ。

(これもまた)

瑛己は小さく笑みを浮かべた。

(……父さん)

俺の道は間違っているかな。

こんな時父さんは、何て言うのだろうか？

笑うのだろうか？ 怒るのだろうか？ 泣くのだろうか？

脳裏に浮かぶ写真の中の父は、いつも穏やかに微笑んでいる。

まるでそれは、すべてを認めて、理解して。

優しく、守り、慈しむかのように。

(……父さん)

瑛己は目を閉じた。そして初めてこう思った。

会いたいと。

父さんに会いたいと。

父さんと母さんと。

3人でこの空を眺めて。3人で、笑ったり、悩んだり、そんな毎日。

過してみたかった。

父さんに。

「……………」

会いたかった。

ゴーグルを脱ぎ捨てた。

もう声を上げて泣いていいか？ そう思った。

もう思いつきり笑っていいか？ そう思った。

もう、俺は……。

その時だった。

無線が音を立てた。そしてその向こうから、震えるような声がつつ、瑛己の耳へ届いた。

生きて、と。

ドクン

瑛己は強く瞼を閉じた。涙が滲み出した。

そして気付くと、操縦席を蹴飛ばしていた。無我夢中に、機体から飛び出した。

風が、涙を吹き飛ばしていく。

爆音は、遠い空の事のように聞こえた。

『 in the blue sky 』

『俺は、瑛己に、憎まれていていいのかもしれないな』

暗闇の中、どこからともなく、声が聞こえる。

『ハル……』

『当然と言えば当然か。親父らしい事の何一つ、してやらなかったからな』

ゆっくりと、布団から這い出して。そっと、自室の扉を細く開けた。

向こうの方が、ほのかに明るい。

屈折した闇の中、僅かに、父の背中が見えた。

『いつか……僕の父さんは兵庫おじさんだって、言われそうな気がするよ』

『何言っただよ、馬鹿ヤロ』

『……兵庫』

『お前がそんな事で、どーすんだよ』

『……』

『そんな事思っんなら、もっと顔出してやれよ。瑛己のためにも、それに、咲ちゃんのためにも』

『……』

走り出したい。

この扉を開けて、今すぐに。

父さんの背中へと。

なのにどうしてか、足が動かない。

両手は薄く扉を開けたままで、それ以上の、力がこもらない。

『俺は……ひよっとしたら、2人に会うのが怖いのかもしれない』
『……』

『俺も変わってしまった……色々な事を見すぎたよ』

『……』
『2人に会ったたびに思うんだ。2人の目に映る俺は、一体どんな姿なんだろう？ っ。瑛己は俺の事をちゃんと覚えていてくれるのだから。』
『俺は……俺に、幻滅してやしないかってな』

『ハル』

『自分の知る聖 晴高は、こんな人間じゃなかった。こんなの、自分の愛した男じゃないって……そんなふうには思われやしないかって……だからって、俺が行ってどーするんだよ』

『……』

『どう思われようとも、お前はお前だろうが。瑛己の父親は、お前一人なんだ。そして、咲ちゃんを抱きしめてやれるのは……お前だけだろうが』

『……』

『それに。咲ちゃんだって、わかってるよ。お前の強さも弱さも、馬鹿な気持ちも全部ひっくるめて。お前の事、愛してるんだよ。正直、こっちが妬けるくらいにな』

『兵庫……』

『瑛己だって。わかってくれてるさ』

『……』

『あいつも、気丈に振舞ってるけどさ。一応、俺の前ではちゃんと笑ってくれるけど』

『……』

『俺はお前の代わりに2人に会ったたびに、いつも思うよ。何で俺は、聖 晴高じゃないんだらうって』

『……』

『どんなにあがいても、俺は、お前にはなれない』

『……』

『週末、顔出してこいよ。雑務は俺が引き受けるから』

『……悪い』

『今更』

笑い声が聞こえた。

それに少し安心して、息を吐いた。

父さん……。

父さん……。

父さん……。

「き、瑛己っ！」

呼ぶ声に、目が覚めた。

連呼される名前に、瑛己は、不思議な気持ちで瞼を開いた。

「……？」

最初に映ったのは、ド・でかい、飛の必死な顔。

「瑛己さん!!」

それから秀一の、半べそかいた泣き顔。

「まったく、心配かけやがって」

新の、怒ったような笑顔。

「脈は正常だな……痛む所は？」

冷静な医者みたいな、小暮の真剣な瞳。

「……いえ」

ゆっくりと身を起こし、瑛己は軽く頭を振ってみた。そして自分の手を見た。

(まだ、生きてる)

断片的な記憶を辿っていく。

空(k-u-u)に撃たれ、そして……。瑛己は目を伏せた。

生き残るつもりは、なかった……。そんな事を思い、自嘲気味に

苦笑を浮かべると、風に煙草のにおいが香った。

見上げると少し離れた所にジンは、明後日を見ながら、煙草を吹かしていた。

そしてその前に立っていたのは。

「……隊長」

瑛己はゆっくりと立ち上がった。

磐木は無言で瑛己を見ていた。厳しい形相に背筋が小さく震えたが、構わず、瑛己は一步踏み出した。

殴られるかもしれない。

そんな事を思いながら、磐木の元に歩いて行く。

そして。彼が頭を下げるより先に。磐木が重そうな口を開いた。

「馬鹿者」

「……申し訳ありません」

「まったく、お前という奴は」

磐木が大きく溜め息を吐いた。珍しく崩れたその顔を、瑛己はぼんやりと眺めた。

「どこまでも 聖隊長に、そっくりだな」

「……」

磐木が初めて、微笑んだ。

短い黒髪は、水をひたしたかのように濡れて光っていた。

「あ」

おぼろげに。瑛己は思い出した。

飛空艇を飛び出した。

パラシュートと共に海に落ちた自分を。だがしっかりと支えてくれた、腕があった。

「聖ッ！」

一生懸命、名前を呼んで。

『聖 瑛己、しっかりしろッッ！』

……その時、2、3度殴られたような気もするが。

この、岸边まで。運んでくれた人がいた。

「……隊長」

瑛己は、頭を下げた。それに磐木は「ふん」と鼻を鳴らした。

「礼なら、あいつに言え」

トンと肩を叩くと。アゴで軽く、彼の背中を指した。
瑛己はゆっくりとそちらを、振り返った。

「……………」
そこに、白い飛空艇があった。

雲の隙間からこぼれる太陽の光を受けて、銀に煌キラくその機体に。
ゆったりと、背中を預けて。

薄くトキ色がかった飛行服に身を包み。

短めの髪を、風に遊ばせている。

空（ku-u）と呼ばれる飛空艇乗り。

この空に、並ぶ者はいないと言われ、墜とした者は空の歴史に名前が残るとも言われる、

? 絶対の翼? を持つ、飛空艇乗り。

その、彼女が。

「……………」
立っていた。

言いたい事は、たくさんあった。訊きたい事も、たくさんあった。
しかしどれもこれも胸を焦がすばかりで、言葉になって出てこなかった。

瑛己は何かを言いかけて、結局それを飲み込んだ。

「ありがとう」

そして最後に出たのは、それだけだった。

異動の日。

『獅子の海』で。

【竜狩り士】の銃撃を浴びた時。

そしてこの、神に祝福された海で。

飛ぶ空にはいつも、白い翼があった。

目指している空。そしてその先にはいつでも、暖かな風に満ちて

いた。

笑顔があつた。

光があつた。

瑛己は初めて、言葉が万能でない事を知った。

そんな彼の気持ちを、まるで察したかのように。

彼女は、ふわりと微笑んだ。そして、スツとその右手を差し出した。

瑛己は少しだけ驚いたように目を開き、苦笑のように笑った。

「ありがとう」

握った手の向こうで、彼女が呟いた。

瑛己と彼女の目が合った。

鷺色の、透き通るような。穏やかで、優しい瞳に。

「……聖 瑛己。君の名前は」

その問いに、今度は少女が目を丸くした。

だがすぐに、

「そら」と小さな声で言った。「空(sora)」

「……ありがとう」

「また、空で」

瑛己は頷いた。

「ああ。 また、空で」

白い翼が去っていく。

瑛己はそれを、ぼんやりと見つめていた。

そんな彼を横合いから、新がどついた。

「何見惚れてんだ、お前」

「……っ」

「いやー、まさか、しっかし……仰天や。あの空(kuu)が、
あないに可愛い子やったとは……!!」

「おい、飛いー、瑛己こいつ、空（ku-u）ちゃんに惚れたぞー！完全に」

「……ッ！ な、新さん、何を言ってるっ！」

「瑛己さん、顔真つ赤ですよ。えー！ やっぱそーなんだあ！？」
「秀一、お前までっ……」

「なんやとー！？ 瑛己お前、さてはっ、空（ku-u）と仲良くなって、彼女の飛行技術の秘密を知ろうっちゅー魂胆やな！？ なんちゅー外道なやつちゃ！！ 抜け駆けは許さんぞ！？ 空（ku-u）のケータイ番号、俺にも教える！！」

「ちがっ……それに、ケータイって……。この世界に、そんな物存在しねーよっつ！」

瑛己は頭を抱えたい心境になった。そして実際、頭を抱え込んだ。けどその顔には、満面の笑顔が浮かんでいた。

たくさん小突かれながらも。

おなかが痛くなるほど笑ったのは、久し振りだと思った。

生きて。

君の声に。

僕は、この道を選ぶ。

父さん……。

ごめん。そして、ありがとう。

ありがとう。

父さん。

『in the blue sky』(後書き)

第1部 完

『小雪、散りて (snow—snow)』

ハラリと一つ、雪が落ちた。

それを男は無表情で一瞥し、スツと息を吸い込んだ。季節はもう、夏に差し掛かるうとしてている。

だが、山間に位置するこの街には、稀にこの時期、こうして小雪が散らつく事がある。

積もる程ではない。風に吹かれ、誰にも気付かれず、消えていくだけのものだ。

男は手にしていた本を机の端に伏せ、窓辺に立った。

その眼下には、『蒼国』首都・蒼光（あき）の街並みが広がっている。

夜の闇の中、白い雪の向こうにキラキラと灯る街の光は、まだしばらく闇を照らし続けるのだろうか。

議事堂の書斎からこの景色を眺めるたび、男は知らず、眉を寄せ

る。それを消すために、男は手近に置いてあったワインに口付けた。

美味（うまい）いとも不味（まずい）いとも、何も思わなかった。

そして再び小雪散る夜陰に目を向け、ふと、瞼を伏せた。

「何の用だ」

小さいが、よく通る声だった。

その声にし少し遅れ、続きになった向こうの部屋から、音なく、現れた者がいた。

「気付いていたか」

短く刈り上げられた猫毛に、丸い小さな眼鏡をチヨンと鼻の上に引っ掛けた男、

「久し振りだな」

原田 兵庫はその顔に、人の良さそうな笑顔を浮かべ立っていた。男はそれを見もせず、ワインをグイと飲んだ。

「警備は全員クビだな」男は皮肉げに笑った。「夜盗に、こんな奥まで許すとは」

「相手が悪かったな」

兵庫は懐から煙草を取り出すと、無造作に口の端にくわえた。

「橋爪。随分手広くやってるそうだな。周りの連中は泣いているぞ？」

「原田。俺はお前と違って忙しい」

そう言つと初めて、その男 『蒼国』 軍本部統括指令長官・

橋爪 誠 は、兵庫に目を向けた。

その眼に、兵庫は内心息をのんだ……こいつの眼は、あの頃から変わっていない。

頬の線の引き締まったシャープな顔立ちに、髪は乱れなく整えられている。背丈は兵庫と同じくらいだが、凜然とした軍服姿に、実際よりも高く見えた。

そして宿る、強い、瞳。

兵庫は一瞬浮かんだ様々な感情を、しかし顔には出さず、代わりに煙草に火を点けた。

「俺も暇じゃないんでね」

「何の用だ」

「あん？ 言わなくてもわかると思つたが？」

兵庫はライターを懐にしまうと、静かな瞳で橋爪を見た。

「？空の欠片？を、どうした」

じつと。その表情の変化を一つも見逃さないとするかのようになり、兵庫は橋爪を見つめた。だが、橋爪は眉一つ動かさなかった。

「それを知つてどうする」

「否定しないのか。『永瀬』から運ばせた、あれを」

「言つただろう？ お前とクダクダ問答している時間はない」

それに、と橋爪は言葉を切り、その顔に皮肉めいた笑みを浮かべた。

「お前には何もできない」

「……それは」

兵庫のその目に明らかな怒りが浮かんだ。

「？空の果て？で再び、その空を掻っ切る、そういう事か」

「さあて」

「橋爪、貴様」

「原田、ここは禁煙だぞ？」

「俺は許さない」

その言葉に、橋爪はクツクと低く笑った。

「お前が許す許さんの問題ではない」

「……ッ」

「お前も会いたいだろう？ 親友ともに……」

「貴様は」

兵庫は煙草を捨てると、グシヤリともみ消した。

「全部、わかってるな」

「何がだ」

「あいつが『湊』へ行った事。そして、？それ？を運んだ事も」

「……」

「それだけじゃない。全部わかって……、そんなにハルが憎いか」

橋爪は、感情のない瞳で兵庫を見た。

「お前は、ハルを」

「原田」

兵庫の言葉を遮るように言った橋爪の声は。軍総司令・橋爪 誠
の声であった。

「憎んでいるのは、お前だろうか？」

「……」

「まあ、お前が憎み続けているのが、俺なのか、聖なのか 自
分自身なのか」

「……ッ」

「俺には、興味はない。ただな」

橋爪の背中に、雪が、音を立てず、散っていた。

「お前に、邪魔はできない」

「何を」

「この世界に、抗えないものがあるでしょう」

「……」

「絶対的な力、歯向かう事できないもの。人はそれを、運命だとか宿命だとか言う。さながら、神のご意志だ。それに振り回され、人は生きていく」

「……お前の望みは何だ」

「ふっ」

橋爪は不敵に微笑むと、兵庫に背を向けた。そしてそれ以上、何も言わなかった。

耳の端に遠く、廊下を駆ける足音が聞こえた。

兵庫はギリと奥歯を噛みしめた。

「お前の好きにはさせない」

「お前の意志など関係ない」

それを聞くか否か、兵庫はスルリと部屋を立ち去った。

「抗えないもの」

誰にともなく、橋爪は呟いた。

「それが、俺となる。それだけだ」

薄暗い廊下の片隅に女が一人、虚空を睨んでいた。

冬が舞い戻ったかのように、今夜は冷える。腕を組んで、その背を壁に預けながら、女　　時島　恵は、脳裏に雪を描いた。

（それにしても）

恵はそれを打ち消すようにゆっくり瞬きをすると、薄暗い廊下の先を厳しい瞳で眺めた。

（一体、誰が）

恵の脳裏に浮かぶのは、先ほどからずっと、その事だけだった。

(誰が、空(k u | u)を)

売ったのか……思ってからその言葉に、恵は吐気にも似た感情を覚えた。

空(k u | u)が、あの日、『湊』空軍基地・第327飛空隊とあった事は当人の口からも、他の筋からも耳に届いた。

空(k u | u)は思ったより明るくそれを恵に告げ、そしてここで聖 瑛己に会った事を話した。

その場では、恵は心から、無事でよかったと彼女を抱きしめた。

だが明らかに、彼女は327飛空隊に待ち伏せにあっている。

そして、空(k u | u)の事を知るのは極々僅かな人間でしかないという事……それも作戦、航路などは特に。

(空(k u | u)が背負うのは絶対の翼)

そして、その正体を公にする事は今までもそしてこれからも、あり得ない事だろう……恵は眉間にしわを寄せた。

それなのに。

彼女は、作戦の帰りに襲われた。

数少ない？彼女を知る者？の中に、彼女の情報を、流した者がいる。

(一体誰が)

「……」

恵は小さく息を吐いた。

それが例え、誰であろうとも 恵はそつと瞼を伏せた。

その時、向こうから足音が響いた。恵はハッと背を正し、そちらを見た。

夜陰に視界は悪い。だが恵にとってそれは、関係がなかった。

その人物の顔を見とめると、恵は凜とした声でこう言った。

「閣下。お帰りですか」

「うむ」

男は低く呟くと、それ以上何も言わず、恵の横を通り抜けた。

その顔がいつにない表情を浮べている事に、恵は気付いた。
その顔は、ほのかに笑みを浮べていた。

「……………」
恵は背中に、何かゾクリとするものを感じた。
だがそれを慌てて胸の奥にしまい込むと、男の後を追いかけた。

雪が、降り始めた時と同じように、静かに止んだ
そして、退いた雲の切れ間からこぼれた月が、夜空を薄く照らし
出した。

それを見届けるように、最後に散った小さな雪は、地面にたどり
着く前に空へと消えた。

夕の朱に染まる雲の切れ間から、一台の飛空艇が、不意に姿を現した。

逆光を浴びて黒くも見えるその機体は、すべらかに空を横切ると、徐々に高度を落としていく。

その底が海をかすめ、ザッと白い飛沫をあげた。

それは操縦席に座るその男のサングラスまで飛んだが、男は気にした様子もなく、口の端を釣り上げた。

海を滑った飛空艇は、やがて、小さな棧橋に動きを止めた。

男は慣れた様子で操縦席から降りると、軽く肩を回した。

そして胸元から煙草を取り出し、空を仰いだ。

その頬を、夕焼けとは違う光が当たった。

男は光の先を振り返り、気に入りのジッポーをピンと鳴らした。

そこに描かれたのは、銀色のキスマーク。

そして光の先、小高い丘から海に向かって光を放つのは、一軒の

酒場。

『ローレライ』
Lorelei

男は一度自分の飛空艇を眺めると、満足そうに微笑んだ。

今は海に浮かぶセピアの飛空艇。その機体に刻まれた、女神の刻印を思つて。

男はゆつくりと、歩き出した。

店から漏れる静かな音楽が、海に流れ出している。

断崖の軽い階段を上がる。そして店に入ると、中は穏やかな空気に包まれていた。

見た目よりずっと広い店内に、人の数は少なくはない。

少し離れた舞台の上で、歌姫が、花を咲かせている。

その美しい歌声は、男の姿を見とめた何人かの性質の悪そうな者の足も止めてしまう。

後で礼をしなきゃな。男はニヤリと笑い、そしてザツと店内に目を走らせた。

やがて、ふっと男は目を止めると、煙草を吹かし、ゆったりとした足取りでカウンターの一番奥へと向かった。

そこに、一人の男が座っていた。

歳は20後半ぐらいだろうか。細身の、色白の青年であった。薄い色の髪を後ろで一つに束ね、それが長く、背中に流れている。

男はその横へ腰掛けると、バーテンを呼びつけたただ一言、「マテイーニ」と告げた。

その声に青年はふっと顔を上げ、「……山岡か」ポツリと呟き、小さく息を吐いた。

「しばらく顔を見なかったな……また、竜狩りか？」

バーテンが静かにグラスを置いた。それを取り、山岡 篤は、クツクと笑った。

「違うね」

「じゃあ、女か」

「当たらずとも遠からず、かな」

男はゆっくりと山岡を振り向いた。

光の加減で碧にも見える、薄い色の瞳に苦笑をにじませ。男は、山岡のサングラスに隠された双眸を覗き込むようにして言った。

「風の噂でお前が、？白い竜？を墜り損ねたと聞いたが？」

山岡はそれには答えず、ただ小さく微笑んだ。そしてグルリと椅子を回し、歌姫を見た。

男は歌姫には目もくれず、山岡の横顔を見、そして自身のグラスを見つめた。

「？絶対の翼？、空（ku-u）、か……」

歌姫の美しい歌声が、優しく、だが強く、店内に響き渡っている。

「撃墜した者は、空の歴史に名が残る　よく言ったものだ」

「お前、空（ku-u）と戦った事あるのか？」

「……なくもない」

「ほお？ 初耳だな」

「人に聞かせるような話じゃないさ」

カランと、男のグラスの氷が音を立てた。

「ただ、風が吹きぬけた……俺はそれに呆然と立ちすくみ、気がつくくと、広大な海の上で果てない空を見上げていた。それだけの事だ」

「詩人だな」山岡は小さく笑い、足を組んだ。

「お前のトコの、お嬢さまもか？」

すると、男は「まさか」と笑った。「あいつはまだ？ 彼？ に会った事はない……焦がれてはいるがな」

「……俺は、少し生き方を間違えているのかしれん」

「……」

その時、喝采が起きた。

歌い終えた姫君が、恭しく礼をする。それにまた、ひときわ大きな拍手が起きた。

山岡も惜しみなく手を叩いた。だが、男はグラスを眺めたままだった。

そして、惜しまれながら袖へと消えていく歌姫を目で追いかけて、

山岡は深く瞬きをまばたをした。

「来ライ。正しい生き方って、どんなだ？」

「……」

「俺はお前ほど頭がよくないから。生き方に、正しいとか間違っていると考えた事もねえよ」

「……」

「俺にとって大事なものは、俺の空てんを翔ける事ができるかどうか、それだけだ」

「……お前は。羨ましいな」

「そうか？ 俺は、来、お前の空も結構好きだがな」

「……」

店内に、ざわつきが戻り始めた。

山岡はそんな様子を静かに見つめ、そして、来と呼んだ男を見も

せず言った。「空(ku|u)を仕留めようとした時、」

「後一步で、邪魔してくれた奴がいる」

男はふっと山岡の横顔に目を向けた。

「聖という奴だ」

「

途端、男の動きがピタリと止まった。

「ヒジリ……………」

「聖 瑛己。聖 晴高の息子だ」

「……………」

「ひよつ子のクセに、野暮に翔ける。どごその誰かにそっくりだな」

「……………」

「ひよつとしたら、お前のトコのお嬢、近いうちに会う事になるかもしれないよ?」

クスクスと笑うと、山岡は立ち上がった。

「さて、と。そろそろ行くかな」

「山岡」

凜とその名を呼び、男は山岡をじつと見た。

「お前にとって、空は、何だ?」

その問いに、山岡は一瞬目を見開いたが。

独特な笑みを浮かべ、「? I can fly to the

nd of the world?」

「果てへと導く、悠久の墓標ゆりかこ、かな」

そのままヒラリと背を向けた。

後ろ手に手を振る山岡の背中を、男は複雑な表情で見っていた。

「…………… 聖 晴高……………」

かすめるように呟いたその名前と共に彼の脳裏を掠めたのは、一枚の、空だった。

凜然と並ぶ本の棚を前にする時、ふっと胸に、言いようのない感覚を覚える事がある。

早く早く、すべての本に触れたい、手にしてみたい、目を通したい……そんな、焦燥感にも似た感覚と。

だが、触れる事躊躇ためらわわれる、何かしらの……圧迫感。

一系乱れず並ぶ本棚という闇の中に、まるで、得体の知れぬ魔物でもいるかのような。触れた途端に、自分の中で決定的な何かが変わってしまいそう……そんな、妙な、恐怖に似た感覚。

薄暗い書店の片隅で、本棚を見上げている聖 瑛己も、今心にそんな不思議な葛藤を抱えていた。

だが瑛己はそんな内心とは裏腹に、顔はいつもの通り無表情のままだった。一冊一冊を淡々と、静かに眺めていく。その様子は、本に興味があるようにも見えるし、ただの暇つぶしのようにも見えた。その、流れるように動いていた目が、ふっと止まった。

そのまま、瑛己はしばらく動かなかった。しばらくしてようやく一つ瞬きをすると、短く息を吸い込んだ。

そして、すっと手を伸ばそうとした。

「瑛己さん、何かいい本、見つかりました？」

その時不意に、本棚の影から場違いな程明るい声がした。

ヒョイと顔を出したのは、童顔に人なつっこい笑顔を浮かべた、相楽 秀一だった。

「ああ……そつちは？」

思わず手を引っ込めた瑛己は、少し驚いた様子で秀一を見た。

「うん！ 『名探偵ライラック』シリーズの最新刊！ 発売と同時に飛ぶように売れて、これ、最後の1冊なんだって！ 僕、ちょっと感激で」

「そつか。あいつは？」

すると、秀一は困ったように苦笑を浮かべ、「あつちの棚で、『飛

空新聞』にかじりついてますよ」

「空軍や空賊など、空に関する事を専門に扱った新聞なんですけど……特に空賊、渡り鳥の事が細かく書かれていて。床に胡坐掻いてブツブツ言いながら、必死に読んでますよ」

瑛己は小さく苦笑を浮べた。秀一はそれを見て、大きく溜め息を吐いた。

「瑛己さん……けどね、僕、飛があの新聞を読んでいる時の……背中を。見る度に思うんです。あいつ、いつか空軍辞めて、渡り鳥にでもなるんじゃないかって」

瑛己は一層苦々しく笑った。

「確かに、飛は空軍よりも、空賊や渡り鳥の方が似合ってるさだな」とすると秀一は頭を抱えた。「よしてくださいよ」

「それでなくてもあいつ、最初は『渡り鳥になるんや!!』って言い張って、じじ様とばば様と毎日大喧嘩していたんですから……。間に挟まれた僕なんか、2人に『飛を説得してくれ。聞かんようだったら、崖から突き落としてくれても構わん』とせがまれ、飛からは『ジジイとババアを説得してくれ。無理なら、海に突き落としても構わん』と。本当に、困っちゃいましたよ」

「……」
「結局、お互いが取っ組み合いを始めて、最終的に『空軍で我慢しろ』という事で落ち着いたんですが。僕としては、ヒヤヒヤですよ……。一緒に空軍に入る時、くれぐれもよろしく頼むと頭を下げられてますし。かといって、『渡り鳥になるんや!!』と叫ぶ飛を止められる自信もありませんし」

「……」
「だから、瑛己さん、お願いが」

「……俺にも、暴れ出した飛を抑える気力はない」

その時、どこかから「ドアホ!!」
【天賦】の無凱に挑戦状やと
「……?」
【昴】ごときが、100年早いワッツ!!
その前に俺が相手したから首洗って待ってけ!!」という、荒れた声が聞こえて

きた。

「……」

「……」

瑛己は嫌そうに目を閉じ、溜め息を吐いた。そして秀一も一層、頭を抱え込んだ。

空（ku-u）撃墜命令。あの作戦から『湊』空軍基地に戻り、1週間ほどが経った。

基地に戻るとその足で、327飛空隊の7人は総監・白河の元へと向かった。

本塔の2階にある彼の部屋へ行く間、誰も、口を利こうとしなかった。

沈痛な彼らの表情とは正反対に、出迎えた白河は、本当に安堵した表情を見せた。

1人1人、順番に見ていくその瞳の端に、瑛己は光る物を見たような気がした。

磐木は低い声音でゆっくりと、基地を出てから『輝向湾』きこうわんに至るまで、そしてその空で何があったのかを話していった。

白河も、327飛空隊の面々も、黙ってそれを聞いていた。

だが、たった1つ。磐木でさえも伏せた事があった。

「『輝向湾』の上空で、我々は予定どおり空（ku-u）に遭遇致しました。そして、総監の意に添うようと死力を尽しましたが……空（ku-u）の腕は、我々の想像を遥かに越えていました。我々は、空（ku-u）の撃墜に失敗しました」

「……」

「破損は、須賀飛行兵の飛空艇がエルロンに少々、聖飛行兵の飛空艇が空中で爆破。空（ku-u）は、聖を撃墜するとそのまま、混乱する我々の間を縫い、逃走。気がついた時にはもう、我らの手の

届かぬ場所へと消えておりました」

「……そうか」

瑛己はチラと磐木を見た。その目には、複雑な色が浮かんでいた。「聖君、怪我は」

瑛己はハツとして、白河を見た。

「……いえ。大丈夫です」

「そうか……何よりだ」

そう言った白河の顔に、瑛己の心臓がドキリと跳ねた。

この人は、本当に心配して、安堵してくれている……そんな、父親のような目だったから。

瑛己は頭を垂れた。そして「申し訳ありません」と呟いた。

「いや、いい。いいんだ」

白河はゆつくりと瞬きをした。

「今回の件は……後は、私が何とかする。君たちはもう、心配する必要はない」

「総監」

思わず身を乗り出した磐木に、白河はやんわりと微笑みかけ、

「二度とこんな形で君たちを、空に上げたりはしない」

窓から差し込む光に劣らない、白河の双眸が、強い光を放った。

そして327飛空隊は、しばらくの休暇を与えられる事となった。

それ以来1週間、召集も、総監からの呼び出しもかからない。

「総監が今朝一番で、『蒼光』に向かったらしい」

それは、基地に戻った翌日。食堂で会った小暮から聞いた話だった。

「事が事だ。失敗しました、それで終わる問題じゃない。『黒』と政治的な問題も絡んでいるからな。軍本部の 橋爪総司令に直々、会いに行っただろう」

「橋爪総司令……」

瑛己はふっと、視線を伏せた。

「要するに総監、総司令にケンカ売りに行っただろう？ 大丈夫

かよ？ 生きて帰ってこれるのかしらん？」

そばで聞いていた新が、まったく人事のように「きゃあっv」と不気味な裏声でおどけてみせた。

「橋爪総司令つて、元、空軍上がりだった？ 当時は？ 鬼神？ つて呼ばれてたつて聞いたけど」

「ああ。その頃から、そして今も、舞台が空から陸おかに変わっただけで、あの人のやり口は何一つ変わらないさ」

小暮は無表情で眼鏡を持ち上げると、足を組替えた。

「逆らう者は、容赦なく斬り捨てる人だ。あの人に楯ついて、現在重い役職を担っている者はいない。……まあ、役職だけならまだいいが。下手をすれば、その生命いのちさえ剥奪はくたつされる」

「こわっ。マジで大丈夫かよ、総監は」

ボディーガードがいるんじゃないか？ 磐木隊長がいい。あの人の鉄拳の破壊力は、俺らが実証済みだ。それを言うなら、副長も行くべきじゃないか？ あの人は、拳銃の名手だという話だぞ？ ……そんな2人のやりとりを、瑛己はどこか遠い世界の事のように聞いている。

（橋爪総司令、か……）

その人を、瑛己は知らないわけではなかった。

「あーあー……俺ら、いつになったら飛べるんやろうなあ」

空に向かって大きく欠伸あくびをしながら、飛が気だるそうに言った。

「飛は、そればっかだね」

苦笑しながら、秀一は買ったばかりの推理小説を抱きしめた。

「あんだだけ熱心に読んでおいて、結局買わなかったの？ 『飛行新

聞』」

「あん？ いらね。もう全部読んじゃったし」

「あ、そう」

大きく溜め息を吐き、秀一はふつと立ち止まり、後ろを歩く瑛己に並んだ。

「瑛己さんは、何の本を買ったの？」

「……」

その右腕に抱えた紙の包みを、秀一は目を輝かせて覗き込んだ。それに瑛己は苦笑して、「別に」と言った。

「値段、結構してましたよね？ えー、何の本？？」

「大した物じゃない」

途端、「あー！」と飛が振り返った。そしてニヤニヤ笑うと、

「わかった！！ お前、さてはエッチ本　　！！」

「……」

瑛己は飛を、ギロリと睨んだ。

「隅に置けんなあ、お前も！！　はっはっは！！」

睨んだ。

睨んだ。

徹底的に、

睨んで。

睨んで。

そして、睨んだ。

「……じよ、冗談やろ？　おま、そんな顔せんでもええやろ！？」

「えー！？　何？？　僕、今よく聞こえなかった。飛、今何て言

ったの？？」

「……」

「秀……。お子ちゃまには関係ないこつちや。昼メシどないする？　その辺で食べてくか？？」

「えー！！？　何それ！！？　瑛己さん、ねえ、何て言ったの？？」

「ねえ！」

「また、『海雲亭』？」

「瑛己さん、無視しないでよー！！！」

「ん？　瑛己君は、海月さんに会いたいんかにやー？？」

「……………」

「だから、睨むなって……………」

「もお！！！！ 飛も瑛己さんもツツ！！ 僕を無視しないでって！！ じゃないと！！ 2人がこっそり店中のエッチ本を買いあさってたって、町中に言いふらすよツツツ！！！！！！」

「 なツ！！！？？」

「しゅ、秀！！！？？ お、俺らがいっつ、エッチ本を買いあさった！！！？？ それも店中のか！！！？？」

「いいの！！ 僕が今そう決めたの！！ 皆さん聞いてください！

！ さつき、ここにいる須賀 飛と聖 瑛己さんが ……」

「だ ……！！ 往來の真ん中で！！ 人のフルネームでツ！！」

「……………」

「瑛己ツ、俺を睨んでないで、秀一を何とかしろ！！ 俺は、エッチ本を買いあされるほど金持ちじゃないツツ！！ 無実だっ！！」

「……………俺だって、買ったのは、この1冊だ」

そう言っつて、瑛己は心底の溜め息を吐くと、抱えていた紙袋を力サカサと開けた。

そして瑛己が取り出て見せたのは、

「『？空の果て？』についての研究書』……………？」

「……………何やこの、教科書みたいなド・分厚い本は……………」

わかったか、と言わんばかりに瑛己は眉間にしわを寄せ、マジマジと眺める飛の手からひったくつた。

「瑛己さん……………」

秀一は、何となくなたまらなくなり、頭を下げた。「すみません」

「……………何が」

「僕、瑛己さんが何買ったか知らなかったから……………その、変な事言っっちゃって」

「……………別に」

言いながら、瑛己は歩き出した。

そして、知っているんだなと思った。

父である、聖 晴高の事。そして彼が最後、どこを飛んだのか。

(知ってたんだな……)

秀一も、きつと、飛も。

知っていて、何も聞かないでくれた。

知っていて、何も変わらず接してくれた。

後ろからトボトボと着いてくる2人の気配に、ふっと、瑛己は苦笑を浮べた。

「……ありがとう」

ボソつと、呟いた。

それに秀一は、ハッと顔を上げた。

「昼メシ、どこ寄る？」

「俺、この近くでいいメシ屋知ってるけど？ どないする？」

「あ……ひよつとして、『るり亭』？ あそこの定食、美味しいんだよね！！」

「そうそう！！ 瑛己、行った事ないやろ。ただし、海月さんみたいな別品はおらんんで？ あそこにいるんは、化石になりそうならばちゃんだけや」

「……飛、そんな事言ったら、ヨシ婆ちゃんの隕石が落ちるよ……？」

「わかった。それでいこう」

瑛己は苦笑した。

そして、空を見上げた。

眩い光が、目に飛び込んできた。

その日の夕方、白河が『蒼光』から戻ったという情報が基地を駆け抜けた。

1週間。その間、ずっと向こうにいたとは思わなかった瑛己は、

話を聞いて驚いた。

「噂やけど」

基地の食堂の脇で缶珈琲を飲みながら、飛は、珍しく少し声を落としてこう言った。

「顔にな、殴られたようなアザがあったつちゅー話」

「……」

瑛己は眉間にしわを寄せた。そして、窓の向こうに見える本塔を振り返った。

「多分、明日、召集かかるで」

「……だろっな」

飛はグイと珈琲を飲み干すと、網状になったごみ箱にヒョイと放った。

缶は見事な曲線を描き、甲高い音を立ててそこに吸い込まれていた。

果たして、次の日。飛の予想は的中し、327飛空隊は、久し振りに総監の名で召集される。

その夜。

滑走路を望む本塔、総監室に、ジンがいた。

扉の脇に突っ立ったたまま動かないジンを見ながら、白河は軽く息を吐き、そして自身のソファに深く腰掛けた。

「掛けてくれ」そう言っても、ジンが動かない事はわかっていた。

だが、苦笑を浮かべながら白河はそう言った。案の定、ジンは動かなかった。

「話とは何でしょうか？」

「うむ」

白河は低く唸り、そして右の頬をつつと撫ぜた。

「話をつけてきた。詳しい事は明日、『七ッ』全員を集めて話すつ

もりにいるが……いやはや、骨が折れたよ。幸い、ここはこれだけ
ですんだがな。私もいつまで、ここで、この職に就いていられるの
か」

「……」
「磐木より先に、君をここに呼んだのは、ワケがある」

白河は机に肘をついて顔の前で組み、そこに額を当てた。

「君たちは、どうやら、随分厄介なものに關つてしまったらしい」

「……『黒』ですか」

「ああ。総司令に話はつけたが、正直、この先どうなるかの確証は
ない。先方が今回の事にえらくくご執心でな。このまま簡単に終わ
るとは思えない」

「……」

「特に……あの男は。必ずまた何かを仕掛けてくるぞ」

「あの男？」

白河はふつと顔を上げ、ジンを見た。その目には疲れというより
戸惑いの色が濃く出ていた。

「風迫君。　埠頭フスという名に、覚えはあるか？」

「……」

「『黒国』黄泉騎士団所属・第1特別飛空隊隊長、だそうだ」

「……」

「その顔は……覚えがないわけではなさそうだな」

「……」

ジンは無表情のまま、白河を見た。

「先日きた、『黒』の使者というのは？」

「ああ。察しの通りだ。若いのに随分と弁のたつ、頭の切れそうな
男だと思つたよ」

「……」

「先に総司令にまで手を回していたのが、彼なのかそれとも別の誰
かなのか、私にはわからない。だがな、風迫君」

「……」

「彼は君を、知っている様子だった」

「……」

「くれぐれも気をつけたまえ　過去に喰われてしまわないように」

また一つ、夜が明けようとしている。

飛空艇から飛び降り、ゴーグルを脱ぐと。途端、眩しい陽射しが目にしみた。

瑛己は眉間にしわを寄せ、前髪を掻きあげた。

たまらなく眠いと思った。

欠伸あくびをかみ殺していると、丁度、フラリと操縦席から飛び降りた

秀一と目が合った。

「………… お疲れ様です」

笑って見せたが、流石の秀一スマイルも、疲労の影が濃い。

新は、操縦席から這い出す気力もないかのようにそこに突っ伏し、小暮は眼鏡の汚れを面倒臭そうに袖の端で拭いている。ジンはヴァージニアスリムをくわえ、少しだるそうにライターで火を灯し、磐木ですら、どこか眠そうにして愛機に背をもたれて腕を組んでいた。瑛己は周囲のそんな様子に、少しホツとした。

半日を越える長時間飛行。辛いと思ったのは、何も、自分だけではなかったか。

だがそんな安堵も束の間の事。

「はああ！！ 着いたっ、着いたでー！！！！ ハッハッハッ！！！！」

恐ろしく元気な笑い声が、だだっ広い滑走路に鳴り響いた。

瑛己はゲツソリと、その声の主を振り返った。

「何や、空気が美味いなあ！！ 絶好の飛行日和っ！！ お天とさんも、絶好調やな！！！！」

そこには？ 自称・空戦マニア？ 須賀たかき 飛が、不気味なほど満面に笑みを浮べて、小躍りしながら煙草の箱を片手に遊んでいた。

「…………」

「おう、瑛己！！ なーに、しけたツラしとんのや！！！！ 秀坊、ちやっつきり歩けー？？ お前ら、遠路はるばる『日嵩』ひだかまできて、

なーにボケた顔しとんのや!!??」

「……………」

「ほらあ、隊長！早いとこ基地へ行きましようよー!!…こつから少し歩くとかって言つてませんでしたっけ？新さん、なーに操縦席で寝てんですか!!ほれ起きた起きた!!早くしないと置いて行きますよ!？」

「……………あうあ」

「さあ!!!皆元気出して!!!はりきつて、『日嵩』空軍基地へと向かいましょー!!!さあつ!!!胸を張つて!!!ハツハツハツハツ!!!」

「……………」

瑛己はゲンナリした。そしてそれは他の面々も同じだった。

「あいつのあの元気は、一体どこから湧いてくるんだ……?」

瑛己の横で、小暮が疲れた声で呟いた。

それに瑛己は一つ溜め息を吐き、

「……………空がある限り、じゃないかと」

そう言つて、雲一つない真つ青な、満天の蒼空を仰いだ。

輝く太陽が、少し、憎らしく思えた午後。

白河が『蒼光』から帰還して5日後の事である。

「『日嵩』?」

問い直す声に、白河は「うむ」と低く頷いた。

「首都『蒼光』で、『日嵩』空軍基地総監・上島君に会つてな…

…磐木は知っているだろう?あの上島君だ」

「……………は」

「最年少、若干35歳で総監になった男だ。昔、この基地にいた事もあつてな。私がまだ現役の頃だ。上島君は同じ編隊に属していな、それは腕のいい飛空艇乗りだったよ。」

上島君は、橋爪総司令の信頼も厚い男なのだが……今回、私が少々難儀をしていた時、総司令に2、3進言をしてくれたい。何ともまあ、ありがたい事ではあるのだが」

そう言つて白河は苦々しそうに笑みを浮べた。

瑛己はそれに小首を傾げたが、ふと磐木の顔を見ると、彼も同じように苦いものを眉間に浮べていた。

「それで『黒』との件は、とりあえず話をついたのだが……代わりに、上島君に頼み事をさせてしまった」

「頼み事ですか」

磐木の低い声に、意味ありげな音が含まれていた。

どうも、厄介な事らしい……そう思ったのは、瑛己だけではなかった。

「実は、今度【無双】に襲撃をかけるにあたって、『湊』から腕のいい編隊を……『セツ』を、援軍として出してもらえないだろうか」と

「【無双】 ……!?!?」

その言葉に、ガバリと身を乗り出したのは飛である。

「総監、今、俺の聞き違いでっしゃるか!? 【無双】って、【無

双】って、あの【無双】ですか!?!?」

その剣幕に、白河は穏やかに笑った。「ああ、そうだよ」

「【無双】 【天賦】の一部隊にして、東の海を統べらんとする組織。今回その根城を、『日膏』基地総力をあげて、叩き潰そうという計画らしい」

【天賦】。瑛己の眉が、ピクリと揺れた。

『湊』へきて僅か数日、?獅子の海?で対峙した翡翠色の飛空艇の事は瑛己の記憶にまだ新しい。

そしてその翡翠の鳥を束ねる、銀色の獅子。

【天賦】の無凱……瑛己は知らず、拳を握り締めていた。

「ひよええええ!?!?!」

飛が、よくわからない奇声を上げた。

「そ、それを、ま、まさか、俺ら！？ うひゃああ！！！」

「飛、落ち着け」

「これが落ち着いてられますかっ！！！」

大騒ぎする飛に、白河の顔がほころんだ。

「須賀君、期待させて申し訳ないが、今回はあくまでも名目『日膏』の補佐だ」

「名目、ですか」

飛とは一転、冷めた声で言ったのはジンだった。そして胸元から煙草を取り出すと、指先でクルリと回し、

「上島総監の本当の対手は、あいて一体誰なのか」

高揚した空気が、突如シンと静まり返った。

白河は肯定も否定もしなかった。ただ苦笑い、「悪い奴ではないのだが」と口を開いた。

「昔から、人一倍闘争心と野心の強い男でな……特に、当時隊長を務めていた私には、随分いい感情を持たれていたようだった。私と上島君は、正反対の性格と言っていい。だから、私のこういっはつきりしない物言いと態度が、彼は気に入らなかつたらしい。事ある事に反発されたよ。私もあの頃はまだ若かつたが、それでも、少し骨の折れる相手だつた」

「……我々に、【無双】を撃墜する様を見せつけようか？」

「さあて。それとも、レースに参加させて、敗北を味あわせる事が目的なのか」

「どちらにせよ、ただの応援では終わるまい」

白河は腕組みをし、そして磐木を見た。

磐木はそれを受け、一瞬眉間のしわを深めたが。「……わかりました」

「出ます」

「すまん。先日、君たちを不当な理由で空に上げないと約束したばかりだというのに」

「いえ。今回は、出ないわけにはいかないでしょう」

見回せば、全員が「やるっきゃないわな」という笑みを浮かべていた。

そして。

「総監！！」

突然立ち上がり、声高々に叫んだのは……言うまでもなく。

「安心してください！！俺が絶対ツツ、【無双】をぶっ叩きますから！！」

「……いや、飛、それは違う……」

「何や秀！！ええわ、もしも万が一、『日嵩』の連中がぶっ放してきたら。そつちも一緒に叩き墜とすだけやツツ！！」

「……いや、それも違うと……」

「ハツハツハツ！！！！どいつもこいつも、まとめて相手したるわッ！！うわあ、腕が鳴るわあ！！！！」

「……」「……」「……」「……」「……」

全員、啞然と飛を眺める中で。

「ははは。須賀君、期待しているよ」

「総監！！任せてください！！」

こいつに期待なんかかけてしまって、大丈夫なのだろうか……？
瑛己は、飛にも白河にも、一抹の不安を覚えた。

「クツクツク……。何や、噂に違わぬ、ええ待遇してくれるやないか」

『日嵩』空軍基地から少し行った、町の酒場にて。

運ばれてきた麦酒ビールをグビと一口飲むと、飛は、不気味すぎる含み笑いを浮かべ煙草を噛んだ。

瑛己はそれを無視して料理に向かい、秀一は苦笑しながらオレシジューズにストローを差した。

「仕方ないよ。急の事だからね」

「秀一、お前、本気で信じてるんか？」
昼間。

『日嵩』基地に着いた327飛空隊は、まずその入口で「連絡を受けていませんので、後日改めてお越しく下さい」と。けんもほろろの扱いを受けた。

それで引き下がるわけにもいかない。隊随一の頭脳派・小暮が事の次第を話し、上島総監に取り次いでもらえないかと言うものの

返ってきた返答は、「上島総監は、現在、出張中です」。
「ありやあ、完全にワザとだろうなあ」

新が焼酎を飲みながら、苦笑ともつかない笑みを浮べた。

「入口に立ってた奴ら、『七ツ』ご指名の門前払い命令、いただきまするよん？」

「だろうなあ」

小暮は足を組替え、麦酒に目もくれず、置いてあったジンのヴァージニアスリムの箱から一本取り出し口にくわえた。

「珍しいな」

先に吹かしているジンが、トントンと灰皿の角で灰を落とした。

「後で倍にして返します」

「出世払いで結構だ」

「ハハ、それじゃあ、あの世までお借りしておきますよ」

「磐木隊長、麦酒は？」

「磐木はムスツと口をへの字に曲げると、「いらん」

「それより飯だ。腹が減った。聖、その皿を取ってくれ」

無言で渡す瑛己を見て、飛が「はああ」と大きく溜め息を吐いた。

「しかし、これから、どないするんですか？」

「どないしようかねえ」

「新さん、茶化さんでくださいよ」

「だって、実際じゃねーのよ」

「まあ、待つしかないだろうなあ」

「何を？」

「決まってるだろう？ 上島総監がお帰りくださる日を、だろう」
飛はゲッソリ顔をして、天井を仰いだ。

「はああ……ボケボケしてたら、作戦に乗り遅れちまう」
「それが狙いかも？」

「『セツ』は期日に間に合わず、敵前逃亡をした、か。あり得るな」
「ていうか、僕、よくわからないんですけど」

ストローを口に含んだまま、秀一が言った。
「作戦の期日もそうですが……上島総監って、一体どんな人なんですか？」

「どういう人、ねえ？」

意味ありげに新はニヤリと笑い、磐木を見た。だがすぐにギロリと鬼のように睨まれ、焼酎に目を移した。

「上島総監は、『湊』を目の仇にしているという話だ」

答えたのは小暮だった。

「それが、白河総監に対するものなのか……それとも、彼が『湊』にいた当時に抱いた基地への憎しみなのか。それは誰にもわからない。だがあの人は、『湊』に対して果てしなく暗い負の感情を抱いている……知ってるか？ 以前上島総監が、『湊』基地の撤廃を総司令に訴えたって話」

「撤廃!!!？」

「ああ、それ聞いた事ある。何や、議会で退けられたけど、かなりトチ狂ったように言ってたやつやないスか？」

「ほう。飛、よく知ってるな」

「俺、『飛行新聞』だけは、完璧にチェックしてますから」
「だから、つまり」

小暮は慣れた様子で煙草の灰を落とすと、煙を切るように一瞬ヒュツと手首を動かし、口元に持って行った。

「それだけ『湊』を憎んでいる人間が、今回の一件、何の他意もない『湊』に応援を求めるとは思えない。そこにどんな意図があるのか……単に、【無双】撃墜という大イベントを前にしたにも関わらず、

『湊』ご自慢の『セツ』が蚊帳の外、まったく役に立たなかったというレッテルを貼りたいだけなのか……それとも」

「それ以上の、何か罫があるのか、か？」

ジンの言葉に小暮は大きく頷き警木に目を向けた。

「どうします？ 隊長」

警木はしばらく無言でいたが、やがて「待つしかあるまい」と呟いた。

「作戦決行までまだ日がある。帰るわけにもいくまい」

「上島総監は、本当に不在と？」

「いや。基地にいるだろう」

事も無げに言うと、警木は苦笑するように目を細めた。「あの人のやりそうな事だ」

「我々の着陸指定地をわざと基地から離れた場所にしたのも、不在と言って門前払い食らわすのも、あの人がやりそうな事だ」

「隊長」

「今日は宿に泊まり、明日もう一度基地へ向かう。それで駄目なら、明後日。それが唯一、今、我々ができる事だ」

「わかりました」

この件に関する論議は、それで終わった。

それからはしばらく、めいめい酒と料理と談笑で夜は更けていった。

だが。その一日は、そのまま簡単に終わりを迎えてくれなかった。

テーブルいっぱい料理があらかた空になった頃。

「……なあ、聞いたか？ 『湊』からきた連中の話」

店内に流れていた音楽が、一瞬シンと静まったそんな時であった。チビリと麦酒を飲んでいた瑛己の目が、ピクリと明後日を見た。

それは、他の誰もが同じだった。ハハハハと大笑いしていた飛も声を落とし、突つ伏して眠っていた新も細く目だけを開けた。

『海雲亭』の2倍はあるような広い店内であった。

ごった返す客の層はまばらであったが……彼らが囲むテーブルの少し向こうに、簡素な格好をした男が5人ほど座っていた。

丁度、瑛己が座る位置から正面の場所だった。見るともなくチラと見る。

飛行服を着ているわけでもない（瑛己たちも既に着替えている）。空軍の特徴ある何かを身に付けているわけでもない……だが、この場所と、彼らが持つ独特の空気は。

（『日嵩』……）

飛たちが、瑛己に目で問い掛けた。それに彼は無言で頷いた。

「ザマあないよな」

「所詮、その程度の」

「ハハハハ。確かに」

注意して聞いても、話し声は喧騒に紛れて断片的にしか聞こえない。

それを、瑛己たちはじつと静かに聞いていた。

「……を、墜りそこなっただってさ」

「知ってる。けどどうせ、怖くて逃げ出したんだろ」

「ハハハ、違くない。【天賦】とだって、本当にやったのかどうか」

「自分らで適当に撃ち合って、それっぽく飛空艇を飾ったんじゃないの？」

「あそこの隊長」

「知ってる。？空の果て？の生き残りだろ？」

「要するに、逃げ足が早いつて事だ」

「？逃げ専隊？つてトコじゃないの？ 本当は」

「だーら、適当に」

「ハハハハ！ 奴らも実はそれを期待してんじゃないの??」

瑛己たちは。

初老の店主が呆然と、もう叫ぶ言葉すら浮かばないかのような顔で立ちすくんでいる。

傍観していた警木が、そろそろ潮時と見て、重い腰を上げかけた。

だが、それより早く。混乱する店内に、声が、響いた。

「いい加減にしるよ」

凜と響く精悍な声だった。その声には、我を忘れて暴れる者の手さえも、一瞬止める力があつた。

瑛己は麦酒を片手にしたまま、声の主を振り返つた。

少し離れたテーブルに1人、足を組んでこちらを見ている者がいた。

まっすぐに輝く、挑戦的な目をした。それは紛れもなく女性だった。

黒いジーンズに、革製の、赤の短いジャケット。髪は後ろで高く一つに結び上げ、それが店の灯りによって照々と光っていた。

「お前……!!」

飛の胸倉を掴んでいた男が、目を見開いて彼女を見た。彼女はニヤリと男のように笑い、スツと立ち上がった。

「こんなトコで大騒ぎしている場合じゃあ、ないんじゃないのか?」
「……ッ」

「上に知れる前に、有り金全部置いてとっとと退きな。それとも、何もかも頓挫にしたいってんなら、あたしも手伝うけど?」

「……」

「何や、お前は!!?」

飛は男の腕を振り解くと、今度はその女性に食って掛かった。

「女の出る幕やないわ!! 引ッ込んでろ!!」

「ハン」

女は飛の啖呵を鼻で笑うと、ジーパンのポケットに手を突っ込み、鋭い眼でこう言った。

「あんたら、鳥なら鳥らしく、空でケリをつけろっつってんだよ、

あたしは」

「何!？」

「飛……ッ!!」

秀一の制止も聞かず、女に向かって一步踏み出した飛の鼻先に、女は間髪入れず、短銃を突きつけた。

「ッ」

「『湊』空軍基地、第327飛空隊、『セツ』」

女は余裕の顔で飛を、そして他の面子を一瞥すると。

「喧嘩なら、空で買っよ」

そう言っつて、唇の端を釣り上げた。

「何をッ」

「……っと、警音」

そして飛が二の句を告げる暇もなく、彼女はヒラリと宙を舞い、風のように消えて行った。

彼女が去つてすぐに、騒ぎに駆けつけた警察がドタドタと踏み込んできたが。

その時にはもう、『日嵩』の者と思われる男たちの姿はなく。代わりに、彼らの置いていったかなりの額の金によって、店主が「酔っ払いの喧嘩です」と引きつった笑顔で言ったのを
327飛空隊の7名は、そ知らぬ顔して聞いていた。

彼らの宿に『日嵩』からの使いがきたのは、次の日の朝早くだった。

「警木。昨日きてくれたそうだな。事前に連絡をくれればよかったものを。昨日は所用で、地方へ出ていた」

『日膏』空軍基地総監・上島は、部屋に入るなり早口でそうまくし立てた。

それに磐木は（地顔かもしれないが）、いささかムツと顔をしかめた。

「先にご連絡申し上げたはずですが」

「知らん」

上島はソファにドカリと腰掛け、『セツ』全員を1人ずつ、上から下まで見ていった。

それはまるで、値踏みするかのような目であった。

「掛けたまえ」

「……いえ、このままで」

「フン。そうか」

皮肉ったように笑うこの男が、瑛己は好きになれそうにないと思つた。

態度もそうだが、何よりその目。

明らかに、見下している。

瑛己は無表情に上島を眺め、そして一瞬脳裏に浮かんだ白河の困つたような笑顔を、とても気の毒に思つた。

「磐木、君らの噂は聞いている。随分派手にやっているようだな」

「……いえ」

「だがな、我が基地にはそんな君らの噂を、デマカセだと言う者が多々にいる。本当は、取るに足らない連中ではないのかと……フフ、そう怖い顔をするな。所詮ただの噂だ」

「……」

「まあ、その真偽はいずれ公になる事であろうがな」

上島はニヤリと笑つた。嫌味な笑いだつた。瑛己と目が合った。だが瑛己は無表情のままだつた。

「さて。ではまず今後の事を話す前に、紹介しておきたい者がいる。おい、入れ！」

上島の声が続いて、部屋に入ってきたその顔は。紛れもなく、昨

夜、酒場で殴りあつたうちの一人であつた。

「東君だ。今回の作戦で、前線の総指揮を勤める」

「よろしく願ひします」

ゆっくりと頭を垂れたその顔には、皮肉とも余裕ともつかない、不思議な笑みが浮かんでいた。

そしてもう一人。

その男の後ろに、かなり遅れてフラリと入ってきた者がいた。

深紅のジャケットに、黒のジーンズ。挑戦的な双眸と、ピンと張り詰めた精悍な空気を身にまとい。そして男のような笑みを浮べるその 女性は。

「本上 昴（honjyo | subaru）君だ。今回、特別に作戦に参加してもらつ事となつた」

「……スバル？」

飛の眉がピクリと動いた。

「あんだ、まさか……噂の」
だが彼女はそれには答えず、挑戦的な瞳のままにこやかに微笑み、「よろしく」と言つた。

飛が小さな声で「上等や」と呟いたのを。瑛己は隣で、心底嫌そうに溜め息を吐いた。

本上 昴 スバル

この空を翔ける様々な飛空艇乗りの中で、その名を持つ者は、別にこう呼ばれる事がある。

？傭兵・スバル。

「あれは、3年前の冬や」

飛は目を細め、険しい顔つきのまま夜空を睨んでいた。たかき

「何とかつつーお偉いさんが、空賊に狙われた事があった」

「……国鉄の、渡来会長襲撃事件か……」わたらい

明後日を見ながら言う小暮に、飛は片眉を上げて頷いた。「ああ」

「俺は、政治のゴタゴタに興味はないし、ようわからん。だが、その何とかつつー会長が【サミダレ】に狙われたつつーのは、よう覚えてる」

襲撃は、空。

「どこぞである、会議だか飲み会だか知らんが……ともかく、その移動での襲撃が予告された。だからそのワタライ会長は、護衛としてかなりの数の鳥を雇った」

「……」

オレンジジュースを飲むのを止めて、真剣に聞いている秀一の横で。瑛己は大して関心なさそうに麦酒を飲んだ。えいき

「そして、約束の日。だが会長は予定の時間も航路も大幅に変えて、空に上がった。案の定、行程の半分まで襲撃はなかった。これはイケるとワタライ会長は、悪人顔でほくそ笑んだ」

ジンがヴァージニアスリムに火を点けた。新が甲高い声で酒場の店員に酒を頼んだ。

「だが、甘かったのはワタライ会長の方だった。出し抜かれたのは、会長の方やったんやな。雇った護衛の中に、【サミダレ】がいたんや。襲撃は？六弧湾？のど真ん中。それも、月が半分欠けた真夜中

だ。ワタライ会長の命は、そこでジ・エンドのはずやった」

「……」

「だが、結果として会長は逃げ切り、【サミダレ】は会長襲撃に失敗。その後、捜査の手が入り、ジ・エンドしたのは【サミダレ】の方やった。そしてその時、ワタライ会長が逃げきれたワケが、？ 昂？ やった」

瑛己も空を見た。窓越しに見る初夏の夜空には、細長い月が薄っすらと輝いていた。

「真つ暗な海の上、視界の利か^きん中、入り乱れる飛空艇。だがそいつは……まるで昼間の空を飛んでいるみたいに、【サミダレ】を相手にしてたつちゅー話や」

「……」

「結局、事実上昂一人に翻弄され、手をこまねいているうちに、本命のカレは夜陰に紛れて逃亡。舌を打っているうちに、昂の姿もなかったつー……大間抜けな話や」

店の女性がジョッキを持って現れた。新がそれに手を叩いて喜んだ。喜びのあまり、店員の女性に抱きつこうとしたが、代わりに、その顔に強烈な平手^{ヒンタ}が叩き込まれた。

「それからやな。昂つー名前をよう聞くようになったんは。初手のそれでえらい有名になりよって、以来、護衛だの迎撃だの、色んなトコから仕事が入りおった。それがまるで、転々と戦場を渡る兵士みたいだと。それが、傭兵と呼ばれるようになった所以^{ゆえん}や」

ふっと、飛の眉間にしわが寄った。瑛己はその顔に、飛の歯噛みを聞いたような気がした。

「傭兵、昂か……」

酒には目もくれず、ジンはヴァージニアスリムを吹かした。

その隣で、磐木が小さく息を吐いた。

それは、この作戦の前途を思ってたか、それとも別に思う事があつてのものか。

初顔合わせは、ピリピリした緊張の中、だが何事もなく終了した。
『日嵩』^{ひだか} 総監、上島の部屋で対面を終えた彼らは、その後部屋を
移し、正式に今回の作戦内容を聞かされた。

「【無双】^{むそう}が潜伏しているのは、ここ。B-3ブロック。？弓月海^{きつき}
？に位置する小さな諸島、中央に位置するこの島です」

前線総指揮に当たる東という男は、ホワイトボードに貼り付けた
地図を前に、淡々と説明していった。

その頬にアザがある。そして飛と新の顔にも、同じような跡はあ
った。

「そして今回の作戦は、この島を取り囲むように……3方向から同
時襲撃をかけるというものです」

「3方向ですか」

「ええ」と東は少し笑った。「この海域は、少々入り組んでいます」

「諸島とはいえ、高い陸^{おか}と山が密集しているのです。そのため、飛
空艇泣かせと言ってもいい。踏み込んで行くには、少し骨の折れる
場所になるでしょう……その中で、多少難が浅いのがこの3つのル
ート。ここは実際、【無双】が使っているルートでもあります。こ

こを、『日嵩』で固めます」

「『日嵩』で、と？」

ピクリと問いかけた小暮に、東は笑みを貼り付けたまま言った。

「はい。『セツ』の方々には、実は、最後のルートをお願いしたい
と考えています」

そう言っただけで東は地図の一点を指した。

「ここより島へと続く道 4番目のルート。ここをあなた方と、
本上君にお願いしたいのです」

「曲者ですよ、あの男は」

小暮が無表情のまま、手元の酒に口付けた。

「4番目のルート……隊長は、どう思われましたか？」

警木は眉間にしわを寄せたまま、じつと目を閉じている。

その夜。昨日と同じ酒場に、327飛空隊の7名は顔をそろえていた。

流石に昨日の今日という事もあり、店主の顔はどこにも見えない。だがそういう事をまったく気にかけないのが、彼らの凄い所でありな所であった。

「何か、すつげ つまんなさそうな作戦じゃないか？ 今回」

顔にしっかりと平手を印した新は、口を尖らせて麦酒をあおった。

「体のいい厄介払いじゃないのん？ 4番目のルートなんて」

それを聞いて、ジンが初めてクツと小さく笑った。

「小暮、お前が言いたい事は何だ」

「……副長は気付かれましたか」

「馬鹿が」

秀一が、眠そうな顔でキョトンと首を傾げた。

「彼はこう言いました。4番目のルートは、かなり困難を極める。

運転に長けている者でも易々とは通れないルートだ。となれば、襲

撃に遭った【無双】が逃げるには、そのルートを使うとは思えない。

だが、その道をがら空きにする事もできない。万が一に備え、かつ、

あのルートを易く抜ける事ができる編隊は『セツ』しかない。よ

つてよろしく願いたい」と

「つまり」

ジンは煙草を灰皿に押し付け、ニヤリと笑った。

「俺達は難関の四番目のルート（最後の道）を、絶対に抜けなければならぬって事だ。それも、無傷でな」

「だがそれは、彼らにとってはあいた相対する意志。となれば必然、あの道には仕掛けがある」

「……」

「何だ！ そーゆー話か」

「樂觀できないぞ、新」

楽しそうに笑う新に、間髪入れず小暮は言った。

「4番目のルート、通るだけでも厄介な、そんな所で襲われたら」

小暮の顔が、苦渋で歪んだ。

瑛己は、小暮のそんな顔を初めて見た。

いつも冷静に客観的に物事を捉え、余裕とも取れる顔しか浮べないようなこの男が。こんな表情をするとは……瑛己は小さく目を見開いた。

「大丈夫つすよー、小暮さん。もし何かあったって、ブチのめせばいいだけなんだからー」

仕掛けがあると聞いて、こちらもうキウキ顔の飛が、軽い口調でそう言った。

「……」

小暮はそれに、何も言わなかった。代わりにチラリとジンを見た。ジンはくわえていた煙草を灰皿に押し付けた。半分ほど残っていたそれが、グニヤリと奇妙な曲線を描いた。

「飛、お前、谷拔けに自信、あるか」

「ハ？」

「聖は？ 相楽は……むしろ、得手か？」

「え？ 何がですか？」

「隊長、とりあえず明日から、低空の特訓でもやりますか？」

「……うむ」

「小暮、近場に溪谷がないか調べろ。どんな所でも構わん。ヒドければヒドいほどいい」

「わかりました」

初めて、ジンが手元の麦酒を喉に流し込んだ。

その姿に一抹の違和感のようなものを感じたのは、果たして、瑛己だけだっただろうか。

2日後。

朝日と同時に叩き起こされた瑛己たちは、早速空に上がっていた。ちなみに、彼らの宿は到着の日と同じ、町の一角にある酒場件宿屋といった所であった。「悪いが宿舎は定員がいっぱいでな」と上島は言ったが、明らかに嫌がらせとしか思えなかった。

「まあ、よっぽど気楽じゃんか」

笑顔全開で新がそう言ったように、上島の嫌がらせも、むしろ彼らにとっては願ったり叶ったりであった。

ただ一つの難は、基地まで距離があるという事。だがそれも、『日嵩』の町を散策できると思えば、大した事ではない。

さて。早朝空に上った327飛空隊の7人は、一路、南へと向かった。

『日嵩』から南に抜けた海沿いに、？狐谷きつねだに？と呼ばれる深い谷がある。

彼らがそこを知ったのは、昨日。酒場兼食堂で、めいめいに朝食をとっている時だった。近くのテーブルから偶然聞こえてきたのがきっかけだった。

その日のうちに上島の許可を得て、早速向かってみる事にした。

目的は、谷抜け、そして低空飛行の練習である。

「……こんな訓練は、今更必要ないとは思うんだがな」

飛行学校の教習内容として、瑛己も何度かこの手の事は経験している。

険しい谷間を、一定の制限高度以下で飛行する。それは、勘に頼らず、地形を先読みし、機体の状況を頭に描きながら瞬時に判断して飛ぶ、操縦感覚の訓練のためである。

特に谷間で重要になってくるのは、速度である。見通しの利かない谷間では、一瞬の判断ミスが命取りになる事がある。速度と出力のコントロール、これが重要になってくる。

「んなもん、学生^{ガキ}じゃあるまいし、楽勝ですって！」
そう高らかに断言した飛であったが。

《飛！ 速度の出しすぎだと言っているだろ！！ 余所見^{よそみ}している
と右を持っていかれるぞ！！ 何をやっている！！！！》

磐木の怒声は、鳴り止まなかった。

瑛己とて、安穩とそれを聞いていられる立場になかった。
どうにも、翼がぶれる。

何を今更言っているのか……自分でも、自分の飛行が齒がゆくな
る。

だが、左右には切り立った断崖、物凄い圧迫感を感じる。

気にしては駄目だと思しながら、だがフラリと、その絶壁に引き
込まれそうになる瞬間がある。

どれだけ空を飛んできたのか。それなのに、翼の感覚が心もとな
い。

《聖、ふらついているぞ》

ジンに言われるまでもなかった。自分で一番よくわかっていた。
早くこんな谷間、抜けてしまいたいと、瑛己は苛々と思った。

速度を上げてしまいたい、高い空を舞い上がりたい。

瑛己でさえも操縦桿を握る手がもどかしく、焦れていた。飛など
は一体、どんな気持ちで飛んでいるのだろうか。

2機も並んで通れないほどの峡谷であった。先頭に小暮、飛、磐
木、秀一、瑛己、ジンの順番で飛んでいた。

瑛己の内心の葛藤とは裏腹に、前に行く秀一の機体は、微塵もぶ
れない。

カーブでは的確にきれいに曲っていく。速度も一定だ。それを見
ると余計、自分の飛行の荒さに焦れる。

焦ら焦らしながらどれくらい、そんな峡谷を飛んでいただろう。

抜けた時は、安堵もそうだがひどい脱力に襲われた。全身が疲れ
きっていた。

《よし、もう一度、きた道を引き返すぞ》

《……ゲゲツ》

流石の飛も、ゲツソリだった。飛ぶのが嫌だと思ったのは、初めての事だったかもしれない。

瑛己でさえ、ゲンナリした。

そして、そんなふうには谷を何度往復しただろうか。

基地に戻ったのは、昼も大分回った頃。

全員（特に飛は）、這い出るようにして飛空艇から抜け出し、地面に突っ伏して動かなくなった。

「……あかん、俺、あーゆーの絶対向いてない……」

夜。宿の部屋のベットに突っ伏し、飛は低くうめいた。

「……」

瑛己は何も言わなかった。だが顔は「同感だ」と言っていた。

「？ そーかなー、僕、結構面白かったけど」

「……秀、お前の神経回路、腐ってるんじゃないか……？」

俺は繊細やから、あーゆーのは向いてないんや……と、自称？ 繊細な空戦マニア？ は寝言のように呟いた。

「実際の場所は、あれよりひどいのか？」

「運転に長けていないと通れないって話ですよね？」

「思いやられるな……」

「あれ？ 瑛己さんがそんな事言うなんて」

「……俺も、ああいうのはどうも苦手だ……」

そう言っただけでなくベットに倒れ込む瑛己を見て、秀一はふつと笑った。

「……何が可笑しい」

「いえ。だって、瑛己さんが『苦手だ』だって」

「……悪いか」

「いえいえ。ちょっと、嬉しくて」

「……何が」

「何でもないですつて。ちょっとかわいいなつて思っただけですよ」

「……………お前に言われたら、俺も終わりだな」

「何ですかそれー！ どーゆー意味ですかー！」

「……………眠い。俺、もう寝る……………」

秀一が何か言ったが、瑛己は何も言わず、そつと目を閉じた。冗談半分でやったそれが、案外心地よくて。開けようと思つても、もう、目は開けられなかった。

吸い込まれるように、眠りに落ちた。

次の日も、彼らは谷へ向かった。

その次の日も、そしてその次の日も。

『日嵩』での合同作戦の協議、演習の間を縫うようにして彼らは空にいた。

そんな彼らを、『日嵩』の者達は冷ややかに見ていた。

瑛己たちとて、ゲンナリだった。

だが、誰一人文句を言う者はいなかった……………それは、今回の練習を特に指揮しているのが、副長・ジンだったからかもしれない。

磐木すら、今回は黙って彼に従っている。

瑛己はこんなジンを初めて見た。

瑛己にとって風迫 ジンという人物は、孤高の狼という印象があった。

磐木が吠えている一歩向こうの輪の外で、一人無言で煙草を吹かしている。

副長という肩書きを持ちながら、さして興味なさそうに冷めた目で、隊の事も空の事も見ている……………そんなふうに思っていた。

だが今回のジンは違った。

磐木が赤い灼熱の炎ならば、ジンは青い極寒の炎なのだろう。

初めて、瑛己はジンのそういう？炎？を感じた おかげで、

この状況であるが。

「はうあつ……、ようやくこんな、谷抜け生活ともおさらばやな」
飛が疲れきった顔に笑みを浮かべ、コトンと麦酒を飲んだ。

作戦の前日。

瑛己と飛と秀一の3人は、いつもの食堂で、少し遅めの夕食を囲んでいた。

他の面々の顔はない。最後の協議を終えた時点で、別行動を取っていた。

「出立は、明日、1500か……」

「じゃあ、明日の朝が最後の谷抜け練習だね」

「……はあ…… やつとあんな、陰気な場所から解放される……」

飛は嬉しそうだったが、明日の夕刻、最後にぶっつけ本番が残っている事を、瑛己はあえて言わなかった。

それは、言うのが面倒だったというのもあるが、彼にしては珍しく、心底ここ数日の谷生活にゲンナリしていたからだったかもしれない。

「それにしても……あの人、結局今日も顔出さなかったね」

ポツンと言った秀一の言葉に、飛の瞳に小さく火が灯った。

本上 昴。

連日行われた作戦協議、そして合同演習等々。だが彼女は一度も、顔を見せる事はなかった。

時折それに、総指揮・東が苛立たしげに、探し出してつれて来いと部下を叱咤しているのを見た。

「渡り鳥なんぞ、そんなもんや」

皮肉げに飛が言った。

「けど……僕、よくわかんないんだけど、何であの人、雇ったのかな？」

何気なく言った秀一の言葉は、瑛己もずっと引つかかっている事であった。

空軍が渡り鳥を雇う……確かに珍しい話ではない。だが、今回に

限っては意味合いが少し違っている。

(常道に考えたとして)

結論は一つだけ。しかし。

「あん？ んなもん、知るか」

飛は大きく鼻を鳴らして言った。

「どつちにしろ、どいつもこいつもまとめてぶっ倒したる」

そう宣言する飛は、かなりストレスがたまっているように見えた。

(だが……)

瑛己は腕を組んだ。

そしてふと思つた事を言おうと口を開きかけた時。その目の前を、

赤い人がスツと通り過ぎた。

昴だつた。

彼女は何食わぬ顔で彼らのテーブルを通り過ぎると、隣のテーブルに座つた。

飛もすぐに気がついた。そして、

「いいご身分やな、渡り鳥うちゅーのは」

明後日を見ながらも、聞こえよがしにそう言った。

秀一がギョツと顔を歪めた。だが構わず、飛は足を組んで続けた。

「作戦の一つも聞きにこんと、どこを飛ばうちゅー腹や」

「……」

昴は黙つて目を閉じている。

「ええなあ、自分勝手に空が飛べて。見たで、『飛空新聞』。【天賦】の無凱に挑戦状やつて？ でかい風呂敷、広げるのはさぞかし簡単なんやろな」

「ハン」

店の女性が言葉少なく、グラスを昴の前に置いていった。

「あたしは、そんな事言つた覚えはないね」

「活字にちゃんと残つとるやないか」

「だから、ライターなんて言う連中は嫌いだっていうんだ。ある事ない事書きやがる。それを鵜呑みにする馬鹿が、世界には五万と溢

れているっていうのに」

「今なんつった、お前」

「あん？ 聞こえなかつたか、この馬鹿が」

「……………」

飛の口の悪さは周知の事だが、昴も大概、口が悪い。

秀一が、アワアワと口を震わせていた。

瑛己は、困ったなと思った。警木もジンも、頼りの人間は誰もいない……………一触即発、間に入らなければいけないのだろうか？ 果てしなく、他人の振りを貫き通したい所であるが。

「……………」

「……………」

殴り合いが始まると思った。

血の雨が降ると思った。

だが意外にも、それ以上、飛と昴の間には何も起こらなかった。

稲光のような睨み合いが数分あったかと思うと。

「クツ」

「ハン」

同時に2人、鼻で一つ笑みを浮べ麦酒をあおった。

秀一は安堵の溜め息を漏らした。

だが、瑛己には2人の最後のやりとりが聞こえてきた。

ケリは、空で。

「……………」

巻き込まれないように祈る事が、今の瑛己にできる唯一であった。

そしてその願いが決して叶わない事を一番知っているのは、瑛己自身であった。

いよいよ、作戦の朝はきた。

327 飛空隊はいつもより早めに谷練習を終えると、予定の15

00時に基地を飛び立った。

彼らと本上 昴。【無双】へ向かう編隊は彼らが最後であった。昼過ぎと同時に、『日嵩』の各隊は時間をずらしすでに【無双】へと向かっていた。

ガランとした基地と、静まり返った滑走路。それは少しの淋しさと不安を、瑛己の胸に抱かせた。

それは、ひよっとしたら他の面々も同じだったかもしれない。誰も一言も言わず、それぞれの飛空艇に乗り込んで行った。

「くれぐれも、慎重に走れ」

それは、軽めに最後の谷練習を終えた後の事であった。

基地に戻ると小暮が、誰にともなく呟いた。

「……小暮？」

それを聞いた新が、不思議そうに彼を振り返ったが。小暮はまるでそれに気付いていないように、明後日の空を見上げた。

「……」

ジンが、ヴァージニアスリムに火を点けた。

瑛己は秀一に、何か見たかと訊いた。

だが秀一は「いいえ。今の所は何も……」と首を横に振った。

《これより、【無双】に向けて出発する》

《方位130。予定到着時間は1700》

《行くぞ》

滑走路を滑り出す。

風とエンジン音が重なる。

ギアがふつと、陸から離れる。

後は、空へ。

無限の空へ。

それはまるで。

(解き放たれた、一本の矢)

どこへ行くのか。

どこまで行くのか。

この先に、不安はないのか。
そしてこの先には、何の保証もない。

「……………ククッ……………」
上島は空を眺め、とても楽しそうに笑っていた。

かつてこの空に、【サミダレ】と呼ばれる空賊があった。

空賊としては、【天賦】に次ぐ規模を持っていた彼らの名前が、特に知れ渡ったのは3年前の冬。

国鉄・渡来会長襲撃事件。一説には、『黒国』が絡んでいたのではないかと言われるその一件で、【サミダレ】の名はその後壊滅しようとも、空の歴史に残る事となった。

そして現在では、その名前は別の意味を持って使われている。

結束の中に潜む一点の穴 絶対の中に、あるはずのない不安の兆し。

ゆえに、空に身を置く者はそれを、『鎖乱』と言う。

「さて」

海の間ごうに、島の影が見えてきた頃。

編隊の一番後ろを飛ぶ夕陽色の飛空艇は、ブンとエンジン音を唸らせた。

そしてその乗り手は、ゴーグルの端を一撫ぜし、唇の端をふつと歪めた。

「そろそろ仕事を始めるか」

次の瞬間、昂の顔から笑みが消えた。

代わり、その瞳に宿ったものは、空を映したような青い光であった。

(嫌な風だ)

ゴーグル越しにチラリと空を見て、瑛己えいきは息を吐いた。

前方、海の向こうに見えていた島の影は、今ではもう山の隆起が見えるようになっていた。

だが空は、今にも泣き出しそうな天気だった。

327 飛空隊に与えられた4番目のルート、南側から入るその道が、島々の隙間に細く口を開けている。

数分も後にはあの中にいるのかと思うと、

(ゾツとするな)

前に行く磐木の飛空艇は、風に揺れもしない。

無線は鳴らない。もう領海内だ。ここでマイクに向かって歌えば、それは間違いなく【無双】を観客にライブする事になるだろう。

いっそ、ラジカセでも積んでこればよかったと瑛己は思った。もちろん聴かせてやるのは、気に入りの曲だ。いやいっそ、飛のイビキや磐木の罵声でもいいかもしれない。

(……)

島が近づく。

操縦席から振り返った磐木が、右手で文字を描いた。

空軍の特種な手信号である。 ? これより入る。 高度と速度

に気をつける?。

何となく、瑛己は飛たかきを振り返った。瑛己の横を、少し高めに飛ぶ彼は、目が合うとニツと歯を見せた。

秀一は見えない。彼は後ろの方……丁度、一番後ろをとっている昂の前を飛んでいた。

先頭に行く磐木が、島の割れ目に差し掛かった。

続いて新が、飛が、そして瑛己が。

(風が、中に向かって流れている)

入るといふよりもむしろ、吸い込まれるような錯覚を覚えた。

不安を覚えたのは、瑛己だけではなかった。

仲間が消えて行くのを見ながら、小暮は、無線のボタンを押すまいかと躊躇ためらった。

(暗い)

そして思った以上に、狭い。

谷抜けの練習をした？狐谷きつねだに？も、随分居心地の悪い場所であったが。

(なるほど、違いない)

こちらの方が、その道は険しい。

その上、折り悪くこの天候である。

襲撃には最高かもしれないが、迎撃には最低だ。

狭い……と言ったが、幅は？狐谷？よりあるかもしれない。飛空艇が2台並べる。

だが狭く感じるのはなぜだろう？ 複雑な道筋せいの所為なのか、それとも突出した岩肌の所為なのか、空の所為か、海が黒いからなのか。

右から、杭のように出張った岩がある。それをどうにか抜けるとまた、覆い被さるように枯れた樗けやきが岩の間から突き出していた。

(戦うどころの話じゃないな)

今頃飛は齒噛みをしているだろう。

【無双むそう】までどれだけこんな道が続くかは知らないが、これではたどり着いても役に立ちそうにない。

(ただ、飛ぶ事だけが手一杯で)

他に何ができるのか……苦笑しようと思った。その時だった。

ドカン

一つ、音が鳴った。

一瞬、瑛己にはそれが何かわからなかった。樗を避ける事に意識はすべて持っていかれていた。

風が吹いた。

それは、雨が近い時の風ではなかった。

油のおいが混じった、爆風であった。

「何だ、と、瑛己は振り返ろうとして。」

その横を、下へ、青い機体が斜めに墜ちて行った。黒い煙が視界を覆った。

だがその寸前に見えたのは。

炎を上げた、秀一の機体だった。

「ッ、ッ」
ドドドドドド

瑛己は煙を振り切るように操縦桿を押し倒した。

ガツンガツンガツン

渓谷の中に、聴き慣れた音が反響する。

ガツンと大きな音がして、爆音が木霊する。

何が起こっているのか確かめたくても、瑛己は飛ぶ事で精一杯だった。

殴りつけてくるような岩肌を、ギリギリでかわす。そして振り仰いだそこに。

「暗い渓谷に、茶のように染まった夕陽色の飛空艇が。」

「ッッ！！！」

青い飛空艇に、弾丸の光を叩き込んだ。

砕けた光は、花となった。

それは美しい花だった。

なぜならそれは、命を乗せているから。

青い飛空艇は、黒い海へと墜ちて行った。

「秀一ッ……………！！！！！！」

飛に、脱出のパラシュートは見えなかった。

気付いた時には、海に墜ちていく秀一の機体と。

銃撃の嵐。

避けられたわけではない。岩肌が楯になった。ただの偶然だった。

「テメツツ……!!」

事態を理解するまでに、少し時間が要^いった。

昴が秀一を撃った。

そして今も、昴の銃口は自分達を向いている。

「スバル ツツツ!!!!!!」

渓谷も岩も海も空も、どうでもいい。

飛は速度を上げて、上へと切り返した。

《飛ツツ!!》

無線から飛び出したのは、小暮の声だった。

途端、爆音が鳴った。

瑛己はその銃弾が、どこから発射されたかを見た。

そして、言葉を失った。

頭上から編隊が現れた。

それは、翡翠^{いすひ}の飛空艇。

「【天賦】……」

ポツリと、雨が降り出した。

だが、瑛己はそれに気付かなかった。

《スバル、テメ、裏切ったのかツ!!?》

怒声というよりノイズに近い飛の声に、昴は「ハン」と笑った。

「あたしは、ただ仕事をしてるだけだよ」

《仕事、やと……?》

「趣味で飛んでるわけじゃないからね」

しかし。

「……ハン、そういう事が」

天から現れた翡翠の一団に、昴は舌を打った。

「気に入らないね」

そう言いながら、銃口を飛に向ける。

そして撃った。

ダダダダダダ

「チツツ」

瑛己はかるうじてその銃撃を避けた。

(ここから出なくては)

こんな溪谷の中、その上雨まで降ってきては。勝てるとか抜けるとか、そういう話ではない。

(死ぬだけだ)

だが、空は【天賦】が固めている。どうやらこの溪谷から出すつもりはないらしい。

【無双】は【天賦】の一部隊だと聞いた……あれが【無双】だったとしても、何も代わらない。

だがなぜ？ どうして？

秀一は？ 仲間たちはどうなった？

時折、ノイズのような飛の怒声が聞こえる。

だがそれを確かめる余裕もない。敵は【天賦】と昴と、そしてこの地形である。

ダダダダダダ

ガツンガツンガツンツツツ

(まずい)

避けきれなかった銃撃が入った。機体が大きくぶれる。

そして目の前に、岩肌が迫る。

操縦桿を目いっぱい右へ傾ける。

これを避けたとしても、と瑛己は眉間にしわを寄せた。

(次の銃撃はかわせない)

バックミラーに映らない部分に、確かに背中を取られている【天賦】がいる。

瑛己は唾を飲み込んだ。

ガ　　ツツツ!!

ギリギリで抜ける岩肌と機体の腹との間に、えぐるような音が響く。火花が散る。

操縦桿を握り締める瑛己は、今自分がガラ空きの事がわかっていった。

視界の隅に、翡翠が舞った。

これが最後か。

その途端、翡翠は黄色い閃光を上げた。

《　　聖、　　》

撃ったのは、磐木だった。

その声に、瑛己はらしくなく安堵を覚えた。

瑛己は岩肌のギリギリを抜け、そして声の主を探す。

《逃げる》

そしてようやく、その機体を見つけた時。

その機体からは、黒い煙が立ち昇っていた。

「隊長」

そしてその背後にいる者を。瑛己は呆然と眺めた。

雨に濡れて光るそれは。まさに。

銀色の、獅子。

「……無凱……」

刹那、瑛己は誰かの笑顔を見た。そして光を。

後の事は、覚えていない。

すべてが光に還るのならば。

自分はそれを、望むのだろうか？

……そんな事、今問うた所で仕方がないのだが。

まるでそれは、雷雲の中を飛んでいるようだった。

『……ッッ』

舵がきかない。

飛空艇はもう、もっていかれている。

『……クソッ』

視界を、闇と光が交差する。

何かの残骸が、激しく機体の腹にぶち当たる。

だが、音はない。

機体が大きくバウンドする。叫んだはずだった。だがその声が掻き消えてしまう。

何かの大きな力によって。

抗う事のできない、絶対の、力によって。

『……ッ』

闇と光が交差する。

行く先はわかっている。

男の目から、涙がこぼれた。

だがそれも、荒れ狂う風によって吹き飛ばされた。

夢と現（じゆん）の狭間（ま）の中で。

どうして、兄者！？

瑛己（えいご）はその声を聞いた。

命の借りを返せるのは、命だけなんだよ。静かだが強いその声に、瑛己はなぜか安堵した。そして再び、眠りについた。

次に気がついた時、瑛己は寝台の上にいた。

そして、何を考えともなくぼんやりと、汚れた天井を見つめて
いると。

「やっとお目覚めか」

皮肉げな、少年のような声でした。

その声には聞き覚えがあった……瑛己は時間をかけて、声のする
方へ顔を向けた。

「兄者、気が付いたよ」

寝台の上から、不機嫌そうに自分を見下ろすその顔は。

本上 昂スバル 止まっていた思考回路が急激に動き出す。

色々な事が一瞬にして、瑛己の頭に洪水のようにしてなだれ込ん
だ。瑛己は慌てて起き上がろうともがいた。

そんな彼を、スツと制した者がいた。

「無理するな。まだ傷に障る」

「ッ」

彼を止めたのは、静かな瞳。

それは、深い深い海のような碧みどり。

「聖 瑛己君、だね？」

穏やかなその声は、どこかで聞いた事があると思った。

「……あんたは」

「俺の名は、本上 来（rai）。妹の無礼を詫びる」

「……」

妹……？ 瑛己はゆっくりと瞬きをした。

「君を助けるだけで、精一杯だった」

「……」

瑛己は寝台の背にもたれ、柔らかに揺れる白いカーテンを見ていた。

額に違和感があった。そっと触れると、何かググルグルと巻かれているようだった。

それは、瑛己の体も同様だった。白いサラシが胸から腰にかけて、幾重にも巻きつけられていた。

あの時の傷か……起き上がる時痛んだ。傷は、かすり傷程度のものではないだろう。

瑛己は心の中で眉をしかめた。だが、表には一切出さなかった。

「なぜ」

尋ねたのは、そんな短い言葉だった。

それに、来と名乗ったその男は小さく息を吐き、静かな口調で話し始めた。

「俺がああ場所に着いた時、すべてが始まり、終わろうとしていた。青い鳥は煙を上げて谷に吸い込まれていった。そして空から【天賦】てんぷと、無凱むがいが現れた」

「……」

「もう気付いているかもしれないが、妹が受けた本当の仕事は、君たちをかく乱する事だった」

チラと入口の脇を見ると、そこに昴が、腕を組んで明後日を見ていた。不機嫌に眉間を寄せる彼女は、苛立たしげに舌を打った。

「かく乱……」

「墜とす事、そう言い換えても構わない」

「……」

「許してやってくれとは言わない。だが妹も、【天賦】が出てくる
とまでは聞いていなかった」

「ハンっ、冗談じゃないよ」

「昴」

「【天賦】が出張るなんて聞いてたら、あたしはあんな仕事受けなかった。誰が好んで無凱なんかに手を貸すか！！ あんのクソ親父

……！」

『日嵩』の上島総監か……瑛己はそつと眉を寄せた。

「……皆は」

「まだ公にはなっていないが」そう言葉を濁し、来は声を落として言った。「数名が、【天賦】に拉致らうぢされたと思われる」

「……」

「生死はわからない、それが何人なのかも。俺も、君を拾うのがやっとだった。それ以上の余裕はなかった……すまない」

「……」

瑛己は来を見た。

「なぜ、俺を助けた」

「……」

「……」

「……馬鹿な妹の尻拭い、じゃ駄目か？」

「……」

来はふつと、苦笑した。

「そうだな……もしもそれに理由ワケがあるとしたら。君の父さんに借りがある、そんな所かな」

「……？」

「12年前、聖 晴高に助けられなかったら、俺はもうあそこから……、二度と、戻る事はできなかつただろう」

「12年前……？」

心臓が。トクンと跳ねた。

来は瑛己を見た。その顔には、なんとも言いがたい不思議な色が浮かんでいた。

その目が、瑛己は哀しいと思った。

「12年前 俗に言う？空の果て？で」

哀しいと思った。

(?空の果て?か……)

瑛己は目を閉じ、闇の中でポツリと思った。

つい先日書店で見つけた本、そこにはこう書かれていた。

?空の果て?とは、この世界の矛盾、そして我々の心にある埋めようにも埋められない?最後の欠片^{ピース}?の象徴なのかもしれない。

12年前。

通称?零地区^{ゼロ}?

どの国にも属さない、規定海里の穴とも言

えるその場所だ。

それは唐突に、何の前触れもなく。

空に、空を越えるものが、現れた。

その空から生還できたのは僅か数名。

その中に、瑛己の父の親友である、原田 兵庫と。瑛己が所属する『湊』基地第327飛空隊、隊長・磐木 徹志が含まれるが。

父・聖 晴高はその日以来、消息を絶った。

「……」

兵庫は言っていた。最後に見た晴高は、笑っていたと。

『生きる』

地獄のような空で、その言葉だけを残して。

(父さん……)

父はどこへ行ったのだろうか。それは、瑛己にとってずっと胸に引っかかっていた事なのかもしれない。

そして、?空の果て?とは、何なのか。

だが『?空の果て?に関する研究書』を読んでも、結局、はつきりとした事は何一つ書かれていなかった。

ただ……一つだけ言える事は。

それはそこにあった。

夢や幻ではない。

空は確かに裂け。巨大な口を開け。

父はその空に、消えて行った。

(……そして)

自分はその父の背中を、追いかけている。ずっと、そんな事認めたくなかった。

空軍に入った理由もただ漠然と、母が望んでいるような気がしたから……そして、？空の果て？について知りたいから……それだけでその道を選んだ。

父の事など、関係ないと思っていた。

自分は父の顔もよく知らない。基地に行ったきりで、あまり家に戻らなかった。遊んでもらった記憶もなければ、話した記憶も曖昧だ。

そうという記憶はむしろ、兵庫の方が深い。

だから、瑛己はどこかで、父の事を憎んでいた。……憎もつとしてきた。

(けれど)

瑛己は気付いた。

自分は父の背中を追いかけていると。

父を求めて、飛んでいるのだと。

自分が飛ぶそのワケは。

(会いたいのか……？)

その空に、その面影を、探しているのかもしれない。

その夜中、眠れないまま目を閉じていると、来が「聖君」と少し慌てた様子で部屋に入ってきた。

「【天賦】に捕らえられたのは3人。そのうちに、隊長の磐木君も含まれている」

「……」

瑛己は何も言わなかった。

拉致された3人の安否も、残る3人の消息も。

そして今自分が置かれた状況も……あまりにも考える事が多すぎて。そして、目まぐるしく色々な事が起きすぎた。

瑛己はただ、眠りたいと思った。

睡魔でも悪魔でも何でもいい。この焦りと哀しみを埋めてくれと願った。

腹の傷が、チリチリと痛んだ。

ふう……と、瑛己は長く長く息を吐いた。

窓から望む空は、薄いピンクに色づいている。

太陽は、じきに地平線から顔を出し、今日もまた世界を光で照らすのだろう。

瑛己は軽く首を振り、ゆっくりと寝台から降りた。

「……………」
傍にたたまれていた飛空服の上着を掴むと、肩に引っ掛けた。

それだけの行為に胸がズキリと戦慄つわなみいたが、瑛己にとってそれは、ほんの些細な事に過ぎないような気がした。

そして、静かに家を出た。

思ったよりも普通に歩ける事に瑛己の表情が小さくほころんだ。

吹く風には、濃い草のにおいがする。

懐かしいと思った。そんな時だった。

「どこ行く気？」

「……………」
風にそよぐ草以外、静まり返った朝の世界の中で。

その声は場違いなほどに、鋭利なもののように思えた。

「朝っぱらから何ゴソゴソしてんのかと思った。あんた、そのナリで、どこに行こうっていうの？」

「……………」

「まさか、捕まった仲間を助けに行く　とか言うんじゃないよね？」

「……………」
八八八と、昴は笑った。

瑛己は彼女を振り返りもせず、そつと瞼を伏せた。

助けに行く……………？　助けたい……………？　よくわからない。

(だけど……………)

【天賦】に、磐木達が捕らえられている。

それを聞いて、瑛己は、心が、よくわからなくなった。

ただ、じつとしていられないと思った。

動かなければいけないと思った。

何をするとかしたいとか、そんな問題よりも。

動かなければいけない。

走り出さなければいけない。

それだけが無意識に、瑛己の心を占めていた。

そこには正義感も使命感もなかった。

ただ動きたい　。

「あんた、奴らがどこに捕まってるのか知ってるの？　大体、ここがどこだかわかってるの？　そしてどうやって、【天賦】の根城まで行く気なわけ？」

「……………」

「兄者、こいつ馬鹿だ。さっさと海に捨ててしまおう」

「……………」

瑛己は眉をしかめた。そして、ゆっくりと振り返った。

簡素な建物の脇に、昴と来が立っていた。

来は軽く腕を組んで、難しい顔で瑛己を見ていた。

瑛己も来を見た。まっすぐに、来を見た。

そこには何の曇りも迷いもない。

その瞳に来は一瞬息をのんだ。

そして瑛己の背中に向こう、はるか東の地平線の彼方から、眩い

ばかりの光が溢れ出した。

一瞬くらんだ脳裏を打ち消すように、来は静かに瞬きをした。そして、

「その体では無理だと言っても、聞きそうにないな」

「……」

「警木君たちが捕らえられているのは、【天賦】の4番目の基地、
『白雀』の東だ」

「兄者……?」

「昂、『アルデバラン』は出せるか?」

「……、いつでも飛べるけど、」

「そうか」

小さく頷き、来は瑛己に向かって歩き出した。

瑛己は動かなかった。

瑛己の前までくると、来は微かに微笑み、言った。

「聖君。体に障る、家に入りなさい。朝の仕度をしよう。話はそれからだ」

「……あんだ」

「手を貸すと言っているんだよ」

「……」

「兄者ツツ!!」

「昂。お前だつてこのままでは、腹の虫が収まらないだろう」

「……そりゃ……、だけどツ」

「ふっ。無凱にいいようにコケにされて、黙つてられないよな、お前だつて」

「んな事……グウ、兄者あ」

「ははは。ともかく飯にしよう。聖君。心配するな」

そう言つて来は瑛己の肩をポンと叩き、家の中へと戻つて行った。

「チクシヨ」

残された昂は悔しそうに顔を歪めると、キツと瑛己を睨んだ。

「お前は、あたしらの捕虜なんだ、それを忘れるな」

言い捨て、地面を蹴るようにして来の後を追った。
瑛己は彼女を見送り、そして深く深く溜め息を吐いた。
「……運命の女神呪いは、まだ続いているのか……」
瑛己は太陽を振り返った。
そして、腹が減ったと思った。

「やはり、か」

来が、手にしていたヘッドホンをカタリと置いた。

本棚の間に、無数の機械が埋まっている。

そこでしばらく、ヘッドホンを片耳に当て何かを聞き入っていたが。フツと短く息を吐き、立ち上がった。

後ろで一つにされた長い薄茶の髪が、それに合わせてファサと落ちた。

それに合図に、戸口で腕を組んで立っていた昴スバルが動いた。

音もなく窓辺に寄ると、カーテンを、ザツと一気に閉じた。

不意に現れた闇に、瑛己えいきは小さく目を閉じた。

そして深く深く溜め息を吐いたのは 何を思ってたか。

「現在地はここだ。？弓月海ゆづきうみ？の端にある小さな島。『日高』基地からほぼ南南東に位置する」

ランプの灯りが、どこからともなく吹く風にチチチと揺れた。

テーブルいっぱいに広げられた、薄汚れた地図には、随所に文字や記号が書かれていた。

瑛己はそれをザツと見た。『蒼国』、そして『黒国』……北の王

国『ビスタチオ』、さらにその向こう、『ロンデバルデスク』

聞いた事ない国も幾つかあった。

そんな地図の、中央に書かれた『蒼国』。周りの大きさに比べたら、『湊』など、何と小さなものなのだろう。

瑛己はふと、『湊』から視線を北へと滑らせた。

首都『蒼光』を越え、さらに北に位置する山岳のふもと。

地図に名前すら記されていないそこが、瑛己の故郷だった。

「聖君？」

不意に呼ばれ、瑛己はハッと顔を上げた。

「……それで、隊長達はどこに」

少し慌てたように言っていると、来はコクリと頷いた。

「『日膏』の北、半島の沿いに『白雀』という町がある。その東にある【天賦】第4基地。現在はそこに監禁されている」

「『白雀』」

瑛己は首を傾げた。

確かに、地図にはそう書かれた場所がある。

だが、瑛己はおかしいと思った。

「覚えがない、か？」

瑛己の様子を見て、彼より先に来が言った。

「無理もない。今市場に出回っている物で、『白雀』を記した物は一つもないよ」

「……？」

「この町は数年前に、地図から消されてしまった町なんだ」

「消された……？」

その時、来の目に過ぎった複雑な色を、瑛己は見逃さなかった。

「この町では、国家絡みで軍に関する様々な実験が行われていた。だがある日を境にそれはすべて破棄され、町自体が消滅する事となった。それが、実験の失敗によるものか、逆に成功のためなのか、はっきりした事はわかっていない」

「……」

「だが、今回の磐木君達の拉致にその事は、少なからず関係している」

昂が、「兄者」と咎めるように言った。だがそれに来は小さく首を振った。「いや」

「君達は知るべきだ。特に……聖君、君は」

「一体……」

「さつき、俺はあそこで何を聞いていたと思う？」

問われたそれに、瑛己は眉をしかめた。

「『蒼』の軍上層部が内々に使う電波だ。かなり複雑に暗号化されたものだ、ジャックできても、解読できる者はそうはいないだろう」
「……………」

「それによると、【天賦】は3人の命と引き換えに、聖石を出せと言っている」

「聖石？」

「またの名を、？空の欠片かけら？。一説に、『白雀』の消滅はそれが原因だと言われている」

瑛己は眉間にしわを寄せた。

「その石には不思議な力があるのだという。詳しい事は俺も知らないが……………いわく、世界を変えてしまうほどの力が。その石には秘められているとか」

「世界を変える石……………？」

ああ、と来は頷いた。その顔は、いつになく厳しかった。

「その起源は、人の歴史と共にある。歴史の裏舞台で、その名は時に書物に記されている……………戦争、反乱、剣と剣、銃と銃、そして血と炎の中……………その石は、まるで混沌の中に光を放つように、歴史に姿を垣間見せている」

「……………」

「その石の存在を知る者は少なくない。だがそれは、おとぎ話の類だと思われ、信じる者は少なかった。……………あの時、12年前、あの空にあんなものが現れるまでは」

「……………12年前……………？」

瑛己の心臓が、ビクンと跳ねた。

「そう……………12年前、あの空に、？果て？が現れるまでは」

「……………」

「？空の果て？、その原因は……………聖石・？空の欠片？にあると言われている」

ドクン。

「空の果て?。」

その原因が。父が消えた、その空を。

「?空の欠片?、そんな物が……?」

「聖君、君は知らないかもしれない。だが 君はかつて1度、その石と共にあつた事があるんだ」

「え」

「聖石は様々なルートを経て、今『蒼光』にある。その一つに……、?獅子の海?は覚えているか?」

「?獅子の海?」

忘れるはずがない。

『湊』へ異動して数日。初めて飛んだ作戦の空。

それが……? 瑛己は訝しげに来を見た。

「君達は、『永瀬』基地から2機の輸送艇の護衛をした。そして?獅子の海?を渡り、『明義』へと送り届けた」

「確か積荷は、衣料物資だと……」

「おかしいと思わなかったか? なぜそんな物を狙って、【天賦】が まして、総統・無凱が直々に現れたのか」

「……」

「衣料物資の中に、」

もつと違う物が積まれていたとしたら?

「無凱の本当の狙いは、」

世界を変える力があるのだという。

「まさか」

?空の欠片?。

それを守って。

「飛んでいた……」

これは一体……瑛己はわけがわからなくなった。どういう事だ? こんな。

聖石。

【天賦】。

無凱。

捕虜。

磐木達の命。

その向こうにあるのは。

?空の果て?。

そして、

父さん……!

「……」

こんな。

何がこの空に。この空で。

そしてこの空を。今。

「そして、無凱は『蒼』に　　いや、橋爪に、聖石を出せと言った」

磐木達の命を楯にして。

「だが疑いなく、橋爪がそれに応じる事はない。そして磐木君達は、殺される」

軍部最高総司令長官・橋爪　誠。

瑛己は地図を見た。だがその心は別の、違うものを見ていた。

「期日は明日の夕刻。日没と共にタイムリミットだ。動くとしたら、今夜しかない」

「……」

「昂。いいな?」

「……チツ……限りなく気乗りしないけど、兄者の命令なら従つよ」

「ははっ、いい子だ」

「……」

「さて……問題は君だが」

瑛己は顔を上げた。

「兄者、足手まといになるよ」

「自分の体の事は、わかっているな?」

瑛己はコクリと頷いた。

つい先ほど、瑛己はそれを見ている。

胸から腹にかけて、ひどいアザと火傷があった。薬がいいからか、普段はさほどでもないが……時折、燃えるような痛みが走る。

左腕も思うように動かない。

「……」

昴に言われなくとも、ついて行けない自分を知っている。

行った所で、逆に最悪の結果を招くだけだろうと、瑛己はわかっている。

わかっている。

なのに。

「その目が、言っている」

来がフツと、苦笑ともつかない笑みを漏らした。

行きたい、と。

瑛己は頭を緩く振った。それでも。

本能が叫んでいる。

行きたいと。

走りたいと。

「……昴、『アル』の後ろに乗せてやれ」

「兄者」

「危険は、元より承知だ」

「……」

「だが聖君、俺も、思う」

まっすぐな目が、瑛己を見ていた。

「確かに君は、ここにいてべきだと思う。今回の事は、君が経験した事のない分野の話だ。俺にも保証はできない。正直、君がいればリスクは大きくなる」

「……」

「だが」

なぜだろう？ 来は思った。

「君は行かなければならない、そんな気がする」

そして知らなければならぬ。
その空で、何が起こったのか。

そしてこの先、この世界で何が起ころうとしているのか。

「君は……その目で、見なければならぬのかもしれない」
それはひとえに。

聖 晴高の息子がゆえに。

そしてその背中を追いかけて。

この空を、翔けんとするがゆえに。

「兄者、潜入は？」

「『白雀』を使う。あそこには第4基地につながる隠し通路がある。そこから潜入する。そして聖君、さすがに君をこの先には連れに行けない。そこから先は、俺と昴に任せて欲しい。それでもいいか？」

「……」

瑛己は小さく頷いた。

それに来は笑った。

「心配するな。空を飛ぶだけが、俺達の仕事じゃない」

「あたし的には、徹底的に気乗りがしないし、陸は性分おかじゃないんだけど」

「こいつはこう言っているが、銃の扱いは俺より慣れている。そこらの軍人よりはよほど使うだろう」

「って、仕込んだのは兄者じゃないか！」

「……すまない」

瑛己はゆっくりと頭を下げた。なぜか、下げたいと思った。

それに昴はハンとそっぽを向いた。

「勘違いするな。あんたのために飛ぶんじゃない。あたしのプライドのためだ」

「……」

瑛己は少し嫌そうに顔をしかめたが、最後には苦笑を浮べた。

「ともかく」来は大きくそう言っつて、前髪を掻き上げた。

「出立は、深夜。夜明けと同時に作戦終了としよう」

昴がワザと大きく溜め息を吐いた。だがそれ以上何も言わず立ち上がると、勢いよくカーテンを解き放った。

今後は陽射しが、目にしみた。

瑛己は2、3度瞬きをし、そして窓越しに映る空を見上げた。

太陽を覆い隠すものは何もない、蒼いばかりの空だった。

(父さん……)

そっと呟いたその声はどこへ消えて行くのだろうか……ふと、そんな事を思った。

そして。

後に、このフライトは、瑛己にとって重要な意味を持つ事となる。だがそれはもう少し先の話である。

石畳に、己の印を刻み込むようなその足音に、磐木は薄らと目を開けた。

窓一つない、格子の檻の中。

ランプの灯りでは、ここに巢食う闇は照らしきれていない。

傍らに、飛たかきがいる。

あれからずっと、気を失っている。それが、磐木には丁度よかった。

事が終わるまで、どうか目を覚まさないで欲しいと願う。

それが例え、どのような形であれ。

靴音が目の前で止まった。

代わり、鉄の格子の向こう闇の中に、巨大な人影が現れた。

顔はよく見えない。だがそれが誰なのか、磐木はすぐにわかった。

「どうだ、心地は」

空気を震わすような、声だった。

磐木は唇を噛みしめた。そして、音を殺して唾を飲み込んだ。

「無凱……！」

【天賦】 総統・無凱。

その男はニイと笑うと、鋭く睨む磐木を見下ろし、山のように声を轟かせた。

「久しいな、磐木」

「……」

「こうして会うのは、いつ振りか」

「……」

「生きて再び見えた事を、嬉しく思うぞ」

「冗談じゃないと、磐木は内心拳こぶしを握った。

「答える」

磐木は一層強く、無凱を睨んだ。

「何をだ？ 我が前を助けた事か？」

「違う。俺の命を、誰と何の、取引にしているかだ」

「ふははは！」

磐木とて、馬鹿ではない。

自分がなぜここにいるのか……こんな手の込んだ事をされているのか、その察しはつく。

人質。それ以外に、自分が生かされている理由はない。捕らえられた理由などない。

だがそうになると、相手は誰か。

ただ1人しか、思い浮かばない。

「相手は橋爪総司令か」

磐木の命が天秤で価値を持つとすれば、それは『蒼国』。

そして交渉相手は必然、軍で最高の地位を持つ者となるだろう。

「橋爪 誠……、磐木は明らかに嫌悪の顔を浮べた。
そしてその頬を、一筋の汗が流れた。
「偉くなつたものだな、彼奴も」

「……」
「あのような事がなければ、よもや、お前の敬愛する聖が、そこに
立っていてもおかしくないものを」

「……」
馬鹿な。そう磐木は吐き捨てた。

「聖隊長は、そんな事望まん」

「ふふ、然り」

さも可笑しそうに無凱は笑った。それにランプが、ユラリユラリ
と激しく揺れた。

「聖 晴高……懐かしい名だ」

「……」
「すべては遠い彼方^{かなた}。されどそれは、すぐそこにある光景。一度目^{ひとたび}
を閉じれば、我はあの空に帰れそうな気さえする」

磐木は訝しげに目を細めた。

「磐木、あの空を覚えているか？」

「……」
「俺とお前、聖と袂^{たもと}を別つた最後の空だ」

「……」
「我にとつて、あれほど甘美^{かんび}な空は、後にも先にも存在せぬ」

甘美？

小さなランプの光が、磐木の目の中に灯った。

「俺は聖隊長を」

そう言つて磐木はゆっくりと立ち上がった。

「生涯賭けて、守り続ける」

「聖を守る？」

「俺にとつて隊長との最後の約束は、絶対のものだ」

「それが、お前がこの空にある理由か」

「そうだ」

一際、無凱は大きく笑った。

「お前は変わらぬ」

それがいい事か悪い事か、磐木はもうその答えを知っている。

「『七ツ』 あの時命を賭した、聖の遺言のなれ果てか」

「……」

「磐木、お前はその遺言に、己の命を捧げるか」

それに磐木はフツと唇の端を釣り上げた。「愚問だ」

「元より、あの空で覚悟は決まっている」

「ふははは！ 小気味良い」

「無凱、貴様の狙いは何だ」

ピタリと無凱を見つめ、磐木は格子の手前に歩み出た。

「俺達を殺すために生かして、何を目論む？」

すると無凱はクククと低く笑い、スツと手を出した。「この手」

「あの折、聖によってもぎ取られた。この足もだ」

「……」

「我の体の半分は、もはや痛みを感じぬ。だがこの心とて同じ事

私の願いは、お前と相対し、また、事同じくする」

「……」

「どの道、長居はさせぬ。神にでも願っている事だ」

「……」

無凱はもう一度ニツと笑うと、格子に背を向けた。

その背中に磐木は「おい」と声を掛けた。

「空の七つ星、7番目の星が、何と呼ばれているか知っているか？」

無凱はゆっくりと振り返った。

「破軍星」

「……何が言いたい」

だがそれに磐木は何も答えなかった。

しばらくの沈黙の後、無凱はフンと鼻を鳴らし、歩き出した。

磐木はその背を見るともなくそこに立ち、そして、ゆっくりと目

を閉じた。

「祈る神など、おらん」

だが祈るとすれば。

磐木にとってそれは、ただ一人の顔。

(隊長……)

その顔と、7番目の星が、重なって見えた。

始めて飛空艇に乗ったのは、瑛己えいきがまだ、3歳の時だった。

瑛己はその時の事をよく覚えていない。だが時折母が、とても懐かしそうに語って聞かせてくれた。

作戦の帰り偶然立ち寄った晴高は、咲に内緒で瑛己を胸に抱き、飛んだ。

町の上をグルリと回り、山を空から臨み、飛ぶ鳥を追いかけて。陸おかに戻ると咲はカンカンで。晴高は苦笑しながら何度も頭を下げた。

だが瑛己は、とてもとても嬉しそうだった。

お父さん、お父さん、ねえ、乗せて。連れてって……基地に戻る直前まで、晴高の手を掴んで離さなかった。

今度、また、お母さんに内緒でな。

出立前、晴高は瑛己の頭をクシャクシャにして、いっぱい抱きしめた。

「……」

瑛己はその時の事を、よく知らない。

記憶があるのは、いつだったか、兵庫と一緒に上がった空。

やはり咲にはこっそり、古びた複葉機の後ろに乗せてもらった。

『お前のとーちゃんは、空が好きでたまらないんだよ』

その時はただ、凄いと思った。

『んで、お前のかーちゃんは、そんなとーちゃんが好きでたまらないんだよ。ハルも、咲ちゃんが好きでたまねーのにな。んで、お前が愛しくて仕方がないっつーのに』

空がきれいとか、景色とか、風とか。そんなものを感じる余裕もないくらい。

『お前のとーちゃんは、しこたま、不器用なんだよ。何で人つてのは、好きになればなるほど、不安になるんだろう？ 言葉なんかなくたって、全部伝わってるし、わかってんのにな』
必死に歯を食い縛って、振り落とされないように、置いていかれないように、前を見据えていた。
『だけど瑛己、お前は……どんな時も、とーちゃんの事を、信じてやってくれ。じゃなきゃあいつは、帰る場所をなくしちまう。おじちゃんとの約束だ。な？』

《降りるよ》

短い言葉が鳴ったか否かで、飛空艇はクツと頭を下げた。

瑛己はハツと、目を見開いた。

人の飛空艇に乗るといふのは、こういうものだっただろうか。高度を下げる夕陽色の機体は、まるで、風の海を斬り込んでいくかのようにだった。

普段はこんな事、何とも思わないのに。ふわっと湧いた浮遊感に、背中がゾクリとした。

それは、周りがまだ視界の利かない、夜陰に包まれていたからかもしれない。

暗闇の中でも、目の前に、草原とわかる場所が広がった。

このスピードで着陸するというのか。多少はスピードを落としたものの、まだ、速度は生きている。

だが昇スバルは慣れたものだった。無理な着陸にギアが悲鳴を上げたが、それでも、曲線を描くようにピタリと陸地に飛空艇をつけた。

「昇、足が吹っ飛ぶぞ」後から着陸した来ライは、操縦席から呆れ顔で昇に言った。

「この間も言っただろ、ギアに負担を掛けすぎだと」

「キュッと言うあの音がいいんよ。何か、走ってきたぞって感じが

して」

「いつか命を落としても、俺は知らないからな」

昴の愛機・『アルデバラン』。そして向こうに停まるのは、来が乗ってきた飛空艇、『フェルカド』。

『アルデバラン』は最高2人乗りに対し、『フェルカド』は多人数型飛空艇、大きさが一回り違う。

小型の旅客機のような外観で、操縦席の他に数名が乗員できるようになっていた。

2機はそのままゆっくりと進むと、少し先にあった森に、飛空艇を潜める事にした。

「この森を抜けた先に、『白雀^{はくせう}』がある」

瑛己はトンと飛空艇から降りた。痛みは決して、顔に出さない。

包帯の上から、飛空服の上着を羽織っただけの格好であった。だが寒さはない。風には、夏のおいが混ざり始めている。

来も昴も、確かに黒を基調にした服装だが、普段とあまり変わらなかった。

ただ、昴の腰に光る黒塗りの銃を。瑛己は複雑な思いで見つめた。3人は無言のまま森を歩いた。

そしてものの5分も経たないうちに、木々は途切れた。代わりに現れたのは、石畳と。

「ここが……」

地図から消されてしまったという町。

風が、ヒュウと息を飲むような音を立てた。

瑛己は思った。

ここには、何かの、気配があると。

「兄者、？あれ？を1人置いてきて、よかったわけ？」

タッタタッタ

下水道に、昴の声が微かに響いた。

だがそれに、来は答えなかった。

昴は「チエツ」と小さく舌を打ち、代わり、走る事に集中した。

「昴」

大分遅れて、来は口を開いた。

「何？」

「もしもの時は、わかってるな？」

「……」

昴は一瞬、眉間にしわを寄せた。そして「わかってるよ」

「俺の事は捨てて」

「わかってるって。聞きたくないよ、そんな話」

「……」

出口が近い。

来はスツと昴の前に出た。

昴はその背中を見て思った。

兄者の背中には、ほんのすぐ、そこにあるというのに。

(なぜか、遠く感じる)

来の背中には、翼がある。そう思う事がある。

それが昴にとって、時折、不安でたまらなくなる事だった。

『白雀』に、瑛己は一人、ポツンと立っていた。

ふと空を見上げると、明らかに、先ほどより明るくなっている。

それに少しずつ、町が浮かび上がってくる。

静かだと思った。

手近に転がっていた石に腰をかけ、何を見てもなく、町をグル
リと見渡した。

地図から消えた町。

軍が関る、何らかの実験が行われていたという……町。

ここで何があったのだろうか。

だが、来は言っていた。それに、？空の欠片？が閉まっているかもしれない。

聖石・？空の欠片？。

そんな物知らない。初めて聞いた。世界を変える力を持つかもしれない石……歴史に刻まれる混沌の中に、光を放ってきたという石

正直言つて、興味はわからない。

そんな事言われても、よくある物語の中の一つにしか思えない。だが……それが、？空の果て？に関係しているとなれば。

「……………」

瑛己は瞼を伏せた。

ふと。瑛己の脳裏を、あの日の光景が過ぎった。

『空軍に、行こうと思っ』

あれは、飛空学校へ行くと決めた時だった。

瑛己は母の顔を見なかった。見るのが怖かったのかもしれない。

『そう』

咲は短くそれだけ言つて、洗い物を始めた。

そんな母の背中を、瑛己は黙って見ていた。

『母さん』

『自分の空を、行け』

『……………』

『父さんの言葉』

『……………』

『あなたの好きにきなさい。私が止める理由はない』

『……………悪い』

あれから3年後だった。

どうにか学校を卒業し、『笹川』空軍基地への配属が決まった…

…そんなある日。

咲は、空に還った。

「……………」

どうやって家に戻ったのか、覚えていない。

瑛己が見たのは、静かに横たわる母の姿。

元々、心臓に病を持っていた。それがここ数年悪化していた……それは後になって知った事だった。

母の口元は、なぜか、笑っているように見えた。それは、瑛己がそう思いたかっただけなのかもしれないが。

「……………」
母の事を考えると、瑛己の胸は哀しく痛む。時折、叫び出したい衝動に駆られる。

(父さん……………)

父の事を思うようになったのは、母が亡くなってから。

胸の中に渦巻く様々な想いを、すべて、？父？という名前に向けようとした。

哀しみと痛み、不安と絶望。

どうして父はいなくなってしまったのだろうか。

父がいてくれたら母は、……………そして自分は。

そんな事考えた所で、何も変わらない事を知っている。

だからこそ　　瑛己は、辛かったのかもしれない。

今目の前にある現実をすべて？父？のせいにしてしまえるほど、

瑛己はもう、子供ではなかった。

むしろそれができていたら。どれほど楽だっただろうか。

「……………」

父は、母と共に生きていた。

そして。

「……………」

瑛己は瞼を伏せ、スツと立ち上がった。

瑛己は父と共に、生きている。

夜明けは刻々と近づいている。

階段を5つ跳ばして、昴が宙に舞い上がった。

その気配に、見張りの男は振り返った。

その目に映ったのは、空より迫る昴と、ランプの灯りに照らし出された、笑顔。

刹那、男の側頭を昴の回し蹴りが捕らえた。

宙から繰り出された、渾身の一撃。

諸に入ったそれは、ゴキという、骨の碎ける鈍い音を生み。

男の体は、奇妙な具合に歪み、壁に叩きつけられた。

半分開いたままの瞳には、果たして、何が映ったのか。

だがそんなものはや興味ないように、昴は「ふうー」と満足げに息を吐いた。

「昴。もつと慎重に動けないか」

後からゆつくりと階段を降りてきた来が、呆れ顔で、妹の会心の一撃の有様を見下ろした。

「だってー兄者、やっぱ私こーゆーの向かない。肩凝っちゃってさ」
そう言っつて両肩をグルグル回す昴に、来は苦笑した。

「大体、下水からそのまま【天賦】の地下牢……何か、ここが【天賦】の基地だつて実感湧かないよ」

地下の下水は、地下牢の一室に続いていた。

そのような所にこんな道があるというのは、かつてここから脱走した者がいるという事である。

実際、下水から牢に通じる狭い横穴は、手で彫り進められた跡が残っていた。

掛けられていた錠前を来が手早く外し、地下牢の中を音を殺して走った。

「牢屋ばっかだね、ここ」

昴も絶句するほど、走っても走っても鉄格子が続いていた。

「この一帯の地下はすべて、牢獄で埋め尽くされている。ここは、【天賦】の中でも拷問や監禁、処刑を主に行う場所だ。ゆえに別名

『地獄の門』と言われている」

「ふーん。どうりで、カビた血の匂いがするわけだ」

だが、昴は大して興味なさそうにペツと舌を出した。

壁に掛けられたランプに、火は灯っていない。この辺りは使われていない証拠である。

来と昴は走った。

不意に、突き当たった階段に、ロウソクは灯されていた。

下へ、下へと。

来は小さく頷いた。2人はそのまま、さらに地下へと向かった。

途中何度か、見張りの男に出くわした。だが相手が気付くか否かで、来か昴のどちらかが床へ沈めていった。

「恐らく、その階段を下に行つて、左へ抜けた先に」

その矢先、角にいた見張りを昴が回し蹴りで崩したのである。

「銃は使うな」

途端、男が最後に壁に叩きつけた音を聞いた何人かが、何事かとやってきた。

「わかつてるつて」

闇に乗じるのは、慣れている。

体勢を低くして昴は走る。

そしてそのまま、スピードと共にその足が虹を描いた。

「ッ!？」

闇から突然現れた衝撃に、駆けつけた男達が声を上げようとするや否や。

来の手刀が、それを斬った。

そして同時に、後ろから現れた者を昴の飛び蹴りが首を斜めに絶ちつけた。

「ゲロ弱。つまんない」

ブチブチ言いながら、トントンとつま先を叩く。

彼女を無視して、来は手近の牢に近づいた。そしておもむろに、その錠前に向かった。

ものの数秒。カチリと小さな音がした。

「早く」

昴は、大きく欠伸あくびをした。

「君は……?」

格子の向こうから低い声が、訝しげに響いた。

「『湊』327隊長・磐木殿とお見受けしましたが」

「……」

「私は本上 来と言います。まずは妹の不始末を詫びます。ともかく話は後で。直に気付かれます」

「何……?」

「助けにきたって言ってんだよ」

昴がスツと来の横を抜け、牢の中へと滑り込んだ。

「ここにはこれだけ?」

そう言っつて、そこにいる者を見渡す。

「捕われたのは3人だ。いるか?」

「ああ。顔に星があるにーちゃんと……ああいつか。どいつもこいつも、のん気に寝てやがる」

そう言っつて、昴はクスリと笑うと。そこに寝転がっていた飛たかきに歩み寄った。

そして。

「起きろ、タコ!」

ドカツと、その頭を蹴飛ばしたのである。

「昴っ!」

慌てたのは来である。しかし磐木は案外、平然としていた。

「……タタタ……」

意識を取り戻した飛が最初に見たものは。

「ゲツ・モーニン」

怖いほどの笑みを浮べた、本上 昴、その人であった。

瑛己は、何を指すともなくポツリポツリと町を歩いた。

『白雀』。その町並みは、白い石の廃墟という印象だった。

建物は傷み、崩れ、原型を正確にとどめている物はほとんどない。こうなる以前は一体どんな所だったのだろうか……？ 瑛己は脳裏の中で、賑やかに人が行き交う町並みを想像した。

古びた木切れが転がっている。『……亭』、宿だろうか、食堂だろうか？ それとももっと違う何かの店だろうか？

瑛己はその看板らしき木切れが落ちていた傍にあった建物に目を向けた。

入口は、放たれたままになっている。

覗いてみる。薄暗い。天井が半分落ちた空間があるだけだった。そして燃えた跡がある。

「……」
瑛己は店を離れ、再び、歩き出した。

沈黙という時間に守られた町並み。

地図から消されてしまったというその町は。

「……」
爆撃に遭っている。瑛己はそう思った。

白い石畳に時折こびりつく黒い跡。

時間と風だけでは、ここまで町は崩れ落ちない。

ひしゃげたように碎ける建物は。天井から何かを叩き込まれた衝撃を物語っている。

しかし一体、なぜ？

「軍に関する実験、か……」

それが何であれ。

その爆撃の主が、一番消し去りたかったのはここだなと、瑛己は不意に立ち止まった。

そこには、黒い大地が広がっていた。

何かの建物があった形跡はある。だが。

それは、見事なまでに完全に、消え失せていた。

スッポリとそこだけがまるで、別の次元にでも通じているように。世界から剥ぎ取られていた。

ただただ、黒い大地を残して。

焼けた大地に、何かを刻み込むかのように。

「……………」

『白雀』。

一体ここで、何が起こったのだろうか？

吹いた風が何かを呟いたように聞こえたが、瑛己にはそれが、わからなかった。

「…………… 妙だ」

来が、ポツリと呟いた。

「何が？」

それに昂が、少し苛立たしげに言った。

昂がご機嫌斜めな理由は、一向にはかどらない脱出の途だった。

来は磐木に手を貸していた。そして新が飛を支え走っていた。

磐木が右足と脇腹を骨折、飛が全身打撲状態。しかし、新だけは無傷だった。

「で？ そこを右に行きやーいいのん？」

そしてなぜか、元気である。

「飛いー、もつとチャッキリ歩けよ。ほれほれ、元気出して！」

「……………」

飛は無言で、齒をギリと鳴らした。そして顔を上げたその視線の先には、昂がいる。

昂は飛の、殺気を帯びた視線に気付いていた。だからこそ苛つく現状でかるうじて、嘲笑が浮べられるのである。

「静か過ぎる」

そんな中で一人、来は厳しい面差しで辺りの気配を探っていた。だが、誰もいない。

見張りも、追加の兵も、何も現れない。

ただ、5人の足音だけが闇の中へと消えていく。

「まだ気付かれていないって事？」

チラリと来は、磐木を見た。目が合った。

「……」

磐木の双眸に、来は微かに目で頷いた。そして「ともかく急ぎましょう」と言った。

だが、背中にまとわりついた嫌な予感、消えてくれそうになかった。

それは、偶然だった。

一人、『白雀』という町をボンヤリと歩いていると。

瑛己の耳に、微かに、リン……という鈴のような音が届いた。

鮮明な音ではない。サビに濁った、聞こえるか聞こえないか、そんな程度の音だった。

だが、瑛己にはそれが聞こえた。そして音を振り返った。

そこに、一枚の扉があった。

建物……そう呼べるような物では、もう、なかった。外から見ただけでも、そのほとんどは消えていた。

瑛己はジャリと靴を鳴らし、その扉へと向かった。

こんなふうになっても、扉はしっかりと、内を守るように閉じられている。

そのノブに、鈴は引っかかっていた。

「……」

リン……

風に、鈴が鳴いた。その音は、先ほどより強く聞こえたような気がした。

瑛己はそっと、ノブに手をやった。

回らないと思った。

だけど、回るとも思った。

ノブは始めこそギギと嫌な摩擦を上げたが、ある一定を過ぎると、奇妙なほどすんなりと瑛己の手の中で滑った。

「……」

扉を開ける事に、少し躊躇った。

それなのになぜそれを開けたのだろうか？

音もなく、扉は開いていく。

天井は意味をなしていない。密封された空間ではない。なのに、

中からふんわりと香ったその空気は何なんだろうか。

その空気を、瑛己は知っているような気がする。どこかで感じた事があるような気がする……だが、わからない。

足を踏み入れれば、そこには。ただの空間があるだけである。

ここが民家だったのか、何かの店だったのか、それとも……？

何も、わからない。

本棚の一つも、食器棚の一つも、テーブルの一つも、残っていない。

あつたのはただ、椅子。

壁際に唯一、形を留めていたその上に。

なぜか。写真立てが置かれていた。

瓦礫の中にあつて。その一角だけが、奇妙な違和感に包まれている。

瑛己は一步、踏み出した。

誰かの意思が、ここにある。でなければあり得ない光景。

瑛己はその写真を、そつと手に取った。

扉が守っていたものは。

「……！」

なぜ？ そう思った。

心臓が、大きな音を立てて跳ね上がる。

それは、こんな所で見るとは思えない写真。

飛空艇。

こんな所で見るとは思えない、人。

それを背にして、飛行服に身を包んだ2人の男が立っている。

どうして、こんな所に。

聖 晴高。

なぜ？ 何で父さんが。

そして、もう一人は。

「……」

微かに微笑む、その顔は。

瑛己はその人を知っている。
いや、知っていた。父が消えてしまふ、その前までは。
家にもよく遊びにきていた。

冷たいとか、怖いとか、仏頂面だとか、そういう印象よりも。

瑛己はその人を、こう思っていた。

手の大きなおじさんだと。

いつも、瑛己の頭を撫でてくれた。

あまり言葉を交わした記憶はない。だけど……。

瑛己はその人が、嫌いではなかった。

世間で流れるどんな噂よりも。

瑛己はその人が、時折見せたはにかみ笑いを……信じていた。
ずっと。

いつかの、あの日まで。

橋爪 誠。

あの人の事を。

信じていた。

「聖君！」

声に、瑛己はハッと顔を上げた。

来^{ライ}だ。慌てて、咄嗟に瑛己は写真立てをズボンのポケットに突っ込んだ。

そしてそこから飛び出すと、丁度、来と出くわした。

「……、こんな所にいたのか」

来の表情に、安堵が生まれる。

瑛己は大きく息を吸い、それから「皆は？」と聞いた。

「無事だ。先に飛空艇に向かった」

「そうか……」

瑛己の顔に笑みが浮かんだ。だがそれを掻き消すように、来が少し声を荒げた。

「急ごう。早くここを離れた方がいい」

「……？」

「どうも、嫌な予感がする」

それはどういう……？ 瑛己が口を開きかけた途端

一発の銃声が、空に舞い上がった。

鳥が、静寂を突き破るように空へと翔けて行く。

「スバル 昂！？」

来はハッと振り返った。

そこに。

「あに、じゃ」

昂が立っていた。

両手を後ろできつくねじ上げられ。

「ふはははは」

その男。

【てんぷい 天賦】の無凱むがいと共に。

「誰が動くのかと、楽しみであった」

ザザと建物の陰から、黒い人垣が現れた。

一瞬にして囲まれる。その様子を、瑛己は眉をしかめて見ていた。無数の銃口が、こちらを向いて光っている。

「だがまさかお前が出張るとは……この我にも予想ができなかった」
来が、瑛己を無凱から隠すように、スツと立ち位置を変えた。

「久方ぶりだな、ライ」

「……」

瑛己は、表情の見えない来の後ろを見た。

背中に流れる長い髪が、風に揺れなかった。

「俺の事を、まだ覚えておいででしたか」

その声には、苦笑ともつかない笑みが含まれていた。

「忘れようにも、忘れまいて」

あにじゃ……昂の口元が揺れる。

「妹を、放してもらえませんか？」

来の首筋を、汗が伝って流れた。

「これが、お前が我を裏切り、かつ、守り抜こうとするものか？」

「……」

静寂が痛い。

「であるとしたら、あなたはどうかしますか？」

「3つの首が姿を変えようとも、それは等しく同じ事だと思わぬか？」

「……」

「ましてその3つが、どのような果てを辿ろうとも。奴にも、さして興味のわく事ではなかるう」

「無凱。俺達を殺すか？」

その言葉に、瑛己は初めて、目の前にいるのがその男だと気がついた。

【天賦】 総統・無凱。

瑛己は来の陰から彼を見やった。

巨大な男だと思った。

風になびくのは、深紅と漆黒のマント。そこから突き出すのは、鍛えられ隆起を帯びた黒い二つの肩、そして双腕。身にまとうのは、黒光りする鎧のような物。

その面差しは。腕と同様日焼けした肌……そして、左目を覆う、銀の眼帯。

(これが……)

来の問いに、無凱は答えなかった。代わりに、大きくその口元を歪めた。

「お前はいつから、生きる事を望むようになった？」

「……」

「変わったな、ライ」

「……」

「我の知るお前は　死こそ唯一の神とうたった男。もっと暗く、強い眼をした男だった」

「……」

「あの頃のお前……我の右腕として、【天賦】に黒き翼を広げし頃のお前、何がそれほどお前を変えたのだ？」

来の肩が、少し揺れた。

瑛己も昂も、来を見ていた。

だが、次に聞いた来の声は。とても涼しく、穏やかだった。

「それが知りたければ、あなたも、？空の果て？に飲み込まれてみればいい」

「……」

「？空の果て？に飲み込まれ、地獄の空を彷徨い、そして、二度と生きては帰れないと思ったこの空の下に、もう一度降り立つ事ができた時……あなたも、嫌でも変わる」

「……」

「俺には、守りたいものがある」

「……」

「時間は不変だと信じていた。あの頃俺はすべてを後回しにして、

ただ自分の思うがままだけに走っていた……一番大事なものを放り出して、絶対というあやふやな神に託し、見向きもしなかった」

「……」
「俺はもう、後悔をしたくない」

簡単に死を語りながら、本当は、死ぬ事がどういふ事かも知らなかった。考えてもいなかった。

それを思い知らされたあの時。

来は、心に決めた。

「いつかもう一度迎える最期の瞬間に。俺は笑顔でありたい」
「……」

兄者……昂の声が、微かに聞こえた。

聖君、と、瑛己にだけ聞こえる声で来が言った。

「俺が突破口を開く。君は逃げろ」

「……あんたは」

来はそれに答えなかった。

笑顔でありたい。その瞬間に、来は自ら進もうとしている。見えないとはわかっている。だが、瑛己は首を横に振った。

「来、」

「合図したら」

やめる。やめてくれ。

命の借りを返せるのは。

そんなものいらない。

そんな事は、勝手に、空にでもわめいてくれ。

「ライ」

無凱が、ゆっくりと口を開いた。

「ならば我が、お前に、お前の望みを与えてやる」

その時だった。

空が、高く、鳴ったのは。

耳に飛び込んだのは、軽い、エンジン音。
空を翔ける、飛空艇の唸り声。

何？ 瑛己は天を仰いだ。その刹那。
ドドドドドド

天から、光が、ほとばしった。

瑛己達の横を、薙ぐように降り注いだそれは。

銃撃の、雨。

鮮血と悲鳴。

だがそれ以上に。瑛己の目に映ったのは、その飛空艇の艇影。
それは、セピアに。

「クツ、撃てツッ！！！」

無凱の怒声を合図に、銃撃が、空に向かって放たれる。

その瞬間を、来は見逃さなかった。

風のように走ると、胸元から銃を抜き。

「ぬっ！？」

無凱の手が、少しだけ緩む。それに昂は、「ンアアアア！！」

と声を上げ、肩で無凱に体当たりをした。

ダンダンダン！！

銃声が舞う。

体勢の悪い昂の体当たりでは、無凱はビクともしない。だが、気をそらすのには充分だった。

来の撃った弾の一つが、一瞬から空きになった無凱の腕を突き抜けた。

血が吹き出す。だが、無凱の顔に、動揺の色はない。

遠退いていたプロペラ音が、再び、グンツと耳に押し寄せ
る。

「くああアアア　　ツツ！」

昴の悲鳴が響いた。

無凱によってその細い腕が、あり得ない方向に捻じ曲げられていく。

「ふははははは！！！」

血を流しながら、もう一つの腕で、ライの体を簡単に弾き飛ばす。瑛己は空を見た。そしてその飛空艇から何かが落ち、風にはためいた。

瑛己はそれが何かを理解して。

次の瞬間、走り出した。

「ムツ！？」

瑛己を認めた無凱の腕が、襲い掛かる。それを間髪、地面を転がって避け。

瑛己は手を伸ばした。

そこにあつたのは、昴の。

黒塗りの銃。

エンジン音が増していく。

拳銃なんか、使った事はない。

だが、瑛己はそれを握り締め、真っ向、無凱に突きつけた。

銃口を。そして。

その双眸を。

その面かほに、無凱は。

「　　ツツ！！？」

その顔を無凱は知っている。その目を、無凱は。かつて、その空で。

エンジン音が、

昴の手が、スルリと抜けた。

刹那、瑛己は銃を捨てると、倒れ込もうとする昴を抱え、無凱に背を向け走り出した。

「来ツツツ！！！！！」

起き上がるうとしていた来を、無理矢理引つ掴み、
ドドドドドド！！！

空から振る、弾丸の雨。

そしてそこから垂らされた、縄の梯子へはしごを。

来が、その意図をくみ、瑛己の腕を取った。

そして瑛己と来は、同時に手を伸ばす。

「　　ッッ！！！！」

ザンッ

一瞬の出来事。

無凱の目の前から、瑛己達3人は、セピアの飛空艇と共に、明後
日の空へと飛び去った。

「…………ふはは」

飛ぶ鳥は、もうあんな遠くを飛んでいる。

消えて行くその残像を見送りながら、無凱は一人、笑った。

彼の周りには、血の海がある。

自身、腕から血を滴らせながらも。

「聖　晴高アア…………！！」

その名を、呼んだ。

かつてその空で翼を見え、そして、果てへと消えて行った蒼い鳥。

それと、たった今銃口を向けた少年は。

「そうか…………そういう事が…………」

無凱の脳裏に、『獅子の海』が蘇る。

あの時、空（ku-u）が現れる間際、真つ向勝負を挑んできた

あの飛び方。あの時胸に浮かんだ、奇妙な感覚は。

聖　晴高。

12年前のあの時と同じ、あの翼。

「くはははは…………そうか、そうか…………」

無凱は両手を拳を握り締めた。
また空が、面白くなる。
無凱の胸を、鼓動が激しく、打ち続けた。

来の合図に、瑛己は陸地に降り立った。
ドサリと、不恰好に尻から落ちた。だが、傷が大して痛まなかった。
たので、瑛己にとってはそれでよかった。

昂を抱いて、来が梯子から手を離れた。

「……ッ」

手を抑え、起き上がるのに苦労している昂を、瑛己は助け起した。

「……」

昂はそんな瑛己を、不思議そうに見つめていた。

「……りがと」

しかし次の瞬間、昂は瑛己の手を払い、来の元に向かっていた。
そして。

ズザザザ

草の中をなめらかに、それが、空から降りてきた。

セピアの飛空艇。

その真ん中には。

「……山岡」

操縦席に乗ったままのその男の名を、来が小さく口で唱えた。

「礼はいらん」

黒いサングラスをしたその男は、ニヤリと笑い、胸から煙草を一本取り出した。

「他の連中も、無事に戻れるようにこっちで手配しておいた」

「……」

「古い知り合いがまた1人、俺に許可なく死のうとしてやがるんで、頭に来ただけだ」

「山岡……」

「これで、お前への貸し借りはなしだな」

「……悪い」

煙草を口の端にくわえると、火を点ける。

銀色のジッポいで。

その表面にあるのは、飛空艇の胴体に描かれた物と同じ。

キスマーク。

瑛己はその男を、じっと見ていた。

男はその視線に気付いたか、ようやく、瑛己を見た。そして、

「聖 瑛己君」

ゆっくりと、サングラスを半分だけ外し、

「相変わらず、運命の女神は、君を愛しているのかい？」

ハハハと軽く笑った、その顔は。

「お前っ……！！」

「んじゃ、そろそろ行くかなー。またそのうち、」

空で

そういうと、男は再び空へと飛び上がった。

俺はただ、真実が知りたいだけだよ。かつて瑛己にそう言

ったその男は。

「山岡 篤……」

瑛己は、山岡の姿を目で追った。そして、その背中から伸びた飛行機雲を。

ずっと、ずっと、眺め続けていた。

海の彼方から朝日が。世界に、夜明けを告げていた。

『秀一(dreamer)』

これは、夢だ。

そう思い、秀一は目を開けた。

「
最初に見えたのは、操縦桿を握りしめる自分の両手。

目の端に、ゴーグルの縁が見える。

飛空艇……？ そう思った刹那、機体を、恐ろしいほどの風が殴りつけてきた。

ナンダコレハ？

台風の真っ只中を飛んでいるかのような感触。

嵐の中なのか？ 思うように操縦できない。

「……くっ！？」

底を突き破るくらいにアクセルを踏み込む。操縦桿がひどく重い。視界が暗い。

これは一体……秀一は、流れる汗を雑把にぬぐった。

そして、空を仰いだその瞬間。

「　　ッッ！！？」

そこにある光景に、秀一は、言葉を失った。

刹那。

トトトトトト

まさか、銃声？

こんな空で。

ガツンガツンッ

機体が揺れるのが、嵐のためなのかそれとも被弾したためなのか、もはや、わからない。

コンナ、

意識が溶けていく。

コンナ現実ガ。

もう一度、秀一は空を振り返った。
ポツリポツリと、何かが空から降っている。
まるでそれは、雨のような。
空が、割れた、欠片。

?空の果て?が、そこにあった。

13

その時白河の胸を駆けたのは、光であり、闇であった。
泣きたいほどの喜びと、同時に、つんざくほどの深い深い哀しみ。
そして、胸を焦がす……焼け付くような、この感情は。
白河は拳を握り締めた。そしてゆっくりと目を閉じた。
そして再びゆっくりと目を開けると。
目の前に並ぶ磐木達に向けて、深く、頷いた。
そして、

「すまん」

それが、今回のあらましを聞いた『湊』第23空軍基地総監・白
河 元康の第一声であった。

瑛己えいきつ子が磐木達と合流したのは、セピアの飛空艇が飛び立つて間もなくの事だった。

空から現れた、濃紺色の飛空艇……それは、来ライの『フェルカド』であった。

新の話によれば、3人の帰りを待っていた所に、その男は現れたのだという。

銃声を聞きつけ、『白雀はくせう』へ向かおうとする彼らに、その黒いサングラスの男はニヤリと笑みを浮べ。

「先に飛んでる」

直感的に何かを感じた新は、磐木達の反対を押し切り、エンジンペダルを踏み込んだ。

そして飛んでいた所、セピアの飛空艇……そして、そこにぶら下がる瑛己達を見つけ、追いかけてきたのだと言った。

それから、来が運転を代わり、瑛己達はそのまま『湊』へと向かった。

ほとんど無言のままたどり着いた『湊』空軍基地。

だが、彼らを迎えてくれたのは……喧騒の嵐。

喝采と涙と、歓喜。思ってみなかつたほどの『湊』の歓迎振りに、瑛己達は目を白黒させた。

そして、すぐに現れた担架をピシヤリと制したのは、磐木だった。「総監にお話が」

動く事もままならないような飛たかでさえ、人の手を借り、そこへ向かった。

白河が留守だと聞けば、そのまま待った。

そして……彼らの帰還の報告を受け、慌てて戻ってきた白河は。磐木を見るなり、無言で抱きしめた。

そして瑛己達一人一人を腕に抱き。

男泣きに、涙をこぼしたのであった。

「事の発端は、我々にも責任があります」

そう言っ頭を下げたのは、本上 来^{ライ}であった。

来と昂^{スバル}。その2人もそこに、席を同じくしていた。

「月の初め頃、妹に仕事の依頼がありました。それは……今回の一件、あなた方と共に飛び、その足を砕く事」

来の隣で、昂が明後日を睨みつけていた。

「そしてその依頼を受け、妹は飛んだ。そしてあなた方を撃った」

「……」

申し訳ない。そう言っ、来は深く頭を下げた。それにその場は静まり返った。

「どうか顔を」

白河は、嘆息のように言った。そして、「お訊きたい」

「依頼主は」

「……」

「……」

昂はチラリと来を見た。

来はゆっくりと一度瞬^{まばたき}きをした。そして、

「『日嵩』 総監・上島 昌兵 (e s i m a | s y o u h e i)」

静かだが、強い眼差しで彼はそう言った。

「本来、依頼主の事を語るのはタブーです。ですが今回は、私たちも少々相手を甘く見すぎていた」

「……」

「昂は、あなた方を撃った。そしてそこに【天賦^{てんぷ}】は現れた。そして彼らはあなた方を墜とすと……最後に昂を囲み、攻撃を仕掛けてきたのです」

それに、327飛空隊の面々は訝しげに顔を上げた。

「どういう事だ、それは……」

「狙いはあなた方と昂、両方だったと考えられます」

何機もの【天賦】によって囲まれた昂は、必死に逃げるも、撃墜

される。

パラシュートで飛び出した彼女に、なおも【天賦】は銃口を向けた。

だがそれを間一髪救ったのは、来だった。

「昴を拾い、聖君を助け……だがそれが限界でした。逃るので精一杯だった」

「では、上島君の狙いは」

「327 飛空隊を撃墜する事。そして、昴の命」

「……」
ハント、昴はそっぽを向いた。それは怒っているようにも、興味がなさそうにも、どちらにも見えた。

その場にいた全員の顔に、複雑な色が灯った。飛は、無言で目を閉じた。

そんな彼女を見るともなく見て、白河が、静かに口を開いた。

「君たちが受けた依頼の事は、もう何も言わない。だが……磐木達を救ってくれた事、心から感謝する。本当にありがとう」

そして、手を出したのである。

来は何と言っていていいかわからなかった。白河を見つめた。

そんな来に、彼は穏やかに微笑みを浮べた。

その顔は、あまりにも強く、優しくて。

「ありがとう」

そのまま肩を抱いた白河に。来は、自分がまだまだ小さいのだという事を知った。

「しかし……どうすんすか？ これから」

軽い口調で新は磐木と白河を見た。

「そういえば……こういう時、本領発揮するはずの小暮ちゃんは？」

ジンさんと、秀一は……」

秀一。

その言葉に顔を上げたのは、飛。

「総監、秀は……ッ!？」

瑛己の眉間にもしわが寄る。

恐らく全員が見ている。黒い煙と、紅蓮の炎……あの谷で最初に、斜めに墜ちていった蒼い飛空艇を。

秀一の、その姿を。

そしてパラシュートを見た者は、誰もいなかった。

白河は黙っていた。その顔には、何かを言おうとしているも、何から話したらいいのかわからない……そんな複雑な色が濃く出ていた。

そして。

「風迫君と、相楽君は、生きている」

「

「昨日の早朝、『音羽』基地を経由して、帰還した」

「秀は、秀は、じゃあ、無事やったんですか!？」

関を切ったように、飛が身を乗り出した。その目には、涙がにじんでいた。

「墜ちた所を、どうにか風迫君が助けたらしい。その風迫君は、今、私の用事で出てもらっている。相良君は……医務室にいるはずだ」

「せやったら、俺」

瑛己は飛に肩を貸した。そして立ち上がるうとした途端。

「待ちなさい」

白河が制した。

その顔は、ひどく、暗い。

瑛己は眉を寄せた。

「最悪の状態から、一命は取り留めたが」
ドクン。

その言葉が、秀一の様態を告げている。

命……？

「だが……まだ意識は戻っていない」

「総監？」

「佐脇先生は……意識が戻る可能性は50%だと言っている」

「それは」

「相楽君は頭部に」

「」

飛が、瑛己の腕を、振り払った。

「飛ッッ!!!」

その体で。走り出した彼を。

誰も、止められなかった。止めようとしなかった。

瑛己は慌て、その背中を追いかけた。

薄暗い廊下が、痛いくらいにシンと静まり返っていた。

「秀一」

医務室のドアを、飛は蹴るように開けた。

そして彼はそのまま、動けなくなった。

その肩越しに、瑛己は中を見た。

そして。瑛己もそこに立ちすくんだ。

見慣れたはずの医務室にあったのは……様々な、機械。

ピッ、ピッ、ピッ……と鳴り続ける何か。

白い線が、不規則な波を描く何か。

わからない数字を常に刻む何か。

1つ2つではない、点滴は何？

そしてその、機械に囲まれているのは。

「……お前^{まん}」

その寝台で横たわっているのは。

「お前、何しとんのや、そんなトコで」

その頭を包帯でグルグル巻きにされ、真っ白の顔をして、死んだように眠っているのは。

「秀一ッッ……!!!」

いつもどんな時も、ニコニコと笑っていて。飛の後ろを駆けてい

た、あの少年だった。

「ん」

瑛己は喉だけで言って、飛に缶珈琲を渡した。

飛はそれを無言で受け取った。

自販機から、ガタガタともう一本こぼれ出す。

それを、膝を折って取り出す。と、タブを開けずに手の中で転がした。

飛は無言で、食堂のガラスの向こうに映る、夕焼け空を見ていた。瑛己もしばらく同じように眺めていたが、やがて、珈琲をグイと飲んだ。

添え木された左腕が、少し煩わしい。

飛も全身に包帯が巻かれている。その上から上着を、袖を通さず肩だけに引っ掛けていた。

松葉杖が隣のテーブルの椅子に、捨てられたように立てかけてある。

「……」

秀一は、撃墜された時、頭を強く打った。

体の怪我は、大した事はない。致命傷となるほどのものはなかった。

だが、心が。

「……」

何しとんのや、おまん、そんなトコで！！ 早よ起きんか、馬鹿ヤロ！！

そう言っつて、寝台に掴みかかっていく飛を。瑛己は佐脇先生と一緒に押さえ込んだ。

「秀一ッッ……！！ 馬鹿ヤロ、馬鹿ヤロッ……！！」

後から駆けつけてきた磐木だったか誰だったかに、瑛己はそれを聞いた。

秀一には特殊な力がある。

？予言屋？そんなふうには呼ばれるその力。未来を見てしまうというその力を……聞きつけた、軍の研究組織が。秀一の身柄の引渡しを求めているのだという。

それを白河は断固として撥ね付けている。

「飲めよ」

簡単に、大丈夫だとは言えなかった。

あんな秀一を見た後では。そして、こんな飛を目の前にして。

その言葉が救いにならない事が、瑛己にはわかっていた。

だから言えなかった。

そして、言わなかった。

「……あいつが」

珈琲缶を握り締め、飛は、小さく口を開いた。

「あいつが、俺より先に死ぬ、ワケがないんや」

「……」

夕陽を見つめるその瞳には、果たして今、一体何が映っているのだろうか？

瑛己はその横顔に、いつかの自分を重ねた。

「……絶対こんな、あるはずがない……こんな、こんな」

「……」

両手で、珈琲缶を包むようにして。飛はガクリと頂垂れた。

そして。

「秀一は、見とんのや……俺が死ぬ、その様を」

瑛己は飛の横顔を見た。

夕焼けに染まる飛の横顔は、どこか遠くて。

そこにいるのに。手を伸ばしても、届かないような……そんな錯覚に捕われた。

「あいつが俺の家の傍に越してきたんは、まだこんなちっこいガキの頃やった」

ポツリポツリと飛は口を開いた。

「あいつの父ちゃんは医者でな。越してくる前は、どこぞのデカイ病院におったって話や。何思ったか知らんけど、あんな小さい町に越してきてな。まともな医者がいなかったから、皆、めっちゃ喜んだって、家のジジイが言ってた」

だがそれは、瑛己に語っているというよりも。

「せやけど、そーゆーやつかみがあつたんやな……秀は、近所のガキ連中に結構苛められて。あいつ、すぐ泣くし。俺も正直、面倒な奴やと思ってた」

「……」
「家が近いし、ジジイとババアがうるさいし。しゃーないと思って付き合ってたんやけども……ある日、あいつの母ちゃんが俺の家に飛び込んできたんや。秀一が、部屋から出てこない。何とかしてくれって」

「……」

「『飛、お前、何かしたのか!?!』ジジイとババアが怒鳴るし。俺、全然心当たりねーし。その前の日、馬鹿連中に絡まれてるトコ助けたくらいなもんで。俺、濡れ衣だし。だけどジジイが殴るし。いい迷惑だ。俺は頭にきて、秀一の部屋に殴り込んだ」

「……」

「したらあいつ、布団引つかぶって泣いてやがる。俺が扉蹴破つて入ると、すっげえビクついてやがるし。ますます容疑が掛かるし。一発殴つてやるうと思って秀一の胸倉掴んだら」

「……」

「あいつ、グチャグチャの顔して俺に言ったんや……『なんで?』って」

「……………」

飛、死んじゃうの？

「泣きわめく秀一をぶん殴って、洗いざらい白状させた。俺が死ぬトコを見たって……。あいつが時々、変なもんを見る事は知ってた。それが原因で、苛められてるってのも知ってた。けども俺は……んなもん、どうでもよかった」

バーカ。

「勝手に未来を決められてたまるか」

死なねーよ、阿呆。

「あの日から、俺と秀一の中で何かが変わった……俺は誓った。絶対に秀一より先には死なないと。空で死ねたら本望やと思う。けど俺は、秀一の？未来？をブチ壊す。そのために空を飛んでる。そしてあいつが、親父の反対を押し切って医者を選ぶなかつたのは、あいつなりに、？未来？と戦うためや」

飛は、僕が守る。

「来んなくて、どれだけ言ったかわかんねーんやけどな」

「……………」

「それなのに……何でこんな事になっちまうんやろ」

「……………飛」

「なあ、瑛己……人の運命って、何やるう……？　生きるって何やるう？　死ぬって……何なんだろう？」

「……………」

「秀一は今、夢の中で、何を見てるんやろ……？」

瑛己は答えられなかった。

ただ、空っぽになった珈琲缶のタブを見つめた。

覗く穴の向こうは、真っ暗な闇。

だが瑛己には、光も闇も同じもののように思えた。

最後の光を終えた夕空が、急速に、闇へ姿を変えていく。
その最後の残光を帯びた雲が赤く、そして黒く。
天を2つに分けるように、長く長く伸びていた。

「大丈夫か？ 白河君」

その言葉に白河は、微かに目を見開きそして、「何がですか？」
と言った。

「顔色が悪い」

「最近、寝不足が続いていますので」

「まあ……無理ないかもしれんな」

そう言つて男はドカリとソファに腰掛けた。

それを見届け、白河もそこに腰を落とした。

「高藤さんはお元気そうで」

「いやあ、まあ、色々あるがな」

『音羽』第8海軍基地 総監・高藤 慶喜 (t a k a t o u | k

e i k i) は満面に苦笑を浮べた。

「さすがに君には敵わんよ」

大柄な体格に負けずと声の大きいこの男を、白河は、存外好いて
いた。

「で、橋爪君は何と？」

歳は白河より二回り近く上である。だがこの豪胆な男は、『蒼国』
の中でも一目置かれた重鎮的存在であった。

「磐木達の第一報が届いた時、丁度私は総司令と共にいたのですが
……ただ一言『有無』と」

「感動も、何もなかったと？」

「は」

「らしいと言えばらしいか」

高藤は豪快に笑った。

「どの道、君も磐木達も命拾いといった所か。橋爪君は一体どうす
るつもりだったんだ？ ……それこそ聞くまでもないが。君の目の
下のそれは、どうせまた橋爪君に殴られたんだろっ」

「……」白河は何とも言えず苦笑した。

「白河君は、橋爪君が上にいる限り、生傷が絶えそうにないな」

「……私がつと、総司令の意に沿えるような人間であればよかったです」

「ははは」

高藤はテーブルの端に置いてあった灰皿を引き寄せると、上着のポケットから煙草を取り出した。そ「そんな人間は、世界広しと言えども、中々いやしないさ」

「……」

「それに、結局の所で橋爪君は、君を手放したりはしない」

「……え」

高藤は手早くマッチで火を点けると、ふう……と吹かした。

「殴られるほど、好かれているんじゃないのか？」

「……それだけはないと思います」

「そうかな。俺からすればよっぽど、上島君の方が橋爪君の眼中にはないと思うがね」

「……」

「そして上島君はそれに気付いている」

「……」

「上島君が君を、そして『湊』を憎む理由は、そんな所にもあるのかもな」

「……」

馬鹿な事だ。そう言つて、高藤は灰皿の端で煙草を叩いた。

「あの時翼を失ったのは、白河君も同じだというのに」

「……高藤さん、それは」

「誰にも言わんさ」

「……」

「だが……君はそれでいいのか？ 特に原田に……憎まれ続ける事に、それでいいのか？」

白河は目を伏せた。そして高藤の太い指に挟まれた煙草を見た。

白河は煙草を吸わない。その理由は別に、体のためとかいうのではない。

ただ、弱いから。

自分の脆さを白河はよく知っているから。

「いいんです」

それに頼れば、逃げられなくなる自分を知っている。

だから。白河はこれ以上、自分で自分の首に鎖を巻きたくなかった。

それでも時折、恋しくなる事がある。頭の片隅を、奇妙な誘惑が駆ける事がある。

それは決して、煙草を吸いたいかいいうのではなく。

ただ、弱い自分を隠してしまいたくて。

「もう、慣れました」

「……そうか」

心の内にある哀しみを、それが消し去ってくれるというのなら。それがたとえ、ほんの一瞬だとしても。

「まあ……どちらにしても、今回の事は幸いだった」

「ご心配をお掛けしまして」

「いやそれは。君たちには色々之恩があるからな。入用の時はいつでも力を貸すつもりでいる。俺で役に立てればだがな」

「ありがとうございます」

白河は心から頭を下げた。そんな彼を見て高藤は、ほのかに笑みを浮かべ、そしてゆっくりと頬を正した。

「だが……気をつける、白河君。上島君の事は、俺より君の方がよほどよく知っていると思うが」

「……は」

「もしも今回の一件が、本当に上島君の意図で動いていたというのなら……すぐにでも、何か仕掛けてくる可能性はある」

「それは」

白河は頷いた。「私も、懸念している所です」

「橋爪君には？」
「まだ何も」
「そうだな。決定的な裏が取れるまで、やめておいた方がいいだろう」
「高藤さん」
「俺も内々に調べてみる。ともかく、充分に注意する事だ、白河君」
「は」

14

バラードが、流れている。

大分客の減った『海雲亭』は、穏やかな空気に包まれていた。その歌は、母が好きだった映画の中で流れていたものだと、瑛己えいきは思った。

台所で口ずさんでいたその背中が、脳裏に蘇る。

そしてその姿が、秀一に重なった。

それを振り払うように、瑛己は麦酒を飲み干した。

海月さんがいたら……と瑛己は思った。だが、彼女は昨日から急用で留守にしているらしかった。

どんな時も、どんな事も笑い飛ばしてくれるような彼女がいたら。姉のように慕う彼女がもしここにいたら……今の自分を見て、何と云うだろうか？

カウンターの隅に座り、ボンヤリと一人、飲み続ける彼を。

ふと浮かんだ海月の顔に、瑛己は苦笑した。

けれど、今は、一人でよかったのかもしれない。

何も考えられない頭に、音楽だけが通り過ぎていってくれればそれで。

その方が。きっと。

「……………」

瑛己はバイトの青年に追加を頼んだ。

「すぐにお持ちします」

別に、すぐでなくてもよかった。

……………一つの曲が終わろうとしている……………最後の歌詞が消えて行く

そのピアノの余韻を掻き消すように。

ガタリと、瑛己の隣の椅子を誰かが引いた。

「カシス」

ジュークボックスが、新しい曲を奏でようとしている。

「いい店じゃん。空軍のお膝元にあるわりには」

「……………」

瑛己はチラリとそちらを見た。

「……………まだ帰ってなかったのか」

本上 スバル 昂。

彼女は「フン」と唇の端を釣り上げると、テーブルに頬杖をついた。

「あのうるさい奴はどうした？」

飛 たかき の事か……………瑛己は苦笑し、「医務室に」と告げた。

食堂で別れた飛がどこへ行ったのか、本当は知らない。だがきつと秀一の所にいるのだろうと瑛己は思った。

それがわかっていいるから、瑛己はここにきた。そっとしておいてやりたかったし、自分も一人になりたかった。

「そう」

そう言っつてグラスに口付ける横顔を見ても、瑛己は不思議と何も思わなかった。

秀一を撃つたのは、彼女だ。

だがなぜだろう……………恨む気持ちも憎しみも、湧いてこなかった。

ただ、その横顔が。哀しいと思った。

伏せた目に落ちた影が。なぜだか瑛己には、泣いているように見えた。

「来は？」

「兄者は、さつき飛んだ。調べたい事があるってさ」

「……」
「兄者が無凱むがいの脇にいたって話。驚いただろ」

「……」
瑛己はそれに無言で返した。

けれど昴はそれに気を悪くした様子になかった。ふつと明後日を見ると、「あたしと兄者は」と呟いた。

「まあ、世間で言うところの、孤児院で育ってさ」

「……」
「あたしが物心ついた時、兄者はもうそこにいなかった。シスターとかは、兄者は偉い学者さんになるためによその国に行ったんだって言いまくってたし。あたしもそれを信じてた。定期的に手紙もくれるしさ、いつかそのうち、迎えにきてくれるかなって」

「……」
「兄者がきてくれたのは……あたしが8つか9つくらいの時だった。それで、本当の事を知ったんだけど」

「……【天賦】にいたって？」

「【天賦】が【天賦】になる前の話だよ」

「……」
「兄者は？空の果て？から帰ってきた。そしてあたしの所に帰ってきてくれた。兄者は決して、その時何があったか語らない。ただ……あなたの親父に助けられたって事以外」

「……」
「あたしは、あんなだけには、助けられなくなかった」

「……」
音楽が。

瑛己は目を閉じた。

「……悪かったな」

「借りは」

「どうやって返して欲しい？」 昴の言葉に、瑛己は片眉を上げた。

「そんなの、いらない」

そして首を横に振った。

「そうはいかない」

「……」

「さつさと返さないと、こっちは、おちおち眠れない」

「……」

勝手に眠れ……と瑛己は嫌そうな顔をした。不眠症の相手までしていられない。

「そのうち、な」

溜め息を吐いた。そして、そろそろ基地に戻ろうかと思った刹那。

ウィーン、ウィーン、ウィーン

「……!?」

外から届いたその音に、瑛己はハッと顔を上げた。

それは、その場にいた誰もが同じだった。キョロキョロと辺りを見回すと、何事かと外へ飛び出した。

「何だ……? こんな夜中に……」

訝しげに言う昴に、瑛己は。

「第三種非常警戒警報……」

「なに?」

「……」

瑛己は立ち上がると、店の奥から出てきた店主に「すぐここを離れた方がいい」と言った。

「聖、」

「昴、お前も行け」

「何……? どういう、」

「ともかく、俺はすぐに基地に戻る」

「待て。どういう事が説明しろ」

グイと服の端を掴む昴を、瑛己は困ったように見つめ、

「敵襲だ」

「ッ!？」

そう言つて、瑛己は足を引きずり駆け出した。

店の扉を、添え木した腕で殴るように開けようとしたその刹那、
代わりに、昴がそれを蹴飛ばした。

「あたしも行く」

「」

「どうやら、早速借りが返せそうだ」

瑛己は苦笑しようとして、それを掻き消すように首を横に振った。
「急ぐよ」

「今夜は、朔か……」

月のない夜空を眺め、そして白河は嘆息を吐いた。

「こちら、『湊』空軍基地、応答願います!」

本塔最上階の、情報管理室にて。

通信士達の必死の声を横目に、白河は、高藤が去った後でよかつた
たと心から思った。

「総監、依然、何の連絡もなし。応答ありません!」

「総数は?」

「リーダーによる確認……およそ、100は下らない模様」

「総監!」

「……ふう」

もう一度息を吐き、白河は振り返って呟いた。

「第二種警戒態勢発令。第315飛空隊から随時、離陸できるよう
に待機。通信士は応答確認まで、電波を続けてくれ」

きたか。

白河はもう一度息を吐いた。

そして、夜空を見据えた。

その目には、別の光景が過ぎっていた。

あの日……聖 晴高達を見送り、そして。

その後起ったあの 彼の人生を変えた、あの時の、あの光景が。

あの時死ねたらよかったと。
未だに白河は、悔やみ続けている。

非常警報のベルが、けたたましく鳴り響いている。
駆ける者、喚く者、怒り、哀しみ、そして狂喜。
基地は混沌と化していた。

「ヒドイ有様だ」
昂^{スバル}が舌打ちをした。その横で、瑛己は人ごみの中に見知った顔を見つけ叫んだ。

「新さん！」
「おう！」

駆け出そうとしていた新の背中に追いつくと、瑛己は周りを一瞥^{いちべつ}して訊いた。

「これは一体……？」
「詳しい事はわかんねーけど」爛^{らん}と瞳を輝かせ、新は言った。「すげえ数の飛空艇が、こっちに向かって飛んでるって」

「飛空艇……？」
「もう間もなく『湊』の領空に入る。さっき第二種警報が出た。怪我人以外の手の空いている者はすべて、臨戦体勢に」
「俺達は？」

その問いに、新は眉間にしわを寄せた。「327は待機だと」
「なのになぁ……だのになぁ……、あの人、イの一番に走って行きやがった……勘弁してほしいっつーの」

「あの人？」
「警木隊長」

「……………！」

「足と脇腹持つてかれてるっつーのに、何考えてんだあの人は……！ 普段、人の事を『軽はずみだ』とか、『もつと行動を慎め』だとか言うわりに、自分はどうなんだよ？ さすがの新さんも、ちよつぴり腹が立つちゃうなあ、今回ばかりは」

「新さん」

「怪我人は、すっこんでるっつての」

いつも飄々《ひょうひょう》としているこの男のこんな顔を、瑛己は初めて見た。

「お前は飛と秀一を連れて、地下のシエルターに行け。 言つとくが」

刃物のような目だった。

冷たい炎、そんなものが、彼の瞳に宿っていた。

「空^{うら}にきたら、ただじゃおかないからな？」

「……………」

「早く行け。そこのお嬢も一緒に連れてけ！ 女子供にウロウロされるのが散って仕方がねえんだよ！ 急げ！！」

そう言つて駆け出した新の背中に。瑛己は何も言えなかった。

「何だあの猿顔！！」

新の背中を蹴飛ばそうとする昴の腕を引つ掴み、瑛己は大きく溜め息を吐いた。

「さつき、借りがどうのって言つてたよな？」

「あ？」

「医務室に行つて、飛と秀一を頼む。地下シエルターに連れてつてくれ」

「何？」

「それで貸し借りなしにしよう」

一瞬キョトンとした昴だったが、次の瞬間、声を立てて笑った。

「あのさあ、それ、逆のがいいと思わない？ あたしが戦場^{そら}へ行く、あんたは地下へ行く」

「飛と秀一を頼む」

「……」

それだけ言って、瑛己は走り出した。

その背中を、昴は。見えなくなるまで見つめ続けていた。

総監室。

そこにいるとは思わなかった。だが瑛己はその扉を叩いた。

本塔は静まり返っている。ここにくるまでにも、段々と人の数が少なくなっているのは感じていた。

格納庫で待機する者、そして地下へ避難した者。

もう、どちらかなのだろう……瑛己は総監室の扉を開けた。

誰もいないと思っていた。だけど。

「……総監」

白河 元康。彼はそこに立っていた。

「聖君」

窓辺に立ち、振り返るその顔は。場違いなほど静かな色を称えていた。

「何をしている。君は早く地下へ行かないと」

ようやく、白河の目に戸惑いが浮かんだ。

それを見て、瑛己はここへ何をしにきたのかわかった。

「総監は、ここで何を」

「……」

白河は視線を外した。そして、「今、出撃命令を出したよ」

言うのが早いのか、今までとは違うサイレンが基地に木霊した。

高く、低く、遠く、遙かまで。

翼を広げる。風と共に。グンと低く飛び出せと。

その音は飛空艇乗りの心に向けて、そう叫んでいるように聞こえた。

そして、サーチライトが飛びかう中を、無数の蒼い鳥が、空に向かつて飛び出した。

窓から飛び込むその光に、白河の横顔が、ふっと陰った。

「総監は、」

「私はここにいます」

「……」

「多くの若い者が空で、命のやりとりをしている時に、指揮官が地下で震えていたなんて、間抜けな話だと思わないか？」

「……相手は？」

白河は首を横に振った。「呼びかけに、答える者はいない」

「だが飛空艇が走行時に奏でる特殊な電気信号と、端末上に浮かび上がった配列を見る所……それは恐らく」

「……」

「この朔の空に、晴天に忘れられた、空の蒼さを映した翼」

「『翼竜』……？ まさか、『日嵩』……！？」

ガラスの向こうに『日嵩』総監・上島の笑顔を見たような気がした。

「総監」

直にここも戦場になる。瑛己は急かした。だが、

「聖君……いいんだ」

私は裁かれなければならない。

「私は、あの日、君の父さんを」

見殺しにしたのだから。

ツツツダアアアンンンンン！……！

ドドドドドドドド……！……！

「!?!」

瑛己は空を振り仰いだ。そこに、閃光を見た。

「始まったか」

淡々と白河は言った。瑛己はその背中に叫んだ。「総監ツ!」

「早く、地下に!」

「……」

「総監ツツ!」

「行かないと行っているだろうツツ!」

白河のこんな怒声を。

瑛己はギリと歯噛みをした。そして、

「あんたがそんなふうになんか命を捨ててて、誰が、あんたのために命を懸けるっていうんだツツ!」

「」

ダンツと、瑛己は扉を殴るように部屋を飛び出した。

「聖 ……!」

待て。

白河は手を伸ばした。

待ってくれ。

その背中は、いつかの映像と。

まるで。

「晴、高……ツツ!」

からっぽの格納庫に、ポツンとそれは、待っていた。

操縦席に引っ掛けてあるゴーグルを掴み、手早く額に引っ掛ける。

「……行くぞ」

腹の傷が痛む。

左の腕に添えてあった物を、雑把に取って宙へと投げる。

カランと軽い音が、セメンの上に鳴り響いた。それと同時にエンジンをつける。ゆっくりと動き出す。

頬を撫せた風に、ゾクリとする。背中を、言いようのない感触が走る。

こつこつのを、嫌な予感というのだろうか？

関係ない。瑛己はそう思って苦笑した。

今更。当に自分は、運命の女神によって。微笑まれている。

「……ッ！」

医務室に着いた昴は。

「あ……、君、丁度いい所に！！ 彼を運ぶのを手伝ってくれ！！」
訝しげに辺りを見回した。

医務の佐脇が、秀一の周りで看護の女性とオタオタしている。

「……あのうるさい奴は……？」

「うるさい……？ 須賀君の事か？」

「スガ……」

「彼なら、警報が鳴った途端飛び出して行ったけど……？」

「」

畜生。

「あいつッッ……！！」

どいつもこいつも、男って奴は。

馬鹿で阿呆で、カッコつけで。見栄っ張りで、ガキで、どうしようもなく。

「頼む、君、手伝ってくれないか……！！」

「……」

愚かで。愛しくて。

どうして。

昴は無言で、左脇に手を貸した。「すまない、ありがとう！」佐脇は嬉しそうに顔をほころばせたが。

「……面子を、守ってやるだけだよ」

死んだらただじゃおかないから。

心の奥でそう呟き、昴は、唇を噛みしめた。

飛びかう光が、少し、煩わしい。

だがそれが、朔の夜には唯一の命を結ぶ綱だと。瑛己はわかって
いた。

「……まずいな」

しかし、視界はかなり悪い。

敵の数も不明だが、同じように、仲間もどれだけこの空に上がったのか。

(誤射だけは避けなければ)

ジリと額に汗が浮かんだ。だが果たして、どれだけかわす事ができるのか。

自分にその可能性があるのならば、他の者として同じ事。

ザツと見ただけでも……仲間とも敵ともつかない、空を飛ぶ者は、かなりの数だ。

これだけの数が途端、戦闘を始めたら。

(どこから、何が飛んでくるかわからない)

自分の放った弾も、どこへ行くかわからない。誰の、何に当たるかの保障がない以上。

(下手に撃つ事はできない)

《南の方角に、ピー》

《ガガガ……黒い何かザザザ》

飛びかう電波に、無線もひどい。瑛己は電源を切ってしまうおうか

と思ったが、結局やめた。

代わりに、歌を口ずさんだ。

父が好きだった、？約束の場所？。

母に教えてもらい、瑛己が弾ける、たった一つの曲。

操縦桿を握るその指が、不意に、鍵盤を叩くかのように振られる。

「……………」

瑛己は風になぶられる髪を、適当に掻き上げた。

・

ああ酔つてると、瑛己は思った。

ガガガガガ

目の前を飛んでいた飛空艇が、痙攣するように微動した。

それに眉をしかめるより先に、瑛己は慌て、操縦桿を右へ切った。その途端、飛空艇は凄まじい爆音を放ち、夜空に花開いた。

周りを飛んでいた幾つかの機体も、その花に巻き込まれ、包まれた。

瑛己の頬を、生暖かい風が撫ぜた。そして、ムツとするような火と油の匂いが鼻をついた。

バックミラーで確認する気にもならない。

密集して飛ぶのは、それでもなくても危険な事だ。

確かにそれは、離陸したばかりの『湊』の鳥を……正体もわからぬ敵の前に、そして視界の悪いこの真つ暗な空に飛び出したたくさんの鳥が、羽根を寄せる事は、人として愚かというにはあまりに酷な事なのかもしれない。

だが銃撃は、その真ん中に降りそそいだ。

それでバラバラになった鳥は、その時点で、恐らく心も乱れ飛んだ。

瑛己はそれを、一団の後列から見ている。

(黒い鳥)

黒い空から押し寄せたのは、それと同じ色をした翼。

もう一つの、空の色をした鳥達。

白河は言っていた。電気的な信号や配列は、自分達の乗るこの『蒼竜』と同じだと。

そしてその、翼の線や機体の造形も。

そして、唯一の目印となる　　そのエルロンに入った白線も。
ダダダダダ

そんな音は、聞こえなかったかもしれない。それくらい、空は雑多としている。

だが、瑛己の機体の真横を、風が、吹き抜けていく。

そしてどこかで爆音が上がる。

夜空を、閃光が染める。

「……………」

瑛己はチラと周りを見渡した。そして速度を上げると、密集から抜けるように高度を上げた。

もしも本当に、敵が、上島……『日嵩』だったとしたら。
グンと抜けた瑛己の後ろに、追っ手がついた。

バックミラーに、サーチライトを浴びた黒い機体が映った。

ドドドドド

操縦桿を、右へと押し倒す。

耳の上を、銃弾が、切り裂くように飛んでいく。

瑛己は『湊』とは逆の方向に進路を取った。

あそこにはいけない。

たしかに、離れればそれだけ、視界は悪い。だが瑛己にとって、他のリスクに比べれば大した事ないような気がした。

（あそこでは、撃てない）

そんな事思っつて、瑛己は苦笑した。

自分が変わった。瑛己は深く瞬きをした。

ダダダダダ

左へと切り、即座、グイと前に押し倒す。

「随分と、」

下降する瑛己を追って、黒い機体も機首を下へと向ける。

だがその時、瑛己はもう、右からひねり込んでいる。

そして黒い機体の、背中を見ていた。

果たして彼は、それに気づいたのだろうか？ 視界から消えた瑛己が。

撃つ、その瞬間に。

トトト

2、3発。それで充分だった。簡単に撃って、フワリと旋回する。バスン、バスンと、エンジンが火を吹いた。そして、ゆっくりと落ちていく機体から、乗り手が飛び出したのが見えた。

(慣れてしまった)

瑛己は苦笑した。

だがそれも仕方がない事かもしれない。

『湊』へきてから2ヶ月……わずかそれだけの間に、一体どれだけの空をくぐり抜けてきたのだろうか。

そしてどれだけの飛空艇乗り達と、翼を交えてきたのか……。

その時、瑛己の脳裏に、一人の笑顔が浮かんだ。

彼女は今頃、どうしているのだろうか？

この空を、この空のどこかで、その真っ白な翼を羽ばたかせて。

瑛己は苦笑した。そして目を閉じた。

きつとこの空で、つながっている。

「さて……」

瑛己は基地を振り返った。

夢中で空へ飛び出した。だが別に、自棄でも見栄でも、虚勢でもない。

(警木隊長……)

新が言っていた。イの一番で飛び出したと。

あの体で……、気丈な男である。だが、立っているのがやつとだ
という事は、瑛己にもよくわかっていた。

新ではないが、瑛己も磐木に、どれだけ殴られたかわからない。
見つけて、一発殴る。そんなつもりがあったわけではなかったが。
(放っておけない)

だが、この空で磐木を見つけるのは、容易な事ではない。

まして、自分が空にいる事が新にでもバレたら。ひよっとして撃
たれるかもしれない。

大きく息を吐いた。

それでも、

『なぜあんな事をした。聖ッ!』

『聖! なぜ勝手に飛んだ!! なぜ黙って飛び出したりした!!』

『聖、しっかりしろッッ!』

『馬鹿者』

『どこまでも 聖隊長に、そっくりだな』

『 聖、逃げる』

「隊長……」

ド
ド
ド
ド
ド
ド
ド

連射しながら、磐木は眉間にしわを寄せた。

爆炎を上げる機体の真横をすり抜け、体勢を立て直そうとする暇
もなく、次の銃火が降りそそぐ。

それが、カツンと一発だけ胴体をかすめた。塗料が少しだけピッ
と飛んだ。

それは、磐木がうまく避けたからというのではない。

「浅い」

それは、渡ってきた空の違いとでも言うべきだろうか。

例えば相手が、磐木の機体をどれだけ傷つけたのか、そんな事に気を取られた一瞬の間に、磐木はもう彼の後ろを飛んでいる。

そして、撃っている。

「……………」

磐木はムツと口を結んだ。そして、溜め息を吐きながら思った。今翼を交えているのは、空賊の類ではない。

飛び方が違う。

空賊、そして渡り鳥の飛び方は、もつと、自由に奔放だ。

風を切り裂く。グンと、伸びるような飛行をする。

言い換えればそれは、正しく訓練されていない飛び方でもある。

それがゆえに、先が読めない。

思わぬ所で、予想できない飛行をする　それが磐木の知る専

らの、彼らの飛び方だ。

だから、訓練上の成績がどれほど優秀であっても、それが一概に空戦に長けるとは限らないのである。

空戦で渡っていけるかどうかは、もつと別の、何かが必要となってくるのだ。

それが勘であり、そして経験なのかもしれない。

磐木は少し目を細めた。

少なくとも今夜、自分が撃った者の中に、そういう者はいなかった。

教科書通りの飛び方だなと思った。

これは、空賊ではない。

飛び慣れはしているが、空戦慣れはしていなかった。

「……………」

磐木の脳裏に、一人の男の笑顔が浮かんだ。

(上島さん……………)

その眉間にしわが寄った。

学校を卒業して、初めて配属された『湊』空軍基地。第301飛

空隊……。

隊長・聖 晴嵩。口数は少ないが、いつも凜としていて。どれだけ情に厚いか知っている。そんな彼を支えるように、いつも笑い話や馬鹿な話をして、隊を守り立てていた副長・原田 兵庫。

磐木にとつて、晴嵩と兵庫は憧れであり、目標であった。眩しかった。

そして、その2人をいつも静かな視線で……どこか、淋しげに見つめていたのが。当時、第304飛空隊、隊長・白河 元康。

そしてそんな白河にいつも苛々しながら厳しい視線を送っていたのが、副長・上島 昌兵だった。

なぜ？

なぜそれほどまでに、上島は白河を憎むのだろうか？

(あの日も……)

『すまん。すぐに行く』

困ったように言う白河と。

その後ろで、何とも言いがたい瞳で晴高を見た上島。

あの時の顔が、磐木は忘れられない。

『心配するな』

そう言つて白河の肩を叩いた晴高は。数時間後？空の果て？へと飲み込まれた。

「……………」

その後間もなく、白河は『蒼光』へ配属され、階級を上げた。

そして上島もまた、第2首都『浪漫』に仕官として移った。

それを、磐木は病院で聞いた。

あの時生きて戻れたのは、磐木と兵庫。

そして兵庫は、空軍を去った。

「……………」

磐木は眉間にしわを寄せた。

何かがおかしい。

(なぜ)

上島はあの時　　笑っていたのだろうか？

あの笑顔は一体、何だったんだろうか？

そして。

白河と上島の間、あの後、何があったのだろうか？

なぜなら。後で聞いた話では。

あの後、上島は事故に遭い。

そして白河の右腕はあの日以来、二度と、動かなくなってしまったのだから。

ドドドドド

反射的に、磐木は操縦桿を倒した。

その動きに、胸が激しく痛む。だが、磐木は表情一つ変えずにバツクミラーを覗いた。

夜空に、何かが蠢いていた。

この空は、どうなっているのだろうか。

どれだけ墜としたかわからない。だが未だ、空は混沌としている。基地は大丈夫だろうか？

(聖達は)

ダダダ、カツンカツンカツンッ！

「　　ッ」

チツと舌を打ち、磐木はペダルを踏み込んだ。

(できる)

海面ストレスレで体制を立て直し、右に抜ける。その背中を追うように放たれた銃弾が、海に軌跡を描いていく。

痛みが、意識の邪魔をする。

ひねりこみながら、相手の後ろを取ろうとするが、相手は巧にそれをかわしていく。

普段の磐木なら、焦れたりはない。

だが、痛みが彼の冷静さを少しずつ裂いていった。

そんな自分に気付いているから、磐木は唇を噛んで耐えようとした。

左に抜け、操縦桿を押し倒す。そこで、

(撃て)

相手の腹を、初めて見た。

射撃ボタンに指を押し込んだ。

その瞬間、基地から飛び出したサーチライトが、サツとその黒い機体を照らし出した。

操縦席を。

そして、その乗り手を。

「　　ツツツ!?!」

ドドドドドドド

警木は慌てて操縦桿を引き寄せた。機体はそれに、グワンと揺れながら向きを変えた。

放たれた弾は、結局相手に当たる事なく、奇妙な曲線を描いて明日の空へ飛んでいった。

「上島さん……　ツツ!?!」

幻だったのかもしれない。

だが、サーチライトに浮かび上がったその乗り手は、上島　昌兵、その人だった。

あの時と同じ、?空の果て(あの日)?と同じ。

勝ち誇ったような、あの笑顔で。

《サササ……警木イ……》

無線の声に、瑛己はビクリと眉を寄せた。

入ればなしのそこからは、ずっと、様々な声が流れ続けていた。撃墜したという喜びの声もあれば、助けを求める声、断末魔の声もある。

この空に飛びかっているのは、飛空艇じゃない。人の意思だ。

目に見えないそんなものが、今にも絡み付いてきそう。たまた

なくなり、瑛己は無線の電源を切ってしまうおとした。

そんな時だった。

《……わき？ ……ククク》

張り付くような声だった。

雑音だらけの無線の中で、それだけが、妙にリアルに聞こえてくる。

その声に、瑛己は聞き覚えがあった。

(上島総監……!?)

《……まさか、あんたは》

答えたのは、紛れもない。

「隊長！」

瑛己は辺りを見回した。

《どうした？ 磐木？ 怯えているのか？》

どこだ？

瑛己は必死に、銃弾の中を翔ける。

《まさか……、どうして、あんたが》

やけに鮮明に。

耳の後ろを汗が伝っていく。

《どうしてだ？ 何であんたは》

ドドドドド

追っ手か？ だが構ってられない。

《あんたはもう、飛べないはずだ》

執拗に迫るそれをかわし、瑛己は飛空艇が雑把に飛びかう空を突き抜けた。

ダダダダダ

避けた弾が当たって、味方が敵かわからない、何かが激しく火を吹いた。

《なぜだ？ あんたはッ、》

《俺は、生まれ変わったんだよ》

《何を》

《あの日》

隊長　　ツツツ！！　瑛己は空に向かって叫んだ。

《白河君に胸を撃たれたあの日》

《》

《俺は、神様になったんだよ》

「……………」

白河は、目を閉じた。

窓の向こうでは、激しい爆音と、閃光が空を染めている。

ダンツという音がして、部屋がガタガタと揺れた。天井からパラパラと砂の欠片が落ちてくる。

戦場は空だけではない。基地もまた、爆撃を受けて燃え始めている。

『あんたがそんなふうになんか命を捨てて、誰が、あんたのために命を懸けるっていうんだッ！！』

「……………」

その時、けたたましい音と共に総監室の扉が開いた。

白河は、虚ろにそちらを振り返った。そして、

「こんな所で何してやがるッ！！　大馬鹿野郎！！！！」

「原田……………！！」

「さっさと来い！！　死にたいのか！！？」

「しかし……………」

「馬鹿野郎！！！！」

そう叫ぶと、兵庫は白河のえりを締め上げた。

「こんな所で、テメエに死なれるわけにはいかなえんだよ！！！！」

「……………」

「これで貸し借りなしだッ！！　さっさとしろッツ！！　俺だってまだ、傷が痛エんだよ！！！！」

「原田……」

白河はゆつくりと頷いた。

そして、「すまない」と呟いた。

それに兵庫はフンと鼻で笑い、

「馬鹿野郎」と小突いた。

けれどそれは、まったく痛くなかった。

だから、泣けそうになった。

《ははははは……どうした、磐木？ ふははははは》
ドドドドドド

心臓が苦しい。

気が狂いそうだった。

磐木は眉間にしわを寄せ、真つ暗な空を睨みつけた。

(馬鹿な)

あり得ない。

磐木の知る限り、上島は二度と、飛空艇に乗る事はできないはずだった。

事故に遭ったのだと、彼は聞いた。

？空の果て？……そこからどうにか逃れ、気付いた時、磐木は病院の寝台の上にあった。

あの日、結局白河達304飛空隊はこなかった。

磐木はそれに関して何も言わなかった。だが兵庫は、白河を殴った。

それも、病院に入院している白河を。失意の底にいる白河を。

何が原因なのか詳しい事はわからなかったが、白河の右腕は永久に、動く事はなくなった。

噂では、拳銃の誤射を受けたと聞いた。それで、一番大切な神経が、砕けた。

それが昇進の理由ではなかったろうが、白河は首都に異動となった。

そして……。

上島もまた、二度と、空に上がる事のできない体となった。

意識不明の重態。最初に聞いたのは、その言葉。

回復したのは、奇跡だった。

それでも、後遺症は残った。もう、上島は空には上がれなくなっ

た。体がスピードに耐えられなくなった。頭が激しい高低さに耐え切れなくなった。気圧、速度、そして体内の組織が。

空のすべてに、上島の体は拒絶された。それに彼がどう思ったかは知らない。だが、葛藤がなかったとは思えない。

磐木から見ても上島 昌兵という男は、とてもいい腕と、高いプライドを持った飛空艇乗りだった。

(白河総監が)

さつき、上島は何と言った？

胸を、撃った……？

事故じゃなかったのか？ 事故だと聞いた、離陸しかけた飛空艇との接触による……なのに。なぜ。

白河総監が。

そんな事が。

「あり得るはずがない」

磐木はきつく眉間にしわを寄せ、射撃ボタンを押し込んだ。

ダダダダダ

銃弾は、空を切って飛んでいく。

「上島さん、なぜだ！？ なぜあんたは」

《？果て？からの帰還者の言葉とは思えないな》

ドドドドド

体ごと、操縦桿を左に押し倒す。

何度かの被弾に、飛空艇の感触は悪い。下手な操縦は、そのまま墜落につながるかもしれない。

だが磐木には、そんな事はどうでもよかった。そこまで頭が回らなかった。

体の痛みと、心の痛みで。おかしくなりそうだった。

《磐木、？空の果て？はどうだった？》

磐木は歯を食い縛った。

(撃つ)

さつき外した事を、これほど悔いた事は今までかつて、なかった。
アクセルを踏み込む。

《聖はどんな思いでその中に入っていったんだろっなあ》

「黙れ」

《お前は、怖くて逃げ出したのか？ 聖達を見捨てて逃げたのか？》

「黙れッ!!」

ダダダダダ

銃弾が、かすりもせず飛んでいく。

苛々する。

頬を伝う汗が、鬱陶しい。

《お前は逃げたんだ》

風の中に、笑い声が聞こえる。

《お前は逃げたんだ》

それが無線から聞こえるのか、頭の中に響いているのか、もう、
わからなくなってくる。

どちらが上で、どちらが下なのか。

夜空が、奈落に見える。

飛んでいるのか墜ちているのか。

もう、わからないわからない。

「ウオオオオオオオオオ!!」

磐木は、声の限り、叫んだ。

そして、一瞬操縦の手が飛んだその瞬間。

バックミラーに、上島の機体が入った。

絶好のタイミングだった。

入れば間違いなく、磐木の命はなかった。

しかし。

トトトトトト

横合いから、上島目掛けて、無数の銃弾が飛んだ。
それをヒョイと避けた上島に。

《悪いけど、その辺にしといてもらえますー？》
軽い口調で言ったのは。

《いくら頭にきているっつっても、これ以上、うちの隊長さん苛めてもらっちゃ、さすがの新さんも、ブチ切れますよん？》

「新……！」

磐木は目を見開いた。そしてそれを振り返った。
蒼い機体が、闇の中に航跡を描いている。

《元義 新か》

《おっ？ フルネームで覚えていただいとるとは、俺、ちよっぴり嬉しいんすけど》

《死ね》

《ははは、んな簡単に死んでたまるかっつ》
グワンという音を立てて、新が磐木の隣を横切った。
その刹那、操縦席の新と目が合った。

逃げてください。

なぜか、磐木には一瞬だけ見た新が、そう言ったように思えた。
だが、どうも逃げられそうにない。

無線のやりとりのせいなのか、黒い機体が集まってきている。

「馬鹿が」

磐木は嘆息を吐いた。

だが、さつきよりずっと心は落ち着いていた。

磐木は新に向かって、すまんと呟いた。

もう一度、「馬鹿が」と言った。それは、自分に対してだったの
かもしれない。

「いや〜ん、こりゃあ、ちよっぴりヤバいかもん？」

おちやられたように言つて笑つたが、目はまったく笑つていなか
つた。

新はチラと周りをうかがい「ヤダヤダ」と首を振る。

「隊長と総監の熱い囁きに、皆が引き寄せられちゃったじゃないの
ヤダヤダ、これだから血の気の多い連中は嫌だつーの……と、
目の前にいたそれに銃弾を叩き込む。

ドドドドド

まともに入る。刹那、爆音が空に轟く。

その噴煙に紛れ、右へと旋回しながら、煙の向こうを睨みつける。
「さあて、どう料理していきましょうか？」

1対10か……それとも、もつと多いか。

ともかく、どうにかして磐木をここから退かせなければ。

背中に気配を感じて、操縦桿をバツと押し倒す。すぐに、エルロ
ンの脇を弾がかすめるように切っていく。

敵さんの腕自体は、大した事はない。

だがそれでも数が集まれば別だ。

そうなれば、？教科書飛行？も厄介なものとなってくる。

特に新は、その？教科書飛行？が大の苦手だったりする。

海軍に2年いた。その後、駆け込むようにして学校へ入った。

成績としては、下の下。特に学科は最悪だったが。

柔軟性のある飛行。それだけが唯一、新を空へと押し上げた。

自分がそうじゃないからか、新にとって型どおりに向かってくる

飛空艇乗りは、空賊類と戦い合うよりもよっぽど面倒だった。

ダダダダダ

上昇からひねり込み、出た背中に撃ちこみを掛ける。

間髪なく横から攻撃が降るが、これはどうにかかわす。

かわした先に、恐らくあれは上島の機体。

正面からくる上島と新の撃ち合いとなる。結局、それを嫌って新が先に下へと逃げた。そのせいで、後ろにいた何かが上島の銃撃を浴びて蜂の巣となった。

「付かれたかにやー？」

上島が、新の後ろに付いている。

それに新は笑みを浮べたが、頬を汗が流れた。

「撃たれる」

そう思った瞬間、別の何かが上島を撃った。

《新！！》

磐木である。

新は頭を抱えた。

「おっさん、さっさと逃げろっつもの！！」

《誰がおっさんだ！！》

「あ。無線入れっぱなだった」

ペロつと舌を出しながら、射撃する。

また一機、空に花と砕け散る。

「隊長、ハッキリ言いますけど、どっか行ってください」

《馬鹿者！！何を言っている！！》

「だーら、ハッキリ言っつっつてんでしょうが！あんた、足手まといだっつーの！！ 戦りたいんなら他所へ行って戦っってください！ この場は、俺がご接待しますから」

たった1人どうにかできる自信は、大してなかった。

特に、一番厄介なのは上島。

《10年早い》

「10年経ったらあんた、40過ぎじゃないっすか！」

《新、俺に喧嘩を売ってるのか？》

「やっと思いきましたか」

さっさと行ってくれ。

そんなやりとりの最中も、新は2機ほど墜としている。そして磐

木も、「馬鹿者！！」と叫びながら1機墜とした。
新が言葉の向こうで、何を言っているのか。わからない磐木ではなかった。

困になるから、早く逃げてください。

できる事なら、磐木もそうしたかった。

精神力だけで動かしている。

戦っている相手は、もう、たった1人。

自分自身。

《俺の相手は、ここにいる》

新は舌を打った。だが、初めてその目が微笑んだ。

「あんた、馬鹿だ」

《新》

「二度と、俺の事を馬鹿だと言ってほしかりませんね」

《わかった》

「上等です」

新は、目いっぱいアクセセルを踏み込んだ。

時間との勝負だと思った。

「んじゃまあ、新さん、ちよっぴり本気を出しましょうか」

ダダダダダダ

撃ちこむ。抜ける。

激しく、空を翔け出す。

瑛己は苦笑した。

まったくあの2人は……。無線は全部、瑛己に2人の気持ちを届けていた。

（どこだ？）

これだけハッキリと聞き取れるという事は、遠くないのだと思う。
 瑛己は慎重に辺りを見回した。

そしてその闇の中に、不意に、白河の顔が浮かんだ。

「……」

ともかく今は、一刻も早く磐木と新の所に行かなければ。

夜の闇を切り裂いて、その向こうに太陽を願わずにはいられなかった。

「うぜえっつの!!」

新の眉間にしわが寄る。

(ヤバイな)

残りの弾数が、カウントダウンを始めている。

恐らくそれは、磐木も同じだろう。

撃つても撃つても、終わらない。切りがない。視界が利かないせいだろうか？ いつまで経ってもどこまで飛んでも、何も変わらないような錯覚を覚える。

「隊長!! あんた、そろそろ引退したらどうっすか!!」

苛立ちを、無線にぶつける。

《お前こそ、海へ帰れ》

「あんたは山に帰ったらどうっすか!!」

隊長、このままではマズイですって。

磐木は新の言葉の意味に気付いている……だが、陸へ降りたら2、3発殴ろうと心に決めていた。

ただし、無事に帰れたらの話だが。

そんな刹那、新の視界に白線が踊った。

黒い機体。

(上島総監!?)

他と違う、異様な雰囲気を持った飛行をするその飛空艇。

だが上島とは違う。上島よりももっと、絡み付いてくる。

それは偶然だった。交差した瞬間、その操縦席が間近に見えた。

そしてサーチライトの光に照らされたそこにいたのは。

「東」

確か、そう言ったはずだ……【無双】作戦の時、総指揮を取っていたあの男。酒場で殴り合いもした。表情の掴みにくい、印象の薄い男ではあったが。

(刺すようなあの目だけは、やけにハッキリ覚えてる)

新は舌を打った。

「俺も煙草を復活させようかしらん？」

操縦桿を、素早く右へと切り替える。

速度は全開である。

翼が空気を切り裂いている。

ドドド

それは、入らなくてもいい。

勝負は次である。

東が向きを下に取る。それは追わず、だが視線では追いかける。

東が上に舵を向けた瞬間が、勝負の時である。

だが。

「やべっ」

どつからともなく、銃弾が飛んでくる。

新は慌てて舵を左へ切ると、素早くその出所を見た。

「隊長」

戦^やり合っているのは 上島か!?

待て。東はどこへ行った?

ハッとして、新は視線を駆け巡らせた。

「あ」

そして、見つけた先にあつたものは。

「隊長ッ!! 後ろッッ!!」

咄嗟、新は手を伸ばした。

だが、伸ばした手のひらの向こうで。

ドドドドドド

爆破したのは、東の機体だった。

新は目を見張った。

星が、そこにあった。

機体に描かれた、7つの星。

《隊長、遅れた。すまん》

短く聞こえたその声は。

「ジンさん　　！！！」

そのまま、ジンの機体は切り裂くように空を滑り、一気に2つ、撃墜した。

空を、宙返りするように舞い上がったその機影を見上げた時、新は泣きそうになった。

《新、ボケつとすんな》

「ふいつ！ すんませんっ！」

そして、再び力強く操縦桿を握り締めた新の目の前を、スツと、蒼い機体が横切った。

それは警木と上島の間を割るように翔け抜けると、その背をひるがえ翻し、上島を追いかけた。

ドドドドドドドドドド

問答無用な連打だったが、その1つが、確かにエルロンの一端を砕いた。

「お前、」

《他を片付けてたら、遅くなった。後はここだけだ》

「小暮ちゃん……！！？」

無線から聞こえてきたのは、消息不明だった小暮 崇之の、涼しげな声だった。

「生きてたのか……」

《勝手に殺すな》

「だって……！」

《話は後だ。　　そろそろ、あいつもくるぞ？》

「へ？」

あいつ？ そう思い振り仰いだ新のすぐ頭上を。蒼い機体が追い越していった。

そしてそれは右に操縦桿を切ると、斜めに滑ったその姿勢のまま、掻っ切るようにそこにいた黒い機体に撃ちかけた。

ガガガガガ

「……まさか」

よもや……そう思った刹那、答えは、無線から鳴り響いた。

《お待たせしました！！ いやあ、探すのにえらい苦労しましたよ

！！》

「飛たかき！！ バカヤロ！！ お前、どうして！！」

《ははは、俺を誰やと思ってるんですか？ 新さんばつか、ええカッ

コさせませんよ！？》

「ええカッコつて……」

《さあ、俺が相手したる！！ どころからでもかかってこいッッ！！》

新は「ふざけんな！」と怒鳴ったが、笑顔をもう、消す事ができなかった。

ジンがいる、新がいる、小暮がいる。飛がいる。

磐木は操縦桿を握り締めた。

どいつもこいつも。

「大馬鹿者ばかりだ……うちの隊の連中は」

ふつとあの頃の、晴高の苦労が忍ばれた。

「隊長」

今日まで、自分はこの空を、飛び続けてきました。

あの時の、あなたとの約束のために。

そして 自分の意志と信念で。

「この先も」

この命の許す限り。

《磐木》

「上島総監」

磐木は、上島の背中を捕らえた。

《俺を撃つても、何も止まらんぞ》

「……」

《万物はすでに、動き始めている。12年前のあの日から、世界は》
「黙れ」

磐木は射撃ボタンを押し込んだ。

ダダダダ

残ったすべての銃弾を、ありったけ、解き放つ。

だが最後の最後で、その銃撃をひねってかわした

上島の、

その上から。

ドドドドド

ブンツツと風を切り、上島の真横をすり抜け、何かが銃撃を叩き込んだ。

上島の機体が、物言わず火を吹いた。

遅れて鳴った爆破音には目もくれず、磐木はその機体を目で追った。

もうあんなに遠くを飛んでいる。

蒼い蒼い機体。

その機体に　最後の、7つ星を抱き。

磐木は苦笑した。

「……手の焼ける奴ばかりだ」

腕はまともだろうか？

陸に戻ったら、どいつもこいつも。

その頭を力一杯　抱きしめてやる。

その目がゆっくりと開いていくのを。昴は、映画のワンシーンのように、じっと見ていた。

「あっ……………!!」

薄暗い地下のシエルターの中で。

医者が声を上げた。

そして、意識を取り戻した彼は、一つ深く瞬きをすると。

「……………皆は……………?」

荒く息を吐き、そう呟いた。

「早く、空を」

「え?」

「止めなきや……………早く……………」

うわごとのように言っただけ、目を閉じた秀一に。

昴は「大丈夫」とその頭を撫ぜた。

なぜだかわからないが、そうしてやらなければいけないような気がしたからだった。

例え、この命が尽きる事になっても、
どうしても、やらなければいけない事があった。

汽車が、ゴトンゴトンと揺れていた。

瞬きを一つすれば、車窓から臨む景色は、スルリと姿を変えてしまふ。

だけど、今の海月にとって、それは大して意味のある事ではなかった。

町並みも、田畑も、森も、海も、そして空も。

流れる車窓と同じように、彼女の心にも、流れて消えて行くだけの事だった。

そんな彼女を、通路を挟んだ隣の座席にいたジンが、チラリと見た。

平日の夕方、車内に人気はまばらだ。

海月の横顔が、窓に映っている。

それを見て、ジンの脳裏を別の横顔が過ぎった。

淋しげで、切なくて……愛しい。

ジンは顔をそらした。

海月はジンの事など忘れたように、窓の一点を見つめていた。

朔の夜より、少し遡る。

「ごちそうさん。美味かったよ」

そう言つて、兵庫はニコニコと勘定をテーブルに置いた。その声に、厨房で皿を片付けていたおかみが振り返った。

「ああ、毎度おおきに。お部屋へ？ 今誰か呼びますよつて」

慌てて駆けてくる中年の女性を、兵庫は苦笑して制した。「いいつて」

「そんな気を使わなくていいつて。大丈夫、一人で上がれるから」

「せやけど」

「ほら、向こうで客が呼んでるよ？ よつこらせつと。旦那、美味かった。また明日も期待してるから」

はははと笑い、奥の厨房にいる旦那に声をかけた。そして少しおぼつかない様子で席を立った。その姿を見たおかみがオロオロしたが、

「せやから、まだ松葉杖使わなかってセンセが」

あんなかつたるいもん、使つてられない。そう思いながら兵庫はヒラヒラと手を振り、食堂の二階にある宿の部屋へと上がつていった。

「よつこいしょつと」

冗談でそんな声を上げながら、階段を上がつていく。

体を半分壁に押し付けるようする。無理な姿勢に背中が痛むが、手すりを掴みたくとも腕は三角巾で吊るされている。

足の包帯は、大げさすぎると思う。だが白いガーゼの向こうからは、チリチリと火を吹くような痛みが、絶え間なく頭を打ち続けている。

兵庫は目を閉じ思った。

よく、生きてられたもんだと。

この宿にたどり着いたのは、数日前。

命からがらワケもわからず走ってきて、最終的にぶっ倒れたのが、この宿の裏にあるゴミ捨て場だった。

次に気がついた時、兵庫は宿の寝台の上で、包帯をグルグルにされて横になっていた。

ありがたかったのは、誰も、何があつたのか訊かない事。

それを口にした所、おかみは言った。「あんたさんが話したいなら幾らでも聞きます。せやけど、せやなかつたら何も訊かへん。それが、お宿のしきたりどす」

少しなまりのある口調でカラカラと笑つたおかみに、兵庫は手を合わせて感謝した。

部屋に戻るなり、兵庫はドカリと寝台に寝転がった。

しかし……気に掛かる事がある。

おかみの笑顔に甘え、思わず頼んでしまった 一通の封書。

あれは無事に届いただろうか……そう思うと同時に、ここを妙な事に巻き込んだという自責の念に捕われる。

宛てたのは、『湊』基地総監・白河 元康。

(もっと早く、知っていれば)

兵庫は眉間にしわを寄せた。

1週間ほど前の事だった。瑛己達えいきが『日嵩』へ行つたという話を耳にしたのは。

だがそこで兵庫は嫌な事を聞かされる。

『日嵩』の総監・上島が、『セツ』に何か仕掛ける気であるという事。そしてそれに【天賦てんぷ】、そして無凱むがいも関わっているかもしれな
いという事。

(上島 昌兵……)

その男を、兵庫はよく知っている。

彼がまだ空軍にいた頃、同じ基地にいた。白河が隊長をしていた
当時304飛空隊の、副隊長をしていた男。

兵庫は上島に対して、特に関心はなかった。

白河と上島がもめている姿はよく見た。心底困つたように返す白

河に、挑むように畳み掛ける上島の姿……「白河も大変だな」と晴高は苦笑していた。

上島の挑戦的な目は、白河だけに向けられていたものではなかった。自分と……晴高に対しても、かなり執拗に向けられている事に、兵庫は気付いていた。

だが、兵庫には興味がなかった。

上島がどうして白河に食って掛かるのか、そして自分達に敵対心を抱いているのか、兵庫にはそれが……何となくわかっていたから身分、そういう事なのだと思う。

白河と上島は、兵庫に言わせれば？いいトコのお坊ちゃん？だった。それなりに地位も名誉もある家に生まれ育ってきた。上島はどこぞの大臣の補佐をやった奴の息子だし、白河も、国鉄の役員関係者の家だったはずだ。

対し、晴高も兵庫も身分もクソもない？一般人？だ。そこらの雑草と同じように育ってきた。社交界も赤じゅうたんも知らない代わり、草っぱらで泥まみれになって走ってきた。

上島にしてみれば、そんな？下賤な輩やから？と一緒に扱いを受ける事に、果てしなく抵抗があつたのだろう。

奴の口癖は今でも覚えていて。「俺は上に行く者だ」

「……………」

兵庫は苦々しく笑った。そして、その瞳に怒りをにじませた。

（お前もあいつと一緒になのかよ……白河？）

白河……その名を思い出すたびに、兵庫の心は怒りに燃え、そして哀しみに揺れる。

（ともかく、もっと早く知らせていれば……）

兵庫がここに倒れ込む数時間前、彼は、『日嵩』の作戦が空振りに終わった事、そして派遣されていた『湊』の隊が行方不明になったという事を聞いた。

だが、もしも上島と【天賦】がつながっているとしたら。兵庫には確信があつた、瑛己達は生きている。

なぜなら 無凱の狙いは、？空の欠片？。

橋爪に対し、瑛己達の命をカードに使う可能性は、充分に考えられる。

(だが、橋爪はそれに答えない)

だから、兵庫は慌てて白河に手紙を書いた。

捕らえられているとしたら、場所から考えて、間違いないく『白雀』

白河、頼む、早く。

兵庫は胸の奥でそう叫びながら、目を閉じた。

その目元には、厳しいしわが寄っていた。

その時だった。

コンコンと、部屋の戸が叩かれる音がした。

兵庫は目を閉じたまま動かなかった。

しばらく黙っていると、再び音がする。

ようやく兵庫は薄目を開けた。「……誰だ？」

こんな時間に誰だろうか？ 夜半を過ぎている……宿の者だろうか？

色々と世話を焼いてくれるのはありがたいが、少し煩わしい

事がある。

だが、帰ってきた声は。

「兵庫……？」

一瞬、それが誰だかわからなかった。

だが、次の瞬間、兵庫は顔を上げた。

「誰……」

「兵庫」

まさか。

おい、待て。まさかそんな。

か細い、女の声。

兵庫は慌てて起き上がるうとした。その時、戸が開いた。

その双眸に飛び込んだのは、よく知った女。

ここにいるはずのない、夢でしか……会えない女性。

「兵庫！」

海月^{みづき}、と兵庫は言おうとして。

次の瞬間、その頭は海月の腕の中にあった。

「お、おい」

戸惑うのも忘れるほど、強く、抱きしめられる。

「兵庫っ……………」

「海月」

素のままの髪が、流れて兵庫に降りかかる。

いいにおいがする。

「ど、して」

言いかけた兵庫は、海月の肩越しに彼の姿を見た。

「お前は、瑛己んト」の……………」

「風迫^{かざこ} ジンです」

白河のヤロ……………兵庫は大きく息を吐いた。

「どっぴうこったよ」

兵庫は足を組みながら、仏頂面でそう訊いた。

突き当たりにある談話室のような所だった。兵庫は雑把に自販機

で珈琲を買って、おもむろにあおった。

ジンは無言で少し離れた椅子に腰掛けた。

「それを訊いて来いと言われました」

兵庫はチラとジンを見た。「お前……………無事だったのか」

ジンは彼を見もせず苦笑だけ浮べると、小さく頷いた。

「悪運は、強い方で」

「……………」

「あなたは、ひよっとして俺の事も」

「……………噂だけはな」

「そうですね……………。俺も、あなたの噂だけは」

今度は兵庫が苦笑する番だった。

「じゃあ、何もわざわざ聞きに行く必要、ないんじゃないかい？」

ジンはそれに答えなかった。ただ、「総監の命令です」と言い、兵庫を見た。

「総監が、とても心配していた」

「……そうか。で、奴は手紙を読んだのか？」

「俺が基地を出る直前に、『蒼光』へ向かった」

「橋爪か……馬鹿な。行った所で時間の無駄だったのに」

何であいつはそれがわからないんだ？ 兵庫は缶を潰すように握り締めた。

「しかし、白河総監は独断で動けるような人じゃない」

わかっているさ、そんな事は。昔から、あいつは何一つ変わらない。

……俺がどんだけ汚れても、あいつは、白いままだ。

「その傷は、」とジンが言った。

兵庫は面倒臭そうに自分の腕や足を見ると、「労働災害っつー奴」ふっと笑った。

「あなたのやろうとしている事が、どれほど危険な事か、あんた……」

……わかってるのか？」

「……何が？」

そう言いながらも、兵庫はおや？ と思つて苦笑した。

「お前さんが気にするような事じゃあないよ。お前は空だけ飛んでりゃそれでいいんだよ」

「……」

「悪く取るなよ？ ただ、お前が知る必要はない事だよ。背負う必要もな。磐木にも言っておけ。お前らはまだ、空の広さと美しさだ

け知っていればいいんだ。飛ぶ事を楽しんでりゃそれでいいんだよ」

「……」

「こういふのはな、俺みたいなのになんか任せておけばいいんだよ。お前だって、せつかく日の当たる所に出れたんじゃないか。わざわざ、闇に戻るような事するんじゃないよ。お前が選んだのは、そっちな

「んだろ？」

「……」

「白河に伝えてくれ。俺の事は気にするな。自分がしたいからそうしているだけだ。誰の……ためでも、所為せいでもない」

お前の所為ではない。

そして……晴高のためでもない。

ただ、自分だけの問題。

そして、決意。

それで例え、この命が尽きる事になっても。

どうしても、やらなければいけない事があった。

それはただ、自分自身の。

意志。

「……伝えておきます」

「すまん、わざわざこんなトコまできてもらったのに。ロクな事
言えなくて」

「いえ」

「お前ひよつとして、基地に戻ったばっかじゃないのか？ 今日
ゆっくりしてけ。明日、……あいつを連れて、帰ってくれ」

ジンはピクリと兵庫を見た。兵庫は苦々しく缶の縁を見た。

「あの人が、自分で、行くと言った」

兵庫の考えている事がわかったように、ジンは呟いた。「白河総
監の命令じゃない」

「ともかく、あいつを連れて帰れ。お前は基地にいないと駄目だ」

「あんたは？」

「俺はもうちょっとここにいる。宿のメシは美味しいし、医者にもま
だじつとしてるって言われてるんでね」

「……」

よっこいしよと、兵庫は立ち上がった。

「おかみに聞いてくる。2つ部屋があいてるか……」

「俺が行く」

それを制するように、ジンが立ち上がった。「あんたは、部屋へ」

「……」
「あの人待ってる」

「……」
兵庫は眉間にしわを寄せた。そして、溜め息を吐いた。

「……俺が行くから、お前、海月に話してくんない？」
「断る」

「……ジンちゃん、磐木の下についてると、問答無用が移るわよん
……？」

兵庫を無視してジンは階段を降りていった。

残された彼は、頭を抱えた。

そして一度天井を仰ぎ、息を吸い込んだ。

背中が重い。

そう思いながら、兵庫は部屋の戸を開けた。

海月みづきがそこで、彼を待っていた。

クルクルとした大きな目でこつちを見て。

「兵庫」

小さくて、少し、甘えたような声。

兵庫は目を合わせられなかった。

寝台に座る彼女を避けるようにして、戸口の脇にある備え付けの椅子に座った。

そして、帰れと言った。

「今日は、あいつもさすがに体にきてるだろうから……今、部屋あ

いてるか訊きに行ってるから。お前、明日の朝、奴と帰れ」

「やだ」

即答だった。

「馬鹿。帰れ」

「やだ」

「海月」

「やだ」

兵庫は頭を抱える思いだった。「わがまま言っな

「あたしが帰ったら、あんた、どうすんの、その体で

「俺の事はいいから」

「兵庫が行かないなら、私もここに残る」

「海月！」

「怒鳴りたいのはこつちでしょう!?!」

「……………」
兵庫はギョツとして振り返った。

「ロクに連絡もくれない、『湊』にもこない。たまにきたと思っても、私のトコには顔も見せず去っていく。この12年、あんた、私に対して随分いい態度取ってくれたわよね？ 兵庫、私が、あんたが私の事避けまくってんの、気付かないとでも思ってたんの？」

「海月……………」

「それで拳句に、大怪我して動けない状況だつて？ 行き倒れた所を助けられて、手紙すら自分で届けられない状況だつて？ 誰を差し置いても自分で全部抱え込んで、人に物を頼む事を知らないあんたが、手紙届けてくれって？ それも白河さん宛ての手紙を？？」

「……………」

「兵庫、」

私が、どんだけ心配して。

どんだけ、どんだけ……………」

「海月……………」

「あんたは、何も知らない」

「……………」

「全部、何もかも知っているような顔して、何であんた、わかんないわけ？ 何も知らないじゃないの、あんたなんか、あんたなんか」

「……………」

悪い、^{わり}と兵庫は呟いた。

「俺は……………なんつーか、正直言っちゃえば……………お前に、合わせる顔がない」

「……………」

「悪い」

「何が」

「ん？」

兵庫は苦笑して、目を閉じた。

俺が、生き残っちゃまって。

ハルじゃなくて。

悪い。

「バカ……」

「……明日、帰れ」

それは、自分でも嫌になるくらい、弱々しい声だった。

「やだ」

海月の声も、切れ切れだった。

「いいから、帰れ」

「やだ」

「わがまま言うな」

「……やだ」

「何で」

「だって」

「海月」

「だって」

「頼むから」

「……やだ」

「帰れ」

「……一緒にいたい」

兵庫はハツと顔を上げた。

「海月……？」

「兵庫の、バカ」

「……」

何で気付いてくれないの？

海月は下を向いたまま、頭を振った。

どうして気付いてくれないの？

「……海月」

兵庫は、立ち上がった。

ねえ、どうして？

涙が、こぼれてしまいそうだった。

それを抱きとめるように。

兵庫は海月の隣に座ると、そのまま、片腕で彼女を抱きしめた。

「兵庫お」

「……」

そんな甘い声で、俺の名前を呼ばないで。

そんな事する、つもりはなかったのに。

海月の唇は、とても柔らかくて暖かくて……あまいにおいがした。引き剥がすように顔を離すと、海月の、驚いたような目と合った。兵庫は慌ててそらし、搾り出すように言った。

「これが、俺が、お前の事避けてたワケだよ」

「……」

「帰れ。俺が……どうかなっちまわないうちに」

「兵庫」

「頼むから」

ハルじゃなくてごめん。

お前が、ハルの事が好きだったってのは、ずっと知ってたから。

ハルの事見てたの知ってたから。ハルだけ見てたの知ってたから。

そんなお前を、俺は見てたから。

ずっと……。

「バカ」

え、と。そう呟いたその瞬間。

海月が、兵庫の唇に、自分のそれを重ねた。

「バカ」

どっちが？

海月の頬を、涙が伝った。

兵庫は、海月を抱きしめた。さっきよりも強く、確かに。

心が。

ねえ……どうして？

兵庫は晴高に問い掛けた。

どうしてこんなに、苦しいんだろう？

人を好きになるって……、何でこんなに。

愛しい、愛しい……溢れて、苦しい。もう、苦しい。

「バカ」

その言葉ごと。

海月のすべてを、奪ってしまいたい。そんな衝動から。ずっと、逃げてきたのに。

宿を出たジンは、夜の町並みを、特にあてもなく歩いていく。

目には色々な物が映る。立ち並ぶ様々な屋台、色々な人、笑い声、怒鳴りあい……だけどどれも、ジンの心を捉える事なく過ぎ去っていく。

その代わり、あの光景が蘇る。

(隊長……)

次々と墜ちていく仲間たち。そして現れた、【天賦】^{てんぷ}、そして無^む凱^{がい}……。

自分が一体、どこで墜ちたのか。ジンはよく覚えていなかった。

ただ、気付くとそこに、秀一の機体があった。

そして夢中で操縦席から秀一を引きずり出し、谷間にあつたくほみのような所に隠れた。

幸い、【天賦】は墜ちた何人かを拾い……去って行った。

瑛己は、突然現れた紺色の機体に、昴と一緒に連れて行かれた。

その時、ふと、紺色の機体に乗ったパイロットが偶然こちらを見た。目が合ったような気がした。

そして頷いたような気がした。

あいつは大丈夫だ。確信した。

【天賦】が去った後周りを確認すると、誰のかわからないが、大して致命傷を受けていない機体があった。それに乗り込み、どうにか這うようにして基地に戻った。

そしてその後、白河の命を受け、こうしてここまでやってきた。自分のような人間に頼まなければいけないほど、あの人の周りには、信用できる人間がいらないのか……ジンの顔が、ふっと陰る。

ジンにとつて、白河は命の恩人である。そしてそれは、磐木も同じだ。

(隊長……)

どうか、ご無事で。

兵庫の手紙を持って、白河は橋爪に談判に行ったのだろう。だが、どう楽観的に考えても、橋爪が動くとは思えない。

(いっそ、俺が)

もう一度、【天賦】に切り込むか　そう思った時。

行き交う人の中、目の先に。こちらを向いて、立っている男がいる。

黒い身なりの男。背はさほど高くない。

だが、その顔に。

「

ジンは目を見開いた。一瞬、足を止めかけた。だが……歩かなければいけないと、誰かが背中を押した。止まってはいけないと。

逃げては行けないと。

軒の明かりに照らされて浮かぶ、人影。シルエット無造作に揺れる、長い前

髪と。その間から覗くのは、少し垂れた目。

だがその目に宿っているのは、凍えるような炎。

その光を一層増す、右に引つ掛けた片輪の眼鏡。

今は、『黒国』黄泉騎士団・第1特別飛行隊隊長だという

その男を。

男は微笑んでいた。

ジンはそれから目をそらさず、歩いて行った。

最後に会ったのは、極寒の冬。

『裏切り者』

男はあの時そう言った。

その彼が目の前に立っている。微笑んでいる。
『殺してやる』

ジンは歩く。

『俺は絶対に』

例え神が、お前の存在を認めようとも。

許さない。

「お久し振りです」

すれ違いざま。

ジンは答えなかった。だが、ピタリと足を止めた。

「また、会えましたね」

「……」

「あなたが生きていてくれて、僕は、とても嬉しい」

「……」

「あなたはよほど運に恵まれているようだ」

「……ここで殺る気か？ フズ」

男の気配には、殺気がある。

ジンとフズ、顔を合わせず互い、背を向け話している。

「そうしたいのは山々ですがね」

「……」

「僕は、あなたがどうしたら苦しむのか、どうしたらもう這い上がれなくなるのか、どうしたら気が狂うほどの絶望を味わって頂けるのか……考えて考えて、それが、楽しくて仕方がない」

「……お前がやったあれが、その結論か？ ぬるいな、まだ」

「ふふふ。いい口を叩きますね？ あなたは何様ですか？」

「……」

「今すぐあなたを、殺してやりたい」

「……」

「ですが、次の機会の楽しみに取っておこうと思います」

「……」

「今日は、あなたにご忠告があつてきました」

「……………」

「あなたはそのまま数日、ここで過すといい」

「……………何」

「そうしたらあなたを、素晴らしい朝が迎えてくれます。絶望の朝がね」

「……………何を」

「中々見れるものじゃないですよ？ 内輪の戦いなんて」

「……………ッ」

「『日膏』は、【無双】に送り込む予定だった全勢力を『湊』へ送ります。そして総指揮は　　言うまでもないですね」

「上島が」

「結局、あの人は空でしか……………いや、地獄でしか、生きられないのかもしれない」

あなたと同じように。

「どうぞ、命を大切にしてください。僕が殺すその日まで」

「……………殺す殺すと簡単に言えるうちは」

ジンは虚空を睨んだ。

「お前にとって生も死も、おぼろにしかない証拠だ」

「……………」

フズは笑った。そしてジンを振り返りもせず言った。

「あなたは変わった」

「……………」

「でも、今のあなたの方が、殺しがいいが有りそうだ」

「……………」

ジンは歩き出した。

「そうそう」

それに背を向けたまま、フズは言った。「もう1つ」

「先日、『蒼光』に行った時、随分懐かしい顔を見かけましたよ」

「……………」

「街中でチラッと見たただけだから、空似かもしれない……………だけど、

そっくりでしたよ。あの女に」

「
」
ジンは。ピタリと足を。

「ひよっとして、あなたも探していたんじゃないかってね。見つかりましたか？ あなたの、愛しい人は」

止め、てはいけない。

「あなたと僕、どっちが先に見つけるんでしょうね？」

時島

恵を」

止まってはいけない、誰かの声がする。

歩かなければはいけない。前へ、進まなければいけない。

『走って……ッ……！』

振り向いてはいけない。

『走ってッ……！！ ジンッ、早くッ……！！』

泣いてはいけない。

『生きてッ……！！』

行かなければいけない。

その約束を、守らなければいけない。

想いが、交差する。

胸が苦しい。

誰かに解き放って欲しいと思う。

だから、その名前を呼ぶ。

ずっと、叫び続けている。

その心に、届くようにと。

そして二度と。

離れてしまわないように。

翌朝。ジンと海月は町を後にする。

そしてそこには兵庫も、共に。

『湊』へ向かう、汽車へと乗り込んだ。

マッチが、少し湿^{しけ}気ている。

どうにか火を点けた何度目かのそれを、兵庫は大事そうに、葉巻の先にかざした。

ふう……。

長く長く息を吐く。

役目を終えた一つの火を消し、灰皿に落とす。

兵庫はそのまま窓辺に行くと、空を見上げた。

バカ天気だ。雲の欠片^{かけら}が1つ、2つ浮かんでいるだけで、他には何も無い。一面の蒼の世界。

不慣れな左手で葉巻を吹かす。右腕は、三角巾こそしていないものの、ポケットに突っ込んだままだった。

その時、不意に人の気配がして、兵庫はそちらを振り返った。ガランとした会議室、2つある入口の前から入ってきたのは。

「お？ 早いな」

『音羽』第8海軍基地、総監・高藤 慶喜^{けいき}。

兵庫は軽く会釈をすると、「どーも」と笑った。

「てつきり俺が一番乗りかと思ってたんだが」

「ははは、暇だったもんで。つい、お先に」

高藤は一瞬兵庫を疑わしそうに見たが、すぐに独特の笑顔を浮かべ、「そりゃあ、結構なこった」と豪快に笑った。

「他の連中はまだか？」

長机を蹴散らすように歩いてくる大柄な男に、兵庫はニコニコと笑い「まだですよ」と言った。

「一本よこせ」と、高藤は兵庫の胸のポケットから1本引^ひっ手繰^ひった。

「火い貸せ」

「へいへい」

さつきあれほど苦戦したマツチは、今度は一発で火を点けた。灯してやると、高藤は満足そうに目を細めた。

「にしても……こうして見ると、随分な様だな」

葉巻をくゆらせ、高藤は、眼下に臨む光景にふと溜め息を漏らした。

兵庫も視線をそちらに移した。

本塔4階、第1会議室。

その窓から見える光景は、この数日で大きく様を変えてしまった。まず、滑走路が3分の1ほど、なくなった。

代わりにあるのは、黒い焦土。アスファルトはひっくり返り、白線など姿もない。

格納庫の半分は焼かれ、行き場をなくした蒼い飛空艇の幾つかが、残った滑走路に肩を寄せるように並んでいる。

被害は基地の他の施設にも及んでいる。

本塔、そして北塔はわずかな被害ですんだものの、南館は半分以上を焼失。会堂に至っては全焼、跡形もない。そんな中で宿舍がほぼ無傷だったというのは奇跡だ。

「唯、春の夜の夢のごとし、か……まったくよく言っただもんだな」
遠い眼差しでそう言う高藤に、兵庫は何も言わずに葉巻を吹かした。

「町の方も、こっちほどではないにしろ、ちいっと害が出たみたいだ。しかし『湊』の鳥は元気だねえ。あんな事があつたつーのによく動く。半分が町の応援に向かった。若いつてえのは、宝だな」
「ははは」

「笑いごつちやねえよ。そこいくと、うちの連中は駄目だね。どいつもこいつも、ガタガタ抜かしてやがる。こーりゃ、根性叩きなおす必要があるそうだわいて」

「そりゃあ、あんたけコキ使われたら、誰でも参っちまいますよ」

『湊』襲撃から、3日。

高藤がその第一報を聞いたのは、明け方間近の事だった。

『湊』が何者かに襲われた。高藤にとって、『湊』で白河に会ったその夜の事だ。大慌てで召集をかけ、『音羽』海軍、『湊』へ向かって疾^かけ出した。

だが高藤達が着いた時、すべては終わっていた。

夜が明けて、初めて目の当たりにした『湊』空軍基地は、前日の光景を裏切るほどに変わり果てた姿となっていた。

まず、負傷者の手当てに追われた。それから、爆撃を受けた内外の行方不明者の搜索、救助……『音羽』海軍の者達は高藤に尻を叩かれ、奔走していた。

そして兵庫もそれに手を貸してはいたが、彼も怪我人の一人である。

「すっこんでろ!!」

瓦礫の山を押しつけようとしている海軍の者に手を貸そうとして、かえって足を引っ張り、高藤に怒鳴りつけられている。

「ん？ きたか」

その時、会議室の外から、何人かの話し声が聞こえてきた。

高藤は吸いかけの葉巻を灰皿に押し付けた。兵庫は特に関心なさそうに一服すると、もう一度、空を仰いだ。そして、「親父さん」と言った。

それは、兵庫が『湊』にいた当時、高藤が『湊』の総監だった頃からの 兵庫の、高藤に対する呼び方だった。

「親父さんは一体、何がしたいんスか？」

「……何が？」

話し声が近づいてくる。

「こんな所に奴らまで集めて。叱り事なら、俺だけで充分じゃないですか」

「……」

「何がしたいんスか？ 親父さん」

「兵庫」

高藤は深く瞬きをした。だがそれ以上、何も言わなかった。

ガラリという音が、部屋に広がった。
兵庫はつつとそちらを見た。

「あ」

瑛己^{えいぎ}。

目が合った。

「さてさて」

高藤はふんわりと微笑んだ。

「よくきたな。そこら辺に掛けてくれ」

瑛己……。

兵庫は視線を外した。

なぜか、そのまっすぐな瞳が。

兵庫は少し、痛いと思った。

16

「忙しいトコ集まってもらって、悪かったな。よくきてくれた。ま
ずは礼を言う」

召集。

瑛己がそれを聞いたのは、飛^{たかき}と町の復旧作業に行っている時だっ
た。

「何や？ このクソ忙しい時に！」

崩れた書店の片付けを手伝いながら、片手に『飛空新聞』を広げ
ていた飛は、伝令にやってきた若い整備士に露骨に嫌そうな顔を向
けた。

てつきりまた、新の小言でも聞かされるのではないか……そう思
った瑛己は、彼も、ゲンナリ顔で整備士を見つめた。

謎の襲撃から3日、あれから瑛己達は新に、何をどれだけ言われ
たか知れない。

「総括すれば、「怪我人がウロウロすんな」。

それに関して、磐木ですら新に何も言えない様子だった。

「どいつもこいつも、これ以上手を焼かせないでよね!!! もうっ、新さん、あつたまきちやう!!!」

冗談のように言っているが、新の目はまったく笑っていない。

そのギャップがむしろ怖くて、誰も何も言えなかった。

また定例の「新さん、あつたまきちやう!」召集か……? 瑛己はとても嫌そうな顔をした。

だが、整備士が続けた言葉は意外なものだった。

「召集です 『音羽』の高藤総監が、327隊を」

「高藤さん?」

それには飛も驚いた。

『音羽』の高藤総監との面識は、ないわけではない。前に2度

『音羽』の依頼で『零地区』を飛んだ後日、そして空(ku)撃墜命令の折、『音羽』を経由して行った時、挨拶程度で顔を合わせた事はある。

今回も、イの一番で駆けつけてくれたのが『音羽』だった。それから高藤もずっとこちらにいて、復旧作業の指揮をとっている。

「何やる……? また小言か? おい」

飛はゲッソリとした。

「『日嵩』の件かな」

「んな事、白河総監が『蒼光』から帰ってきてから訊けばいいやないか。『音羽』の高藤さんってな、えっらい気難しいおっさんやつー話やぞ?」

「……」

「あれ? 確か新さんが前にいた海軍って…… 『音羽』やなかったかな? 空軍にリクルートしたいって言った時、ボコボコに殴られて、『てめえの顔なんざ、二度と見たかねえ!!! どこいでも行きやがれっ!!!』って言ったっていう総監って……」

「……」

瑛己はますます嫌そうな顔をした。

「なあ、瑛己。この伝令、聞かなかった事に」

一瞬、本気でその提案に頷きかけた瑛己だった。

気乗りしない足で仕方なく、指定された第1会議室へ向かった。

「はああー、327召集つつたつて、秀はナシやる？ ええなあ」

頭の後ろで腕を組みながら飛は言ったが、その顔は、嬉しそうに見えた。

「よかったな」

「あん？」

「秀一の意識が戻って」

「……まーな」

この数日で一番嬉しかったニュースは、秀一の目が覚めた事だった。

それを聞いた時の飛の喜びようはなかった。

しばらくはまだ安静が必要だと言われたが、医務室へ行き、こやかに微笑む彼の姿を見て、瑛己も心底安堵した。

まだ言葉ははっきりと出てこないが、こちらの言っている事はわかる様子だった。

それから飛は毎日顔を出しては、あれから起った事を話して聞かせた。瑛己も顔を出したが、時折新の待ち伏せに遭うようになってからは、時間などを慎重に考えて行くようにした。

会議室に行くと、そこにはすでに高藤と兵庫の姿があった。

兵庫の姿に瑛己は一瞬不思議そうな顔をしたが、すぐに他のメンバーも集まってきた、兵庫と話す間もなく席につく事になった。

だが、何となく……兵庫の様子が、瑛己は気になった。

気のせいかもしれないが、こちらを見ないようにしている、そんな気がしてならなかった。

そういえば、怪我は大丈夫なのだろうか……？ 昨日『海雲亭』の様子を見に行った時、海月にその話を聞いていた。兵庫の怪我が心配で様子を見に行っていたのだと。襲撃の直後にこちらに戻った

らしい。『海雲亭』はほとんど被害に遭わなかった様子で、「こんな時だからこそ」と親父は翌日から店の営業を再開した。

海月は被害に遭った所を回り、片付けを手伝ったり、炊きだしのグループに加わり配って周ったりと忙しそうだった。

だけど真つ黒になって走り回ってる海月を見て、瑛己は、なぜかきれいだと思つた。もちろんそれを言うと、「瑛己、喧嘩売ってるのね?」と拳を固められそうだったので、黙っていた。

「磐木、体の調子はどうだ?」

問われ、一番前に座っていた磐木はうめくように「はい」と言った。

「絶対安静とは言われていますが、じっとしているわけにもいきませんので」

「はあっ……、つたく、誰かこの人、殴ってくださいよ」

新が大げさに溜め息を吐いて呟いた。それに磐木はギロリと睨み、だが黙っていた。

「元義、お前は相変わらず元気そうだな」

高藤は苦笑した。それに新はペロつと舌を出した。

「それだけが取り得つすから」

「小暮はどうだ。耳の方は治ったか?」

カカカと笑う新の横で、小暮は2、3度瞬きをして頷いた。

「はい。谷間の襲撃の直後はかなり酷かったです、今はほとんど自然に治るだろうと医務の佐脇先生も」

「上々。須賀、その制服の中からはみ出してる『飛空新聞』は、もちろん、金を払って持ってきたもんだろうな?」

ギクリ。

飛の肩が揺れた。瑛己はチラと横に座る彼を見やり、嫌そうに眉をしかめた。

「なっ、なな、何を言ってますか! もちろん決まってるんじゃないスカ!」

「……」

こいつ、返すの忘れてきたな……。もしや確信犯なのでは……。瑛己は溜め息を吐いた。

「聖、火傷はどうだ？」

瑛己は深く息を吸い、「はい、大分よくなりました」と言った。

「無理するな？ お前も須賀も、どうも無茶したがる嫌いがある。

心配してもらってるつてのは、怪我人の唯一の特権だかな。ありがたくもらっとけ」

「わかりました」

瑛己は苦笑しながら頷いた。

「相楽は医務室か……。まあ、仕方がないか。で、風迫。基地に戻ってきた早々、役目ご苦労。白河君に代わって礼を言う」

「いえ」

言葉少なく、ジンは言った。「白河総監は？」

「予定では今日か明日かに戻るらしいが……。まあ、厄介だわな」

白河は今、『蒼光』にいる。

襲撃の翌日、『蒼光』の軍事委員会の呼び出しを受けて飛んで行った。そこでの事はほとんど聞こえてこないが、状況は、あまりよくないという噂だった。

「どつちに非があるか、どう見てもわかりきっている事だということ。軍の上層部にいるのは、目ん玉節穴ふしめなになった奴ばっかりのようだ」

ただ、と高藤は言葉を濁し、明後日を見た。

「唯一の救いは、橋爪君が動かない事だ。良くも悪くも、どちらにも転ばん。この話はこのまま流れて行くだけだ」

「……」

磐木が、重い声で訊いた。

「高藤総監、それで……。上島総監は」

見つかったんですか？

その問いに、高藤はふつと苦々しく笑い、片眉を上げた。

「うちの連中が、総出で海を洗ってる。ほとんどの奴は見つかった

よ。だが……如何せん、総大将の首が見つからない」

高藤はアゴを掻いた。

「それは」

その先を促すように、ジンが言った。「生き残った可能性は？」

「ゼロじゃあないよ」

「……」

「お前らだつてよく知ってるだろう？ この世界には無限の可能性がある。何一つ、俺らを取り巻いているもので、絶対の保障はない。ここでこうして立っている、この地べたにだつて、この先未来永劫、俺らを支えてくれる保障なんて、こんなちびつとの欠片ですらありはしない」

そこで区切り、高藤は兵庫を見た。「原田」

「さつき俺に訊いたな。何がしたいんだ？ って」

「はい」

兵庫はじつと高藤を見た。

高藤はふつと微笑むと、全員を見渡すように言った。

「かつて何が起きたのか、今何が起こっているのか、そしてこれから」

何が起こるのか。

「そいつを、一直線に結ばなきゃならない時が、きたんじゃないかと俺は思う」

「……」

「磐木、お前だつて知りたい事があるだろ？」

「……」

「白河君は怒るかもしれないが……だが俺は、あんな白河君を見ているのが、正直言つて辛い」

「……」

兵庫、お前だつて。

「聞きたくないなら帰んな。知りたくなけりやその方がいい。俺はきつと今から、お前らに、余計なもんを背負わせる。空軍の飛空艇

乗りとして、普通に空を飛んで行く分には、何ら必要のない事だ。
兵庫、俺がしようとしている事は、単なるエゴだ。人の意思など考
えてもいない、自分がしたいだけの事だ。それに付き合いたくない
奴は帰ってくれ。何も言わん。5分待とう」

「……」

「……」

瑛己はチラと兵庫を見た。

じつと一点を睨むようにしたその横顔が。

瑛己はなぜか……何かに耐えているように見えた。

淋しげに見えた。

5分経った。

だが、誰も、席を離れる者はいなかった。

「さて」

高藤は手近にあつた椅子にドカリと腰掛け、雑把に足を組んだ。

そして制服の内側から煙草を1本取り出すと、噛んだ。

「まずは今回の件、もう1度最初から経緯をおさらいしようか。」

磐木

「は」

磐木は深く頷いた。

「半月程前、我々327飛空隊は『日嵩』の要請でかの地へと赴きました。作戦内容は、『日嵩』による【無双】襲撃。4つある【無双】へ道のうち、我々は一番の難所とされるルートを任される事になりました。そのルート^{スバル}を任されたのは我々7名ともう一人、本上昂という者、計8人でした」

「本上 昂……【サミダレ】壊滅の立役者か」

兵庫が渡したマツチで、高藤は素早く煙草に火を点けた。

「は。そして我々は予定の時間に【無双】へ向けて飛び発ちました。そしてその行程の途中、昂と、そして【天賦】の襲撃に遭いました。これは後に判明した事ですが、昂は上島総監に、我々を撃墜する事を目的として雇われたようです。ですが昂本人も、その時【天賦】に撃墜されています」

瑛己^{えいき}の隣で飛^{たかき}が、苛立たしげに肩を搔いた。

「その後、私と元義、須賀の3名は【天賦】によって拉致、監禁されました」

「お前らの消息が不明になって間もなく、『蒼光^{あき}』に【天賦】……いや、無凱^{むがい}からの要求があつた。期日は3日、要求をのまない場合、全員を殺すと」

ふと高藤は目を細め、言った。「で、奴には会ったのか？」

「はい」

ハツキリと、磐木は言った。

(無凱……)

瑛己の脳裏に浮かぶ、あの姿、あの声、あの笑顔。

「そして我々は【天賦】に捕らえられている所を昂、そして昂の兄・来という者によって助けられました。そしてその後、来の飛空艇で基地に帰還した次第であります」

「聖」と高藤が瑛己を見た。「確かお前もその男に助けられたんだっただよな？」

はい、と瑛己は小さく頷いた。そして、あの時の事をかいつまんで話した。

来と昂、そして『白雀』という地図から消された町……無凱との対決。そして現れたセピアの飛空艇、山岡 篤。

もちろん、そこまで詳細に話す事はしなかった。『白雀』で見つけた写真の事も、そして山岡の事も。

山岡と聞いて飛が何を思ったのかは知らない。だが彼は、微動だにしなかった。

「風迫に関しては俺が言おう」と高藤は灰皿に煙草を落とした。

「襲撃から数時間後、偶然うちの者が、領海で彷徨っている2人の飛空艇を発見した。その後『音羽』を経由して『湊』に送り届けた。その時の相楽の状態は……知っているな？」

基地に戻った風迫は、白河君の密命を受けて翌日、『天晴』てんせいに向かった」

「密命？」

問う小暮に、高藤はチラと兵庫を見た。

「こいつの事を知らない者もいるかもしれない、紹介し遅れた。原田 兵庫。元・『湊』基地第301飛空隊所属。俺の元部下であり、白河君の朋友でもある」

「……」

朋友。その言葉に兵庫は苦い顔をした。

「こいつが怪我をしたと聞いた白河君は、風迫に様子を見に行つて

くれるように頼んだんだ。だな？ 風迫」

ジンは面倒くさそうに頷いた。「急いで戻ってきたかいた。祭りに乗り遅れる所だった」

「あのー、つか、今、『天晴』って言いました？」

ふと飛がソロソロと手を上げた。

「あのお……全然関係ないんすけど、俺の、地元なんすけど」

「私はあれから少し気になる事がありまして、独自調査をしていたため、合流が遅れました」

飛の？地元発言？を遮るように、凜とした声で小暮が言った。

「ほう？ 調査と？」

「はい」小暮は眼鏡の縁を正し、ゆっくりと口を開いた。

「あの作戦には当初から、何か引つかかるものがありました。私自身は襲撃の序盤に、昴によって撃墜されましたが、運よくその場を離れる事ができました。その後、【無双】基地に向かいました」

「ゲロっ！ ひ、一人でかよ！？」

目を丸くした新に、小暮は事なさげに「ああ」と頷いた。

「どちらにしても、飛空艇は大破してしまっただし、海の上の孤島だ。あっちに行くしかありませんでした。そこで『日嵩』と合流できれば幸いと思っていましたが」

「が？」

「たどり着いた所は、もぬけの殻となっていました」

高藤は2本目を取り出した。ジンが、重そうに目を開けて小暮を見た。

「警備の数名がいる以外、【天賦】の者はほとんどいませんでした。私はそこから1機拝借し、内地に向かいました」

「こ、小暮ちゃん、ちゃれんじゃあ……」

「た、高藤さん、無茶だっつっても俺、小暮さんには適わないような気がするんすけど……」

啞然とする新と飛を無視し、小暮は表情少なく続けた。

「密かに『日嵩』に戻った私は、そこで、今回の襲撃が元々存在し

なかったのだという事を知りました」

「存在しなかった？」

「そうです。すべてが虚構、彼らの本当の目的は、我々を【天賦】に引き渡す事、そして『湊』への襲撃でした」

ここで言葉を区切り、小暮は息を吐いた。

「そこで私は独自のルートを使って調査をしました。上島総監と【天賦】の繋がり……今回の一件、それが立証できなければ闇雲になつてしまう怖れがありました。ですがその調査の途中、思いがけない事実突き当たりました」

誰かがゴクリと息を飲んだ。

「上島 昌兵という人物には2つの顔があります。『日嵩』空軍基地総監・上島 昌兵、そして、元【サミダレ】幹部、富樫^{とがし} 獵」

「……！！ 富樫！？ 国鉄・渡会^{わたらい}会長襲撃事件の後に行われた一斉捜査で、唯一捕らえられなかったという あの男が！？」

飛が瑛己の腕をつついた。「おい、有名人なんか？」

「はい。間違いありません」

「では……」

「あの谷間の襲撃の際、昴も執拗に狙われたと聞きましたが」
そういう事か、と高藤はうめいた。

「【サミダレ】壊滅の発端となった本上 昴……上島君の目的は、彼女に対する復讐も込められていたか」

磐木は大きく息を吐いた。

そして高藤はうめき声を上げ、2本目の煙草を噛み締めた。

「お前達にとって、空は何だ？」

どこか遠い眼差しで高藤が言った。

「美しいものか？ 広く広大で、無限のものか？ 優しく包むものか？ それとも翼の領域^{フィールド}、そこは自由か？」

その問いに誰も何も答えなかった。

「俺はこう思う。本当は、人は、空を望んではいけないのではないか」

「……」

「人はその起源から、空を深く愛し、求めた。どれほどその腕を伸ばし、近づこうともがいた事か。伸ばした手は、いつしか建物へと変わり、高く高く積み上げられた。長い長い時間と、数え切れない命を積み重ね、それでも人は空を求め続けた」

「……」

「なぜそれほどまでに人は空を求めるのか。未だ世界には、何百年に渡って造られ続けている塔がある。崩れてはまた積み重ね、それを繰り返し、人は……その果てに何を求めるのか」

鳥の鳴き声がする。

「だが近年、画期的な事が起った。飛空艇の登場だ。魔法使いでもなく、普通の人間が空を、鳥のように翔ける事ができる時代がきた。だがそれも、最初は今とは比べられないほどの物でしかなかった。そんな飛空技術を画期的に飛躍させたのは、戦争だった」

チチチ……陽射しは暖かい。

「発端は、簡単な偵察用の物だった。だが戦争の脇役でしかなかった物が、次第に表舞台へと借り出されるようになった。最後には、空をも巻き込んで、人はその業を競い合った」

空は蒼い。

「人が空に望んでいたのは、未開の場所に対する欲望でしかなかったのだろうか？ そして最後には、そこで血を流す事が目的だったのか？ 空は美しい。だが遠く果てしない歴史の果てに手に入れた……そう思い上がる人が、手にした空の欠片は、一体どれほどのものなのか？」

空は高い。

「空を飛ぶ鳥は、果たして自由だと思っか？ 翼という宿命を背負い、死ぬまで飛ぶ事を運命付けられた鳥達は、本当に果たして自由

なのか？ 俺達は翼を手に入れた。空を手に入れたと思っている。だが本当にそうなのか？ 手にした翼は絶対のものか？ この世に絶対などというものがあるのか？ 伸ばし続けた両腕は、本当に空を、掴む事ができたのか？」

指が、空気を、素通っていく。

「翼という十字架を背負い」

風が吹き抜けていく。

「空は本当に自由か？」

髪がかき乱れる。

「そして空は」

瑛己は空を見た。

「飛ぶ鳥を、許しているのか？」

眩しかった。

「そして俺達はそこに、本当に、求めていたものを見つけたのか？」

「今から一つ、おとぎ話をしよう」

何本目の煙草に火を点けながら高藤はそう言った。

「この世界がどのようにして生まれたのか。須賀、知ってるか？」

「へ？」

突然振られた飛は、素っ頓狂な声を上げた。

それに高藤は軽く笑い、そして続けた。

「その昔、この世界には何もなかった。花も草も、土も、海も。何一つ存在しない、果てしなく真っ白な世界。どこまでいってもあるのはただ？ 無？。風もなければ、感じる事何一つ、存在しない世界」

「……」

「それを哀れと思ったか、それともただの出来心か。神はその腕を振りかざした。途端、何もなかった空の隙間から、何かが一瞬とこぼれ落ちた。そしてそこから、光が漏れた」

兵庫が、高藤を見た。

「光は徐々に強く、確かにようになっていく。そして同じだけ空からこぼれるものも多くなつていった。卵の殻でもむくかのように、空が割れて、そこに光が差した。そして今の空が生まれた。割れた欠片は、あるものは溶けて水となり、あるものはそのまま形を変えて土となった。水は集まり、海となる。土は固まり、陸となった。こうして世界は生まれた」

「……」

「古い書物にはこうある。その時、最後にこぼれた？空の欠片？は、水になる事も土になる事も望まず、ただ？欠片？である事を望んだ。そして後に生き物が生まれ、人は生まれた。人はその？欠片？に神の力が宿っていると信じ、大切に大切に守る事にした」

「……」

「人はそれを、？空の欠片？と呼んだ」

聖石・？空の欠片？。

瑛己は一点を見つめ続けていた。

「だが人は、徐々にその石を守る事よりも欲する事を、その力を求め始めた。その石には神の力が宿っている。一度その力を解き放せば、世界のすべてを変える事もできるのだと言われるようになった。人の歴史は、石の歴史でもある。石を巡って争いが始まった。たくさん血が流れ、また、それによって様々な運命が交差していった。一般的な歴史の書物を紐解いても、石の姿は見えてこない。だが確かに、石は我々の歴史に深く関ってきた。多くの英雄が生まれ、散り、幾つかの国が滅び、また生まれた」

「……」

「だが、本当にその石にそんな物凄い力があるのか……誰にもそれはわからなかった。それが本当にこの世界の起源に至る、？最後の欠片？であるのか、それを知る者は誰もいない。確かめる術もない」

「……」

「歴史の書を紐解けば確かに、石によつてもたらされたという事象

も……伝説的には存在する。例えば古代ヘロパピウス王朝、今の『ビスタチオ』にあたるそこで起きたという国土全土が水没せんとした大嵐……それは一説に、聖石の力によるものだという説もある。また、『ロンデバルデスク』に伝わる天より降り注いだ炎の伝説、似たような話は『黒』にもある」

「……」
「石は、人の歴史の混沌と血の海の中に存在してきた。そしてそれを繰り返すうちに、石それ自体が災いだと恐れられるようになった。それでも人は石を求める。なぜだ？ 人が空を求めたように、石に伸びる手も失われなかった」

瑛己はコトンと、空気を飲んだ。

「時間は流れた。世界は変わった。科学技術は進歩を遂げ、人は空をも手に入れた。だが欲望が留まる事はない」

「……」
「その石に、本当にそんな力があるのか。伝説はただの伝説。人はただ、その虚構に踊らされているだけではないのか。 だがその答えは、あまりに突然、知れる事となった」

高藤はスツと息を吸い込んだ。そして、「12年前」と言った。

「石は、色々な道を辿り、あの時ある小さな町にあった。発端は実験中の事故……石を研究していた施設で起った大きな事故。これが、その後の運命を変えた」

トクン。

「その時正確に何が起こったかはわからない。だが、確かに石は力を放とうとした。それをその場にいた全員が目当たりにする事になった。直後その町は、町自体を消し去る事で、すべてを闇へと覆い隠した。地図から消えた町 その名は、『白雀』」

「『白雀』やて!？」

飛が叫んだ。瑛己は黙っていた。

「そうだ。そしてその『白雀』を失った代価として……一つの町を失い、そこに住まう人たちを消し去り……そしてそこで彼らが得た

ものは。神への道しるべ……いや、悪魔の所業であったのかもしれない」

手に入れたのだ。高藤は言った。

「『白雀』と引き換えに。聖石を 解き放つ術を」

トクン。

心臓が、やけに大きく打った気がした。

瑛己は自然、眉を寄せた。

「人は力を得た。その力が何を意味するのかも知らず。そしてその力がどれほどの物かも知らず。ただエゴのままにその力を 手に入れた新しい玩具で遊ぶか子供のよう。軍上層部はその力を、あの日、あの場所で解き放つ事を試みた」

12年前。

「そして、？空の果て？は現れた」

火傷の傷が疼いている。

熱い。

どうしようもなく、心臓が。

何かを求めるように、早鐘に打っている。

「あの日、様々な事が起った」

高藤は静かに、そしてゆっくりと口を開いた。

「数え切れない、かけがえのない幾つもの命を、その空は連れて逝いってしまった。哀しみも怒りも、恐怖もそして喜びも……すべてを飲み込み、無となり、永遠となった」

高藤の声だけが、部屋にシン…と響き渡っている。

「俺はあの日、簡単に奴らを送り出した。ある者とは祝言の打ち合わせの途中だったし、飲みに行く約束をしていた奴もいた。そして……喧嘩したまま、永遠に別れる事になった奴もいた」

一瞬、高藤が瑛己えいぎを見たような気がした。

「あの日、空に何が蠢うごいていたのか、どれだけの意思があったのか。俺は何一つ気付けなかった。ようやくそれを知ったのは、もう、すべてが終わってからの事だった」

兵庫が目を閉じている。

磐木はじつと、虚空を睨にらんでいる。

その目に映っているのは、恐らく、ただ一つ。

？空の果て？。

「だが、あの日起きたのは、空だけじゃなかった」
耳を、塞いでしまいたい。

瑛己の心に、なぜかそんな欲求が生まれた。

「哀しみが、人の心を裁くというのなら。苦しみが人の心を癒すというのなら。神は一体あの日、俺達に、何を望んでいたのだろうか？」

どこかで、何かが軋きしむ音がした。

「あの日起きた、もう一つの悲劇を」

瑛己の心に流れ込む、無線のノイズ。

あの襲撃の空で、上島が言った言葉。瑛己の耳にも届いた、あの

言葉。

その時、ガタリと立ち上がった者がいた。

兵庫だった。

「原田」

兵庫は軽く笑い、「この辺で、ご無礼します」

「座れ」

「や、いいっす」

「いいから座れ」

「親父さん」

「いいから、座れっ」

「いいです」

「兵庫！」

「聞きたくないです」

兵庫の目は、笑っていなかった。

高藤はそんな彼をじっと見つめ、そして深く一度瞬まばたきをした。

「兵庫」

「白河の事なら」兵庫は微笑んだ。「聞きたくないです」

「なぜだ？」

「……」

「兵庫、お前はいつまでそうして、モトから目を背けているつもり

だ？」

「……」

モト……一瞬、誰の事かと思った。

だが瞬間、兵庫の顔色が変わった。

「お前がそうする事で、一体、誰が傷ついていると思う？ どうして俺がこんな席まで作って、奴を裏切るような真似をして、何でこんな話をしていると思うている？ 誰が好き好んで、思い出したくもないあんな日の事を、誰にも聞かせたくないあんな日の話を、しようとしていると思うてる？ 眠っていた蓋をこじ開けようとしていると思うー!？」

「……………」

「白河君から目を背ける事で、あの日の怒りも憎しみも全部あいつに向けて、そうして納得しようとして、そしてこの12年間傷つき続けているのは　お前自身だろうが兵庫ッツ！！」

「……………」

「そして……憎しみも、怒りも、全部自分のせいにして。あの日のすべてを己のうちに封じ込め、その無念さも哀しみも、傷みも、すべて背負う事で……それでお前は、本当に、納得しているのか？」

白河君

「……………」

え、と瑛己は顔を上げた。

戸口の向こうに、人影があった。

「十字架を背負う事が、己の使命だとも思っているのなら、お門違いもいい所だ」

「……………」

「もう、それ以上自分で自分を傷つけるな」

「……………」

「これ以上、生きる事に怯えるな」

ためらうような音と共に、ゆっくりとその扉が開いた。

そこにそこに、白河　元康が立っていた。

「……………」あの日

白河は、かすれたような声でそう呟いた。

そこから先は、自分が話します。そう言って。

誰もがその声にじっと耳を傾けている。

そして兵庫も。

どこか、苦しそうな顔をして。

「？零ゼロ？の海で不審な艇団がいる……直ちに調査に向かうようにと、

私達は命令を受けた」

白河の顔にはアザが幾つもある。それが、白河の心そのものような気がして、瑛己は目をそらした。

「第301から311、315、318、326、327、329……それだけが当時基地にあつて、その命令を受けた。当時は今よりもつと空賊が猛威を振るつていて、あの頃大きな組織が幾つもあったから。その2つ3つが合同で何か事をなそうとしているという噂もあつたため、作戦は思ったより大掛かりなものとなるはずだつた」

白河は、何を見て話をしているのだろうか？

「私達304番隊は、あの時任務から帰ってきたばかりで。若干飛空艇の調子に乱れがある者がいた事もあり、少し遅れて出撃する事になった」

『すまん。すぐに行く』

磐木の脳裏に、あの時のあの、白河の困つたような顔が浮かんだ。そして、

『心配するな』

凜然と笑つ、晴高の笑顔が。

「だが……出撃の時間がきても、誰も、そこに、現れなかつた」
いや、現れたのはただ1人。

『待つてても、無駄ですよ』

「上島君が、笑いながら」

『他の奴らには、304は基地で待機になつたと伝令しておきました』

「私に、銃口を向けた」

『……何のつもりだ』

ハハハ、上島は笑つて、トリガーに指をかけた。

『やめましよう、白河さん』

足がすくむとは、こういう事か？

『304番隊は、飛空艇故障者・体調不良の者多数のため、出撃不可能。総監の所にそう言って頭下げてきてくださいよ』

『何を』

『頭下げるのは、得意でしょう？』

その言葉に、金縛りが少しとけた。

『何のつもりだ、どうして、上島君』

『あんたも俺も、上に行ける人間だ』

上島は口の端を釣り上げた。『こんなトコで舞台の袖に消える人間じゃない。俺達は選ばれてんですよ』

『何の話だ』

『駄馬が死ぬのは、昔から当然の事』

埒があかない。

『俺は行く』

『たった1人で？』

『当然だ』

約束した。

すぐに行くと。

待っててくれと。

必ず行くから。

絶対に。

『それ以上動いたら、撃ちますよ』

『勝手にしろ』

『強情な人だ』

飛空艇に向かおうとした。

その背中から、ガンッ！ と心臓が跳ね上がるような音がして。

『ッ！ッ！?』

横手にあつた飛空艇のプロペラの一片が、凄い音を立てて砕け散った。

『次はあなたに当てます』

『……上島ッ』

なぜこんな事を。

『あんな奴らに構う事はない』

『上島』

『あんたも俺も、選ばれた人間だ。あんな奴らと……どうしてあんなはそうも、奴らと親しくしようとするんですか？ 捨てておけばいい。あんたも俺も』

『それ以上』

『あんたは、あいつらの事を親友とも思っているかもしれないが、あいつらにとってあんたなんか、所詮』

『やめろッ』

『ハハ、白河さんでもそんな顔、するんですね』

『上島』

『撃ちます。銃の腕は保障します。しばらく病院で大人しくしていただきます』

『貴様』

『一緒に上に行きましょう。俺とあんたは、あいつらとは違っ』

絶対行くから。

必ず行くから。

そう、約束したのに。

「……上島君は、俺を撃った」

白河は、瞼を伏せて、そう言った。

「弾は、右腕で砕けた。そこから先の事は……残念ながら、よく覚

えている」

「いつそ、記憶が曖昧であつたら。」

あの時の事を、忘れてしまえたら。どれほどよかつたか。

あの痛みも、そしてあの感触も。

哀しみも。

「俺は……奴に殴りかかった。滅茶苦茶になつて。変な話だが、俺のこの右腕が最後にした事は、上島君を殴る事だった。もみくちやになつて、泥だらけになつて、気付いた時、俺は奴の銃を奪い取つていた」

『ハハハ、撃てよ』

上島の声が蘇る。

『俺を撃つて、聖達を追いかければいい。だがな、もう遅いよ。今更行つても手遅れさ。聖達は今頃』

白河は唇をかみしめた。

『あの世と地獄の境目で、苦しみと怒りと絶望を胸に、最期の時間を味わっているよ？ ハハハハ……駄馬に相応しいと思わないか？ 白河さん？ この俺達と肩を並べようとしたいけ好かない連中の最期に、これ以上相応しい舞台は』

引き金は、指の中で、スルリと動いた。

耳が潰れるような音がした。

「俺は上島君を、撃つた」

陽が傾き始めている。

間もなく、会は無言のまま解散となった。

人のいなくなつた会議室に、兵庫と……そして白河が2人、黙つて座っていた。

白河は何も言わなかった。

同じように兵庫も何も言えないまま、夕焼け空を見ていた。

白河が上島を撃つた事、それは恐らく高藤が全力をかけて外に漏れないようにしたのだろう。

だから直に高藤は『湊』を離れる事になり、遠い辺境の基地へと左遷された。その後も、まったく畑違いの海軍に異動させられるなどしたが、しかし彼を慕う者は多い。それは、高藤のそういう所からくるのだろうとも思う。

兵庫は葉巻が吸いたかつた。だが、腕が動こうとしてくれなかつた。

白河は白河なりに、苦しんで、ここまでできた。

そして、彼もまた、未だ？絶対？に縛られ、もがき続けている。

「……………」

兵庫はゆつくりと立ち上がった。

そして一歩ずつ、白河へ向かつて、歩き出した。

それに気づいた白河が、ビクリと怯えたように立ち上がった。

そんな彼とは目を合わせず、兵庫は白河に近づいて行く。

あまり気乗りはしない。

段々と、その距離が。

……………だけど。

最後の一步は。

重い？ 苦しい？ 切ない？ ……違う。

それは何かの 安堵。

そして兵庫は白河を一睨みすると、「ん」と手を出した。

「え？」

戸惑う白河に、兵庫は少し顔を赤らめた。そして、馬鹿野郎とそ

の手を取った。

右腕を。

「モト」

「」

そして、その頭を小突いた。

全然痛くない。

「無理すんなよ」

それだけ言つて、兵庫は部屋を出て行った。

「兵庫っ……………」

白河は。その場に、泣き崩れた。

「……………さてさて……………」

カツカツカツと、靴音だけが廊下に響いている。

兵庫は不慣れに葉巻を取り出すと、口の端にくわえた。

(?空の欠片?……………)

人が犯した罪、そして業。

開けてはならなかった、パンドラの箱。

その行方を探り、そして。

その石をこの世から消し去る。

それは、この先どうあつても兵庫の胸に刻まれた、

絶対の印。

(そのためになら)

靴音が遠ざかる。

足跡は、残らない。

それでもいいと、兵庫は笑う。

『決意 (seven star)』

星が瞬いている。

瑛己はそれを眺めながら、珈琲コヒーに口付けた。

1人。宿舎から少し行った先の、滑走路を一望できる段差に腰をかけ。

星を眺め、滑走路を眺め……瑛己は一人、缶珈琲を飲んでいた。

高籐の座談会の後、解散になった彼らは。めいめいに無言のままその場を離れた。

飛たちはどこへ行ったのだろうか？

瑛己はそのまま宿舎に戻り……結局落ち着かず、こうしてここに

いる。
飛たちは『海雲亭』かもしれない。でも今は何となく、そこに行く気にもなれなかった。

「……………」
夏が近づいている。

初夏の夜には、虫の音が混ざり始めている。

夜の闇の中に滑走路はおぼろげにしか見えない。だがあの襲撃の跡は、昼間ならばまだくつきりと残っている。

(あの襲撃は)
一体なんだったんだろう……瑛己は思う。

『日嵩』の空襲……。上島総監……。

彼は『湊』と白河を……憎んでいたのか？
(そんな事のために)

どれだけの犠牲が、生まれたのか……。

瑛己は自分の手を見た。

自分は『日嵩』の者達を撃った。
仲間たる者達だ。

(あの時は)

必死だった……そうしなければ、今ここに自分はいないとも思う。

(だけど……)

その選択は正しかったのか？ 否 それは、今ここに残る事ができたからこそできる迷い。

(白河総監……)

白河の右腕が動かない事を、瑛己は今日初めて知った。

(父さんとの約束を守るために)

上島を殴り。

そして、撃った……。

瑛己は珈琲を飲んだ。

星を見上げる。

あの襲撃は、つい数日前。

あの時も星はこんなふうに瞬いていたんだろうか？

「……」

その時不意に、後ろから靴音が聞こえてきた。

瑛己は気づいたけれども振り返らなかった。

そしてそのまま星を見上げていると。

「……聖」

その声に瑛己は、初めて振り返った。

「……隊長」

そこにいたのは。 327 飛空隊隊長・磐木 徹志だった。

「……」

磐木は無言のまま、瑛己のそばに腰を下ろした。

瑛己はチラッと磐木を見た。

磐木は星空を見ながら、持っていた缶に口をつけた。

磐木が手に持っていたのはココアだった。

その視線に気づいたららしい磐木が「たまに、どうしても飲みたくなる」

いつもは苦すぎるほどのお茶を好む磐木が、チビチビとココアを飲んでいゝ。その姿に瑛己は少しだけ苦笑の念を抱いたが、表情に浮かぶほどではなかつた。

そして瑛己もまた、星空を見上げた。

「……」

「……」

元々無口な2人である。

しばらく、2人は黙つて星空を見つめ続けた。

こんなふうには隊長と2人なつたのは初めての事だと思つた。

「……」

思えば、瑛己は磐木の事をよく知らない。

厳しい隊長、悪さをすれば拳骨が飛んでくる。

兵庫は「問答無用なやつ」と言つていた。

だが、厳しいだけの人ではない。それはこの隊に入つて数ヶ月、痛いほど身を感じている。

あの奇跡の海で、何度も何度も呼ばれた名前。あの声は、まだ耳について離れない。

「怪我は大丈夫か？」

ふと、沈黙を破つたのは磐木の方だつた。

「あ、はい」

唐突で。瑛己は口ごもつた。「動けないほどではありません」

「隊長は、大丈夫ですか？」絶対安静と言われていると先ほどの座談会で言つていた。

「じつともしてられん」

「……そうですね」

同意してから、瑛己はふと苦笑した。

「新さんに怒られますよ」

「……そうだな」

頷いて、磐木も苦笑を浮かべた。あの襲撃以来、磐木は新に頭が上がない。

「あの時は……すまなかった」

「何がですか？」

「俺はお前達を守らなければいけないのに……『湊』の敵襲の報を聞いて、一番に飛び出してしまった」

「ああ……新さんが少し戸惑ってました」

「本当は、戸惑つどころじゃなかったけれども。」

「そうか」

「磐木は目を細め、ココアを飲んだ。」

「俺が飛び出しては、お前らが来んわけにはいかんな」

「……隊長が飛んでなくても、自分は出てました」

「……だろうな」

ふっと笑みをもらし。

「磐木は大きく息を吐いた。」

「隊長」

「瑛己は一つ決意をし、磐木に訊いた。」

「自分はよくわかりません」

「……」

「なぜこんな事に……」

眼下にある、『湊』の光景。

今は闇がすべてを覆い尽くしている。

だが朝になれば。すべてがさらされる。

半壊した『湊』の、変わり果てた姿。

今だつて。滑走路には夜間でも灯りが点っているはずなのだ。

灯台からは光があふれ、管制塔も点滅を繰り返しているはずなのだ。

なのに今あるのは、本塔の一部とこの宿舎からもれるものだけ。

光はどこへ行ったのか？

「俺も聞きたいっす。そこんとこ」

その声に驚いて振り返ると、飛たかきが立っていた。

「一体何が起きて、こんな事になったんか……俺にはまだ納得がで

きなくて……」

秀一が、なぜあんな目に遭ったのか。

飛の目に浮かぶ複雑な色の根底には、それがあるのだろう。

そんな飛をしばらく眺めていた磐木だったが。嘆息を漏らすと「俺にもわからん」と短く告げた。

「ただ……根底にあるのは、12年前のあの日……」

瑛己がピクリと磐木を見た。

「すべての運命が変わった、あの日……」

？空の果て？。

「聖」と、磐木は彼から目をそむけたまま言った。

「俺は……お前に、話さなければならんと思っていた」

あの日の事を。

瑛己が入隊したあの日から、ずっと。

「？あの空？で俺が見た事を」
地獄の空で。

瑛己は目を見開いた。そして静かに瞼を下ろした。

磐木はあの日、あの空を飛んだ。

聖 晴高と共に。

父が消えた、あの空へ。

「お前達にも聞いておいてほしい」

？達？という言葉に、一瞬間を置いて。

「……気づいてたんすか」

暗闇から、新と小暮が姿を現した。

「バレバレだ」

俺を誰だと思っている？ という態度で磐木は小さく鼻を鳴らした。きつと、ジンもどこかその辺にいたのだろう。

「あの日、不審な艇団がいるとの報を受け基地を出た……それは先

ほど白河総監が言っていたその通りだ」

どうも作戦が大掛かり過ぎやしないかい？

ふと磐木の耳にあの日の兵庫の音が蘇った。

「それは結局……」と、小暮が口を挟む。

彼にしては珍しく、言いよどむその姿に。

その気持ちを察し、磐木がすべてを受け取って答えた。

「先ほどの高藤総監の話が真なら」

実験。

「？空の欠片？の力を試す、実験……それがその空で行われたのだらう……」

「それは、その不審な艇団を駆逐するために？」

小暮の言葉に磐木は頭を振った「さあな」

「ただ俺達は上の命令で……高藤総監のさらに上の命令で、離陸を命じられた」

伝説には、世界が誕生した時からあるのだという聖なる石。

その力を解放したがゆえに滅んだ街『白雀』。

そしてその力を知った政府が行った実験が。

「12年前の、？空の果て？……」

瑛己は珈琲缶に視線を落とす。……途方もなさ過ぎる。

「当時は白河総監の言った通り、空賊の組織も今より混沌としていた。中でも当時一番勢いを持っていたのし上がって行ったのが【天賦】」

「無凱ですか」

「ああ。当時の空賊は【天賦】と【憂イ候】^{ういこう}という組織とで大きく二分されていた。まだあの頃は【憂イ候】の方が若干大きかったかもしれない。だが無凱という男の力で、【天賦】は瞬く間に【憂イ候】と並ぶまでに至った」

「それで、いたんスか？その空？」

詰めるような飛の問いに。

磐木は彼を振り返り、強い瞳で答えた。「ああ」

「12年前のあの日、あの空に。【天賦】の無凱はいた」
無凱……瑛己は虚空を睨む。

『白雀』でまみえたあの巨大な男。たなびく真紅と漆黒のマント、銀の眼帯。そしてその大地を轟かすかのような笑い声。

(無凱……)

「俺達301飛空隊は最後尾しんがりを任せられた。隊列は先頭に聖隊長、最後を原田副長。俺は隊長の脇を飛んでいた」

誰かがゴクリと、喉を鳴らした。

「目標地点は『零地区』。俺達がそこにたどり着いた時……空はもう、入り乱れていた」

仲間の飛空艇と。

「【天賦】の翡翠、【憂イ候】の紅蓮……様々な色、形、飛行……蒼国前線基地と呼ばれる『湊』の、名高いパイロット達が」

最強とうたわれた空賊の連合艦隊と。

「命を懸けて、戦っていた」

自分など到底及ばないような、もっと高みを望むパイロット達が。
「生きる事のすべてを懸け、空を飛んでいた」

語る、磐木の横顔は、先ほどの白河とはまた少し違っていた。

白河はまるで、夢から手繰り寄せるかのような……自分に向けて語るような語り口調だったのが。

磐木は違う。

その瞳には12年前を捉え。

同時に、自分達を捉えていた。

伝える。

普段は多くを語らないこの男が。

その気持ち痛みほど。彼の言葉を熱くする。

語られる現実を重くする。

「……敵の数は多かった。漠然とも、どれくらいなのかはかれなかった。何分、飛び込んだ途端俺も、何機もの敵艇に囲まれた。さほ

ど腕を持たなかった俺は逃げる事で必死だった。同時に、パニックになりそうになる自分を抑え付ける事しかできなかった。周りを見る余裕などなかった」

以前兵庫から訊いたその日の記憶。

その時描いた映像と、磐木が今語っている映像が重なっていく。「何分、何時間……どれだけ飛んだかもわからない。心は限界だった。煙の匂いだけが鼻を占める。わけがわからなくなった。どちらが上か下か、海はどれか、空はどれなのか。何もわからなくなってきた。アクセルを踏み込んで突っ込もうとしていた先は海だったのかも知れない。もう手の感覚どころか自分が生きている感覚さえ失いかけたその時」

真正面。

正気と狂気の境目に降り立ったのは。

「銀の獅子が現れた」

灰色のような世界の中で一際輝くその姿は。

「俺にはその姿が、天使か……神に近い物のように見えた」

ああこれで。

俺はやっと、空へ。

「俺はその瞬間、息をした。この戦場へ入って初めて息をしたのがその時だったように思った……妙な事を今でも覚えてる。安堵のため息だ。無凱の姿に俺はその時、心から安堵したんだ」

だが磐木は、自嘲の表情を浮かべなかった。

「しかし」

《テツ !!!!!!!!!!!!!!!》

怒号。

それまで耳に届いていなかった無線の音が。初めて、耳に飛び込んできた声は。

「聖隊長が。俺と無凱の間に滑り込んで」

《オオオオオオオオオ !!!!!!!!!!!!!!!》

無凱に撃ちかかった。

ドドドドドドドド

無凱は瞬間、機体を翻す。

それに猛然と、晴高は追撃を始める。

「俺はようやく気付いた」

今自分がまだ息をしている事に。

手も足も動き。

目には空が映る。

瞬けば、涙も出。

唇をかみ締めれば、血がにじむ。

生きています。

「まだ俺は、生きていますという事に」

《隊長　　！！！！》

「俺は慌て、無凱と隊長の後を追った」

そしてそこに至り。初めて空を見た。

あれだけ群れていた飛空艇の数が、随分減っている。

仲間は何？ さっきまではすぐにでも視界に入った蒼い機体が。

探さなければ見つからない……俺を追いかけていた敵の飛空艇は何？

無凱は何？　　聖隊長は何？

ここは何？

みんなは何？

「そして俺は、撃たれた」

ズンツという突然の衝動と。

事態が飲み込めないまま、落下していく機体。

どこが撃たれた？　誰に？　隊長は何？　仲間は？

そんな中見上げた空にあったのは。

「301飛空隊隊長、聖　晴高」

その人は。

「その人が、俺を撃った」

磐木にとって、絶対の人だった。

「……最後の言葉を交わす時間はなかった」
ただ。晴高は堕ちていく彼に向かって手を上げた。
高く高く手を掲げ。
天を指した。

頼んだぞ。

後は任せたぞ。
だから。

「隊長は……俺を生かすために、俺を撃ち落とした」
俺は手を伸ばした。
スルリと去っていく、隊長の姿に。
声を上げた。

待つてくださいと。行かないでくださいと。
でも迷っている時間はなかった。

「パラシュートを背負い、飛空艇から脱出した」
泣きながら。

空を見上げ。
その瞬間。

空が割れた。

パラリ、パラリと。雪のように。

傷ついた晴高の機体をその欠片は覆い。

海にたどり着いた時。

「空には雪のような白い物が舞い……真っ黒い闇が生まれていた」
飲み込まれていく雲、煙、飛空艇。

「俺は落ちた飛空艇に必死に捕まって叫び続けた」
仲間を思い。わけもわからず。

「そのうちに……気がつくと思いは夜になっていた」
風はやんでいた。

「もう空には何も飛んでいない。音はただ海の潮騒の音だけ。凍る

ような冷たい海の上、辺りに残っていた残骸をかき寄せてその上に身を縮め、俺は呆然と星空を眺めていた」

…… 警木は、語る言葉と同じように星空を見上げた。

「一面の星空は、まるで吸い込まれるようだった。一瞬、風がやんだだけで空は全部割れて落ちたのかと錯覚したほどだった」

瑛己は警木の横顔を見つめた。

「そんな星の海の中で、俺の目に一際輝くように飛び込んできたのが、北の一等星である北極星と。そのそばにある7つの星、北斗七星だった」

何があるかと一年中真北にあり揺るがない星と。

常にそのそばにあり、それを中心として空を動く星。

「入隊して間もない頃。右も左もわからなかった俺に、聖隊長はこう言った。俺達は、あの7つの星なのだ」

いついかなる時もその星に寄り添い、守り、天を舞う。

「揺るがない存在。それを守る星。俺はあの日、あの場所で誓った」
俺は、あの星になろう。

北の一番星を守るあの星に。

絶対に揺るがないあの星を守る7つの星に。

北極星はいつもそこにある。あれは誰かの目印になる。
ならば。

俺はあの光を守れるような光になろう。

絶対なる何かを守れる翼になろう。

誰かの心の支えとなる光を守るそんな翼に。

「それが　　？七ツ？の由来だ」

聖　晴高に託された思い。願い。

「俺が聖隊長にできるのは、その意志を継ぐ事……あの日あの海の上で誓った。誰かを支える光、その光を守る翼となろうと。俺は決意した」

「……」

全員が警木の言葉を黙って聞いていた。

「磐木はふつと息を吐いた。……ただ」

「俺の願いにお前達を巻き込んでしまった事は……すまん」

「……」

「俺は、隊長の残した意志を守りたい。だがお前達には関係ない事だ……気に入らんやつは抜けてくれ。構わん」

『湊』第327飛空隊、通称？七ツ？。

その名の由来を聞いて。

「……馬鹿な事を」

苦笑交じりに呟いたのは小暮だった。

「もう、あなただけの意志じゃありません」

「……小暮」

「この先、何か大きな力によって俺達は翻弄されて。巻き込まれて散ったとしても」

「……」

「？七ツ？という誇りを持って死ねるなら、俺は上々だと。そう思います」

「それに、隊長の下で飛ぶのは結構面白いですよ」

「なんや、生傷が絶えないですけど」

「……お前ら」

交互に居並ぶ顔を見て。

最後に磐木は、瑛己を見た。

瑛己はただ無言で頷いた。

「……そうか」

磐木は口の端に少しだけ笑みを浮かべ。

「……愚問か」と頭こぶを下げた。

「『日嵩』、【天賦】、無凱、軍上層部、橋爪総司令、？空の欠片？、そして？空の果て？
何かが起ころうとしているのは確か

な事のようにです」

「あと、『黒』もな」

「ああ。俺達はその一角に位置して……この先どう巻き込まれていくのか予想もできないが 命だけは」

磐木はそこで区切って、改め、強い口調で言った。

「この先何が起ころうとも、向かう先は嵐のど真ん中であろうとも。総員、命だけは必ず守れ。何を置いても、死ぬな」

死ぬな。

瑛己は眉間にシワを寄せ、そして小さく頷いた。

誰かを支える光であれ。

その光を守る、翼となれ。

それが？七ツ？の誇り。

(……………)

瑛己は空を見上げた。

星はさつきと変わらず輝いている。

(……………彼女も今頃)

同じ星を、見ているのだろうか……………？)

絶対たる翼の名を持つ少女。

(俺が守りたいものは……………)

夜空の星が、一つ、音もなく流れ落ちた。

『I prayed to...』

彼女は星空を眺めていた。

その目に映る星が、一つ、流れた。

願い事は……？

(私の願いは……)

「空」

呼ばれた声に。彼女はゆっくりと振り返った。

「こんな所に……」

高台に。

眼下に望むのは、街。

真つ黒になって崩れ落ちた、街だった場所。

「行きましよう、空……」

時島 恵は彼女の肩に手を置いた。

「ねえ、恵さん」

彼女は恵を見上げた。

「私の願いは、何かな」

「……空」

「流れ星を見ても浮かばない……私の願い事は、何かな」

「……」

恵はそつと彼女の背中を抱いた。

「……大丈夫」

「恵さん」

「あなたには私がいるから。私がいるから……」

大国『ビスタチオ』。その中枢都市である『ム・ル』が一夜にて

滅んだという報が瑛己たちの耳に入るのはもう少し後の話である。

そしてそれをなしたのが。

空（k u | u）と呼ばれるたった一人の少女だと知れるのは。

それよりさらに先の事であった。

『I prayed to . . .』 (後書き)

第2部 完

もしも過去に戻れるのなら。

俺は、あの日に戻る事を望むのだろうか……？

戻れる事などできない。だが、ここに来るたびに思ってしまう。
もしももう一度、あの場所にたどり着けたならば。

何かが、変わるのだろうか？

(俺は、)

今ならば、何かを、変える事ができるのだろうか……？

「……」

そう思い、彼は苦笑した。

(愚問か)

ピンとジッポーを指で弾いた。

そして胸元から煙草を取り出すと一本くわえた。

「……」

今日の夕焼けはやけに赤い。

大きく膨れ上がった入道雲さえ、赤く赤く染まっている。

まるで血のようだと思い、山岡 篤はゆっくりと煙草を吹かした。

そしてもう一度、眼下を見た。

海岸沿いの丘から、その場所はよく見える。

『白雀』。

かつて『白い宝石』とも呼ばれたその街。

だが今は風のみが通り過ぎて行く。

焦土、そして瓦礫の廃墟と化している。

「……」

人の気配はもちろんない。

(あの事故から14年か……)

？地図から消された？あの日から。

「姉さん」

ポツリと、山岡は呟いた。

そしてその言葉を消し去るように、ゆっくりと歯を噛み締めた。
あの日には、どうあがいても戻れはしない。

だが。問うてしまう。

(どこで、何の歯車を変えたら)

こんな事にならずに済んだのか。

その時チカチカと、向こうにそびえる入道雲が光った。

あの下は雷雨だろうか？

「……時間か」

山岡は立ち上がった。

軽く服についた芝生を払い、そして空を見上げた。伸びをした。

そしてもう一度、

「愚問か」

山岡はふと唇の端を吊り上げた。

だがその目は一切笑っていなかった。

数分後。

セピアの飛空艇が空に躍り出た。

向かう先は東。

太陽に、背を向けて。

「暑い……暑い……暑い……」

宿舍の隣にある食堂のラウンジの一角にて。

テーブルに突っ伏した姿で、飛たかきがブツブツ言っている。

「暑い……もうアカン、耐えられん……暑い」

ずっと言い続けているその姿に、さすがの瑛己えいきもウンザリ顔で飛を見た。「暑い暑いと言うな」

「余計暑くなる」

「……ほな、寒い言えば涼しくなるんか」
「なる」

面倒臭そうにそう言った瑛己に、飛は胡散臭そうに顔を上げた。

「寒い寒い寒い寒い」

「……」

瑛己は嫌そうな顔をした。

「俺はな、瑛己、5月生まれなんや。春生まれなんや……暑いのはかなわん」

5月ならわりと夏寄りじゃないか？ と思ったが、面倒くさい事になりそうだったのであえて瑛己は何も言わなかった。

「珈琲コヒー飲むか？ 冷えたやつ」

「おごりなら」

「……1本だけな」

やれやれ、と瑛己は席を立った。

『日嵩』による『湊』襲撃事件から、もうすぐ2ヶ月が経とうとしている。

あの時半壊してしまった基地は、この2ヶ月で随分復興が進んでいる。

倒壊した管制塔も新しくなり先日機能を回復したし、滑走路もキレイに舗装し直された。

格納庫は今建設の最中だが、もうじき完成となる。

損壊した飛空艇の補充も決まり、ようやく『湊』も元の体制に戻る。

るためのめどが立ったと言える。

瑛己たちの生活も、元の状態に戻りつつあった。

「ギンギンに冷えたやつな―」

自動販売機の前に立つ瑛己に、遠くから飛が叫んだ。

「どれも一緒だ」

苦笑して、ボタンを押す。ガコンと珈琲が滑り落ちてきた。

2ヶ月前に受けた傷も、随分よくなった。

あの時体に火傷を負っていた瑛己も、もう動く事には支障はない。跡は残ったが痛みはもうない。

全身に打撲を負っていた飛ももうすっかり元気だし、重症だった隊長の磐木も、先日ようやく医務の佐脇先生に「完治」の認定をもらったらしい。

「ほら」

差し出された缶を、飛は飛び起きて受け取った。

犬みたいだと、瑛己は思った。

「うげ、ブラックかいな」

「嫌いか？」

「ようこんな、苦水飲めるなあお前」

「いらぬならもらっとく」

「……ええわ、タダやし、一応飲む」

そう言って飛はとても嫌そうに珈琲に口付けた。

「何やこれ！ めっちゃギンギンに冷えとるやないか!!」

「そうか？ この前まで冷えが悪かったから、適当に機械をいじってみただけだ」

「お前まんの方が、やっぱり無茶するわ」

なんだかんだで結局1本飲みきった。

それを見るときもなく見て、瑛己は、ガラス張りになった壁の向こうにある空を見上げた。

「いい天気だな」

遠くには入道雲も見える。

時刻は昼過ぎ。

昼食にしては少し時間が回った時間だったため、食堂には人気はなかった。

「もう残暑だつっのに……いつまでこの暑さが続くんザンシヨ」
夏も後半。ここ数日、日に何度も何度も聞くフレーズを軽く受け流した時。

「やっぱりここにいた」

その声に振り返ると。

「総監が呼んでるよ。327、総監室に集合だつて」

相楽 秀一、その人だった。

2ヶ月前、意識不明の重態だった彼も、今では歩けるまでに回復していた。

まだ正式に隊務に復帰してはいないものの、時間の問題のように瑛己には思えた。

「大至急だつて。ほら飛、早く立って！ ちゃっちやと動いて！」

「へエへエ。わーった、わーったつて。ホンマお前はうるさいなあ

ー

「うるさいつて何だよ。飛がちゃっちやと動かないからだろ？」

2人のやり取りを、瑛己は吹き出しそうな思いで見っていた。

「？ なーに、瑛己さん？」

「いや、別に……」

あの時、秀一が意識不明になってどれだけ飛が動揺していたか。

それは秀一には「絶対禁句」という事になっている。

面倒臭そうに秀一を見ている飛の内心が、どれだけ喜んでるか。それを考えると、瑛己は笑い出しそうになるのをこらえるので必死になるのである。

今も、気だるそうに歩きながら、気遣うように秀一を横目で見ている彼は。

あの一件で少し変わったなと……瑛己は思った。

「まずは連日の作業ご苦労である」

総監室に着くと、すでに他のメンバーは顔をそろえていた。

夏場、基地や街の復旧作業に明け暮れた327飛空隊の面々の顔は、どれも日に焼けて黒くなっていった。

特に真っ黒になっているのが元義 新だった。

他の者が皆どこかしこに怪我を負っていた中、たった1人無傷だった彼は、あっちこっちの作業場にハシゴして回らされていた。

タンクトップ1枚のその腕は、2ヶ月前より明らかに筋肉がついているように見える。

「午前は街での作業か？午後の予定は？」

「はい」

と磐木が答えた。キレイに刈り上げられた髪が汗でぬれている。

「第3区画から応援要請がきておりますので、そちらの作業に向かおうかと。少し休憩に戻ってきていた次第です」

「そうか……ならそちらは、私の方から断っておこう」

「？」

全員が一斉に総監・白河 元康を見た。

「任務だ」

「再来週、『園原』空軍基地で航空祭が行われるのは知ってるか？」

蒼国第11『園原』空軍基地。

西の要となっているのがここ『湊』空軍基地ならば、『園原』は東の要。

「『園原』の総監・雨峰さんから『湊』の327飛空隊に、航空祭への招待を賜った」

「『園原』つか」

ひゅーと、新が口を鳴らした。

「雨峰総監は……確か、女性で初めて空軍の総監まで上り詰めた方でしたね」

小暮の問いに白河は「ああ」と答えた。

「『音羽』の高藤さんと同期だったはずだ。慈悲深い、とてもいい人だよ。今回も、かの有名な『湊』の『七ツ』が基地でくすぶっているという話を聞いて、気晴らしにどうかという打診が向こうからあったんだ」

有名……瑛己は少し嫌な顔をした。一体どう有名なんだろうか？
まったくいい意味ではないような気がした。

「週末には整備に出してた君らの飛空艇も戻ってくるんだろ？ どうだい、須賀君？」

と、ニコニコ笑顔で話を振られた飛は「そうですね」と神妙な面持ちで答えた。

「『園原』と言えば『湊』の姉妹基地……友好を深めるためにも、いい話ですね」

「っってお前」全員が苦笑を浮かべ、「単純に飛びたいだけだろ」

「何をらしくなく真面目な顔で言ってるんだ」

「なんすか新さん、俺は心底真面目に『園原』と友好関係を結んで

『園原』の飛行技術を見学して、勉強して、あわよくば一戦交えたいと」

「一戦交える気が、お前」

思わず出た本音に、飛は「しまった」と言った顔をした。

「空戦マニアが」と言ったジンも苦笑を浮かべている。

「せやかてジンさん！！『園原』空軍って言えば？ 天空の騎士？ とまで呼ばれる凄腕連中だって話やないですか！！ 戦^やらな損ちやいますか??」

「どういう理論だ、まったくお前は」

磐木が頭を抱えた。その姿に、ハハハと白河が笑った。

「是非もないな。今回は一応任務の形は取るが、いい機会だ。せつ

かくだから気晴らしに楽しんできてくれ。『園原』の航空祭は国内でも屈指の規模だからな。聖君も『湊』に赴任して以来連戦が続いているだろう？ 休暇だと思って、のんびりしてきてくれ」

ああそれから、と、白河は付け足した。

「今日付けで相楽君の復隊を認める」

「え」

その言葉に、秀一は声を上げた。「本当ですか！ 総監！」

「ああ、だが無理してはいけないぞ。佐脇先生はまだいい顔してないからな。だが問題は今回の任務の同行だが……」

「あー、いいつすよ、俺」

と、飛が手を上げた。

「何なら、『葛雲』^{ぢくうん}でも」

『葛雲』とは、2人用の戦闘艇。『蒼竜』より少し長く、前方と後方に操縦席がある。

ただ、飛がそれを言い出したので全員が驚きをもって彼を見た。

『葛雲』は少し重量がある分、スピードが『蒼竜』に劣る。長い分小回りが利かないのである。

しかももし今回秀一を乗せるとなれば尚更。彼が得手とするスピードのある飛行はできない。かなり慎重なフライトになる。

ましてや『園原』基地は遠い。半日かかった『日嵩』の向こう、『白雀』の北東に当たる。

直線距離としても、半日以上はかかるだろう。

「距離があるからな、途中で中継は必要だろう……何なら、相楽君は基地に待機という事もできるが？」

白河は、秀一から返ってくる言葉を知った上でそう訊いた。

「僕は……一緒に行きたいです。迷惑はかけないようにしますから……」

「そうか。……行程・飛空艇等は任せる。相談してくれ」
苦笑する。

「さっき須賀君が言ったとおり、『園原』には腕のいいパイロット

がたくさんいる。いい経験になるだろう。楽しんできてくれ」

そしてすぐに解散になったが、磐木とジンは「少し話がある」と言われ残る事となった。

最後の者が出て行き、扉が閉まるのを横目で確認し。
白河はふつと息を吐いた。

「『園原』の航空祭なんだが……」と少し言葉を濁し、白河はバツ悪そうに頬を掻いた。「橋爪総司令閣下がみえるそうだ」

「総司令が？」

「祭りだからな。例年軍の重役達もこぞって足を運ぶ。特に今年は30回目の記念大会だ。来賓の数も多いだろう」

「……」

「閣下はここ数年は参加されていないが、今年は出席を発表された。何せ閣下の出身は、」

『園原』空軍なのだから。

「話してあったか？ 2ヶ月前のあの一件で、軍本部は幾度も『七ツ』の出頭を要請してきた……必要ないと突っぱねてきたが、最終的に『不必要』と決めたのは閣下だ」

「……」

「雨峰総監は単純に好意でお前達を呼んだ。信頼に足ると私は思っている。何か万が一の事があれば自分が全て責任を取るとも言ってくれた」

「……」

「だが、用心を忘れないでくれ。……楽しんで来いと言っておいてなんだが」

「は」

「もう一つ。相楽君の事なんだが……」

「飛」

本塔を出入り口に差し掛かった頃。

前をツカツカと歩いていく飛に、秀一は声をかけた。

「何で、あんな事」

瑛己は立ち止まり、秀一を振り返った。

だが飛は振り返らなかった。

「……」

「ねえ、飛」

「……あん？」

「だから、何であんな事言ったんだよ。『葛雲』なんて……」

「……ええやる、何でも」

ハハハと小さく笑って、飛は明後日を見ながら言う。

「お前、まだ無理やる。長時間飛ぶの」

「……」

「くるんやる？　ほんならええやないか」

「……でも」

「俺がいつつってんやないか！　四の五の言うな」

パンと言われ、秀一は口をつぐんだ。

瑛己は「やれやれ」と苦笑した。

「ごめん……ありがとう」

「暑い暑い！！　瑛己、ジュースおごれ。今度は苦くないやつ」

「一本だけって言ったろ？　自分で買え」

「ケチケチ言うな。お前、昨日給料入ったやる？」

「……お前もな」

「じゃあ、僕が2人分おごりますよ」

「珈琲、ブラックで」

「コラ瑛己！　何ちゃっかり俺より先にオーダーしとんのや！」

晩夏の基地に、ツクツクボーシの音がこだましていた。

『團原』(skylight)『 . . . 』(後書き)

7 . 2 1 . 誤字修正

数日後。

飛空艇が整備を終えるのを待つて、瑛己達『湊』327飛空隊は一路『園原』空軍基地を目指し基地を飛び立った。

『園原』までの直線ルートには山間部が入るため、南寄りに迂回して向かう事になった。

2時間置きに休憩を挟み、1度中間地点にある空軍基地で一泊。2日ばかりでの移動となった。

その途中には『日嵩』付近を通ったが、現在『日嵩』基地は完全封鎖中。

残った兵士、ならびに職員も、今は別の基地に移っている。

直接上空を通りはしなかったものの、その付近の地理には何となく見覚えが出来てしまっている。複雑な気持ちになった。

結局、『日嵩』の総監である上島 昌平の消息が不明というのもその要員の1つ。

あの時海に堕ちて亡くなったのか、それとも生き延びているのか。

「.....」

瑛己はもちろん他の者達も、何となく緊張でその場を通り過ぎた。

結局、秀一は2日がかりの長旅には耐えられないだろうという判断で、2人乗りの『葛雲』に乗る事になった。

そのパイロットは交代制にしようという小暮の案に、

「俺1人で充分ですって」

なぜか飛がガンとして首を立てに振らなかつた。

久しぶりのフライト、まして長距離飛行。普段あれだけ自由に空を飛ぶ事に対して執着している彼の意外な反応に、隊の者全員が不思議がっていた。

「どうしちゃったのん？ 飛ー？」

「別に。何でもないですよ新さん」

「……何お前、この前の戦闘で頭でも打った？ 墜落のショックで頭のネジが一本飛んだとか」

「それを言うなら新、飛んでたネジが衝撃でうまくはまったんじやないのか？」

「あーナルホド。じゃあ飛、頭出せ。一本抜くから」

「そんなんやないですから！！」

追いかけてっこしている飛と新の姿に、瑛己は「やれやれ」とため息を吐いたのだった。

中継で一泊した際、飛は2人乗りに平気な顔をしていたが。むしろ秀一の方が飛に気を使っている様子だった。

「ごめんね、飛」

「何がや」

そんな会話を何回か瑛己は聞いた気がする。

やはり飛は少し変わった。

瑛己の脳裏をよぎったのは、あの時……意識不明の秀一を前にして彼の名を叫んでいた飛。

そして、

『あいつが、俺より先に死ぬ、ワケがないんや』

『なあ、瑛己……人の運命って、何やるう……？ 生きるって何やるう？ 死ぬって……何なんだろう？』

呟いていた、その横顔。

《『園原』領空に入る、総員着陸の準備を》

『湊』を発つて2日目、昼過ぎ。

無線から聞こえる磐木の声に、瑛己はハッと我に返った。

(『園原』……)

小高い山の向こう、1つ、2つ、飛び越えるとそこに。セメンで塗り固められた、巨大な基地が広がっていた。

「すつげえな……おい」

『園原』第11空軍基地。

降り立った327飛空隊の面々は皆そこで感嘆の息を漏らした。管制塔からの指示で滑走路を抜け、駐艇場にたどり着くなり、すぐさま作業着姿の係員が現れた。

彼らの案内に従い格納庫へ向かったのだが。

その道すがら 停留する、さまざまな機体を見た。

1機や2機ではない。幾つも幾つも。

「オーライ、オーライ、オーライ」

格納庫もすでにいっぱい、あふれんばかりに飛空艇が並べられていた。

その種類も様々で、『蒼国』のものばかりでなく。他国のものと思われるものから、商業用、民間機………色も形も模様も多彩で、まるで飛空艇の見本市のようになっていた。

「祭りは4日後でしたよね？ これまさか、全部、お祭り関係の？」
目を丸くしている秀一に、そばにいた作業員がハハハと笑った。

「まだまだこんな順序の口ですよ」

「この先まだまだ増えます。祭りの前日とか2日前くらいからピークになりますよ。今日はまだ全然。すんなり滑走路に入れたでしょ？ ピークになると降りるのも順番待ち。上空をぐるぐる3時間旋回しなきゃならない事もありますし。まして屋根付のこんな場所あいちやいない。山向こうの第2、第3駐艇場に野ざらしですよ」

「ふえー」

「そんなにかよ……」

格納庫の中も色とりどりの旗やオーナメントで飾られ、もう祭りのような雰囲気である。

ザワつく場内と、足早に駆ける作業員たち。

「何か、もう、盛り上がってんなあ……」

早めに出発した方がいいよという白河の言葉に従い、少し早すぎるのでは？ と思いつながらの出発だったが。

ここまでとは……数時間のフライトの疲れも吹き飛ばような状態だった。

「『湊』の327飛空隊さんですよね？」と、呆然と立ちすくむ7人の前に、新手の作業着姿の男が現れた。

愛嬌のある懐っこい顔立ちの小男で、笑うとエクボができた。「長旅ご苦労さまです」

「今、ホテルに案内します。車を持ってきますので、少々お待ちください」

「ホテル？」

「はい。327飛空隊さまの宿舎は街のホテルに取ってありますので」

ひゅーと、新が口笛を吹いた。「個室？」

「2人部屋が2つと、3人部屋と承ってます」

ペラペラと黒い手帳をチェックしながら、男は笑顔で答えた。

「2人部屋だつて！！ おい、待て。誰が隊長と一緒に寝るよ？ 見るからにこの人、イビキでかそうじゃね？」

「……」

元義 新の頭上に鉄槌を下し。

「それより先に、」と磐木は手を軽く振り払って整備士に向き直った。「雨峰総監にお会いしたい」

「長旅お疲れでしょう。お荷物を降ろしてごゆっくりされてからでも？ 明日改めてお越しただけければ」

「いえ。何より先に、雨峰総監に」

整備士はキョトンとし、それから苦笑して腕時計を見た。「15時か……」

「どこにいるかな？ ここ数日、総監はあっちこっちのチェックで忙しくて場所が定まってないんですが……連絡してみましよう」

「お手数をおかけします」

「いえ」

男は格納庫脇にある詰め所に入り、電話で連絡をしているようだった。

「俺は明日でもいいつすよ？」

頭をなでながら涙目で新が言った。

「馬鹿者。無礼だ」

小暮がそれに苦笑する。「右に同じ」

ジンは早速バージニアスリムに火を点けていた。

「それにしても……大きな格納庫ですね。『湊』の倍以上かな」

「これが見たとこ何個もあつたよな？ その上第2、第3駐艇場つて……どんだけやねん」

「『湊』もこれくらい作ればいいのに」

「予算の問題だろ。誰が資金出す？」

「そら、白河総監のポケットマネーで」

「あの人がそんな金持ちに見えるか？」

「確かに。白河さんのとこつて年上の奥さんでしたよね？ しつかり給料握られてそう。お小遣いあんまりもらつてなさそうですよね」

「……」

瑛己は飛空艇から残りの荷物を降ろした。
滞在は1週間に及ぶ。替えの服は幾らかボストンに詰め込んできたが、洗濯はできるだろうか？ 瑛己にとつては白河の小遣いが幾らかよりそちらの方が重要だった。

そこへ、「お待たせしました」さっきの男が小走りにやってきた。

「今、グラウンドの方にいらっしゃるらしいんで。ご案内します」

「申し訳ない」

「いえ。お荷物大丈夫ですか？」

答える代わりに面々、自分の荷物をヒョイと持ち上げた。

「では、こちらです」

ゾロゾロと、男の背中に従う中。

飛は自分の荷物はもちろん、秀一の荷物も手に取った。

「大丈夫だから、飛」それに秀一が慌てた。「持てるから」

「……」

飛は何も言わず、スタスタ歩き始める。

秀一はその手から、自分のバックを取ろうともがいた。「ちよつと、ねえ、飛つてば」

「……」

その光景に。

瑛己は苦笑を越えて言葉を失った。

やはりネジが1本、正確にピツタリとうまい具合にはまっていなかったようだった。

「あらあらまあまあ。遠い所、本当によくきてくれました」

格納庫から歩く事数分。

公舎の脇に巨大なグラウンドがあった。

普段はここで勤めている者が運動するような場所だろうか？ 今は小さい物から大きい物までテントが幾つも並び、万国旗が吊るされている最中だ。電飾を持って走る作業員の姿もある。

そしてそこで彼らを出迎えてくれたのは、小柄な女性だった。

高藤と同期という事は、50半ばだろうが、見えたとしてもまだせいぜい40代前半。色の薄い茶色の髪を小さく後ろで団子にまとめあげている。太っているわけではないが、小柄なためか少し丸い印象がある。

顔も手も体も小さい中で、ぷっくりとした唇が目を引き女性だった。

少し汗のにじんだ額にハンカチを当てると、優しくそげに目を細めた。瑛己は少し安堵するような心持になった。

「はじめまして。私がこの『園原』空軍基地の総監を務めます雨峰

かんろ (amamine | kanro) と言います」

よろしくね、と微笑む顔に、その場にいた一同が少しドキリとした。年は関係ない、魅力を感じさせる笑顔だった。

女性で初の総監……どんな強面がくるかと思いきや。瑛己たちの表情に驚きが浮かんでいた。

「警木君は久しぶりですね。風迫君も。元気そうで何よりです」

「雨峰総監もお元気そうで」

「ダメダメ。年には勝てません。最近は昔みたいには動けなくて。準備で大忙しなのに、体がついてこなくて困ってる所です」

うふふと笑うその姿に、飛が肘で瑛己を小突いた。何や、印象違うな。上島総監や高藤総監とえらい違うやないか。

「白河君はお元気かしら？」

「はい。息災です」

「白河君は昔から自分一人で抱え込むタイプだから。いつも心配してるの」

白河総監か……ふと瑛己は思った。総監も、あの事件以来少し変わった気がする1人だ。

何と言ったらいいかわからないが、いい意味で「吹っ切れた」そんな感じがする。

(兵庫おじさんの事かな)

そういえば兵庫はどうしているのだろうか？

あの後すぐに、何も言わずに姿を消した。

「……」

今どこで何をしているのか。彼の負った傷もまた、浅いものではなかったはずなのに……。

「あなた方はお体は大丈夫なのかしら？ 長旅疲れたでしょう。無理をさせました」

「全員、随分よくなりました。お気遣いありがとうございます」

体は確かによくなった。だが今回の飛行はさすがに全員少し疲労の色が見え隠れしている。

あの襲撃以来、まともに飛んだのはつい先日。ましてこれほどの長時間を飛んだのは本当に久しぶりの事だ。

全身が少し痛む。特に、微妙に力を入れていた足の筋が今日は熱を持って痛い。

その後しばらく、世間話が続いた。それぞれの体調、基地はどうか、白河の事、『園原』の祭りの準備の具合などなど。

そうした後、ふっと目を細め雨峰総監は口を開いた。「今回の一件……大変でしたね。聞きました」

「【天賦】の人質となり、まして身内である『日嵩』が攻め入るなど……考えられません」

おろかな事です……雨峰総監は臉を伏せた。

「上島総監は……？」言葉を濁す磐木に、「いえ、まだ」と雨峰総監は首を横に振った。

「上島君は何を思い、あのような事を……『日嵩』の兵士たちに罪はない。何を思って、『湊』に兵を率いたのか……」

「……恨み、でしょうか？ 白河総監への……」

「恨み？ そんな事ではありませんよ。上島君は白河君を慕っていました。少なくとも私の目にはそう映っていました」

雨峰は風に遊ばれる髪を手で押さえた。

「恨みなどと……そんな程度のものであんな惨事を引き起こすとは思えない。考えてもごらん下さい？ あの出兵は前も後ろもない戦いですよ？ たとえ『湊』を墜としたとしても何が残ります？ 何が生まれましょう？ 栄誉もなく、残るのは罪のみ。彼らにはもう帰る場所はなくなる。ただ一人の私怨でそのような？」

「上島総監はかつて、『湊』基地の撤廃を訴えていたと聞きますが……撤廃ではありません。移設です。『湊』は今の位置では少し南過ぎる。もう少し上に、『獅子の海』の辺りに居を構えたらという案です。あの湾は『蒼光』へのルートへつながる。今の既存の基地では少し警護がゆるい。『湊』をあちらに移設して、『獅子の海』と『蒼光』までの西の鉄壁にしてはどうかという案だったので」

「……」
「しかしそれをいつしか誰かの手によって捻じ曲げられて……彼の言葉は『湊』の撤廃として世に知れた。同時に彼の名は屈折した形で知れ渡る事となった」

「……」
「私は今でも……上島君を信じてる。おかしいですか？」

「……」
「……」
「私は目を閉じた「いいえ」
全員が、磐木に視線をやった。

ここにいる7人は見ている。上島 昌平という人物と、戦場で叫ぶ彼の声を。

聖母のように微笑む雨峰 かんろの描く上島の像と。
彼らが見てきた上島の姿。

(なぜ……?)

「これほどの差があるのかと……瑛己は眉間にしわを寄せた。
「そんな事より」とふっと雨峰は口調を変えた。

「体調は戻った、なら任務は？ 最近はどうくらい飛んでるのかしら？ 訓練は？」

「いえ」

と、磐木も口調を変えて言った。

「この2ヶ月は基地や街の復興作業が主で、飛行任務は。基地では飛空艇がかなり破損しましたし、我らの物もあの事件でかなりの負荷がかかりました。先日ようやく整備から戻ってきたばかりで」

「飛んだと言えるのは、あれ以来久しぶりですね、ここへの飛行が」
ジンが補足する。それに雨峰は目を見開いた。「そうなの？」

「そうですね……いえね、ちょっとお願いしたい事があったものだから」

「願い？」

「ええ」

そう言っって雨峰は、グラウンドを振り返った「ねえちょっと、斉

藤君！！」

「はい」

そう言って走ってきたのは、露店の看板を取り付けていた作業着姿の長身の男。

そして先ほど瑛己達をここまで案内してくれた小男がその脇にいた。

「ご紹介するわ。こちら、斉藤 流（saitou nagare）君。そして隣にるのが、星井 湖太郎（hosii kotarou）君」

「斉藤 流！？」声を上げたのは飛だった。「まさか……」

「あら、ご存知。さすがは斉藤君」ふふふと雨峰は微笑んだ。

「『園原』空軍基地・第114飛行隊隊長・斉藤 流。うちのエースパイロットです」

『園原』の斉藤 流……瑛己も知っている。さすがに知っている。現在、国内屈指のパイロットとして5本の指に入ると言われている……凄腕の男だ。

長身である。『セツ』の中ではジンと新が同じくらい長身なのが、それよりもさらに高い。

丸刈りの黒髪が汗にぬれている。すっきりとした一重瞼に、高い鼻。汗で光っているが顔立ちは彫刻のような端正な物だった。

このルックスと飛行技術から、女性に人気も高い。

そしてその隣に並ぶ男はニコリ笑って斉藤を見た。

斉藤と並ぶと背丈は一層低く見える。斉藤より頭1つ半くらい低い。愛嬌のある顔に、炎天下でそばかすが目立っていた。

星井 湖太郎。瑛己と飛は息を呑んだ。この2人がその名を知らないわけがない。同い年、同期卒業生の中でも有名な男だった。

東部の飛空学校を卒業。成績は別にトップクラスではなかったと聞く。しかし彼は『園原』の斉藤が自らスカウトをした。彼らの同期で星井の名前を知らない者はほとんどいないと言ってもいい。

「ねえ、磐木君。そして『セツ』の皆さん」

雨峰はいたずらを思いついたお姫様のような顔でペロつと舌を出した。

「私、空から現れたあなた方の飛空艇を見て……ちょっと欲が出てしまいました」

雲が、ゴオと音を立てて流れていく。

「わが『園原』が誇る114番隊『飛天』と、西の要『湊』が誇る『七ツ』。祭りの余興として、どうです？ 1つ勝負をしてみないかしら？」

ニコニコ笑う聖母のような雨峰。

瑛己は思った。

自分を呪う運命の女神とやらが本当にいるのなら。きっとニコニコ顔をしているのだらうと。

『園原(sky) of the knight』 - 2 - (後書き)

2011.7.29.

誤字訂正

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0553m/>

空 - ku_u -

2011年7月31日03時16分発行